
インフィニット・ストラトス～怒れる瞳～

泉海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜

【Nコード】

N8276W

【作者名】

泉海斗

【あらすじ】

白騎士事件・・・、その元にて日本の危機を救ったとされる一人の騎士をまるで射殺すようにしていた少年がいた。彼は事件で家族を失い、残されたのは父親の研究の試作品だけ。だが、彼はそれを持ってIS学園に入学する。怒れる瞳に映るものとは一体・・・。

*自身のホームページでも記載しています。

お知らせ（前書き）

不定期更新ですが、よろしくお願いします。

お知らせ

こんばんは、泉海斗です。

今作品は、以前に短編小説として投稿しました、インフィニット・ストラトスゝ怒れる瞳ゝの連載ヴァージョンです。

現在執筆しています、魔道新世紀リリカルガンダムですが、今月中にサードステージが終わる予定であります。現在フォースステージを執筆しているところですが、まだ序盤だけだということと加筆修正が必要なところが多いので、ある程度下記駄目ができてから再投稿しようと考えています。

その間をつなぐ形でこの作品を不定期ですが、投稿していきたいと思っております。たくさんの皆さんに楽しんでいただければうれしいです。

今後とも泉海斗をよろしくお願いします。

*予定OP1&ED1&キャラ戦闘時メイン曲

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

ED1↓遠雷ゝ遠くにある明かりゝ<HIGH and MIG
HTY COLOR>

キャラ戦闘時メイン曲↓vestige-ヴェステージ-<T・
M・Revolution>

お知らせ（後書き）

明日にはブログを投稿したいと思います。

PHASE00 プロローグ（前書き）

不定期更新ですが、よろしくお願いします。

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

PHASE 00 プロローグ

また夢を見ている。もう二度と見たくないと思っている夢だ。

あの日はとても楽しい日になるはずだった。そう・・・、なるはずだったのだ。だが、その楽しい日・・・久しぶりの家族旅行で行った場所で・・・、家族を失った。

しかし、その家族は周りの観光客や現地人たちとともに走っていた。何故走っていたかというと、この日本のまさに少年たち家族がいる場所に向かってハッキングされた基地からミサイルが2000発以上放たれたというのだった。

その犯人は父よりも早く世界に対して宇宙に進出するためのマルチスーツ・・・『インフィニット・ストラトス』通称『IS』というものを開発した篠ノ之束だという。

何故彼女がこのような行動に出たのかは分からないが。後になって考えたことは、彼女が世界に対してISの理論書を提出したが、全く相手にされなかったと言うことに対して、強引にでもその可能性を示したかったのだということだった。

だが、どうして自分たちが人質に取られなければいけないのだろうか。幼いながら少年は考えた。周りからは悲鳴や泣き叫ぶ声が聞こえる。

我先にと前を走る者たちを突き飛ばして走っていく。突き飛ばされた人はその場に倒れ、後続の人たちに罵詈雑言を吐き捨てられたり、ふまれたり悲慘な状態になっていた。

少年はそんな倒れた人を見て何も使用としない自分が情けなく思った。こんな小さなからだで向かっていったら確実に人の波にさらわれ家族とも逸れてしまう。彼は怖かったのだ。そして、何もできない自分が嫌で仕方がなかった。

「もう少しだ！！もう少しで安全圏内だ」

ミサイルが落ちてくるだろう場所を特定し、それによって警察が避難誘導し行っていた。彼らだって逃げたいだろう。しかし、使命があるのだ、そして覚悟があった。そんな彼らを見て少年は流れに乗って進んでいく。

「お母さん、もう疲れたよー」

「朱雀、もう少しだから頑張って！！」

母親の手に引っ張られている妹の朱雀が疲れた顔をして言う。まだ6歳という小さなからだでここまで走ってきたのだ。疲れないわけがなかった。体力に自信がある少年はそこまでではないが、いい加減着かないのかとイライラを募らせていた。

「飛鳥、お前は大丈夫か??」

「ん??ああ、心配要らないよ、父さん」

「もう少しだ、もう少しだけ頑張ってくれ」

両肩にたくさんの荷物を持って走る。重い荷物のベルトが肩に食い込んで痛みが走る。だが、必死に歯を食いしばり、走る、走る。すると誰かが空を指差して叫ぶ。

「み、ミサイル！！」

その瞬間誰もが悲鳴を上げ、早くいけと前の者たちを急かす。少年・・・飛鳥の家族もその波に飲まれながらも先を進む。口が渴く、胸が痛い、足が重い、揺れる度に食い込む荷物のベルトが痛い。

「お父さん、お母さん!!」

「ああ、早く行くぞ!!」

「朱雀、もう少しだからね。飛鳥、大丈夫??」

「な、なんとか」

飛鳥は乱れる息を整えながら再び走り出す。ちらりと肩越しにミサイルが飛んできている方向を見ると、一機の白い騎士がたった一本の刀で次々とミサイルを打ち落としていったのだ。

必死に走る。ただただ生き残るために。死んでたまるかという気持ちで必死で走る走る走る。足がまるで無限に稼動するかのごとく、ものすごい速さで動いていく。これが火事場の馬鹿力というものだろうか。

必死に逃げるものたちをあざ笑うかのように、次々と遠くのほうにミサイルが落ちていく。

人々の悲鳴が響き渡る。近くで着弾した爆音が耳から一瞬であるが聴覚を奪っていく。平衡感覚を失いかけるがすぐさま体勢を立て直し走り出す。

更に後方で爆発が起きる。徐々に近づいてきているミサイルに対してアス力は恐怖に身を震わせる。どうしてこうなった。どうして自分たちはこうして逃げ惑わなければいけないのか。どうして自分たちはこうやって命の危険にさらされなければいけないのか。

どうしてどうしてどうしてっという疑問に対して、酸素の少なくなり、すぎずきと痛む頭で考えようにも分からなかった。

爆発するミサイル。吹き飛んでいく人たち。地面に叩きつけられ、あるものは木っ端微塵にされ、あるものは建物に叩きつけられ、それぞれ命を散らしていく。見ているわけではない、それでもそんな嫌な音が後ろから聞こえてくるのだ。そして聞こえてくる、まるでゾンビのように地を這って来るような感覚で助けて・・・痛いっと・・・

飛鳥は頭を振って無理やり忘れようとした。

そして、更に進んでいく途中。激しい揺れで人々の恐怖がピークとなる。われ先と列を作っていたものを崩して周りの者たちは関係無しと走り出していく。当然アス力たちの家族もその波に巻き込まれる。すると、朱雀の小さな悲鳴のような声上がる。

「あ、朱雀の携帯!!」

「え??」

朱雀の手を伸ばす砲口にからからという音を立ててかわいらしい携帯電話が転がっていく。飛鳥はそれを見て、そして、朱雀を一瞥する。

誕生日にねだりにねだってようやく買ってもらったものだ。こんな小さな子どもが持つのはどうかという考えもあるが、防犯携帯ということで許しを得ていたのだ。

たくさん友達との通話をしては母親にしかれる姿を何度も見て

いた。そのたびにふと笑みを浮かべてしまっていた自分を思い出す。

「いいから行くわよ！！携帯だったらまた買ってあげるから！！」

「いやー。あれがいいの！！」

「朱雀！！」

「やだー！！」

駄々をこねる朱雀。あたりから人がなだれ込んできて、からだにぶつかるたびに罵倒される飛鳥。言い返したくともその権利は自分にはなかった。突っ立っている自分たちが悪いのだ。

とうとうしゃがみこんでしまった朱雀。このままだと間に合わない。取りに行こうとしている朱雀を母親が必死に引きとめている。

飛鳥は意を決してこう言う。

「俺が取ってくるよ」

「ちよつと待て、飛鳥！！」

「危険よ、やめなさい！！」

飛鳥は走り出していた。後ろから両親の声が聞こえたが、真っ直ぐに朱雀の携帯の方へと向かっていく。

走ってくる人たちにぶつかるたびに怒声を浴びせられるが我慢して携帯電話を探していく。どうやら走ってくる人たちに蹴り飛ばされて相当と浮くに言ってしまったようだ。

いつの間にかかなりとおくまで来ていたからそう感じられた。そしてようやく見つけたときには人の波から少し離れてしまったところにポツリとかなりぼろぼろになったかわいらしいピンクの携帯電話

話があった。

蹴り飛ばされていたためかなり汚れていたが、画面などのデータは無事なようだった。そしてそれを胸ポケットに入れて戻ろうかと立ち上がった瞬間だった。

突然周りが光に包まれた。眼を開けていられないくらいの閃光。そして、耳を劈くような轟音が響くと思ったら、突然吹き荒れる爆風。小さな飛鳥のからだは投げ飛ばされるようにして地面に叩きつけられた。

高いところから地面に叩きつけられ、そのまま地面を滑っていく。かなりすりむいたようで体が半分激痛の襲われている。

「ぐ……。い、一体何が……」

苦悶の声を漏らしながら痛む半身を抱く感じでゆっくりと体を起こす。ゆっくりと赤い瞳を開けていくとそこに映ったのは、死体死体死体……。炎が燃え上がり、地面がめくりあがり、えぐられ、蹂躪されている。

四肢が吹き飛ばされ、脳がぶちまけられ、内臓がまるで虫のように体から這い出ているように見えた。首がない死体もあった。胴体が真つ二つになっており、半身がどこかに吹き飛んでいるのもある。更に近くにあった木に突き刺さっている死体もある。

「オエエエエエエ！！」

思わず胃から急激に上がってきたものを吐き出してしまった。びちゃびちゃと手をついた周りに胃液とともに食べたものが吐き出さ

れていた。異臭がする。思わず鼻を押さえてしまった。

立ち上がり、ふらふらとした足取りで家族の待つ場所へと戻っていく。

「あははは・・・、なんだよこれ」

あたりには先ほどまで逃げ惑っていた人たちの死体でいっぱいであつた。踏み歩く場所もなく。死体をふんでいくしかない。柔らかくなった肉がぐしゃりぐしゃりと奇妙な音を立ててつぶれていく。

変な感覚が足から背筋を突き刺していく。まるで自分が皆を殺しているような感覚に襲われた飛鳥。ごめんなさい、ごめんなさいと呟きながらその道を歩いていく。

ミサイルが未だ全機落とされていないようで向こうでは爆発が起きている。しかし飛鳥には今はそんなことはどうでも良かったのだ。ただ妹に携帯を渡して早くここから逃げようと両親に言いたかった。

まだ旅行が残っている。旅行のお土産や楽しかった思い出話を皆に話すつもりだったから。飛鳥はただ歩いた。大きくまるで悪魔が爪で地面を抉り取ったかのように大きな段差ができており、そこにも死体が積み重なるようになってあつた。

まだ生きているような人も奇跡的にいたが、飛鳥は見捨てた。手を伸ばしてきた人がいた。目は見えていない。多分わずかな音を聞いて手を伸ばしてきたのだろう。飛鳥はそんな人の上も歩いた。小さく悲鳴を上げ、事切れた・・・。

「ごめんな・・・、ごめんな・・・」

小さな女の子を庇うようにして死んでいる母親がいた。少女もぐったりとしており、握っていた熊のかわいらしい人形の目が取れかかっていた。

そして、皆が目印になるように立っていた電柱が見えてきた。大きく折れ曲がり、熱で幾分か溶けている。だが、そこには確かに家族がいた。家族だったものがあつたと言ったほうが良いだろうか。

父の、母の、そして妹の朱雀の体があらぬ方向に折れ曲がり、四肢は引きちぎられ、内臓が飛び出している。

「ア・・・アア・・・アアアアア！！」

ガクリとひざをついて崩れ落ちてしまう飛鳥。ポロリと手を着いた地面に落ちる朱雀の大切な携帯電話。パカリと開いて、そこに待ち受け画面が移る。家族全員で写った集合写真がそこにあつた。

もう二度と戻ることのない過去・・・もう二度と戻ることのない日常・・・もう戻ることはない暖かな生活・・・もう二度と戻らない・・・家族。

抱き寄せたのは手元に転がっていた朱雀の片腕であつた。かわいらしかったワンピースは土ぼこりで汚れてしまい、爆炎で所々焼けてしまっている。そんな朱雀の腕と携帯電話を抱き寄せ、空を見上げた。

そこには次々とミサイルを切り落としていく白い騎士の姿があつた。その騎士の背中にある翼から、まるで天使のように見えた。だが、このときの飛鳥からすれば、自分から大切なものを奪って言う

た悪魔にしか見えなかった。

喉元に何かがこみ上げてくる。怒り、悲しみ、恨み、憤り……どの言葉でも決して形容することができないほどの激情というものがあつた。それはまるで紅月飛鳥という小さなもろい檻を破壊しようとして中から出てくる猛獣のようであつた。

「ウワアアアアアアアアアアアアア！」

飛鳥は吼えた。まるで猛獣の雄叫びのごとくその形容しきれない感情というものが飛鳥の小さなからだを食い破って出てきたのだ。今まで出したことのないようなその叫び声に、飛鳥自身が驚いていた。

空に舞う天使の姿をした悪魔の騎士と、更に上空で見ているだろう神になったつもりであろう篠ノ之束。その姿がまるで血のように怒りに染まつた真つ赤な瞳に焼き付けられる。その圧倒的なまでのISの……『白騎士』の力の前に、10歳という小さな飛鳥はあまりにも無力であつた……。

ふと明るい光が眼に差し込んできて思わず眉間にしわを寄せるようにして唸る。ごろりと寝返りをうつそこはベッドの上。ゆっくりと眼をあけるとその赤い瞳に入ってきたのは二人の少女の姿だった。

「あ、起きたんだ」

「おはよ、アーちゃん」

クールを装っているがそこには優しさがある簪の声といつものほんとして暖かな本音の声が聞こえてきた。

「おはよー。もう、おねーさんおなかペコペコだよ。アツくん、早く食堂に行きましょう」

「お嬢様、もう少し声を抑えてください。周りに迷惑です」

人当たりのよさそうな声の楯無とそんな彼女を諫めるようにいるクールな虚。飛鳥はゆっくりと体を起こし、立ち上がる。

「分かったよ」

そう言った飛鳥の手に嵌められた赤いブレスレットが証明の光に反射して紅く不気味に、美しく輝いた。

——俺は力を手に入れた……。

あの時10歳だった無力な自分。家族が殺されるまま、何もできずにその場に座り込むしかできなかった自分。

あれから6年……。飛鳥はすでに、無力な子どもではなかったのだ。

PHASE00 プロローグ（後書き）

誤字脱字・ご感想がありましたらよろしく願います。

ED1 ↓ 遠雷 〉 遠くにある明かり < HIGH and MIG
HTY COLOR >

PHASE 0・5 キャラ設定&機体設定1（前書き）

OP1 ↓ Ignited < T・M・Revolution >

PHASE 0・5 キャラ設定&機体設定1

名前 紅月飛鳥

年齢 15歳

容姿 髪は赤茶色で瞳は赤色。髪型は寝癖型で、顔立ちは上の中。

性格 一見して雰囲気的に冷たそうで怒りを露にすると怖い印象があるが、人を見下すようなものに対して陰悪している。

身長 170センチ

体重 60キロ

使用機体(MS) ヴェステイージ

家族関係 父・母・紅月飛鳥・妹・紅月朱雀

趣味 読書

学歴 一般小学校↓短期軍事学校↓IS学園

友人関係 更識姉妹、布仏姉妹とは親友で幼馴染

使用武器 小型ナイフ、ハンドガン

備考 もともとロボット工学系の大学教授であった父と専業主婦の母、妹の朱雀との一般的な4人家族。父が宇宙進出可能なマルチス

イツの試作としてMSを開発した。家族旅行先にて待っているときに白騎士事件に巻き込まれ、ミサイルが空港に着弾両親と妹を失いただ一人生き残る。その後小学を卒業するとともに中等部のある短期軍事学校に通う。その後MSの使用が認められ、父親の遺留品であるMSを使用した任務に出動する。軍学校を首席で卒業し、IS学園に入学し、数少ない教官を破る。入学の理由はMSの性能実験。家族を奪った篠ノ之束と白騎士のことを恨んでいる。ISは扱えない。

名前 ヴェステイジ

由来 身も心も傷だらけという意味から。

機体イメージ ガンダムSEED・DESTINYのインパルス。

配色 赤とダークグレーのツートン。

世代部類 第1世代

動力源 電力

待機状態 紅いブレスレット

武装 ・CIWS×2

・フォールディングレイザー対装甲ナイフ×2

・高エネルギービームライフル×1

・アンカー付き巨大シールド×1

- ・折りたたみ式レーザー対艦刀×1
- ・誘導ミサイルポッド×2
- ・バズーカ×1
- ・ワイヤーブレード×1

備考 ロボット工学系の大学教授だった父が作り出した宇宙進出のためのマルチスーツの試作品。ISのような絶対防御の他に、実体武器の攻撃には耐えられるように装甲は強化され操縦者の安全も守られている。ISのようにコアはあるがISとは全く違う。特殊装甲のおかげで実体による攻撃は通用しない。またシールドエネルギーではないので戦いによってはISよりも長時間戦える。防護服としてはパイロットスーツを着用。またデュートリオンビームによってエネルギーを回復することも可能。

PHASE 0・5 キャラ設定&機体設定1（後書き）

ED1 ↓遠雷 ↓遠くにある明かり <HIGH and MIG
HTY COLOR >

ある程度話が進めば人間関係図なども作りたいと思います。たくさんのお気に入り登録ありがとうございます。

ご感想をくれた読者様、ありがとうございます。

PHASE 01 2人以外は女子ばかり（前書き）

OP1 ↓ ignited < T・M・Revolution >

たくさんのお気に入り登録ありがとうございます。それだけで執筆がはかどるというものです。

少しでも楽しんでいただける作品にしていきたいと思っておりますのでよろしく願います。

PHASE 01 2人以外は女子ばかり

4月に入り、季節の始まりとともに人々にとっては新しい生活の初めともいつていいだろう。世間で言えば学校では新しい学期が始まり、それぞれが新しい環境にて勉強や部活、友達関係に対して期待と不安を胸に抱く時期である。

そして、ここはIS学園の一年一組である。

新しい学期が始まり、生徒教師とも新鮮な気持ちで今日に臨んでいる。そして、この教室でも入学式が終わり教卓の前に女性教員が立って喋っている。

「私は副担任の山田真耶です。どうか皆さん、一年間よろしく願いますね」

そう言っているのは、紹介にもあったようにこの一組の副担任である山田真耶。自己紹介をしているように、現在はSHRが取り行われていた。

そのクラスには当然のごとく、世界で1人だけしかないISを動かしてしまった男子の姿があった。

織斑一夏である。

そして、そんな織斑一夏をその斜め後ろから見ている人物もまたこのIS学園では珍種とも言える男という性別を持つ人物であった。

紅月飛鳥。奇しくも、彼の家族を奪っていったISという存在に

囲まれたこのIS学園へと足を踏み入れていた。しかし、彼自身は織斑一夏とは違ってISを起動させることはできない。

なら何故この場所にいられるのか、それは彼の手首にある紅いブレスレットがあるからであつた。それは死んでしまった彼の父親がロボット工学系の大学教授をしていたそのときまで、何時か宇宙で人間が単独で動けるようにというマルチスーツを作っていたのだ。

そして、完成していた試作品こそ彼の今待機状態でいる紅いブレスレットなのだった。あの事件の後に遺留品として生前大学の研究室で使っていたものと、手紙とともに手渡されたのがそれであつた。

ただ残された遺産と家、ISとは違うマルチスーツであるMS。モビルスーツだが、その性能ははるかにISよりも劣り、第0世代・・・、動かし、更にブレスレット状態にする事ができるだけでも奇跡であつたのだ。

しかし、とある事件でそれが解決の鍵となつたためにIS学園へと共生的に送り込まれていた。その理由としてはMSの性能を確かめるためだということ。もしそれがISと同等、それ以上ならば女性にしか扱えないISに取って代わるものになるかもしれないというわずかな希望があつたのだ。

そんな飛鳥がこうして一夏と同じクラスにいるというのは、突然このようなことが起き、ましてや女子しかないこのIS学園に、まさに猛獣の中に生贄として放り込まれた草食動物の兎のような存在である一夏に対する政府からのせめてもの配慮ということだったらしい。

もし二人が離れていたらどうなっていただろうか。最悪一夏はおろ

か、飛鳥もまたこのIS学園ではたった二人だけの男であるために精神力を抜き取られているかもしれないのだから。

そんなIS学園1年1組にいる飛鳥であるが、斜め前、まさに教卓の万前にいる織斑一夏に視線を向ける。女性から見れば世間一般に言うイケメンの部類に入るのだろう。

そんな一夏であるが、先ほどから挙動不審で回りにちらちらと視線を向けている。飛鳥に対しても何度か視線を向けてきた。そのとき正直飛鳥も耐えられるわけもなく、いらいらしていたこともありにらみつけてやるとすぐごと視線を外してしまった。

——なんだあいつ……。

飛鳥は一夏ほど挙動不審ではないが、さすがに周りの視線を一身に浴びるのは耐えられない。イライラがたまる一方である。一夏がそうである様に、こんな誰も知り合いのいないところに放り込まれたら逃げ出したくもある。

だがしかし、飛鳥はここに望んできた。世界をおかしくしたISに対抗しうる存在……MSの性能を確かめるために……。

ただ数少ない飛鳥の心の助けになるのは……。

「アーちゃん、また一緒に学校だね」

小声で話しかけてきたのはほんとした調子の女子生徒……布仏ほんねが隣りの席だということか……。

織斑一夏は男である。

そんな彼は今現在というよりも、今日一日を通してかなり緊張していた。高校の入学式、そして新しい学校、あたら言い教室、新しい生活の始まりである今日この日。

そのようなことで緊張するのは当然なのだが、それは些細なものに過ぎなかった。一夏を最も緊張し醒める大きな要因というのは、一夏とそして理由は違うが一緒に入学してきた飛鳥を除いてクラスメイトが全員女なのだ。

「えっとそうですね・・・、それでは最初のSHRは皆さんに自己紹介をしてもらいましょう」

そういわれても一夏は何を言えばいいのかわからない。唯一二人の男の一人として、何か気の聞いたことを言えばいいのかもしれないが、今この状況で何を言えばいいのか分からないし、更にさすがに滑ってしまい、引かれるのもさすがに嫌だという気がしていた。

得意なことといえば家事全般とマッサージぐらいであり、それも勝手に身につけてしまったスキルなのであるが。

「・・・くん、・・・くん、織斑一夏くん」

「は、はい!!」

突然声をかけられたために上ずった返事をしてしまう一夏。

すると周りからは小さくくすくすという笑い声が聞こえてくる。やってしまったと少し恥ずかしさを感じる。

すると教卓に立つ真耶がその一夏の声に少々驚きながらも話しかけ

てくる。

「ひゃ！？あ、あの・・・お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな？？もしそうなら、ごめんね、ごめんね！！」

一夏が返事をするに次に帰ってきたのはどういわけか謝罪であった。どうすればいいのだろうかとの場の状況に困惑するしかない。

「いや、その、あの、そんなに謝らなくても・・・、ていうか、自己紹介しますから！！先生、落ち着いてください！！本当に落ち着いてください」

一夏がそういうまで懇願するようにぺこぺこと頭を振り続けていた真耶。この人物が自分たちのクラスの副担任だというのだから、飛鳥も含めた生徒たちは少々不安になってきていた。

「ほ、本当・・・？？本当ですか！？本当ですね！？や、約束ですよ？？絶対ですよ！！」

もはや立場が逆転しているようにしか見えず、一夏は最終的に押し付けられた形になってしまった。

仕様が無いと思いながら、立ち上がる。

世界にたった1人しかいない男のIS操縦者。それも一夏は世間一般に言うイケメンなのである。

だからこそ、一つ一つの動きに女子たちは敏感に反応する。

それもただ立ち上がっただけで、その視線を一夏のほうに向けるのだ。一夏も一夏でクラス中の視線が自分に集まっていることに緊張感が増す。

そしてゆっくりと息を吐く。落ち着こうというしぐさである。

「お、織斑一夏です」

無難に名前を言う。周りからすれば、すでに有名すぎるために知っているというものだ。

「よろしくお願いします・・・」

無難である。

至極無難である。

周りに対して先ほどの真耶同様に頭を下げては上げ、また下げては上げとまるで腰の低い平社員みtaiである。

そんなことをしている間、女子生徒たちから伝わってきたのは、もっと何か喋ってよとか、それだけ???という、一夏に対する話題の期待であつた

何よりこの雰囲気は、まさかこれで終わりじゃないよねっと言う無言の圧力みたいなものであつた。

——どうしよう・・・。

すでに緊張からか頭が回らない一夏。助けよ求めようにも周りは知

らない女子ばかりであり、もう一人の別の意味で入学してきた男子である飛鳥を見る一夏であるが、鋭い目でにらまれ、これは助けを求めるのは無理だと判断した。

そして、意を決して一夏はこう言うのだ。

「以上です!!」

あまりにも堂々とした声で言ったために、周りで期待していた女子生徒たち全員が椅子から転げ落ちるという状態になっていた。

「え???あれ!?!これじゃあ、ダメでした!?!」

一夏は周りで女子生徒たちが一夏に対してありえないという視線をぶつけてくるのに少々気後れしつつ言う。

さすがにいきなりの自己紹介を以上ですと絞める人間がどこの世界にいるのか。一夏もやってしまったということで少々落ち込んでいる様子である。すると突然後ろから人影が一夏に迫る。

しかし、その人物が近づくことに一夏はまったく気がついていない。

「お前は、ろくに自己紹介もできないのか、織斑」

そつ一夏の後ろに立っていた女性が、突然持っていた出席簿にて一夏の頭を問答無用で叩く。ものすごい音が教室中に響き渡った。一夏は頭からたんこぶと煙を出して、机に突っ伏している。

一夏は後ろから聞こえてきた声がどうも聞き覚えのあるものだった

ために恐る恐る後ろを振り向く。そして、そこにいた女性を見た瞬間に飛び出した言葉……。

「げえっ！！関羽！？」

一夏がそこに立っていた女性に対して叫ぶ。ひどく驚いているのは当然だった。そして、案の定、二発目の出席簿による制裁が一夏の頭に降りそそぐ。先ほどよりもひどく鈍い音が響いた。

「ぐふあ……」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者が」

「……」

そこにいたのは織斑千冬。嘗て第一世代IS操縦者にして元日本代表。現役時代は、公式戦無敗の記録を残したまま、ある日突然、引退し、それ以後、その舞台から姿を消したのだ。

一夏は姉として、そしては憧れの人物として彼女のIS操縦者時代のことを良く知っていた。しかし、一夏は彼女の仕事についてよく知らされていなかったし、彼自身知らなかったみたいである。それにしても何故彼女がここにいるのだろうかというのが一夏にとっての一番の疑問だった。

彼女は制裁を与えると前に立つ。堂々としているその姿にはあの頃と変わらない威厳があった。

そんな彼女のことを、飛鳥は睨みつける様にして見ていた。

「聞いているのか??織斑」

一夏は相も変わらず千冬の事を見ながら啞然とした表情である。

「な・・・なんで??」

「あ、“織斑先生”もう会議は終わられたんですか??」

「ああ、山田君・・・、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

真耶はたしかに言った。

“織斑先生”

「大丈夫です、これも副担任の仕事ですから」

しかし二人はそんな真耶と千冬の会話を聞いていなかった。織斑先生という言葉聞いて一夏はこう思った。

—— まじかよ・・・。

そして、教壇前に立つ千冬がじろりと教室内にいる生徒たちを見渡してから口を開く。

「諸君、私が織斑千冬だ！君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。出来ない者には、出来るまで指導してやる。逆らってもいいが私の言うことは聞け、いいな??」

何というまるで暴君じみた言葉であるが、そこには消して見捨てないという、確固たる自信を持っているからいえるのだろう。それが嘗て世界で無敗を誇った彼女だからいえるのか、それとも何か別の理由があるのか。

——むかつくな……。その言い方。

しかし、飛鳥にとって知冬のような存在はむしろ嫌う部類に入っていた。上から押さえつけるような、そんな高圧的な言い方、自分が正しいというような言い方。例えそれが正しいことであっても、言い方が気に入らなかったのだ。それは中等部を軍事学校で過ごしていたころも変わらなかった。

——いくら世界最強だからって……。

しかし、その時飛鳥を含め、一夏も失念していた。女子というのは特に女子高生というのは珍しいものや有名人が大好きなのだ。

「きゃあああああ！！千冬様、本物の千冬様よ！！」

そんな彼女の歡喜の悲鳴に続いて次々と少女たちの声上がる。

「ずっとファンでした！！」

教室中の女子生徒たちがざわざわと騒ぎだした。一夏は突然のことに驚いて周りをきよきよと見ている。騒いでいるのは飛鳥と一夏以外の女子全員であるが……。それにこのクラスだけでなく、ここにいる二人以外、この学園の敷地内にいる人間はすべて女性である。

正直慌てて耳をふさいでいたために一夏のように混乱することはなかった飛鳥。だが、そんな状態であっても十分耳がおかしくなるような音量であった。正直言って怒鳴り散らしたかった。

「ど〜ど〜」

「俺は馬か!!」

そんな飛鳥の隣りで、まるであやすようにしてくるだぼだぼの制服を着ている本音がいた。邪険に扱えないそんな雰囲気を持っている。

だが、彼女自身も昔からの幼馴染であるから飛鳥の扱い方を良く知っている。彼は怒っているのではなく照れているのだ。

「うふふ。相変わらず、アーちゃんは面白いね」

「何が面白いんだよ!!」

やや声が大きかったが、それ以上に周りの女子生徒の声が大きかった。周りに聞こえていなかった。

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです!!北九州から!!」

——よくそんな遠くから来たな・・・。

ここにくるためにどれだけの労力がかかったか。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです!!」

・・・。

嘗ての最強のIS操縦者に直接教えてもらえるのだ。こんなこと、めつたいない。

「私、お姉様のためなら死ねます!!」

——はあ!?こいつ何言ってるんだ。

それだけ千冬を慕っているということだろう。しかし、その当人はというと、かなりうつとうしそうな表情をしている。言われて嫌なわけではないが、さすがにここまですごいと、逆に引いてしまう。

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

そうあきれたような言葉を吐くが、それでも鍛えがいのあるという意味ありげな笑みを浮かべているのを見た飛鳥の眼は狂ってはいないだろう。

「きゃあああああ！！お姉様！！もつと叱って！！罵って！！」

「でも時には優しくして！！」

「そしてつけあがらないように躑をしてええええええ！！」

ここまでくればあきれを通り越して感心せざるを得ない。

するとそんな女子生徒たちを落ち着かせ、再び一夏をにらむ。

「で？？織斑、挨拶も満足に出来んのか??？」

「いや、千冬姉、俺は・・・」

「織斑先生と呼べ」

「・・・はい、織斑先生」

怒られている一夏は相変わらずだと内心苦笑いの秋也。

「え・・・??織斑くんって、もしかして、あの千冬様の弟・・・??」

もしかしてもしなくても、彼女と彼は血のつながった正真正銘の姉弟である。

「それじゃあ、世界で初めて男でISを使えたっていうのもそれが関係して・・・」

「それはない」

ばつさりと切る千冬。その質問した女子生徒は慌ててすみませんと訂正を入れて座る。

「まあいい、織斑、続ける」

「え???ああ・・・」

一旦座っていた一夏は再び、千冬の言葉でその場に立たざるを得なくなってしまった。当然あんな挨拶では駄目だと思われたのだろう。そして再び周りの生徒たちが一夏に注目の視線を向ける。すると、その生徒たちからの死線の仲に、見知った懐かしい顔を見つけたのだった。

「箒???」

そこには6年ぶりに合うのだろうか。幼馴染であり、小学校時代に突然転校してしまった篠ノ之箒がそこにいた。一夏が名前を呼ぶが、プイッと顔を横にそらしてしまう。

—— あ、あれ???嫌われたのか??

そんな風に一夏が考えていると、千冬の出席簿による肅清が飛んでくる。

「痛!」

「お前は、自己紹介もまともに出来んのか?」

「いや、だから千冬姉・・・俺は・・・」

「学校では、織斑先生と呼べ・・・。まったく何度言ったら学習するのだ、ばか者」

——確かにそれは言える。

あきれた様子で千冬。一夏はそれから無難な自己紹介を何とか終わらせ、男では二人しかいないので当然のように順番は飛鳥へと来る。

「次、紅月」

「・・・はい」

出席簿を見て名前を言う千冬の言葉に返事をして立ち上がる。

一夏同様に男だということ少女たちの視線を一身に浴びる。さすがにこれはきつい。

「紅月飛鳥です」

無難に名前を言う。

やはり周りからは期待の視線を向けられている。

「趣味は読書。得意なことは料理。一般中学には通わず短期で軍事学校に通っていました」

飛鳥は小学を卒業するとともに、そのまま一般の中学校に通うことはなく短期の軍事学校に通うことにしていたのだ。普通であれば

そのまま高等部・・・そして軍へと向かうはずであったのを蹴って、飛び級で卒業してきたのだった。

開発部門は壊滅的であった飛鳥であるが、戦闘部門においては圧倒的な強さを誇り、更にそのときの教官が女性であり、あまりに高圧的であったために喧嘩をふっかけてばこにしてしまったのだ。

あまりに中等クラスの枠からはみ出ていたためにそのまま短期で高等クラスへと進み、そのまま卒業していた。だが、あのまま軍に入ってもおそらく飛鳥には居場所はなかっただろう。

ほとんどの軍の兵力というのはISである。現代平気であるミサイルなどがあの時白騎士に通用しなかったようにISには通用しないのだ。そのためいくら飛鳥にその力があるうとも、ISを起動させられない彼は不要だったのだ。それを知っていたし、もともとそれ以上軍に進もうとは思っていなかった。

更に大きなきっかけとしてはあの時IS強奪事件に巻き込まれ、始めてISとMSで戦った時だ。それがあつたからこそ、重かった鉛のこの足を一歩前に踏み出すことができたのだ。

「よろしくお願いします」

一応一夏のようなへまをしまいと考えておいた普通の自己紹介をする。ここであえていえば紅月飛鳥の容姿というのは一夏のような純粹にかっこいいイケメンとは違い、雰囲気的に怖い、冷徹そうだという印象を与えるがイケメン・・・簡単にいえばかっこいい不良のような感じなのだ。

赤茶色の髪の毛に赤色の瞳はイライラが募っていたのかやや不機

嫌そうに釣り眼になっている。そんな彼に睨まれるような形になっている。普通は怖がるなどするだろうが、生憎ここにいる女子生徒たちはほとんどが女子中学校などと、ほとんど男に対する免疫のない。

「「きゃあああああー!!」」
「ええ!?!」

突然の悲鳴に近い歓声。思わず後ずさりしてしまうくらいに衝撃を受けてしまった。彼女たちは怖がるどころかむしろ好意的であった。

—— な、何が起きてるんだ……。

飛鳥は突然のこの状況に戸惑っていた。自分はかなりいらだっていたのを自覚していた。だが、それを表に出さないという基本的なことを忘れ、かなり顔に出ていただろう。だから、かなり目つきはにらむようなものだった。それなのに彼女たちは関係ないとむしろそれがいいなどという風に高評価を受けた。

「な、何がどうなって……」
「アーちゃん、人気者だね」

などと本音がさらに周りのテンションを上げるような発言をする。それは何か。彼女の飛鳥に対する呼び方である。

「何何!! 今布仏さん“アーちゃん”って呼んでたよね」
「キャー!! 何々二人はどんな関係??!」
「まさか……」
「ねえねえ、教えてよー!!」

女子たちがそれを聞き逃すはずがなかった。更にボルテージが上がったこのクラスの熱気はすさまじいものだった。

「アーちゃんと私は、幼馴染だよ」

「おい本音!!」

このときにそんなことをいつてしまったら更に事態が悪化するの
は目に見えている。そのことを鈍感な飛鳥が知るはずもなく。その
時本音に対してそう言ったのは恥ずかしいからであり、けしてそれ
がこの後更に事態を悪化させることになるなど思っても見なかつ
たのだ。

本音の幼馴染という言葉に更に悪化したクラスの熱気。周りでは
勝手に恋人同士などという捏造を始めているものもいた。

さすがにこれはまずいと思ったのだろう。おどおどしている真耶。
隣に立っていた千冬のいい加減にしろという一括でその騒ぎはぴた
りと収まったのだった。

それから現在は休み時間である。あれから色々と質問攻めにあつ
たが飛鳥はめんどくさそうにであるが律儀に一つ一つ質問に答えて
いた。なんとなく答えなければ隣に座る幼馴染がついつかり口に
しそつだと感じたからだった。

正直言つて飛鳥にとって居心地はかなり悪かった。なぜなら周りか
らの女子の視線が尋常ではないくらい痛みを伴っているからだつ
た。

ここIS学園は他の高校とは違って、入学式当日から授業があるらしい。さりげなく一夏と共に視線をずらすとこのクラスだけではなく、一組に飛鳥と一夏というパンダのような存在がいるために他のクラスの女子生徒たちも集まっていた。

その中には二年生や三年生もいるのだからたまったものではない。中には品決めをするように下を舐めている人もいるので、飛鳥は自分の身の危険性を感じていた。

女子はみんな二人を見てひそひそ話をしている。二人が注目されているのは当然のことながら、一夏の場合は唯一世界でISを男のみで起動させた存在であるからだ。飛鳥はそのISに代わるMSというものをもって立った二人だけの男の一人だからだった。まさに客寄せパンダの状態であり、この学園に男がいるとなれば当然なのだ。

「・・・ちよつといいか??」

一夏がだれていると突然後ろから凜とした女子の声がした。一体誰だろうと思ひながら振り向く。

「ん??」

するとそこには同年代の女子高生よりも発育がいい胸を持ち、長い黒髪をポニーテールにしている女子がそこに立っていた。

「箒」

そこにいたのは一夏にとっては幼馴染である、篠ノ之箒がいたの

だ。一夏はまさに6年ぶりの再会であった。

「着いて来い」

「あ、おう・・・」

簞に連れられて一夏は引つ張られるようにして、教室を出て行く。後ろから2人の関係を示唆する声が上がっていた。

屋上に続く廊下と階段を進んでいき、ドアを開けるとそこには真っ青な青空が広がっていた。太陽の光がまぶしかった。

「いい天気だ」

まさに新学期にもってこいの快晴であった。

「そういえば」

屋上について二人は手すりに体を預けながら空を見ている。すると最初に口を開いたのは一夏だった。

「なんだ??」

一夏の視線の先にいたのが簞であったために、簞も自分に何かを言いたいのだろうかと思ったのだろう、返事を返す。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」
「・・・」

一夏の言葉に簞は何も言わずに黙っている。しかし顔を赤らめていることからうれしさと照れがあるのだろう。彼女がどんな感情を

一夏に対して持っているのかは、朴念仁である彼には分かるはずもないのだ。

しかし、褒めたつもりだった一夏はというと、篝の様子を見て、何で怒っているのだろうかと、不思議がっている表情をしていた。彼はかなり鈍感であり、篝の今の状態をまったく別に捉えてしまっているようだ。彼女の気持ちが届くのはまだまだ先になりそうだ。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

慌てるような口調で言ってくる。一夏はそんな彼女の剣幕に押されながらも。

「なんでって、新聞でみたし・・・」

情報源を言う。

「なんで新聞なんて見てるんだ」

「ええ！？俺だって普通に新聞くらいは読むぜ」

あまりの理不尽な言葉に一夏はあきれを含ませた表情で言う。

「あー、あと」

「な、何だ！？」

一夏は思い出したように、何か言いにくそうであるように、指で頬をぽりぽりと掻く。

一呼吸をいってから言う。

「久しぶりだな、箒。箒ってすぐ分かったぞ」
「え……」

あまりの突然の言葉に箒は呆氣に取られてしまふ。それと同時にうれしかった。

「ほら、髪型一緒だし」

「よ、よくも覚えているものだ……」

自身のことを褒めてくれているので、素直にうれしかった。照れているのか、その髪をいじりながら言う。

「いや、忘れないだろう、幼なじみのことくらい」

「……」

一夏がそういう言うとき、さかしくいゝ雰囲気になっていたところで、箒がざろりと一夏が気づかないところでにらみつけている。

すると突然チャイムが鳴る、そろそろ教室に戻らなければいけないと思い、二人は屋上を後にするのだった。

篠ノ之箒は内心歓喜で満ち溢れていた。

なぜなら彼女と同じクラスに幼馴染であり、思い人の織斑一夏がいたからであった。

彼が自己紹介で立ったとき、こちらを向いたが恥ずかしさで思わず顔を背けてしまった。それをした後やってしまったと言う後悔が彼女を襲っていた。一夏がこちらを向いたのは、ただ自己紹介に困っ

て助けを求めただけだったのだ。

だが、どうしても彼の前になると心臓が早く鼓動し、素直になれないのだ。だからこうして本当は力になりたいという気持ちとは逆のそっけない態度を取ってしまう。

彼と同じ男でここに入學してきた飛鳥もいるが、彼女にとっては関係のないことだった。そう思っていた。しかし、彼女は知らなかったのだ。彼が自身の姉によって大切な家族を奪われていたことを。彼女は関係なくとも、篠ノ之の性を名乗る彼女に対しても、その祖先がちらついていることをまだ、彼女は知らなかった。

自己紹介を含めた最初の時間が終了した。ちらりと教卓前の彼の姿を見ると、すでにつかれきったようにぐったりと机に突っ伏していた。別のほうの席に座っている飛鳥の周りには他の女子生徒たちが集まって質問をしているのが見えた。彼女は今はただ一夏に話しかけたい、久しぶりに二人きりになりたいと言う気持ちでいっぱいだったのだ。

そんな筈の眼には一夏の姿しか映っていなかったのか、あまりの近寄るなというオーラが話しかけようとしていた女子を退散させていた。そして、一夏の机のそばに来る。対して一夏はそれに気づいていないのか、相変わらず突っ伏したままである。まさか寝ているのではないかと思ったので、少し強めに言う。

「ちょっといいか」

「ん？？」

一夏が顔を上げる。そして、腕を掴んで無理やりに歩き出す。後ろから一夏が何かを言っているが、このときの筈にはまったく聞こ

えていなかった。

嬉々として彼の腕を引つ張り屋上へと向かっていった。その時周
りから向けられる視線など彼女には関係なかった。

そして、目的地の屋上に着いたわけであるが、ここで箒は一体ど
う話を切り出せばいいのか全く考えていなかった。いや、一応色々
と話したいことがあった。だが、いろいろありすぎて、取捨選択が
できなかったのだ。

「いい天気だ」

一夏も話の切り出したうまくいかないようだ。まあ、確かに新学期
にもってこいの快晴であった。

「そういえば」

二人は手すりに体を預けながら空を見ている。最初に口を開いた
のは一夏だった。

「なんだ??」

内心どきどきしながら一夏の言葉を待つ。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」
「・・・」

一夏の言葉に箒は何も言わずに黙っている。しかし、そんな優勝
したことを褒めてくれる一夏の言葉を聞いて、喜びをかみ締めてい
た。しかし、箒がどんな感情を一夏に対して持っているのかは、朴

念仁である彼には分かるはずもないのだ。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

そんな彼女から出てきたのは、慌てるような口調での言葉だった。ありがとうと一言簡単に言えない。彼に何かを言おうとするたびに心臓の鼓動が早くなるのだ。ましてや今は立った二人っきりの状態。更に、久しぶりの再開ということで、うれしさが最高潮にありながら、当然のことながら口から出てくる反対の態度の言葉も言われるほうからすれば意味の分からないことだった。

「なんでって、新聞でみたし・・・」

「なんで新聞なんて見てるんだ」

「ええ！？俺だって普通に新聞くらいは読むぜ」

あまりの理不尽な言葉に一夏はあきれを含ませた表情で言う。対する篤も自分で何を言っているのか。こんなことを言いたいのではないと分かっているけど、心臓が張り裂けそうな状態の彼女の口はまったく違うことを言ってしまう。

「あー、あと」

「な、何だ！？」

一夏は思い出したように、何か言いにくそうであるように、指で頬をぼりぼりと掻く。

一呼吸をいってから言う。

「久しぶりだな、篤。篤ってすぐ分かったぞ」

「え・・・」

あまりの突然の言葉に箒は呆気に取られてしまう。それと同時にうれしかった。自分の事を見ていてくれたことが、何よりもうれしかったのだ。

「ほら、髪型一緒だし」

「よ、よくも覚えているものだな・・・」

自身のことを褒めてくれているので、素直にうれしかった。照れているのを隠し切れず、その髪をいじってしまう。

「いや、忘れないだろう、幼なじみのことくらい」
「・・・」

一夏がそういう言うとき、つかつかいい雰囲気になっていたのが台無しになってしまった。もう少し何か別の言葉がなかったのだろうか。そう物足りなさを感じていた箒は、無意識の内にそれが表情に出ていたのか、一夏のことをにらみつけていた。

すると突然チャイムが鳴る、そろそろ教室に戻らなければいけないと思い、二人は屋上を後にするのだった。

その時不意に吹いた風が箒の長いポニーテールをゆする。箒の表情は、前を歩く思い人を見て幸せそうなものであった・・・。

PHASE 01 2人以外は女子ばかり（後書き）

ED1 ↓遠雷 〉遠くにある明かり < HIGH and MIG
HTY COLOR >

基本的にオリ主の視点でいきますが、イベントなどで他視点から見たほうがいい場合はそれも書いていくつもりです。そのため文字数が多くなり、不定期になることもありますので、そのときは気長にお待ちください。

誤字・脱字やご感想がありましたらよろしく願います。

追記 同作者の『魔道新世紀リリカルガンダム』もぜひご覧になってください。

PHASE02 気に入らない(前書き)

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

たくさんのお気に入り登録感謝感謝です。やや進行は遅いですが、楽しんでいただければ幸いです。

感想お待ちしております。

PHASE 02 気に入らない

IS学園は入学式の日でも授業があり、今は二時間目の真っ最中であった。

「・・・であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ・・・」

教壇に立つて、教科書を片手にすらすらとそれを読んでいく真耶。教室内でも静かに授業を聞いている。それは新学期であり、皆が気を引き締めているからであることと共に、それ以上に後ろに千冬が出席簿を片手に腕組みをして立っているからであった。

さすがにこの状況で不真面目にしていたらどんなことをされるか分かったものではない。そんな中、飛鳥はというと、同じく教科書とノートを広げて、必要なところは書き取って、マーカーで印をつけるなど、いたって普通に授業についていく。

一応事前に貰っていた参考書を頭に叩き込んでいるために、基礎的な部分は理解できる、他の女子生徒たちはというと、このような範囲は一応中学までで習っているのだらうと思う。

中学でもISの授業を取り入れているところがあり、それは大抵女子中学であるのだが・・・。それはそうと、もう一人の男である一夏の事をちらりと見てみると、教科書と真耶を交互に見ては、ぱらぱらと教科書を行ったり来たりさせている。

——何やってるんだ??アイツ・・・。

飛鳥はそんなはたから見れば、授業の内容が分からないと、ついていけない一夏の事を見て退屈そうに見ていた。まさに、焦りで顔が真っ青になっている様子が見えた。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？？」

するとそんな一夏の様子に気がついた真耶が一夏に対して話し掛けて来た。

一夏ははっと顔を上げて、どういえばいいのだろうかとあたふたしている。

「あ、えつと・・・」

「分からないことがあったら何でも聞いてください。なんせ私は先生ですから！！」

はちきれんばかりの胸が更に強調される。男である一夏の視線は教科書からそんな彼女の胸に向いてしまっていた。

飛鳥も同様に男である。思わず教科書から眼を離しそれを凝視してしまう。すると側頭部に何かが当たる。なんだと思ったたら床に落ちたかわいらしい消しゴム。

「消しゴム？？」

それを拾いチラりと横を見る。そこにいるのは幼馴染の一人である布仏本音。

「！！」

そこには相変わらずのほんとした笑みでこちらを見ている彼女がいた。だが、眼が一瞬光ったような気がした。思わず背筋に悪寒が走った。なんとなくだが、これ以上凝視しない方がいいと、彼女の家柄を含めて考え、そう思った。

「アーちゃん、ありがと」

「え、あ、いや」

簡単な言葉がまともに喋れない。昔からそうだ。彼女だけではないが、どうしても邪険に扱えない。

取りあえず本音に落とした消しゴムを手渡し、授業に向かう。

「・・・せ、先生」

「はい、織斑くん!!」

一夏はどこか申しわけなさそうな声で真耶に対して言う。真耶はというとどんと来いというように身構えている。先生として、ここで意地を見せておかなければと、朝方の失態というわけではないが、威厳を取り戻そうとしているのだろう。

「ほとんど全部分かりません!!」

すばらしく元気のいい声で言うのだが、その内容があまりにも情けないというか、稚拙というのか。

「え・・・??? ぜ、全部、ですか・・・??」

さすがの真耶も全てが分からないといわれるとは思わなかったらしい、大きすぎる眼鏡がかけてあったところからずり落ちていた。

飛鳥もあきれた様子で一夏の事を見ている。同じ男として、少々恥ずかしい思いを感じていた。そんなあきれた視線の先にいる一夏は周りの静まり返った状態に焦ったようにきよろきよろと周りを見ている。

「え、えつと・・・、織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか??」

まさかと思ったのか、真耶はクラスに対して挙手を求める。しかし、周りにいるものは誰も手を上げることがなく、静かなままである。

もちろん飛鳥も彼女たち同様に理解している。当然のように、参考書を入学する前に読んでいたことと、軍事学校でも当然のように現代において最強と言われているISもまた、将来は兵器として使われる可能性もあるということとで授業で扱われていたのだ。

「・・・」

まさかというように顔を悪くする一夏は最後の砦であろう、同じく男である飛鳥に恐る恐る視線を向ける。

「何??」

「あ、悪い。でもお前、これ理解できるのか??」

「当たり前だろ。これくらい予習しておけば簡単だ」

飛鳥の・・・一夏にとってはまさかの裏切りの言葉に頭を抱えてしまう。ここには自分を味方してくれる人はいなかった。そんな会話をしていると、一夏の後ろに現れたのは、教室の後ろのほうで見て

いた千冬であつた。

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか??」

千冬が言っている参考書というのは飛鳥も貰ったものであり、まさに昔の分厚い電話帳のようなものであつた。あれを覚えるのははっきり言つて骨が折れるだろう。

ある程度は軍事学校にて習つていたこともあつたので覚えるのはそれほど苦労することはなかった。むしろ飛鳥にとつてはISというのは敵のようなものである。敵のことを良く知らなければいけないということも、覚えることに対する拍車になつていたのかもしれない。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

やっちまつたぜという感じでわるびもなくそう言う一夏。

——馬鹿じゃないか??

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者!!」

すると案の定一夏の頭には制裁といわんばかりの出席簿による攻撃が炸裂する。頭に大きなたんこぶを作つて机に突つ伏す。もう何回になるのだろうか、今日に入つて・・・。

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

有無を言わせぬ彼女の言葉。しかし、さすがにそれを一週間で全てを覚えきるのは難しいだろう。それでもこの結果を招いてしまったのは一夏の自業自得である。無理だというのが、それでもやれとい

われると何もいえない。

「やれと言っている」

「・・・はい。やります」

さすがに姉であつても逆らえない一夏はとうとうあきらめたのか、そんな表情をして言うのだった。そうして授業は続く。

先ほどの授業は終わり、現在は休み時間に入っていた。飛鳥は授業が終わるや否や、突然話しかけてきた一夏と話をしながら自分の席に座っていた。

何故彼がここにいるのかというと。突然自分以外の男がいるからということでやはり心細いのだろう、話しかけてきたのだ。

自己紹介ですでに名前は知っていた。そして、千冬に対しても『千冬姉』というように、彼女とは姉弟の関係なのだという事とも知っていた。

そして、何よりこの織斑一夏という少年は馬鹿なのだという事もなぜなら最初の自己紹介においてもんでもない終わり方をしたり、更には先ほどの授業において、内容としては一般常識であるところすらもわからないと言い、更に極め付きにはあの分厚い参考書を振るい電話帳と間違つて捨てたということだ。そんなんでもないことをしたら、軍事学校ではぶっ飛ばされているだろう。ここは確かにISという兵器をオブラートにつつんでスポーツ競技と呼ぶその操縦者を育成するところである。

そのためにそういう教師はいないと思っていたのだが、如何せん。

一夏の姉である織斑千冬という人物は、はっきり言って軍で教官をやっているように暴力を普通に使ってくる。それで良いのかよIS学園と当然のように思った。

飛鳥は織斑一夏という少年の人間像を先ほどまでの情報である程度作り出していたが、話してみると、はっきり言ってお人よしの塊だと思った。それがプラスに傾くか、マイナスに傾くか、そんなことは関係なく自分の思ったことを言う正確なのだろうと思った。

やや目つきの鋭い飛鳥のややめんどくさそうな喋り方にも、それを気にせずに普通に話している。気づいていながら気にしていないのか、それとも全くの鈍感なのか。

「あー、1週間であれを覚えろだなんて」

「自業自得だろ??? っていうかあれをどう見れば電話帳なんだよ」

「し、仕方ないだろ。あの時は色々掃除が大変で慌ててたから」

ああ言えばこう言う。まるで自分が望んでここに来たわけではないといっているようなものである。確かに、一夏にしてみれば突然人生設計を狂わされたといってもいい。だからといって、そう思っているかといえばそうでもない。はっきり言って今の世の中弾性が女性から下に見られている以上、初めての男性のIS操縦者として彼は世界からいろんな意味で注目されているのだ。

研究対象として、希望の光として……。少しはそのことも考えて、自らの今の立場を理解した方がいいと思った。それにしても、周りからの相変わらずの視線の数はものすごい数であった。正直きつい。

「ちょっと、よろしくて??」

「はい??」
「ん??」

する突然二人に対して、一人の女子生徒が話し掛けて来た。金髪にやや縦ロールの髪型。確か名前はセシリア・オルコットであっただろうかと飛鳥は一応ここIS学園に来る前に各国の動きは一通り知っていた。

それは彼の幼馴染たちの協力のおかげである。

——セシリア・オルコット……。イギリスの代表候補生で、名門のオルコット家の現主。IS学園の入学試験においては主席で唯一“女子生徒で”教官を破った生徒。IS適正A。使用IS『ブル・ティアーズ』、射撃性能に特化している。

「まあ!!なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら??」

飛鳥がセシリアの情報を頭の中で反芻していると。あからさまに信じられないというようなオーバーリアクションをみせるセシリア。それを誰だというようにしてみている一夏と、またかというようにして、あからさまに敵意を向ける飛鳥。

彼女のような女性がでてきたのはISが世界の国防の要になってからである。国々はこぞって女性優遇策を打ち出していった。そしてISが出来た約10年前から男と女の立場が変わったのだ。

“女尊男卑”

ISが女性にしか反応しないということから、女性＝偉いという構

図が生まれ、その風潮が世界にそして社会にすぐに浸透したのだ。

そのための彼女のような男性を見下すようにした言動をとる女性がいってもおかしくなかったのだ。

「悪いけど。俺、あんたが誰か知らないし」

一夏が一々相手にしてはめんどくさいことになりそうだといいことで、さっさと終わらせたいということ、そう言う。

おそらく一夏が彼女のことを知らないのは、女子生徒からの視線によってそんな余裕がなかったからだろう。

「わたくしを知らない！？このセシリア・オルコットを？？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

セシリアはそんな一夏の発言を聞いて心外だといわんばかりに言う。

——むかつく奴だ……。

はつきり言って飛鳥はこの手の人間が嫌いである。力をただ闇雲に振りかざし、それによって他者を従わせるような人間を……。

「あ、質問いいか??」

そんな飛鳥のことに気づいていない一夏は、突然質問があると聞く。

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一々癢に障る言い方にいよいよ握る拳に力が込められる。手が真っ白になるのではないかといわんばかりに握り締められた拳……。

「それで代表候補生って、何だ??」

その瞬間に一夏の言葉に対して聞き耳を立てていた女子生徒たち、セシリアを含めたほとんどがずっこけたのだ。

さすがにその質問は無いと、呆れを隠せない飛鳥は眉間を指で押さえている。

「あ、あ、あ……」

「あ??」

言葉にならないセシリア・一夏に対して指を指しながら口をパクパクと開け閉めしているしかできない。

そんな彼女に対して、一夏は首をかしげる。

「あなた……、本気でおっしゃっていますの!??」

「おう、知らん」

驚愕という言葉がまさに当てはまるセシリアの表情。それに対して一夏は堂々と自身のISに関する知識のなさを露呈していた。

「馬鹿か一夏。お前、それくらい小学生でも知ってるぞ」

飛鳥はあまりの一夏のISに関しての無知さに脱帽していた。参考書を捨てて読まなかったために、授業に追いつけないというのは

彼の自業自得であり仕方がない。だが、『代表候補生』というような、単語のその並んでいる文字を見れば誰でもわかるものを堂々と分らないというのだから、もはやその馬鹿さ加減は救いようのないところまできているのだろうか……。

「いいか??世界大会……つまりはモンド・グロッソに出場するのは『国家代表』と呼ばれる人たち」

「それくらい俺だって知ってるぞ。だって俺は千冬姉の弟だからな」

確かに一夏と千冬が姉弟関係であることは苗字と一夏の彼女に対するプライベートでの呼び方からして分かる。だが、そんな元国家代表……更には世界最強である彼女を姉としてもっているにもかかわらずこの発言はないだろう。

彼がISの知識にここまで疎いというのは彼が一般常識に眼を向けていないのか、それとももとISには興味がなかったのか……いや、自身の姉がISの操縦者として国家代表なのだから興味がないというのはありえない。だとしたら千冬の方が意図的に彼をISから遠ざけた生活をさせていたのか。いや、それでも最低限のISに関する一般常識は知っているはずだ。なら答えはただ一夏は馬鹿だからというのか……。

などと飛鳥はふと考えた。説明の途中だったことを思い出し、すぐさま答える。

「そのお前の姉が出場したモンド・グロッソの大会に将来、イギリス代表としてもしかしたら出場するかもしれないってことだ」

あくまでもしかしたらである。彼女が今いくら代表候補生だからと言ってその下にはいくらでも交代要員がいるのだ。彼女がここま

での実力をつけたのにはかなりの時間と努力があつたからであろつ。だが、今の彼女の態度ははっきり言ってそれらを全て否定することになる。それをまだ分かっていないセシリア。

「確かに言われてみればそうだな」

ようやく理解したような一夏が、そう言う。

「んん。よろしいのです?? 本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくするだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける??」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・バカにしてますの??」

「いや、その言い方は普通に馬鹿にしてるだろ・・・」

青筋を浮かべたセシリアが怒りを抑えつつ言う。確かに一夏の言う言葉を真に受けていればそう取ってしまうのかもしれない。一夏は一夏で馬鹿正直なのだ。

「君がそう言つたんじゃないか」

「大体、そちらの方は少しはお詳しいと見ますが、あなた、ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思つていましたけど、期待はずれですわ」

まさに期待をして損したという感じを表している。まるで見てねだった玩具が意外とつまらないものだったという子供のようだ。

「俺に何を期待されても困るんだが・・・」

そう言われて困ったような顔をする一夏。だが、彼が世界中から注目されるのは仕方のないことなのだ。前例のない、ありえないイレギュラーであるのだから。

確かにここにいる飛鳥もまた、ISという存在から見ればイレギュラーであることには変わりはない。しかし、彼の乗っているMSはISとひどく酷似しているが製作者が違う……。

それに飛鳥自身はISを起動させられない。MSというISに對抗しうるかもしれないというものをもっているから別の意味で注目されているが、それは一夏に比べて微々たる物だ。

やはり功績が少ない分MSが注目されることはほとんどないのだ。

「いい加減にしろよ……。こいつが望んできたかどうかは知らないけど、そんな人を見下すような言い方、やめるよな。むかつくだよ」

「なんですつて??」

いい加減にイライラが沸点に達しようとしていた飛鳥が睨みつけるようにして言うために、更に目を細めるセシリア。

「ふん、まあいいですわ。わたくしは優秀ですから、あなたたちのような人間にも優しくしてあげますわ。そうですわね、ISのことではわからないことがあれば、まあ……。泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくてよ。何せわたくし、入試で“唯一”教官を倒したエリート中のエリートですから」

さりげなく唯一という言葉を強調する。明らかに彼女は自身が皆の上に立つものだということを知らしめたいらしい。

「入試って、あれか?? ISを動かして戦うってやつ??」

一夏が思い出したように言う。飛鳥も自身はMSを使用した
が、相手教官と戦ったことを思い出す。もともときっかけがなければそ
こを受験することも絶対に敵わなかっただろう、笑ってあしらわれ
るのが関の山だった。だが、あの時の事件において、ISの強奪犯
たちを撃退したということが知らされたらしく、受験しないかとい
う誘いがきたのだ。

というよりもそのMSのデータも取りたいという欲望があったのだ
ろう。それはISに対抗するものだということに対する危機感だろ
うか。それについて簡単に見抜くことはできたが……。幼馴染た
ちの後押しもあり、それに参加して、その結果……。はここに
いるように合格だった。

試験での戦闘は圧倒的だったとだけ言っておこう。ISに唯一対
抗する事ができるかもしれない。ただ名もなき大学教授が生み出し
た試作品・・・MSという存在。それが織斑一夏とともに世界に対
して何かしらの変革を齎すのか……。

一気に現実世界に意識を戻す。

「あれだよな。俺も倒したぞ、教官」

「は……??」

一夏の言葉にセシリアは先ほどまで腰に手を当てて優雅なポーズを
とっていたそれが一瞬にして崩れた。飛鳥も驚いたような表情にな
る。失礼かもしれないが、まさか一夏が勝ったとは、今日ここまで
の彼の姿からは想像もできなかったからだ。

「なんだかつつこんできたから、慌てて横に回避したらそのまま壁に激突して・・・勝ったっていうのかな。教官が自滅したんだ、あ、確か山田先生」

——や・・・、山田先生。あんた一体何をしているんだ。

自身の副担任でもある山田真耶に対して突っ込みを入れる飛鳥。まさか、自らの自滅で負けるとは・・・。いくらドジ要素の塊でありながら、それはさすがにないだろうと思えた。

「一夏。それ勝ったっていわない。そんなめちゃくちな結果でよかったのか??まあ、あれは倒す倒さないじゃなくて、どの程度の実力があるのかを図るものだろうけどな」

「そうなのか??あ、だったら飛鳥はどうだったんだよ。ていうかお前、IS動かせないよな・・・」

一夏がそう聞いてくるのに対して、飛鳥はすつと自らの右手首に嵌められているブレスレットを見せる。それこそ飛鳥に対して父親が残したISとはまた違う、宇宙進出のためのマルチスーツであるMS・・・ヴェステイージの待機状態であった。

「俺も勝ったぞ」

セシリアを放っておいて、二人で話をしていた。

「わ、わたくしだけと聞きましたが・・・??」

飛鳥たちの言葉に、自分だけだと自負していたセシリアは、それが気に食わないのか、相当驚いた表情で見ている。

「どうせ“女子”ではってオチだろ?？」
「そうだな」

飛鳥の言葉にうんうんと頷いている一夏。

「つ、つまり、わたくしだけではないと・・・??」

セシリアの表情が先ほどよりも怖いものになっていた。ありえないという驚愕とありえないという怒りの交じり合った表情だ。

「だからそう言ってるだろ。耳が聞こえないのか??」
「なんですって!?!それに、あなた!!あなたも教官を倒したって言うの!?!」

「え??うん、まあ。多分・・・」

近くにいた一夏に猛然と迫りながら問い詰めるセシリア。かなり距離が近い。はたから見れば、彼女から問い詰められている、情けない彼氏である。

——セシリアの奴、大胆だな・・・。

「多分!?!多分ってどういう意味かしら!?!」

「お、落ち着け」

「これが落ち着いていられ・・・」

ものすごい剣幕で一夏に迫るセシリア。突然のことに、その剣幕に押されて一夏は慌てている。落ち着かせようともおそらくプライドが許さないのだろう、彼女はまったく引く気はないようだ。

すると突然三人を遮るようにしてチャイムが鳴る。

「……！！またあとで来ますわ！！逃げないことね！！よくつて!？」
——二度と来るな。

そんな風にして飛鳥たちに対してビシッと効果音が鳴るのではないかと思うような指を向けて言いながら、ずんずんという音が鳴るのではないかと思うような優雅なのであるが怒っているのが目に見えて分かるような足取りで戻っていった。

それからして次の授業に入っていた。

教壇には先ほどまでの二時間立っていた真耶ではなく、千冬であった。生徒たちもこれはまじめに聞かなければあの出席簿が飛んでくると思っているのだろう、それに後ろに立っている真耶もまた、憧れの千冬の授業だということ自身もノートを取り出すなどの真面目さを発揮していた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

とそれについて説明を始めようとした千冬であるが、途中で何かを思い出したようにいったん授業を切る。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

と彼女が言うようにクラス対抗戦に出る代表者を決めなければいけないらしい。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒

会の開く会議や委員会への出席・・・つまりは、まあ、クラス長だな」

一旦開いたその間合いはなんだろうかと思ったが、気にしないことにした。

「ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はない・・・が、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいるように」つまりは代表になったならば、皆の上に立つということであるから、その自覚と責任を持って行動するようにということだ。

かなり責任重大な役だと思った。

「それで誰か立候補者はいないか?? 推薦でも構わないぞ??」

教壇で腕組みをしながらクラスを眺めながら言う千冬。彼女の言葉に静かであったクラスのものが急にざわめきだした。

「はいっ。織斑くんを推薦します!!」

すると突然一人の生徒が手を上げ一夏を推薦するような発言をした。

「私もそれがいいと思います!!」

「私もー!!」

その発言に乗っかる形で次々と一夏を推薦するような発言が出る。党の一夏はというと最初は織斑って誰だと言う表情であったが、自

身が織斑であることに気づき、慌てて立ち上がった。

「お、俺!？」

すると案の定、黙れと言いたいのだろう。目の前にいる千冬からの出席簿による攻撃を受けて沈黙する。

「では候補者は織斑一夏・・・ほかにはいないか??もう一度言うが、自他推薦は問わないぞ。それと織斑。いい加減に席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか??」

再度尋ねる千冬。するとまた別の女子生徒が拳手をして言う。飛鳥はちらりとその女子生徒を見る・・・まさかと思ったが布仏本音であった。

「私はアーちゃんを推薦しまゝす」

「な!?!おい、どういうことだ!?!」

まさかの本音の推薦に思わず立ち上がり反論してしまう。おそらく彼女の策略だろう。彼女なら指示しかねない。だが、逆に考えてこれはいい機会かもしれないと思った。

それはクラス代表戦・・・1年生だけとはいえ、IS操縦者たちに対してMSの性能を見せられるのだから。とは言え、性能自体は現在各国がこぞって開発に走っている第三世代と比べれば見劣りするかもしれない。

だが、そこは飛鳥にとっては力強い幼馴染たちの力も借りて今日まで改良を重ねてきた。当然試験のときよりも戦闘能力は上がっている。

いきなり推薦されたことで、焦ってそう言ってしまったが、すぐさま静かにしろと千冬に言われ、席につく。

「はいはい、私も飛鳥くんに一票いれまーす」

「私も飛鳥くんを推薦しまーす」

「俺もだー!!」

何故かその推薦する声の中に男の・・・一夏の声も混じっていたがそこは会えて無視した。

「候補者は紅月飛鳥と織斑一夏。他にいなければこれで締め切るぞ」

そう言つて締め切ろうとしたときだった。突然後ろの席のほうで机をものすごい音を立てながら叩くものがいた。

「待つてください！納得がいきませんわ!!」

振り向くとそこにいたのは先ほどの休憩時間に飛鳥たちに対して、癢に触る言い方にて話し掛けて来た、イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットであった。

案の定誰からの推薦も受けなかったことに腹を立てているのだろう。かなりプライドが高いから仕方のないことだろう。

「待つてください!!そのような選出は認められません!!大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ!!わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

セシリアの口から飛び出てきた言葉というのはまさに先ほど推薦された二人を見下すような言葉であった。

——こ、こいつ・・・。

前方の席にてそう言っているセシリアに対してにらみつけるような視線をぶつける飛鳥。怒りからか小刻みに体が震えている。握られた拳が真っ赤になっていた・・・。このような考えを持つものとははつきり言って一緒にいたくない。虫唾が走る。いくら、嘗ての日本だけでなく世界において男尊女卑があつたからといって、それをまた繰り返すような人間につくづく嫌気がさしていた。

以前、ここに来る前に通っていた軍事学校の中等部においても、訓練をするというときにそういう女子もいた。たちが悪い女性教官もいて、むかついたのではこぼこにしてやったこともあつた。さすがにここではそれをやるわけにもいかず、曲がりなりにも彼女は代表候補生。つまりは国の代表としてここに来ているのだ。とは言え、彼女の発言や行動というのは著しくイギリスの評価を下げているようにしか思えない。更にセシリアの独論が続く・・・。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！！わたくしはこのような島国までIS技術な修練に来てるのであつて、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

もはや誰もが何も言わずに、セシリアの独論を聞いていた。担任である千冬も何も言わずに黙っている。言いたいことは言わせておけ、そんなもの自分には通用しないと無言の彼女から伝わってきていた。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！！ISの知識もろくない極東のサルや、ISも使えないくせに玩具でISに対抗しようとしている極東のサルがクラスの代表になるなんてありえませんか！！」

とうとう周りに対してもオーバーな振る舞いを見せる。

そついうのなら自推すればよかっただろうにと飛鳥を含めた周りの生徒たちが思うのは当然である。どうやら彼女はそんなことをしなくても自分が選ばれるのだろうと鷹を括っていたのだろう。それなのに彼女ではなく選ばれそうになっているのはISではなくMSを操縦する飛鳥と唯一男子の操縦者である一夏であった。

いよいよ怒りの沸点を超えそうになっている飛鳥。セシリアがいった言葉……。ISを使えないのはこの際どうでもいい。むしろ使えなかったことは幸運であったと思っていた。誰があんな家族の仇であるものを操縦したいなどと思うだろうか。MSは形こそISと似ているが作り主が違う。

それと造り、残していったのは紛れもなく飛鳥の父親だ。それを玩具呼ばわり……。あの日怒りを灯した赤い瞳が再びそこにあった。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で……」

しかし、セシリアの言葉はそこで切られた。突然バアンツというものすごい音を立てながら立ち上がったのは飛鳥であった。

一夏も立ち上がりうとしていたのだが、先に立ち上がった飛鳥に気づいて、途中で止まっている。

クラスの視線は突然立ち上がった飛鳥に向けられている。ものすごい音がなった元は机であり、殴りつけられた拳は真っ赤になっており、机はきしんでいる。

「さっきから聞いていれば言いたいことごちゃごちゃといいやがつて！ー！そんなに日本が気に入らないのならイギリスに帰れよ！ー！」
「な！？」

突然ものすごい音を立てて立ち上がった飛鳥が何をしようというのかと思っていたら突然帰れというのだからセシリアは最初は理解が追いつかなかった。

「なんだよさっきからいくらお前が代表候補生だからって、いいていいことと悪いことがあるだろ！ー！」

「あ、あなたこのわたくしに口答えを・・・」

「黙れよ！ー！」

「く！ー！」

セシリアも言われるだけでは気がすまないのので何とか言い返そうとするものすごい剣幕で怒鳴られたために思わず一步下がってしまった。自分が男におくれをとったことにかなり悔しいのか、それが表情に出ている。

「お前が見下している極東の猿が・・・俺だって言いたくないけどISを造ったんだろ？？お前がこうしてここにいられるのだってISがあるからだろ！ー！」

IS、ISなどと口にするたびに更にイライラが募る。自分の人生をめちゃくちゃにしたそれを口にするのは不愉快だったからだ。

だが、ここでそれを言わないわけにはいかなかった。今にも暴れなくなるこの衝動を何とか押さえ込んでいる飛鳥。

「それに文化に先進も後進も関係ないだろ！！いい加減な考えでものを言うんじゃないやねぞコノヤロウ！！」

確かに彼女がここまで流暢に日本語が喋れるのは相当勉強をしたからであろう。だからといって彼女に文化で否定される筋合いはないのだ。飛鳥だって別段文化を逐一全て覚えていくような日本文化マニアではないが、それでも最低限のことは知っている。対してイギリスのことで何を知っているといってもほとんど興味もないのでほとんど文化的なことは知らない。ここでお互いの文化に対して文句を言っても意味はない。ただの幼稚園児の喧嘩である。

「く！！ISにも乗れないあなたにとにかく言われる筋合いはありませんわ！！」

ISに乗れない＝弱い存在。

そうセシリアは言っている。確かにこの学園内では立場的には飛鳥は一課よりも弱いかもしれない。一夏は国から守ってもらうような、そんな貴重な立場にいるが。ISを操れない飛鳥は別にどうでも言いというわけではないが、希少価値は低い。物として見られていようであるが、はつきり言ってIS協会の者たちからすれば飛鳥も一夏も物同然なのだ。

「それになんですの？？あなたもしかして、MSなどという玩具でこのわたくしに対抗しようとお思いで？？」

「玩具だと・・・？？」

セシリアの言った言葉露骨に反応を示す飛鳥。一步その場からセシリアに近づく。お互いににらみ合ったまま動かない。まさに一発触発がおきそうな状態とその雰囲気がこのクラスを包み込んでいた。完全に遅れた一夏は立ち上がることも、何かを口にする 것도できずに黙ってそれを見ているしかできない。それをよしとさせない二人からの無言の威圧があったからだった。

これ以上長く続けば何がおきるかわからない。そんな雰囲気が出始め始めていた。すると教室に響き渡る数回の乾いた手を叩く音。生徒たちが視線を向けた先には鋭い視線を向けている千冬がいた。

これ以上口論を続けさせて何かがあつては遅いと予想した彼女はそろそろ收拾をつけるためということで無理やり視線を集めさせていた。その有無を言わせぬ視線に黙らざるを得ない。それ以上は言葉ではなく拳が出そうだった。

「自推他推から、候補者は紅月飛鳥、織斑一夏、セシリア・オルコットの三人とする。この三人による模擬戦を来週第3アリーナにて執り行うことにする」

つまりは最も勝利数が多いものが、クラスの代表となるわけである。

「決闘ですわ!!」

再び机を叩くセシリア。その指が向けられているのは飛鳥と一夏である。

「ああ、いいぜ。やってやるさ!!」

千冬の言葉に便乗し、勢いを取り戻したセシリアが再び堂々とした態度で二人に言ってくる。しかし空元気であることを知っている二人は気にしていない様子である。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い・・いえ、奴隷にしますわよ」

まったくここまでくると女尊男卑も末期である。

「わざと負けるほど、俺達は馬鹿じゃない」

いい加減に我慢ならない一夏も席から立ち上がって言う。

「そう??何にせよ、ちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね!!」

「そうだな・・どのくらいハンデをつける??」

「あら、早速お願いかしら??」

一夏の言葉に笑みを作るセシリア。まさに女王様気分である。

「いや、俺がどのくらいハンデをつければいいのかわかってはなしなんだが・・・」

するとクラスの中にどつと笑い声が広がる。一夏は一体何が起きたんだという表情である。

「織斑君、それ本気で言ってるの??」

すると一夏の後ろに座っている生徒が笑いをこらえながらいつて

くる。

「男が女より強かったのは大昔の話だよ??」

「織斑君もISを使えるけど、それは言い過ぎよ」

「ISを使えない飛鳥くんは・・・MSだっけ?? ISに勝てるの??」

みんなが飛鳥たち二人に対して本気で笑っている。それは当然であつた。今の時代、男は女よりも圧倒的に弱いのである。更に世間にもほとんど知られていないMS。功績もないそれが一体ISに通用するのだろうか。いくら試験において教師を破つたとは言え、それはマグレかもしれないというのもある。実際にあの時は明らかに相手教師が気を抜いていたということもある。あの時は未だ完成の域をいっていないMSにおいてどこまでいけるか分からなかったが、今ならやれると思っていた。

それに彼女たちが言う女が男より強いというのは高々権力であり、地位である。その理由は男がISを使えないからである。しかし、現に彼女たちの目の前には織斑一夏と言う男が何故かISを使える。

とは言え相手は曲がりなりにも代表候補生。稼動数秒しかない一夏にとつては自らの立場とセシリアの立場を考えて発言しなければいけないだろう。むしろ普通はハンデをつけてもらうべきなのだから。

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデをつけなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

先ほどの激昂の面影すら見せないセシリアのこの様子。嘲笑を二人に向かつてその顔に浮かべていた。代表候補生である彼女にとって、飛鳥たち二人は戦闘に関しては全く興味はなかった。方やISに乗れるというだけの馬鹿、方やISに乗れずにそれに無謀にも對抗するようなものに乗る馬鹿。彼女のはすでに自らの勝ちを確信していた。

「ねー、飛鳥くん、織斑くん。今からでも遅くないよ??セシリアに言つて、ハンデ付けてもらつたら??」

更に声をかけてくる女子。彼女からすれば二人を気遣つての言葉なのだろう。しかし今の二人にとってははつきり言つて逆効果である。女の彼女が男の二人をバカにしているようにしか感じられないからである。

「だったらハンデはいらない・・・」

「え??」

セシリアを含む女子生徒たちは同時に呟く。

「いないって言つてるんだよ」

「で、でも飛鳥くん・・・??セシリアは代表・・・」

後ろの女子が何かを言おうとしたとき。

「だから、なんだよ??」

まるで関係ないというニュアンスで言う。

「結局そういう奴がクラス代表になるんだから、いまさらハンデも

何もない。それにハンデをつけて、それで負けたときの口実にされたらたまらないからな」

「ISに乗れない、玩具乗りのあなたが何をできるというのですの??まさかわたくし、セシリア・オルコットを倒せるとでも??」

もはや眼中に無いという様子のセシリア。

「倒せる倒せないじゃない……。倒す!!ただそれだけだ。その伸びきった鼻……。へし折ってやる!!」

するとこれ以上話し合いをさせるときりが無いと感じた千冬は再び手を叩いて区切りを入れる。

一夏もセシリアに対してやる気満々の視線をぶつけながら机に座る。飛鳥はまだイライラをその体に纏いながらも、ゆっくりと座る。セシリアも千冬に対しては逆らえないのか、席につく。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。それぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

そうして授業が再開された。

PHASE 02 気に入らない（後書き）

ED1 ↓遠雷 〉遠くにある明かり < HIGH and MIG
HTY COLOR >

PHASE03 同居人は幼馴染（前書き）

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

二人の口調はこれでよかったのか、ちょっと不安です。

なんとかPHASE03。今回はシリアスよりもほのぼののです。

ご感想、お気に入り登録どうもありがとうございます。

PHASE 03 同居人は幼馴染

「終わった・・・」

腕を伸ばして伸びをするのは飛鳥である。ようやく一日が終わったことをあらわすように、その体からはきばきつというこりにこった音がした。

「身体的より、精神的にきつかったな」

「ああ、それは言えてる・・・」

飛鳥はそう言いながらも帰りの支度をいている。それに対しては一夏も同感だと言う。気が付けば、教室には飛鳥と一夏しかいなかった。教室の外にはまだ二人のことを見ようという女子生徒達がいるが・・・。

まさかここまで初日からバタバタするようになるとは思っても見なかった。飛鳥は近くのホテルから、一夏は自宅からそれぞれ通うことになっている。そろそろ帰ろうかということ、二人は立ち上がり、鞆を手に掴んだ。すると同時に教室の扉が開けられた。

「ああよかった、まだいました」

そこにいたのは担任の千冬と真耶であった。扉を開けたのは先頭で入ってきた真耶であり、相変わらぬぼわぼわとしたスマイルである。

「二人の部屋割が決まりましたよ」

その言葉に二人はえっという驚いた表情になる。

一応IS学園は全寮制である。それはIS学園が国など関係なく中立なものであるためにさまざまな思惑と、一元管理できる手軽さによるための全寮制であった。

今までは女子しかいなかったためにその管理は簡単であったが、今年は違う。飛鳥というISに対抗しうるかもしれないMSというものを操縦するイレギュラーと一夏という男の操縦者というイレギュラーがいるからであった。

そうなると女子とは微妙に違った設備や風紀、道德などから、一気に管理が大変になる。それ等が整うのに約一週間はかかると言われ、それまで二人は例外として自宅通学を言い渡されていた。

「え???俺は確か一週間は自宅通学って言われてたんですけど??」

一夏がそう言われた、聞き返す。すると千冬があきれたように言ってくる。

「お前は自分の立場を理解しているか??」

その言葉に一夏が言う。

「つまり、俺達に危険が及ばないようにってことか??」

「だろうな。俺の場合はMSの強奪、お前に関してはお前の体自身。ふらふらと外を出歩いていたら誘拐されてモルモット行きだな」

「紅月、もう少しオブラートにつつんだ言い方はないのか??」

「でも、事実でしょ??」

取りあえず部屋割りがどうなっているのかを聞く。基本的に男同士になるはずであるが、真耶から飛び出した言葉はそれぞれ別々だということだった。一夏に『1025』、飛鳥に『1034』と書かれた鍵と、寮生活についての注意事項が書かれた紙を手渡した。

「お前達の荷物は必要最低限な物だけ・・・代えの衣服と携帯の充電器で十分だろう、すでに部屋に送っている。残りの必要な物は休日取りに帰るんだな」

確かにそうだが、男としての生活必需品がないことは二人にとっては少しさびしいものであった。

それからして、二人は教室を出て部屋を探していた。

「・・・1024、1025と。ここだ」

飛鳥と一夏は鞆を肩から提げて部屋を探していた。取りあえず番号が若い一夏の部屋が先に見つかった。とりあえず、夕食に行く前に部屋の中にある少ない荷物を整理することになった二人はそれぞれの部屋へと入っていく。飛鳥も自身の部屋である1034号室を目指す。

取りあえず中に誰かがいるかどうかも分からない。ノックを一応してみた。すると中からなんだか聞いたことのある声色でどうぞと言うのが聞こえた。取りあえずドアノブを引き、中へと入る。

そして最初に眼に入っただのは・・・。

「ピカ。。ウ・・・??」

「ん??アーちゃんだ」

「え??なんで・・・??」

そこにいたのは黄色の狐の寝巻きをした同じクラスであり、隣に座っている幼馴染の布仏本音であり、その横にあるベッドにラフな格好で寝そべっていたのは4組にいる同じく幼馴染である更識簪の姿があつた。

何故か無理やりに取り付けられたようなベッドがあり、その上には二つほどの中くらいのダンボールがガムテープにて閉じられた状態で置かれていた。

そんなことよりもどうして彼女たちがここにいいのか。飛鳥にとつてはそれが大きな疑問であつた。

「な、何でお前たちがここに・・・??」

「えゝ、だってここが私たちの寝泊りする部屋だから??」

「何で疑問系??」

思わず尋ねてしまった飛鳥であるが、本音は何故か疑問系の語尾で答える。思わずつつこんでしまうのはいたし方がない。

そして、今度は本音のとなり、廊下側のベッドに寝そべってこちらを見ていた簪を見る。女子同士の部屋だからか、かなり身軽でラフな格好である。最初こそ二人の幼馴染が自身がこれから寝泊りするはずの部屋にいたために内心驚いていたのでほとんど気づいていなかったが、落ち着いた今もう一度見るとちらちらと下着のようなものが見える。

「／／／」

思わずそこに眼を向けてしまい、すぐさま眼をそらす。

「あー!!」

簪自身も自分がいマドンナ服装でいて、そこに立っている飛鳥の性別が自分たちとは違う男性だということによりやく気づき、慌てて足元にあった薄い掛け布団でからだを隠す。

「・・・」

「な、なんだよ・・・」

胸の高さまで掛け布団を持ってきて、眼鏡の奥の瞳が飛鳥をにらみつけていた。怒っているというよりも、恥ずかしいというのだろう。とは言え鈍感な飛鳥が気づくはずもなく。怒っているのだろうと思いつつも、思わず強めに言い返してしまう。

「見た・・・??」

「・・・」

何をと聞き返すほど、飛鳥は馬鹿ではない。眼が泳いでいることから、簪は見たのだと確信する。

当の飛鳥はこれ以上突っ立っていても、簪から向けられる視線に耐えられる自身がなかったので話題を戻すことにする。

「え、えつとなんだ??お前らもここで寝泊りするんだな??」

「そうだよ」

「うん・・・」

と言う事とは、飛鳥はただ一つの答えに帰結した。ここにいるのは男子である自分ひとりと女子二人の本音と簪。ベッドの数は二人が座っているのとダンボールがぼつねんと置かれているのを合わせると三つ。なら残っているベッドは誰が使うのか。当然のことながら突っ立っている飛鳥しかない。

「てことは、お前らと相部屋ってこと・・・??」

「そういうこと」。また一緒だね」

「そうだね」

相変わらずのほほんとしたマイペースな口調で言う本音と、淡々とクールに話してくる簪。とは言え彼女たちも内心気恥ずかしさを感じつつも、小さい頃は良く並んで寝たことを思い出し、懐かしさとうれしさを感じていた。

取りあえず荷物の整理をしようとベッドに近づく。そこには発送者がかかれており、書かれていたのは『更識楯無』。おそらく家に置かれているのを従者に頼んで自分の名を使って遅らせたのだろう。素直にここにいない幼馴染に対して感謝した。

「それにしても、すごいな・・・」

とりあえず部屋の中に入ってそれを見た率直な感想がそれだった。まるで豪華な高級ホテルなのではないかと思えるような造りであった。

衣服などが入ったしたダンボールが、ありえないくらい、その空間に不釣り合いな存在感を放っていた。

ベッドに腰掛けてみるとものすごい弾力に驚いた。子どもであっ

たらここを飛び跳ねて遊ぶだろう。とりあえずダンボールの中の着替えや、勉強道具を整理しようと思い、立ち上がる。

豪華な部屋であるために、色々と整備がなされている。本棚やら勉強に使うテーブルやらは当然のこと、最新式のテレビや、更にはパソコンなども置かれているなどどこまで金をつぎ込んでいるのだと思っくらいであった。

それにしても男にとっての生活必需品がどうして入っているのか。こっそりと買ってきては見つからないようにとかくしていたにもかかわらずダンボールの中に入っていた。家には自分一人しか住んでいないために絶対にありえないのにと思い、少し引きつった笑みしかできない。

さすがにそれを出すわけにも行かず、後ろでは小首を傾げている本音と黙ってこちらに読んでいたものから目を離し、ちらりちらりと視線を向けている簪がいる。

いくらなんでも異性に対して、さすがにこれの類を見せるのは気恥ずかしさが勝る。仕方ないとダンボールに封印したままベッドの下へと滑り込ませた。内心幼馴染・・・この学校では学年が一つ違っているが、彼女に対してやってくれたなという思いを向けていた。

それからしばらくして、三人はそれぞれのベッドの上に座って話をしていた。話題は飛鳥が相手の代表候補生に喧嘩をふっかけたということだ。飛鳥の席の隣にいる本音がその話題を出したのだ。

「何してるの・・・」
「ぐ・・・」

あきれたように言ってくる簪。その言葉と細められた目で見られ、思わずもってしまう。楯無簪は現在の日本代表の候補生としての立場にいる。そんなために他の国の代表候補生についてのことも知らないというわけではなかった。そのためにセシリアのことも全く知らないというわけではなかった。

第三世代のIS『ブルーティアーズ』のイメージインターフェースとしての特徴的なのは青い涙と形容されるようにビットによるオールレンジの攻撃であった。はつきり言っで一対多において真価を発揮するような後方支援型のISである。一応の知識で知っていたためにふと思い出していた。

「代表候補生に喧嘩を振るって・・・」

「し、仕方ないだろ。アイツ、むかついたから」

年は関係なく、昔から兄妹同然に過ごしてきたために普通にタメ口である。ここまで簪が話しに乗っかってくるとは珍しいと思った。もともと口数が少ないのだ。とは言え少しずつ代わりうとしているのかと思うとうれしく思えた。

「アーちゃんはセシリーに勝てる??」

「せ、セシリー・・・??」

おそらくセシリアだからセシリーといったのだろう。彼女の言うニックネームは時々良く分からないものがある。

「勝てる勝てないじゃなくて、勝つ・・・だな。あそこまで馬鹿にされて、悔しくないわけがない」

彼女がISを操縦できるということとで相手を・・・主に男を見下

すのは今に始まったわけではない。ISを使えるわけじゃないのに、理不尽な要求をされたことだってある。だからと言って、自分の親を馬鹿にされて我慢できるわけがなかった。すでにこの世にいない使者を愚弄されたのだ。あそこで言葉より先に手が出なかったのは今までの飛鳥からすれば賞賛されるべきことなのかもしれない。

それにMSがただ父だけ残したものであるわけではなかった。すでにISが世界に広がり10年くらいが経っていた。家柄のこともあってかISの技術もこちらに流れていた。更に幼馴染の姉妹が揃って国の代表やら代表候補生やらになっている。彼女たちの助力もあり、このIS学園に入ることができたのだ。父親だけではなく、彼女たちの協力すらも否定されたのだ。飛鳥がキレルのは当然の結果であつた。

「俺のことだつたらここに来る前だつて普通に言われていたさ。だけど、父さんやお前たちのことを馬鹿にしたら我慢できるわけない……」

また思い出しただけに腸が煮える思いだつた。あそこまで自分の大切な存在を馬鹿にされたのは初めてだつた。だからこそ決闘を受け入れた。代表候補生とか、そういう立場というのは無視して、ただ紅月飛鳥という一人の人間としてそれを受け入れた。

「それにおりむーも一緒だよな」

「おりむー??」

「織斑一夏……あの世界で始めての男の操縦者のやつだよ」

本音のその独特なニツクネームの人物が誰なのか聞いてきた簪。アス海外にも無謀にも代表候補生に挑む馬鹿がいたのかと思ったのだろう。飛鳥はそのニュアンスから一夏のことだと分かった。

「・・・」

簪はその一夏の名前が出た瞬間、表情がこわばる。それに気づいていたのは本音くらいだろうか。またぶり返していた怒りで周りを見ていなかった飛鳥がそれに気づくことは不可能だ。

「アーちゃんは今日、おりむーと喋ってたけど。どうだった？」

本音が聞いてくる。確かに二時限目が終わってから同じ男として交流しておいても良いだろうということで話していたが・・・。

「馬鹿だな」

二人は揃って??を頭に浮かべていた。とはいえそう言いたいという理由は同じクラスである本音も分からないわけではないだろう。

色々あったがあれはその言葉で尽きるだろう。確かにお人よしなところもあり、それは評価に入るかもしれない。だが、総合して飛鳥から言えるのはその一言だった。

そこでようやく冷静にものを見るまでに落ち着いていた。ふと先ほども表情が良くない簪を見てようやく察する。彼女の胸のうちに持っている感情やそれに関係することを考えれば分かることだった。

思わずこの話をするのはまずかったかと思う。完全に失念していた。

「う・・・、まあ。なんだ。1週間後の決定戦・・・、勝つしかない」

そう呟いて見つめる先にある紅いブレスレットの待機状態であるヴェステイージが照明の光で怪しく輝いていた・・・。

PHASE 03 同居人は幼馴染（後書き）

ED1 ↓遠雷 〉遠くにある明かり < HIGH and MIG
HTY COLOR >

誤字・脱字、ご感想がありましたらよろしくお願いします。

PHASE04 ヴェステージ（前書き）

OP1 ↓ ignited < T・M・Revolution >

たくさんのお気に入りのご登録ありがとうございます。

ご感想や、誤字脱字がありましたらよろしく願います。

PHASE 04 ヴェステイジ

IS学園入学二日目、暖かな光が窓際のベッドを使用押している飛鳥の顔にダイレクトに降りそそぐ。どうやらカーテンの隙間からあふれ出していたらしく。とはいえ軍事学校の中等部门に行っていた頃と変わらない時間であるために目覚めはそれほど悪くない。むしろ普通であった。

ゆっくりと日差しが目にし込んできて、ゆっくりとあけられる赤い瞳。しばらくぼんやりと真っ白な天井を眺めていた。そして、不意に自分の体が動かないことに気づいた。

いやこれは動かないというよりも動けないといったほうがいいのだろうか。何かがからだにのしかかっており、不意に何か柔らかく、暖かい何かが自分のからだに触れているのを感じ取った。

その柔らかいものが何なのか。理解できないにもかかわらず、体が熱くなるのを禁じえない。慌てて顔を動かし隣の二つあるベッドに寝ているだろう二人を見る。変わらずやすやすと眠っている二人の姿があった。

ならどうして飛鳥の使っている布団が異様に盛り上がっているのだろうか。恐る恐るであるがゆっくりと布団をめくり上げる。

「あは」

「な・・・」

そこにいたのは簪と同じ、水色の綺麗な髪をした少女。飛鳥よりも一つ学年が上の幼馴染である現更識家当主である更識楯無その人

だった。

「あ、あんた一体何を・・・」

「おねーさんも人肌恋しいときがあるのよ」

「だ、だからって・・・」

何もこんなことをする必要もないだろうと言いたかったが、言っただけで言いくるめられるのでやめておいた。

それにしても思わず目が一点を向いてしまうのは飛鳥も男だから仕方がない。頬に赤みが差している。にゅっと伸びてきた捕捉、雪のように白い手がその頬を指でつつく。

「や、やめろ・・・」

「あははは、アツくん照れてるね」

顔をのけぞらそうにも体が動かせないために更につつかれる。ちらちらと見える豊かな谷間が視線に入るたびに更に顔が熱くなるのを感じる。それを見逃すような彼女ではない。むしろ見せているといわんばかりの薄着である。

ようやく解放され、起き上がる飛鳥はベッドの端に座る。着崩れた服装を直す。その横に布団をかぶった楯無が座っている。

「で・・・??」

ジト目で隣にいる彼女を見る。きょとんとした瞳で飛鳥を見ている楯無を見て尋ねる。

「あんたは何をしにここに来たんだよ・・・」

「むゝ。また昔のように『お姉ちゃん』って呼んでくれないのかな
ゝ??」

「な／＼／」

自身の恥ずかしい過去。純粹無垢な子どもであったとき、それは素直に近所であつた彼女との交流が当然にあつた。家柄からなかなか近づきたい雰囲気があつたがふとしたきっかけで遊ぶことになったのだ。

今も通じて楯無が飛鳥のことをアツくんと呼んでいるように、小さい頃は今こそ気恥ずかしく『あんた』としか呼べない飛鳥も『お姉ちゃん』と呼んで慕っていた。

「無理だ・・・」

「えゝ」

「無理なものは無理だ。恥ずかしい」

「私はむしろうれしいのだけだねゝ」

そんなことを言っている二人であるが昔のように楽しく話をしていたときのようにスムーズに口が動いていた。飛鳥が家族を失ってから、更識家にお世話になったのは2年ほど。そしてすぐに普通中学校ではなく短期の軍事学校中等部に編入していった。その二年の間にも飛鳥は彼女たちと混じって武道などを通じて自らを鍛えた。

はつきり言つて彼女たちに手も脚も出ずにやられる毎日であつた。情けなく、人知れず涙したこともある。それでも腐らなかつたことの大きな割合を占めていたのは篠ノ之束及び白騎士への怨みであつた。

ふとそれを思い出し、思わず握りこぶしに力が入る。それをそつ

と包み込む楯無の柔らかな手。何も言わないが、あの時と同じように、無理はしないでほしいと言っているような気がした。

ちらりと横を見るとすぐ近くに座り変えていた彼女の横顔が見える。そこにはから買うような様子はなく、ただ純粹に嘗てのように幼馴染、姉として心配している楯無がいた。

「あんまり無理しないでほしいな。何かあったらおねーさん悲しいから」

体が密着し、お互いの鼓動が感じられる。ときどきとした心臓の鼓動が知られていると思うと、落ち着くばかりか更に加速する。ふわっと香ってくる女性特有の甘い香り。それが鼻腔をくすぐり、もつと、もつとという欲を掻きたてる。飛鳥にとっては使ったことはあるわけがないが、まるで麻薬のようなものであった。

「わ、わ、分かった。分かったから／＼」

「な／＼に？？どうしてそんなに焦ってるのかな？？」

すると変わり身の早い彼女はすぐに悪戯っ娘のような笑みを浮かべてくる。助けを予防にも二人はまだ夢の世界に旅立っているように無理やり起こすのはかわいそうだ。時間はまだ早いというのにどうして彼女は来たのだろつかという疑問もあつたが今はそれどころではないのだ。

「だから、離れろ！！」

「や／＼だ」

離れるどころか更に体を密着させる。小さい頃ならお互いに姉弟のような感じで、友達感覚でいられたかもしれない。しかし、お互

いにもうそういう年齢ではない。男は女を、またその逆に女は男を意識する。後ずさる飛鳥を追いかけるようにして這うようにして近づく。すらりと布団が床に滑り落ち、薄い服装から白い肌が見える。

がりがりと削られていく理性。今まで彼女を女として見なかったかどうかと言われれば、魅力的な女の子だと思う。だが、これはまずい。非常にまずかった。理性が警報を発している。顔が赤い、心臓の鼓動が早い、緊張で口の中が乾いていく。

誰か助けてくれ。そう心の中で叫んでいた。いよいよ理性という防波堤が瓦解しそうになったとき。突然部屋の扉が勢い良く開かれた。思わず二人はその方向へと視線を向ける。

そこには起きたばかりですぐに来たのだろう、まだ寝巻き姿の女子生徒がいた。いつもは三つ編みにしている長髪そのままながし、綺麗な顔立ち、そして、眼鏡を掛けた彼女はずんずんと部屋に入ってきて、飛鳥と楯無の前に立つ。

「あははは・・・」

「お、おはよう・・・」

「「虚」「」」

そこに現れたのは飛鳥よりも2つ年上であり幼馴染、隣にいる楯無にとっては自身に仕えている人物であった。そんな虚は目の前にいる二人を見て小さくため息をついている。

「おはようございます・・・。取りあえずお嬢様」

「な、何かしら虚・・・」

一応の挨拶に対する返事を済ませた虚はすぐに飛鳥の隣にいる楯

無に視線を向ける。苦笑いで答える楯無。するとグイツと腕をつかれ立ち上がらされる。

「にゃ!？」

まるで首根っこをつままれた猫のような声をあげて立たされる楯無。そのまま腕を引っ張る形でずると連れて行かれる。助けてなどとまるで連れてかれるヒロインのように演じているが、そのときの飛鳥にとってはむしろ虚はヒーローのように見えた。

「全くお嬢様は……。目が覚めてみてみたらベッドがものけの空とは……」

「エヘヘヘ、やっぱり虚には敵わないな」

まだやや肌寒いという朝なので虚が持ってきた上着を着ている楯無。どうやら彼女たちは同室らしい。まあ、二人の関係を考えれば当然なのであるが。この部屋に最初にいた簪と本音もまた同じような関係である。

「すみません、飛鳥くん。こんな朝早くからお嬢様が迷惑をかけてしまい」

「え、いえ。あ、あと助かりました」

専属のメイドであるために謝罪を入れている。飛鳥にしてみれば彼女が来なかったら、これから何をされていたかと思うとむしろ感謝しても仕切れない。内心かなり緊張していたし、雰囲気飲み込まれるところでもあったのは否めない。

「も」。虚が来なかったらもう少しで楽しいことができたのに「お嬢様??？」

「ひい」

口を尖らせて言う楯無であるが、虚が静かに、それでも怖い笑顔で言うために思わず小さく悲鳴をあげてしまう。

「取りあえず戻りましょう、お嬢様。これ以上の長居はお互いに悪いです」

「そうね。残念だけど、これ以上いるとここの寮長さんに怒られちゃうわ」

どうやらこの寮を管理している寮長は一夏の姉である織斑千冬らしい。確かに彼女に見つかったりしたら大変なことになるというところで、虚が楯無のことを連れ戻しにきたのは賢明な判断だったかもしれない。

「何か助けがほしかったらいつでもおねーさんの所に来るのよ。いつでも力になるから」

「ああ、分かった」

「あと、クラス代表決定戦、頑張つてね」

「え、何で知って・・・」

「うふふふ、おねーさんに隠し事は・・・」

「会長権限で知ったのですよ」

「何で真実を言っちゃうのよー!!」

「それっていいのかよ・・・」

最後は頼りになる姉としての言葉を残して行きたかったのだろうが、最後の最後で彼女の行動力のすまじさを知らせることになってしまったのだった。取りあえず、軍学校での生活が見に染み付いてしまっていたので早朝のトレーニングをするべく、着替えを済ませ外へと向かうのだった・・・。

あれから1時間ほど後。飛鳥は、同室の簪と本音とともに食堂にて朝食を採っていた。あれからトレーニングを終えて戻るとすでに二人は起きており、着替えも終わっていた。更に食堂では彼ら3人のほかにも、そこに向かう途中で会った女子生徒も一緒であった。

はじめは簪は一人でいいといていたが、これから三年間子の学園で生活をしていくのだから少しは交流関係を広めておいたほうがいいとも胃、本音の後押しもあつてか一緒に席に座っていた。離れて座ればいつの間にかいなくなるのも考えられたので、隣に一緒に座っていた。飛鳥の簪と反対の席には本音が座っている。

取りあえず朝食は和食である。

このIS学園、世界各地から生徒が来るので食事も生徒の要望に応えるために多国籍料理が網羅されている。更にその料理の味は有名ホテルを貼るかに凌駕する美味である。しかし、そこで働いているのは、どう見てもパートのオバサンなのであるが、人は見かけで判断するべきではないなと思ひ知らされた。

周囲からの視線は相変わらずすごいものである。昨日から彼女たちの行動や視線がぶつかっている。どうやって話しかけたらいいか、どうやって話しかけるきっかけを作ればいいのか、それらを実行するのに勇気が無いという理由でなかなか近づけないらしい。

どうやら彼女達の大半は小・中と女子校出身であるらしい。ISの授業は女性は必須であるけど、操縦できない男には必要ない。共学校でもISの授業が取り入れられていないというわけではないが、それでも女子高のほうが俄然力の入れようは違う。

それに、小さい頃からの英才教育を施す学校も多いために、男とのふれあいがない彼女たちはほとんど男に対する免疫がないのだ。

つまり、彼女たちは箱入り娘、お嬢様達なのだ。

女尊男卑の世の中で、この学園でISは操縦できないが、それに取って代わるかもしれないMSを操縦する飛鳥と唯一男性としてISを操縦できる一夏はある程度尊重されている。それでも昨日のセシリアのように、まだ二人を見下しているものも少なくはない。

それに四方八方からの視線である。はっきり言って監視されているようにしか思えず、気分が悪い。

「ああ、私も早く声をかけておけばよかった・・・」

「まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよ」

確かに飛鳥たちの部屋にも一年生だけではなく二年生や三年生の上級生も訪問に来た。危うく中に入ってくる生徒もいた。それを救ってくれたのは千冬であった。彼女の声一つで慌てて自室に戻り始めた女子生徒たち。

そして、現在に至る。飛鳥の周りで食事をする女子生徒たちは自分たちのトレーに載っているお皿にある量と飛鳥のを比べて言う。

「うわ、飛鳥くんって朝すっごい食べるんだねー!!」

「お、男の子だね」

「そうか?? 取りあえずこれくらいは当たり前だと思っけど」

色々な事情があるということを男である飛鳥が理解し切ることはできない。例えそのような知識があろうとも、鈍感な飛鳥がすぐに理解できるわけではないのだった。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか??」

飛鳥ははそんな彼女たちのトレーの上を見ながら言う。確かに飛鳥の摂っている食事量比べても少なすぎる。

「わ、私たちは・・・ねえ??」

「う、うん・・・平気かな??」

「お菓子よく食べるし」

「それは駄目だろ」

そんな風に言う女子生徒たち。さすがに最後の発言には突っ込みを入れておいた。良くそれだけで持つものだとはつきりいつて感心してしまう飛鳥。真実を知るのは彼が鈍感から脱却したときだろうが、それを口にするのはデリカシーがないだろう。

「お前達、いつまでチンタラ食べている!! 食事は迅速に、効率良くだ!! 遅れた者はグラウンドを10周させるぞ!!」

すると突然女性の声が食堂に響いた。視線をその方向に向けると1組の担任教師である千冬が白いジャージに身を包み仁王立ちしていた。和やかな雰囲気の中で食事をしていた生徒たちは千冬のその言葉に慌てて食事を流し込んでいくのだった。

「織斑、お前のISだが、予備がないため学園が専用機を用意することになった。到着するまで、しばし待て」

朝食からしばらくしてからの一時間目の授業にて、開始してすぐに千冬がそう言った。専用機という言葉に反応してか、クラスがざわついた。

「一年こんな時期に専用機??」

「ていうことは、国から支援が出たってこと??」

「いいなー、私も早く専用機欲しいなー」

そのように一夏が専用機を支給されることについて女子生徒たちの会話はヒートアップする。専用機が支給されるのはほとんどが国家代表や代表候補生、その実力に見合うものでしかない。だが、一夏のように全くのど素人に対して国からの援助が出るということははつきり言って帰結する答えはひとつしかなかった。

しかし、そんなクラスメイトを尻目に、一夏はというと首を傾げている。

「なんで俺に専用機が??それに、専用機ってそんなにすごいのか??」

そんな一夏は自身がどれだけ貴重な存在なのか理解していないようである。そんな一夏の言葉を聞いて暮らす銃の女子生徒が思わず机に頭を打ち付けてしまう。飛鳥はそんな一夏に対してもはやあきれを通り越した視線を向けていた。あれがかの世界最強と呼ばれる織斑千冬の弟なのだから。セシリアの言う期待はずれという言葉はまさに当てはまるかもしれない。

とはいえ一夏の専用機を作っているのが倉持技研ということを隣の席である本音がこそつと教えてくれた。それを聞いてふと思い出

したことがあった。代表候補生である4組の幼馴染、更識簪の専用機が以前作られていたのがそこであることだった。

以前というのは本音が教えてくれたように倉持技研が一夏の専用機を作るためということで、簪の専用機の製造が止まったのだった。もちろん一夏の専用機が完成すればすぐさま取り掛かるということだったらしいが、彼女の性格というのか、姉である楯無に対するコンプレックスからそれを自身の手だけで完成させると決めたらしいのだ。

もちろん彼女の専用機は未だ完成には至っていないらしい。とはいえ彼女はもともと自分から話をすることが少ない性格であるために、代表候補生ということから4組のクラス代表になったらしい。彼女にとっては暮らす対抗決定戦が間近であるが、全く興味はないようだという。

ふと思ったがISを操縦できるわけではない飛鳥であるが、MSははっきり言ってISと原理上は同じである。そのため一夏のような全くの素人のような操縦者が専用機を持ってもいいのだろうか。操縦する本人が乗りこなせなくてはただの宝の持ち腐れになるのではないかと思った。

話しは戻るが、さすがに一夏の言葉には千冬も頭を抱えていた。専用機の重要性くらいISを知っている人間なら誰でもわかる。それを知らない彼は一体なんなのか。さすがに女子生徒たちもやはりアクションを取るのもやめている。

「それに関する話はここまで。それでは授業を始める。織斑、教科書六ページだ。音読しろ」

そしてすぐに話を切ると、授業に入り、一夏に教科書を音読するように指示する。

「あ、はい。えーと・・・」

一夏は言われたページを探して、立ち上がる。

「『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるISは467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取りきすることはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』」

音読し終わると、ほっとし様子で胸をなでおろし、席に座る。

「昨日も話したが、つまりそういうことだ。本来ならIS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。だが、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか??」

ISの根幹を成すコアというものは世界中に467個しかあらず、それは専用機用と研究用にそれぞれ分けられている。更に国ごとに配給される数も全てIS協会が荒らすか条約にのっけておいて決められているのだ。

ならそのコアを複製すれば良いというが、その製造複製する過程

のコア自体の構成が全くのブラックボックス化されているために不可能なのだ。更に唯一コアを作り出せるのは、ISというものを世に送り出した元凶であり、飛鳥の家族を奪って言った一人である篠ノ之束だけなのである。しかし、元凶の彼女はというと、姿を隠して世界中を逃げ回っている。彼女の腕が確かなのか、世界がただ間抜けなのか。

ISと簡単に一言で言ってもさまざまな世代わけが成されている。第一世代は兵器としてのISの完成を目指した機体。現在はほぼ退役している。

第二世代は後付武装によって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれた世代であり、現在最も多く実戦配備されている。代表的なものを上げるとすると純国産である打鉄とフランス産のラファール・リヴァイブである。

第三世代は操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした世代である。未だ実験機の域を出ない。そのためか、どの機体も燃費が悪く、新たな課題となっているようだ。

飛鳥の使用するMS……。ここで言えばISと似ているのは防護服のようなスーツを着て、そこに待機状態になっている装甲を纏う。全身装甲までは行かないが、ISのものと比べるとほとんどはだが露出することはない。

しかし、第二世代のように後付武装などの換装することによってさまざまな状況に対応できるようになものでもなければ、操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器も装備されているわけではない。

今はIS自体をこの待機常態である赤いブレスレットにできているが、武器を粒子変換するなどということは飛鳥の父親はさすがに解明できなかったし、開発もできなかったようだ。だが、それに取って代わる武器のほうでの開発は進んでいたようだった。

簡単に言えば飛鳥のMSは見た目的にはISで言う第1世代くらいなのだ。だが性能的に言えばどうなるかは未知数である。自己進化していくISといわれているが、果たしてMSはどうなのだろうか・・・。

「安心しましたわ」

すると突然、そんな微妙に重い空気をものともせず高飛車な喋り方な透過った声が響く。もちろんその声の主はセシリア・オルコットであった。いつものごとく腰に手を当てて、上品なポーズをとっている。

「わたくしと同じく専用機持ちならば、容赦はいりませんわね?? あとここではつきり言いますわ。あなた方に勝利はありませんことよ。イギリス代表候補生である、セシリア・オルコットと戦おうだなんて、片腹痛いですわ。むしろ手合わせできるだけでも、貴重な体験ですわ」

ニヤニヤと見下すような言い方である。そんな彼女の言い草が気に入らなかった一夏は立ち上がり叫ぶ。

「ふざけるなよ。まだ試合もしてないのに、決め付けるだなんて、ふざけるな!!」

「一々突つかかってくるなよコノヤロウ。何か言っていなきゃ不安なのか?? そんなのだとお前の実力の程度が知れるぜ」

「な、なんですって!!」

確かにセシリアの操縦技術と機体の性能と比べれば雲泥の差があるかもしれない。彼女にそれで勝ちたいのであれば、最低限でも代表候補生レベルの力あたりは必要になるのではないかというのが、クラスの生徒たちの見解であった。そう思うとむしろ、勝負は目に見えているのだから、無駄なのではないかというのが当然のように思われていた。

「あなた、本気で言ってますの??そんなろくに動かしたこともない期待ならましも、全く実績のない玩具でわたくしに傷の一つでも付けられるとでも、お思いですか??」

「だったら傷一つついたらどうだって言うんだよ!!自分の言ってる言葉に少しは責任を持てよな!!」

当然そういつている飛鳥自身もイギリスの国を背負ってここに来たセシリアに対する言葉も少しは控えなければいけないのであるが、そんなことを一々気にするような性格をしている飛鳥ではない。

「ふん。せいぜい最後まであがくのですわね。まあ、何をしようとこのわたくしセシリア・オルコットの勝ち揺るぎませんわ」

セシリアも興が醒めたといわんばかりに、鼻を鳴らして座り込む。クラスの中に重苦しい空気が立ちこめる中、ふと一人の女子生徒が質問があると手を上げる。千冬がそれを許可したためにおずおずと立ち上がりその視線を黒い髪をポニーテールにしている篠ノ之箒に向けて言う。

「あ、あの先生。篠ノ之ってことは、篠ノ之さんは東博士の関係者なのですか??」

その女子生徒は若干緊張間を漂わせながらそう質問した。誰もがその疑問を持っただろう。なぜなら篠ノ之束と篠ノ之箒は苗字が同じなのだから。その質問に対して、千冬はあいまいに流すように言おうとした。それは当然だろう、もしそれが正しいことなら小さな騒ぎでは済まされないのだから。しかし、その篠ノ之箒というのは何を血迷ったのか・・・。

「あの人は関係ない!!」

かなり真剣な表情で、鋭い視線を向ける箒を見て、質問をした女子生徒は体を小さく震えさせ、小さく悲鳴をあげ、ゆっくりと席に座る。周りの生徒たちもそんな箒の横顔を見てすぐに視線を逸らした。

そんな風に叫んでしまつては、せっかく話を流そうとしていた千冬のさりげない気遣いが水の泡である。こうもなつてはいくら教師が否定しようにも放棄自身がそれを認めてしまっていることになるためにどうしようもない。

仕方ないと千冬が授業を始めようとしたときだった。突然ものすごい音とともに立ち上がったものがいた。

「一体なんだ、紅月?? 質問があつたらまずは挙手をしろ」

千冬が目を細めて睨むように言う。だが、そんな彼女の視線も言葉も無視して黙つて前のほうの席にいる不機嫌だという雰囲気をかもし出している篠ノ之箒の元へと行く。

「なんだ??」

あからさまに敵意・・・不機嫌オーラを理不尽にも飛鳥にぶつけてくる。しかし、飛鳥の睨む視線を受け、一気にその不機嫌オーラは吹き飛んでいた。彼女はこのような瞳を知っているからだ。まるで何かを憎んでいるような瞳。そう自分の姉のせいで生活などを全てめちやくちやにされた両親が姉に向けているような瞳だった。いや、それと比べるのには足りない。もはや殺すことも厭われないと思うくらいの殺意や憎悪、怒りなどが瞳にあつた。

「言え・・・」

「な、なに・・・??」

飛鳥の剣幕に押されてやや遅れを取る形で聞き返す。

「言えって言うてるんだよ!!お前の姉!!篠ノ之束はどこにいる!!」

「し、知らない・・・」

「言え・・・言え!!どこにいるんだ!!」

とうとう胸倉を掴み、軍事学校で鍛えられた腕力で座っていた箒を軽々と持ち上げる。それを見て慌てて飛び出してきたのは一夏だ。さすがに幼馴染がやられるのは見ていられなかったのだろう。箒を飛鳥から引き離すようにして自身の後ろに庇うようにして立つ。そのまま飛鳥の胸倉を掴んでいない逆手で、思いっきり殴りつける。

机にぶつかりながら床を転がる飛鳥。ものすごい音がして、生徒たちは悲鳴をあげる。鼻から血を流した飛鳥が睨みつけるようにして立ち上がる。殴られた頬は赤くはれているが、その眼光は鋭いままである。

流れる血を甲で拭い取る。ゆつくりと立ち上がり。足を踏み出そうとする。だが、それを後ろからとめるように抱きつく存在があった。

「!」

飛鳥は無意識の内にそれを邪魔だと振りほどこうとした。怒りに支配された飛鳥の視界に入るのは親の敵であるものの妹とそれを庇うようにして立ちはだかる邪魔者だけだったのだ。

しかし、それができなかった。背中に抱きついて、わきの下からその人物の手が出ているが、制服がだばだば、その特徴的な制服を見て、振りほどこうとした力が一気に失せた。

「何するんだよ・・・」

「アーちゃん駄目だよ」

「本音・・・」

布仏本音が後ろから飛鳥のからだを捕まえていた。男の力を使えばすぐにでも投げ飛ばせるくらいの軽さである彼女。その手を振りほどく琴だつて少し力を入れればできたことである。

「皆怖がつてるよ」

そういわれて周りをゆつくりと見渡す。飛鳥の目つきが相当鋭くなっているのだろう。クラスの女子生徒たちは小さく悲鳴をあげたり、後ずさったり周りにいる生徒は涙も見せていた。

「あ・・・」

ゆつくりとこみ上げていた怒りが醒めていくのが感じられた。それを感じ取ったのかどうかは知らないが、ゆつくりと飛鳥の体から自身の拘束を読本ね、どこから出したのか分からないが、用意周到にハンカチでその血で汚れたところを拭いてくれる。

「すみません・・・」

「ハア、全くお前もお前だが、織斑。お前もやりすぎだ」

「で、でも千冬姉・・・」

「織斑先生だ、馬鹿者」

ハンカチを貸してくれた本音に一言礼を言い、それで傷口を押さえつつ、周りの生徒に対して謝罪する。とはいえ、さすがに殴られたことと篠ノ之束に対する怒りというのは胸の中でくすぶっていた。

相変わらず睨む目からは怒りの炎は小さく燃えており、その視線の先には一夏と篝の姿があった。

「せんせー。アーちゃんのことを保健室に連れて行っても良いですか??」

終わりが見えないこの状況で本音の声が教室に響く。一夏に殴られた後が紅く染め上がっており、腫れているのが遠目でも見えた。更に借りたハンカチも流れる鼻血で白から赤へと変わっていた。

「悪化するのは避けたいからな。いいだろう、布仏。お前が連れて行け。他の生徒だと今は少し荷が重いだろうからな」

「はい」

千冬が生徒の様子を見て、明らかに飛鳥に対して怯えているのが見えた。確かに冷たそうな雰囲気を持っていたが、暴力に走るくら

いに怒ることもあるというのがかなりショックの大きな出来事だったのだろうと思う。

更に、飛鳥だけではなく一夏の行動も原因であった。たった二人だけの男子生徒の喧嘩。ほとんど男子に対する免疫のない彼女たちからすれば、かなり恐怖の対象に映っただろう。もろにその拳が入ったのだから当然であろう。

胸倉をつかまれ、一夏に助けられていた筈ですら、そんな一夏の行動に驚きを隠せていなかったのだから。取りあえず千冬自身が止めにはいる前にそれ以上の殴り合いが起こらなかっただけでもラッキーと思わなければいけないのだろうか。

取りあえず最初の原因を作ってしまった飛鳥をこの場から一旦離れた方がいいと思い、保健室へと連れて行くことを許可する。付添い人として、他の女子生徒であればおそらくともにこなせないと思い、いたって普通に行っている本音が自身で立候補したので頼むことにした。

ふといい忘れていたことを思い出す。さすがに新しい学校生活が始まって2日目で暴力沙汰になるとはまさか想定しているはずもなかったのだ、今後のことも考えて罰を与えておかなければいけないと思った。

「それと、紅月。放課後に職員室に来い。さすがに今回の荒事見過ごせないからな」

「・・・分かりました」

さすがにここは大人しく従ったほうがいいと、少々気に食わないが飛鳥は返事を返す。そのときの表情は相変わらず不機嫌そうであ

り、その真っ赤な瞳はうらみの炎でいつも以上に真っ赤になっていた。飛鳥たちが教室から出て行くと、一気に緊張感が嘘のように消えていた。大きいため息をつく生徒、机に突っ伏してしまう生徒などが見受けられた。

「あと、織斑。お前も来るように」

「な、なんで!？」

「そうです。一夏は私のことを・・・」

「口答えは許さん。私に来るようにと言ったら来るんだ。分かったな??」

「はい・・・」

当然のように一課にも繰るように言う千冬。本人は分かっているが、さすがにあそこで殴るのは軽はずみであり、やりすぎである。引き離すくらいであれば目をつぶるが、その殴る行為で更に相手を怒らせることを考えていなかった一夏もあの雰囲気を作り出した原因の一人でもあるのだ。

とはいえもともと原因の発端は幕の千冬がせっかく話を流そうとした行為を無碍にする発言だったのだが・・・。

とにもかかわらず、授業は再開された。

「いててて!!」

「はい、男の子なんだから我慢して」

「くそ・・・、あいつ本気で殴りやがって・・・」

保健室に来た飛鳥と本音。本音は治療される飛鳥の代わりに証明書に色々書き込んでいる。養護教諭の女性は飛鳥を椅子に座らせ、

真っ赤に晴れ上がった頬と、口の中の切れたところなどを診察し、手当てをしていた。

書き終えた本音は養護教諭から手渡された氷袋を持って飛鳥の後頭部に当てている。

「ひゃいー!!」

「あははは、おもしろい」

大きくできたたんこぶに本音が持つている氷袋を当てる。もしかするとそのだばだばな制服は冷たさから直接手を守るためにあるのではないかとふと思ってしまった。

殴り飛ばされたときに吹き飛ばされ、机に思いっきりぶつけてしまったのだ。そのときにできたこぶであるが、相当強く打ち付けたのだろう。かなりの大きさであり。氷袋の変わりに本音がわざと遊ぶようになでりなでりとされて思わず痛みで小さく悲鳴をあげてしまう。

当然氷袋はかなり冷たく、思わず悲鳴をあげてしまうくらいにそれにしてみた。取りあえず冷やしておけばそれは大丈夫だとはちまきで無理やりに固定される。思わず何でと呟いてしまった。

殴られた衝撃で口の中を切ってしまったが、それはあまり深くはなく、少しばかり塗り薬程度で数日もすれば直るといわれた。鼻血はすでに止血されているために大事には至っていない。

それと比べて思いっきり殴られた頬は反対と比べてひどいように晴れ上がっていた。殴ったときの力とともに、おそらく一夏の思いが込められているのだろう。守りたいという正義感、そして怒り。

「まったく新学期早々男の子はやってくれるわね」

「しょうがないでしょ……。俺にだっていろいろあるんです」

「でも、まあいいわ。私も養護教諭だけどほとんど暇してるのよね」

「仕事しろよな」

あきれたように言ってくる養護教諭の女性。どうやらここを利用するのよほどのことがない限りはないらしい。そのために今もまたからんとして静かな雰囲気漂っている。

元が女子高であるためか、かなり綺麗な空間である。とはいえ今も女子高であり、飛鳥と一夏は完全なイレギュラーなのであるが……。

清潔感溢れたこの空間。薬品のおいがわずかに香ってくる。

「はい、動かないで」

「いででで……。」

「こら動くな。ちゃんと治療できないでしょ」

そんな空間にまた医者と患者の声が響く。はれた頬に塗り薬をつけ、処置を施している。わずかな刺激でもかなりさすような痛みが走るために、飛鳥は顔をしかめる。

しかし、顔を背けることはできない。

「動いちゃ駄目だぞ」

「ぐぎぎぎ……。痛い痛い!!」

後ろから本音が両手で頭を固定しているのだ。そのほっそりとし

た腕から考えられないような力で固定されているために、治療の痛みよりも頭をつかまれている痛みで悲鳴をあげているのが多い。

「はい、これでおしまい」

「おしまい」

「お、終わった・・・」

ようやく治療が終わったが、どうしたわけか、治療しに來ただけでこんなに疲れるとは思わなかった。とにかく握られていた頭が変形したのではないかと不安で確かめるしぐさをしている。

「頭のほうはこぶがひけばいいけど、今日はあまり激しい運動はしないほうがいいわね。謝ってぶつけたらとんでもないわ」

「まじかよ・・・。代表決定戦の練習しなきゃいけないってのに・・・」

「体を大事にするのも大切よ??先生の言うことを聞きなさい」

「ええ・・・」

「返事は??」

「・・・はい」

ぶつくさと文句を言う飛鳥であるが、さすがに健康などからだの状態を完全に把握するほど医学などに精通しているわけではないので、しぶしぶと従うしかなかった。

取りあえず一言礼を言って保健室を出て行った。暇なら話し相手になってほしいとも言われ、気が向いたらと返しておいた。

そんな治療を終えた二人は教室へと戻っていた。時間はそれほどたっていないが、完全に授業を一つ捨てることになる。他の人にノートを借りて移すしかないと思った。

「ところでさ・・・」

「なあゝに??」

隣とことごと歩く本音を横目に飛鳥は口を開く。

「何である時、俺を止めたんだよ」

あの時というのは飛鳥が一夏に殴り飛ばされ、お返しに殴ろうと立ち上がり、歩き出したときだった。それをとめたのが本音であったのだが彼女に聞いてみても・・・。

「なんでだろうねえ??」

疑問系で返されてもこちらが困るのだがとあきれたような表情で彼女を見る。とはいえ、これ以上聞いてもおそらく彼女ののほほんとやり過ごされるだけだと思ったのでやめておいた。

そして、廊下の角を曲がろうとしたところで何者かの気配を感じた。向こうに誰かがいる。いそぐでいない気配。絶妙なところで自分のことを試しているのだろうか。

思わず嘗めるなと思ってしまった。そして、そこにいるだろう人物の名前をいう・・・。

「何してるんだよ、楯無」

「ピンポン」さすがにこれくらいは読めるようになってるね、アツくん」

「馬鹿にするな、俺だってあのときのままじゃない・・・」

扇子を口元に当てながらにつこりと笑みを浮かべた女子生徒・・・
IS学園2年の更識楯無がそこにいた。

「ちょっと小耳に挟んだことがあったからね」

「なんだよ・・・それ」

楯無の言葉に飛鳥は尋ね返す。するとその扇子の先を飛鳥のおでこにつきたてながら言う。

「アツくんが織斑一夏くと喧嘩をしたって言うつわさをね」
「!!--」

思わず目を見開いてしまう。あれは確かに激しい音を立ててしまったが・・・だがすぐに納得した。おそらくあの時見ていなかったが、他のクラスの生徒たちも思わず興味を持って見に来ていたのだろう。彼女の扇子がバツと開かれ口元を隠している。飛鳥が見ている部分には何故か青春の文字が書かれていた。

「いつの時代の物語だよ・・・」

「あら、殴りあうこととお互いを理解できるんじゃないの??」

「どこの不良の友情物語だよ・・・」

何故かいつの間にかそんな文字が書かれていることに関しては以前からのことなので一タつつこむことはしない。とはいえ彼女の言う言葉は古すぎる。

その話しは別として、今こうしてのらりくらりと校内を散策している彼女がどんな立場の人間かを考慮すれば簡単なことだった。

「それにしても一方的にやられたようね。軍人なのに」

「殴り返せばよかったか?? たぶん全治何ヶ月かになってたぞ」

からかうように言う楯無に対して、少々物騒な言葉で返す飛鳥。
冗談よと言って流すようにする。

「殴ったら殴ったでその後が怖かったかしら??」

「さあね。あの先生がそう見逃すとは思えないけどさ」

廊下の窓から顔を出して外を見る。晴れ渡った春の日差しが校庭に差し込んでいる。木々が緑色にきらめき、青空が広がり、装飾のようにして白い雲が流れている。

「ところで・・・」

そう話を切り出す飛鳥。

「あんたはこんなところで油を売って何をしたいんだ??」

「もう、最近の子はすぐに答えを求める傾向にあるわね。もっとゆとりを持ったほうがいいわよ??」

「俺がそんな人間に見えるかよ??」

「うふふふ、そうね。でも、少しはゆとりも必要よ?? そんな四六時中復讐や力ばかり考えていても、疲れるだけよ??」

「そういうあんたも、四六時中狙われている立場だろ??」

そついうと確かにと気にしていない様子の笑みを浮かべる。絶対強者の自信の現れであろうか。あのイギリス人の代表候補生とは全く違うオーラ。比べるのも失礼だろう。

「簡単に言えば、アツくんの怪我の程度を見に来たって言うのが妥当かな」

「別に・・・、何ともない」

ややどもる飛鳥。

「えゝ、だつてさつき・・・」

「い、言うなよ!」

「にゅ!」

ニコニコしながら何かを口にしようとした本音の口を慌てて手をかざしてふさぐ。いきなりだったのですがの本音もいつもは半目の瞳も全開まで見開かれていた。

「それだけ元気なら大丈夫なようね。心配のしすぎかしら??」

「これくらい別に・・・」

目の前の彼女が小さい頃に良く怪我をしてしまい、泣いていた飛鳥を慰めてくれたときの優しい姉の姿に見えた。今はそんなに甘えられないし、そんな気もない。そういうと彼女は悲しそうな表情をかすかに漂わせるのだが・・・。

「ならそろそろ教室に戻ったほうがいいわよ。授業こんな時期から遅れるわけにはいかないでしょ??」

「誰が引き止めてたと思つてんだよ・・・」

「うふふふ、なら頑張つてね」

そう言つて再び角を曲がっていく。急いで後を追うが、すでに楯無の姿はそこにはなかった。小さくため息をつく飛鳥。まだまだ彼女には遠く及ばない。そう思った。

『あのね、僕大きくなったらお姉ちゃんのこと守つてあげるんだか

ら』

『そっか、ならアツくんには簡単には負けられないよ』

『絶対にすぐ追い越すんだから』

『楽しみにしてるね』

何で今頃こんな幼い頃の記憶が蘇ったのだろう。そう思ったその次の瞬間には頭から霧散していた・・・。

それから一週間が経っていた。とうとう、クラス代表決定戦の日が来てしまったのだ。正直時間が経つのが早いと思う。

すでに一週間前に負った怪我などは感知していた。あの子の放課後地冬からの説教を受け、一夏との仲直りを果たした。とは言っても一応という形である。なぜなら飛鳥にとって箒は篠ノ之の姓を持っている。

彼女が篠ノ之東の居場所を特定することができる何かを持っているかもしれないので、無理やりにも聞きだすかもしれないと、一夏は警戒しているのだ。その手もあるが、はっきりして別の意味で飛鳥は捕まる気はない。

一夏が箒との間でなにやらラッキースケベがあつたらしいが、そんなことをして捕まりたいなどとは毛頭ない。とはいえ姉的存在である楯無が連日布団に侵入して来ていたので、その度に驚かされる一週間であつた。

箒の中ははっきりいってあれっきり変わっていない。とはいっても話したこともないし、話すこともない。接触するたびに飛鳥は理不尽と言われるかもしれないが、彼女に対して怒りをぶつけてし

まいそうなのだ。

篠ノ之束の居場所が分かればおそらくそのまま白騎士にもつながるだろう。そのときは・・・と思うと思わず握り拳に力が入る。そのため力を求めた。あの時人生に二度とないかもしれないくらいの絶望を味わった。

周りを見れば皆笑顔で生活をしている。それは平和で幸せで素晴らしいことだ。だが、ふと飛鳥の体の中に今もそのときをじっと待っている猛獣はそれを嫌っていた。もう一つの飛鳥ともいつていいのだろうか・・・。

自分たちだけ平和に浸りやがって・・・と、飛鳥の心の奥底に押し込められている怒り、悲しみ、憤怒、激情、憎悪・・・。さまざま負のエネルギーであり、復讐のための支えでもある。それが今にも彼女たちをかみ殺さんとして身構えることもある。どうして自分だけ・・・などと被害者のような思考に陥ることもある。

「いよいよって感じだな」

ISスーツに着替えて、アリーナの控え室にいる一夏がそう言う。ふとその声が聞こえたために飛鳥は思考の海から現実へと帰還する。隣にいる一夏が何故か一緒にいる筈に対して言う。

「でもなんだ・・・??」

「ど、どうした??一夏・・・」

一夏の言葉を聞いて筈はやや戸惑いを隠せない様子で聞き返す。一体何があったのだろうかと思う。ふとここ一週間の一夏の動向を思い出してみる。放課後になるといつもすぐに彼女・・・隣にいる

箒に鞆とともに引きずられて教室から姿を消していた。

ちらちらとその動きを見ていた楯無曰く、箒が部員としている剣道部の道場を使つての訓練らしい。とはいえこの一週間、飛鳥が訓練場を借りて、他の目を気にせず訓練していたが彼らの姿を見たのは一度もない。

「俺なんにもISについて教えてもらつてないんだが・・・」
「・・・」

「なあ、箒。俺この一週間、剣道しかやってないんだけど・・・。それは間違いないよな??」

「あ、ああ・・・」

一夏が責めるまでは行かずとも、ジト目で箒を見ながらそう言っている。箒も視線を泳がせながらごまかそうとしているが、はつきり言つてバレバレである。拳動不審がそう伝えている。

——て言つか、こいつ・・・。

飛鳥は目を細め、ややにらむようにして二人を見ている。二人が今日までやってきたのは今日のクラス代表決定戦のためであった。しかし、種目は剣道ではなくISによる戦闘。

一夏は全くISを動かすための基礎知識も学ばず、尼知さえ、一度もISを起動させることなく、はっきりいってぶっつけ本番の形で試合に望むことになっていた。

飛鳥からすれば一夏は子の戦いに対して嘗めてかかっていると思わざるを得ない。話を聞いているとどうやらもと一夏は箒の実家である篠ノ之道場の門下生であつたらしい。

入門当初は彼のほうが弱かったがもともとその才能があつたのかどうか、彼女よりも強くなつて言つたらしい。しかし、中学に上がるころにあの飛鳥にとっては強欲な悪魔のようにしか見えない篠ノ之束がISを開発し、あまつさえあの事件を・・・。

その後ISの性能の高さを世界に見せ付け、それが世界を震撼させた。ISが各国に渡されたはいいが、当の本人は姿を消してトンずらしてしまった。ISが彼女にしか作り出せないといわれる以上、彼女の居場所を特定できるものは確保、監視下に置かれなければならない。

そんな理由で彼らはその頃に別れてしまつたらしく、箒が転校せざるを得なかつたのだ。その後一夏はというと、中学では三年間皆勤賞の、帰宅部だつたなどとそこは胸を張つて言うところじゃないだろうと、飛鳥は内心思った。

彼がそんな生活をしていたのは、職業不詳の姉である千冬に少しでも樂をしてもらいたいためであつたらしい。そのために剣道から手を引き、バイトに明け暮れていたらしい。

両親の話がないということから何かあつたのだろうか、ふと思つてしまった。とはいえ今はクラス代表決定戦において、かつことを考えなければいけない。ゆっくりと深呼吸をして、体に走る緊張感をほぐしている。

「あついました!!」

すると向こうから声がしたと思つたら、真耶を先頭に千冬と二人でやってきたのだ。

「どうしたんですか??そんなに慌てて」

相当息を弾ませている真耶。逆に普段どおりに歩いてきた千冬。二人が三人の前に立つと、真耶が口を開く。

「すみません、織斑くんのISが到着するのがもう少しかかるそうなので・・・」

「ええ!？」

真耶の言葉に一夏は思わず声を張り上げてしまふ。目の前でそうであったので、思わず真耶は身をびくつと震わせていた。

「馬鹿者、こんな至近距離で騒ぐ馬鹿がいるか」

「い、イテ。だ、だって千冬姉・・・」

「織斑先生だ。なんと言ったら理解するのだ。それができなければ人間をやめるか、死ね」

「ひ、ひどい・・・」

さすがに彼女が言えば上段に聞こえないのは、彼女のその雰囲気があるからであろうか。どう見ても姉弟の会話ではないのは確かである。彼女にも色々と思うところがあり、こう対応するしかないのであろうが、いつも回りにいる幼馴染の姉妹を見ると、その仲が非常に疑いたくなるのだった。

「織斑のISが来ていない以上、予定していた最初の試合、織斑対オルコットの試合を変更して紅月対オルコットにする。紅月、IS・・・じゃないな、例のものは準備できているのか??」

「ええ、まあ一応は」

「なら早く行け。オルコットが待ちくたびれているだろうな。それ

にアリーナの使用時間は限られているのだから」

腕を組んで言う千冬。飛鳥はというと、誰のせいでこんなに遅くなったんだよと、内心毒づいていた。口にすればどうせ理不尽な攻撃が来るのでやめておいた。

飛鳥のMS用の防護スーツは赤であった。胸部から肩部の辺りが城となっている防護スーツを着て、その手首には当然のように待機状態のプレスレットのMSであるそれがはめられていた。

とうとう来てしまったのだ。望まぬ・・・否、まさに心待ちにしていたのかもしれないこの瞬間。このとき以前にも何度かISとの戦闘を繰り返している。それが知られているか知られていないかだけである。

飛鳥は身も心もぼろぼろである。それは6年前のあの白騎士事件・・・・公にはされていないが、篠ノ之束によるテロ事件。それによって家族を失い、自らの無力さを白騎士から突きつけられた。

だが、それももう終わり。もう自分はあるときのような無力な存在ではないから・・・。そう思いながらゆつくりとピットのほうへを穂を進めていく。ゆつくりと、そして確実にその床の感触を確かめるように。

そしてカタパルトデッキへと到着する。

「システム、起動」

『General Unilateral Neuro-Link
Dispersive Autonomic Maneuver
—— Synthesis System』

そのシステムの文字の羅列が目の前に現れるモニターに映し出される。頭文

字を取って『GUNDAM』。ただ一振りの飛鳥に残された剣であった。守るた

めに、過去とのけじめをつけるために。ただそのためにその剣を振るう。

その姿は到来のISとは違い、ほとんどが機械装甲に覆われた、言ってみれば

全身装甲に近く、わずかに間接部分から赤い防護スーツが見えていくくらいしか肌の露出はない。

その機体の色は胸部が赤である以外はすべてがダークグレー。顔を覆っている4本のV字型アンテナは白と金色、更に睨みつけるような双眼は緑色であった。まさに飛鳥自身・・・赤き怒りの炎とどす黒い恨みの黒が反映されていた。

「こ、これが・・・」

「MS・・・」

目の前に現れたISと似ているが、そこから感じられる威圧感と違うのは違っていた。教師二人は入学試験において、すでに目にしているためにそれほど大きく驚いた様子ではないが、始めてみる一夏と箒は驚きに目を見開いていた。

「これがISと同じ・・・、宇宙進出を基に作られたマルチスーツ」

「ISとあまり変わりはないさそうだが・・・」

見た目的にはマルチスーツということなので、行き着く先は似た

ようなものだっただけ。だが、肝心の中身は全く違っただけ。動力も違っただけ。

飛鳥は全長3メートルほどのMSを纏い、ゆっくりとカタパルトデッキに足を固定させる。あの日から6年がたっていた。あの時絶望のふちにいた、怒りの炎を宿した瞳に映ったのは無数のミサイルの弾頭とそれを破壊していく白騎士。

無力だった自分は何もできずに無様にそこに座り込むしかできなかった。あのミサイルを破壊することも、篠ノ之束を殺すことも、白騎士を殺すこともできず。ただ小さく無力な虫のようにその場に這い蹲るしかできなかった。

長い時間を幼馴染の彼女たちに心配をかけ、ずっと守られるように過ごしていた。そればかりも嫌だということで自らを鍛え、あまつさえ軍事学校にまで通ったりもした。

ただもう二度と手が届くところにいる大切な人を失いたくない。それを目の前で失った飛鳥だからこそ・・・、失ったものだからこそ分かる痛みであった。きっとハイパーセンサーから見える全方位の様子をモニターで確認する。そして前方の信号が赤から青へと変わった。

飛鳥の双眼に移るのはまるで彼を待っているかのように広がるアリーナと空から降りそぐ太陽の日差しとそれを包み込む大空。ぐっと軽く膝を曲げ、その右手にビームライフル、左腕にはアンカー付き巨大シールドを構え発進を待つ。

「紅月飛鳥、“ヴェステイジ”。行きます!!!」

PHASE 04 ヴェスティージ（後書き）

ED1 ↓ 遠雷 遠くにある明かり < HIGH and MIG
HTY COLOR >

PHASE05 青き涙／ブルーティアーズ（前書き）

OP1 ↓ ignited < T・M・Revolution >

いよいよクラス代表決定戦が始まりました。前後に分けて投稿したいと思います。最初はセシリアとブルーティアーズとの試合です。

セシリアとのフラグは・・・立ちません。

PHASE 05 青き涙／ブルーティアーズ

飛鳥が上空に飛び上がる。そこにはすでにアリーナにいたセシリアがそこに待っていた飛鳥が現れたことに気づいて声をかけてくる。

「あら、最初は織斑さんだと聞いておりましたけど??」

「アイツのISがまだ届いていないんだ。だから急遽俺に変わったんだよ」

彼女の様子からして相当待たされていたようだ。いらいらした様子が見て取れた。

「全くレディーを待たせるとは、男性として恥ずかしくありませんの??」

「悪いけど、そう言う経験は生憎ないんでね」

お互いに軽口を交わす。すでに試合は開始されている。

「まあ、いいですね。それにしても、よく逃げずに来ましたのね??わざわざ負けて惨めな姿を晒すためにご苦労なことですね」

相変わらず見下すような口調で飛鳥に言ってくる。その手に握られているレーザーライフルの銃口はしっかりと飛鳥に向けられている。

「今ここで謝るというなら許してあげないこともなくてよ」

そう言うセシリアであるが飛鳥はそれを鼻で笑って拒否する。

「あらあら残念ですね。なら、お別れですね!!」

そういうや否や、突然セシリアは握っていたレーザーライフルを飛鳥に向かって放つ。銃口から狙いを見定めた飛鳥はとっさの回避行動にてその攻撃を川した。

「かわした！？少しはできるようですね」

不敵な笑みは相変わらずのセシリアはライフルを再び構える。飛鳥も負けじとビームライフルを構える。

お互いがライフルを構え、アリーナの上空を所狭しと飛び回る。第三世代であるセシリアのブルーティアーズのスピードについていくMSを知らないものたちからすれば、ありえない光景であった。

セシリアの表情からすっかり余裕というにも字は消え去っていた。縦横無尽に動き回る目の前にいる飛鳥に対して全くレーザーが当たらないのだ。

「く、ちょこまかと・・・」

歯噛みしながらも狙いをつけてレーザーを放つがまるで先を読まれているかのように、トリガーを引いた瞬間にはそこに飛鳥の・・・ヴェステイージの姿はなかった。

「く、どこに・・・!!」

数メートル横に移動していた飛鳥はすぐさまライフルを放ち、ブルーティアーズの方を貫く。ビームの熱で溶かされた青い装甲がえぐられたような後がセシリアの目に入り、それがプライドを傷つけられたように見えた。

「よくもこのわたくしに傷を!!」

傷一つ着けられまいと思っていたセシリアであるが、予想以上にMSと何より飛鳥の操縦がよかったためにダメージを確実に受けていた。対する飛鳥はというと巧みな操縦でセシリアの射撃武器であるスターライトMK?のレーザーを回避したり、対ビームコーティングの巨大シールドにて防ぐためにダメージは0に等しかった。

「このままでは恥さらしですわ……。行きなさい、ブルーティアイズ!!」

セシリアが齒噛みしながらもそう宣言すると、背中の中とわかれていた部分から四基のアンロックユニットであるビットが飛び出した。それがセシリアを囲むようにして浮いている。

「あれが……。第三世代の特徴であるイメージ・インターフェースを用いた武器か」

その四基のビットがまるでそれだけに意志があるかのように自在に動き出し、飛鳥の周りを飛行する。いくらハイパーカメラがあるといっても、見えるだけで反射するのはその操縦者本人の反射神経にかかってくる。

「わたくしとブルーティアイズの奏でるワルツで踊りなさい!!」
「へ、ワルツか阿波踊りか知らないが、そんなのに付き合ってもらえるか!!」

青き涙を形容するように、四基のビットが次々と確実に飛鳥の死角に回り込み、豪雨のようなレーザーを放ってくる。それを微妙な

操縦裁きでかわしていく。だが、そのビットに襲われている飛鳥は防戦一方である。まさにワルツを踊らされているというものだった。

「何ですのその無様な踊りわ。少しは嗜みもお勉強なさったほうがいいですよ」

「く・・・、面倒な武器だ」

右に左に、更には上にしたにと機体をスラスターの強弱によって操作し、火弾を免れている。だからといってこのまま逃げ回っていても勝負にはならない。とはいえビットも一撃離脱とそのまま滞空しているなどというおろかなことはしていない。

「こんのお!!」

「!!きや!!」

飛鳥は再び降りかかるレーザーを回避していくところ、体勢を崩す、何とか正面から放たれたレーザーを構えたシールドで受け止めたが、ぐらりと斜めになった体勢のまま攻撃を掻い潜り、強引な体勢のままでライフルを放つ。

そのビームが狙ったわけではないが、真っ直ぐと飛んで行き、セシリアの、ブルーティアーズの足を貫き、爆発する。腕部や、脚部は人間のそれよりも延長されているために、一応大丈夫であるが、バランスを取るという意味では、難しくなる。滞空していたセシリアも失った右側にぐらりと傾き、すぐさま体勢を立て直す。

「く、これくらいなんともありませんわ!!」

強がるセシリアとは反対に、飛鳥は疑問を持つような表情でその場から離脱していた。いつの間にかビットは再びセシリアの回りに

戻っていた。何故あの時避けられるビームを回避せずに受けたのだろうか。

まさか来るとは思わなかったときを抜いていたとも考えられる。だが、反応はしたものの、全く体が動いていなかった。そう疑問を感じつつ、移動しながら肩越しに装備しているファイヤビー誘導ミサイルを計16発セシリアに向かって放つ。

「そんな攻撃!!」

四散したブルーティアーズがそこから次々とレーザーを放ち、まるでレーザーのカーテンを引くようにミサイルの着弾を防ぎ、撃墜していく。しかし、全てを打ち落とすことはできず、数発が動かないセシリア本人に着弾する。

「きゃあああ!!」

「また・・・」

爆発に巻き込まれ、女性特有の悲鳴が上がる。そんなことは飛鳥の耳には入ってこず、むしろ更に彼女のミサイル着弾が疑問を広げる結果となっていた。何故かわさなかったのか、全て落としきる自信があったのかどうかは同として、最悪を常に想定して動いておかなければいけないというというのが飛鳥の見解である。

「まさか・・・」

「く、嘗めないでほしいですわね。これくらい、どうってことありませんわ」

そう叫び、セシリアがスターライトMK3を構える。それに対しビームライフルですばやくそれを打ち抜く。破壊されたスターラ

イトが爆発し、余波で右手も破壊される。

苦悶の表情を見せながらもセシリアは再び四基のブルーティアーズを飛鳥に向かわせる。まるで蜘蛛の巣を張り巡らすかのようにして、先ほどもより激しいレーザーの嵐が降りそそぐ。

それを回避していくが、シールドで受け止めたときに逆方向から放たれたレーザーがライフルを貫いた。慌てて手を話したために余波を受けることはなかったが、射撃武器を失った。後退した近くにビットが一機あるのが後方も映るハイパーカメラにて視認する。セシリアが指示するのよりも先にすばやく右腰にある柄を掴みそこからビーム刃を展開、逆手にとってそのビットを切り裂いて、破壊した。

「そこですわ!!」

「甘いんだよ!!」

すばやく順手に持ち替えた飛鳥はすぐにスラスタを全開にして、高機動を生かして、次々とレーザーを掻い潜り一基、また一基とビットを破壊していく。背中越しに現れたそれに対して、頭部に装備されているCIWSを連射し、破壊する。

「そ、そんな・・・」

セシリアは自らの機体であるブルーティアーズの特徴であるビットを全て叩き落されるのを見て、啞然とした表情で目前に浮いている飛鳥を見ている。

セシリア自身、自らの機体であるためにその性能も、そして自らの弱点も知っている。だが、それがこの試合の中で看破されるとは

思わなかったので動揺が隠せないでいる。

すでに主戦の射撃武器を失った今、彼女に残されているのは隠し武器と今残った左手に出現させた近接用の武器だけである。

スラスターを再び全開にしてつつこんでくる飛鳥。目前に迫るセシリアであったが、その瞬間セシリアの表情は先ほどまでの啞然としたようなものではなく、勝ちを確信したような笑みであった。そしてその瞬間に腰辺りからビットのようなクリスタルの先端を持つミサイルがこちらに向かって真っ直ぐ飛んできたのだ。

目前に迫る前に突然出現した熱反応。まさかと思っていたが突然放たれたミサイルに対してバレルロールを描くようにして動き、ミサイルをかわす。振り下ろしたビームサーベルをとっさに差し出した近接用のインターセプトとぶつかり合い、火花が散る。

しかし、もともと射撃が専門であるセシリアにとってインターセプトは万が一のときの武器であり、それほど接近戦に特化しているわけではない。そのために罅迫り合いになったところで一気に押し込められている。

「このまま一気に!!」

「甘いですわ!!」

「なに???? が!？」

突然の衝撃がスラスターのある背中に入った。それとともにモニターに映し出されるのはこう機動性を高めるためのバックパックが壊れたということだった。これではつきり言って機動性を失ったヴエスティージはビーム兵装を使える第一世代と変わらない機体になる。

はつきり言つてまずい状態である。先ほどバレルロールで置いてきたと思つたミサイルは誘導つきだったらしく、そのまま向きを変えて再び飛鳥へと戻つてきていたのだ。それが運悪くスラスト突きのバックパックに命中し、大幅にダメージを追つていた。衝撃自体はVPS装甲によつて装甲のほうに大したダメージはないが、明らかに性能ダウンは否めなかった。

「こ、これで権勢逆転ですわね!!」
「ち!!」

セシリアが満面の笑みで言ってくる。思わず齒噛みせざるを得ない。自身に残っているエネルギーは半分ほど。実際の着弾は先ほどの一度だけ、後は飛行しているのでエネルギー消費でそこまで減つていたのである。

セシリアのインターセプトでの戦闘でこちらが負ける割合は少ない。だが、彼女にはまだミサイル兵装が残っており、その着弾数やこれからのエネルギー消費によつては危険であつた。

「一気に終曲ですわ!!」

そう言つと更に数発のミサイルが飛び出してきた。脚部に装備されている穂場リングすらスターも使用して地面をすべるように高速移動する。向かってくるミサイルに対して、頭部のCIWSを打ち込んで次々と撃墜する。

次々とミサイルが打ち落とされ、煙が舞い上がる。その中から打ち落としきれなかったミサイルが飛鳥に向かってくる。小さくした内をしてそれを回避していく。地面に着弾したミサイルが爆発を起

こし、更に視界が悪くなる。

一気に上空に飛び上がる、その煙から飛び出した瞬間にアラート音になる。おそらくセシリアが接近しているのだろう。案の定煙を抜けると向こうも察知していたのかインターセプトを構えて接近戦に向かってきた。おそらくミサイルの数も残り少ないのだろう。

展開したビームサーベルで受け止め鏖迫り合いになる。激しい閃光が二人の間で駆け巡り、力を込め、後退する。残っていたミサイルを次々とは成ってくるセシリア。それを残り段数の少ないCIWSで撃墜する。

「く!!」

「くそ!!」

お互いに遠距離での実弾兵器が尽きたようだ。お互いに牽制しあうようにして空中を一定の距離を保ちながら牽制しあっている。だが、このままの状態を続けていても、最初にエネルギーが切れるのは飛鳥・・・ヴェステイージであるのは見て取れた。残り半分のエネルギー。無効のセシリアの表情もかなり厳しさを物語っている。すっかりと笑みが消え、残りの慣れない近接先頭でどう戦うか、ぎりぎりの思考をしているのだろう。

「一気にカタをつける!!」

左腕に装備されたシールドを首に巻きつけるように体を捻ると、大型のシールドに付属されていたアンカーをセシリアに向かって射出する。セシリアは突然の警戒音に驚いた表情で猛スピードで迫り来るアンカーに反応しきれずに左腕をそのクローが絡みとる。

「きゃあ!!」

「終わりだ!!」

そのクローのワイヤーを思いっきり引つ張る。急に引つ張られたセシリアは驚きの悲鳴をあげる。飛鳥の右手にはすでにビームサーベルが握られている。

「これで!!」

「まだですわ!!」

「なあ!？」

ワイヤーアンカーによって思いっきり引つ張られたセシリアであるが、まだあきらめないという、今までの彼女の口からは到底考えられない言葉が飛び出してきた。

引き寄せられる力を利用し、思いっきり体当たりを繰り出してきたのだ。まさかそんな攻撃を彼女がするとは思っていなかったと、自分の浅はかさを怨んだ飛鳥。VPS装甲によって傷はないが衝撃を耐えるということでエネルギーを消費した。セシリアがショルダータックルを繰り出したことで、その力タの装甲が完全に壊れた。

「つうう・・・、なんて硬い装甲なのですの!!」

砕けた肩の装甲を見て驚愕のあまりに叫んでいるセシリア。おかげで彼女の左肩の肌が見えている。おそらくそこを狙えば強制的に絶対防御が発動するだろう。

飛鳥にとってはセシリアの行動そのものが信じられなかった。彼女のプライドの高さからして、こんな泥臭い行動などするとは思えなかったからだ。腕を掴んでいたワイヤーアンカーのワイヤーをす

でインターセプトで切っている。

逆転に次ぐ逆転。観客の生徒たちはいつの間にかアリーナ全席に埋まるくらいになっていた。エネルギーが残る半分を切った飛鳥とヴェステイージ。もはや虫の息であるセシリアとブルーティアーズ。

「これが最後の攻撃ですわね……。あなたのそれを見ると、どうやら動くたびにエネルギーが減るようですわ」

「それがなんだって言うんだよ」

「いいえ、良くそのようなものでISに対抗しようと思いますわね」「お前にとっては玩具じゃなかったのかよ」

「それは撤回しますわ。まさか、わたくしセシリア・オルコットとブルーティアーズに対してここまでやれるとは思っても見ませんでしたの。誇ってもよろしいことよ」

「そうかよ!!」

再びスラスターを吹かせ、接近する。お互いにすでに接近戦用の武器しかない。更に接近戦では何枚も飛鳥のほうが上である。そのためにセシリアは一方的に防戦である。

だが、一向に下がろうとせず、徹底的に粘ってくる。確かに下手に特攻をかけてカウンターを受けるよりだったら、攻撃している間にもエネルギーを消費していくMSを相手にしている今、その作戦が一番かもしれない。

「こんのおおおおお!!」

「くう!!」

振り下ろされる渾身の攻撃で弾き飛ばされたセシリア。その衝撃でインターセプトが破壊される。無防備な状態で滞空している彼女

に対して、ビームサーベルの切っ先を向ける。

まさか目の前の男・・・紅月飛鳥がここまでできるとは思わなかったセシリア。MSなどと知らない兵器をここE.S.学園に持ち込むなどと、なんて恥知らずだろうと思った。だが、こうして今時分はその自らが玩具だと見下したMSに破れようとしている。

更に、その操縦者が彼女が嫌っている男が操縦しているにもかかわらずである。はつきり言って試合中圧倒されている自分が齒がゆかった。何度危険な状況になったか。それでも逆転の状況を作り出したものの、こうして今時分はやられようとしている。

しかし、不思議と男に負けるというような惨めな気持ちはなかった。むしろこのように自分に対して負けじと向かってくる男は初めて見るというような新鮮な気持ちを感じていた。

ヴェステイージのスラスターが再び全開に噴く。機動性は落ちていくといっても全力であった。そして、その瞬間に一瞬でセシリアの前にヴェステイージの姿が現れる。

“ 瞬時加速 ”

爆発的な加速を一瞬で起こし、接近する技術である。鋭いビームサーベルによる突きがセシリア・・・ブルーティアーズに突き刺さる。装甲を突き破り操縦者に直接触れようとしたその瞬間、絶対防御が発動し、ブルーティアーズのシールドエネルギーは完全の0となった。

大きく息をはく飛鳥。モニターに映し出されているエネルギーの残り残量は0に等しかった。それでも自身の突き出した刀身は確か

に彼女に届いたのだ。イギリスの代表候補生という、はつきり言って一般人の飛鳥にとっては立場が違うものに対して……。

そして、6年前に亡くなった父が残していったたった一振りの剣となるもの。尖れていない、ただの鉄の棒であつたそれが、何度も打ち直されることでこうして一振りの剣と成つてここにいた。

『勝者……紅月飛鳥!!』

確かに傷だらけの戦士（飛鳥とヴェステイージ）が一振りの剣としてそこにあつた……。

PHASE 05 青き涙／ブルーティアーズ（後書き）

ED1 ↓ 遠雷 〈 遠くにある明かり 〉 < HIGH and MIG
HTY COLOR >

原作どおりであればここで恋愛フラグというものが立つのでしょうが、私の考えからすれば安価すぎると思われるので立っても友情フラグです。

。 次回はいよいよオリ主にとっては悪夢に近い存在との戦いです・・・

PHASE 06 悪夢再び（前書き）

OP1 ↓ ignited < T・M・Revolution >

たくさんのご感想、お気に入り登録ありがとうございます。

いよいよ原作主人公とのクラス代表をかけたの戦いになります。飛鳥にとってはトラウマ的なフォルムをした一夏の専用機・・・白式。

これは運命の悪戯なのか・・・。

傷ついた戦士の瞳に映るのは一体・・・。

PHASE 06 悪夢再び

一夏と篤は揃って管制室にて監督としていた千冬と真耶とともにモニターに映る試合を見ていた。

そこに映っている赤とダークグレーの機体は自分たちが使うようなISとは違う、まさに人型に近く、かなり露出の少ない全身装甲。

確かにそれだけ見れば、十分驚かされるし、ISとの戦闘も十分すぎるくらいである。

だが、二人にとってそれ以上に、飛鳥が代表候補生であるセシリアを破ったことに驚きを隠せなかった。いくら最初はセシリアが気を抜いていたとはいえ、途中からはしっかりと代表候補生としての力を発揮していたと思う。はつきり言って自分たちでは勝てないだろう。

しかし、流れは確実に飛鳥に会った。途中傾きかけていた流れもすぐに戻し、心象ではあったが、あの代表候補生を破ったことは賞賛に値するものであった。次はいよいよ一夏の試合であった。

「これは・・・」

「ハア、やりすぎだな」

真耶と千冬がそろって小さなため息を吐いていた。一体どうしたのだろうかと耳をそばだてていると、どうやらセシリアの専用機であるブルーティアーズが先ほどの戦闘で大きく破損してしまい、補給だけでは到底試合にならないという状態だという。

確かに一夏たちの目から見ても、あれはISの初心者との戦いではなくまさしく真剣勝負であった。そこまでやるかと思うところもあるが、見ていたときにぶつかり合う二人にはとてもそうは言えなかった。

「それにオルコットさんも気を失ってしまっていますからね」

「そつとしておいてやれ。無理をさせて、機体と操縦者を壊したとなったらイギリス本国から何を言われるかわからないからな」

「そ、そうですね。なら、また大幅に変更ですかね」

「そうなるだろうなと・・・ようやく来たのか」

「あ、そうですね。ようやく来ました！！織斑君の専用IS」

「へ??？」

「ピットに搬入してあります。時間ありません！！急いで」

「取りあえず織斑は事が事だからぶつつけ本番で物にしなければならん」

そう言いながら歩く千冬。そしてピットを開けた一夏の前に現れたのは真っ白なISだった。

「はい！！これが織斑君の専用IS『白式』です」

それを見た瞬間一夏は思わず目を奪われてしまった。それはまささらな白であった。何者をも浄化する白。そして、一夏は、直ぐに”白式”を起動し纏った。

「背中を預けるようにしろ・・・」

意地を出す千冬の言葉を聞きながら一夏は白式に自身の身を預ける。

「あとはシステムが最適化してくれる」

そして千冬が最適化前の白式を纏った姿を眺めて確かめるように見ている。

「ハイパーセンサーは問題なく動いているな・・・一夏、気分は悪くないか??」

「大丈夫、千冬姉いける」

やはり姉なのだ。弟に何かがあつては困る。だからこそ、自分ができる最低限のことはしておこうと思つての行動なのだろう。一夏も千冬の言葉に答え、そしてピッドのカタパルトに乗る。そして一度簞のほうを見る。

「それじゃあ、簞、行ってくる」

「・・・ああ、勝つてこい」

そう言つて一夏はピットから飛び上がり、アリーナで待つていたセシリアの元まで飛んでいく。見ているしかできない千冬たちは、管制室のモニターからその戦いを観戦するのであった。

飛鳥は現在破損した部分と失つた武装の補充をしていた。それほど大きな破損部分はなく、予備のライフルはあつたので後は必要なエネルギーを補充するくらいであった。

手を見れば震えている。それは勝利の歓喜であつた。初めてISに買ったときのことをもいだ下。あの時は本当に無我夢中であつたためにほとんど覚えていないが、今だから分かる。これはようやく自分が一歩前に進めた証なのだと・・・。

「次はアイツか・・・」

織斑一夏。女性にしか扱えないはずのISを男で始めて起動させてしまったという謎の人物。姉の織斑千冬は第一回モンド・グロツソ大会で優勝。公式戦では無敗の最強を誇る。そんな彼女を姉にも疲れがどこまでISを知っていたかというところの入学してからの授業の理解度を見てかなり低いと見ていいだろう。

とはいえ彼はどうかやら篠ノ之箒と剣道をしていることと、幼馴染の力を借りて知った経歴からして剣道を習い、それなりの実力はあったらしい。過去形なのは彼の中学での動向を知れば一目瞭然であった。

この一週間何をしていたかというところと剣道だけというようにISについては全く訓練している様子はなかった。馬鹿にしているつもりはないのだろう。別段向こうの責任であるために気にする気もないただ、倒すだけ。そう、それだけだった。

気を抜いてしまったらセシリのように足元をすくわれる。もともと飛鳥には気を抜くなどということは微塵もない。いつだって飛鳥は地面にはいつくばってでも上を目指してきたのだから、それ以外の歩み方を知らない。

「システム、起動」

『General Unilateral Neuro-Link
Dispersive Autonomic Maneuver
—— Synthesis System』

一瞬の光に包まれ、再び完全に修復されたヴェステイージを纏っ

た飛鳥がそこにいた。右手にライフル、左腕に巨大シールドを装備し、カタパルトデッキに足を固定する。

今日二度目の発進。きつと真剣な表情を射出口に向ける。信号が赤から青へと変わる。発進可能な合図だ。

「紅月飛鳥、ヴェステイージ。行きます!!」

誰に対して言うわけでもなく、飛鳥は飛び出していく。そして、向こうのピットから飛び出してきたのは白だった。白、白、白・・・。白い翼の形をしたスラスタ、白い四肢、その姿はまるで騎士。そして、その操縦をしている人物は織斑一夏・・・。

『これより、紅月飛鳥対織斑一夏の試合を始める』

アナウンスで試合開始が伝えられる。飛鳥はただ呆然と目を見開いた状態で目の前の一夏を見ている。一夏はおそらく予め武器を確認しておいたのだろう。すでにその手には刀剣が握られており、こちらに向かって飛び出してきた。

「うおおおおお!!」

上段から切り下ろすようにして振り下ろされる刀剣。それをはつと気づいて横にからだをずらしてかわす。一夏はいきなりのトップスピードを扱いきれなかったのか、かわされて前につんのめる。

「おわつととと!!」

それを管制室で見ていた幕ははらと見ている。自分が鍛えなおすといっているながら一緒にいられることがあまりにもうれしいこ

とと、あまりにも一夏が弱くなっていたために剣道だけに構っていたので、一夏のISの操縦が未熟なのは否めない。その原因が自分にもあるので、申し訳なさでいっばいだった。

「な、なんだか織斑くんの操縦、見ていてハラハラしますね」

「一週間何をしていたのか・・・とは言わずともわかるがな」

あえて離れたところにいる筈に聞こえるように行っているのかは分からないが、それを聞いてシユンとなってしまう筈。ただここにいる自分にはただ一夏が勝つことを祈るしかできないのだ。

一夏に対して無思考のまま飛鳥はライフルからビームを放ち、白式の肩の装甲を打ち抜く。爆発し、肩の装甲が半分吹き飛ぶ。

「く、シールドエネルギーが」

一撃でかなりもって行かれた白式のシールドエネルギー。ライフルによる射撃だけではなく、肩の装甲を打ち抜いたときに起きた爆発による余波が体を襲ったためであった。

再び正面に構える刀剣。ゆっくりと対面する飛鳥は刀剣を構える一夏をただにらみつけている。初めは呆然としてしまった。なぜならいきなり飛び抱いてきて、自分の目の前に現れたのがあの時飛鳥の家族と幸せを奪って行ったISに似ていたからだ。

そうしてしばらく呆然としてしまったが、はつと現実思考を戻し、冷静に落ち着いたその瞬間に沸いてきたのはその冷静さをはるかに上回るようなただ怒りであった。何故こんなところにいるのかと、何故こんなところにそれがあるのかと。

飛鳥は次々とライフルを打ち込んでいく。一夏も回避しようとして白式の機体を動かしていくが、全く回避できずに次々と装甲を抉り取られていく。次々とモニターに映し出されるエネルギーの残量を見て一夏は焦りの色が色濃く見えてくる。だが、その瞳の中の負けないという炎は更に激しく燃える。

飛鳥は一夏が突っ込んできて横一線に振りぬいてきた刀剣を大型のシールドで受け止め、ライフルの銃口で殴る。がんというものすごい衝撃が一夏の頭部を襲う。一瞬視界が真っ白になった。しかし、観客の悲鳴を聞いて、はっと意識を取り戻した一夏は、自らが地面に向かって落下していることを知り、慌てて体勢を立て直し、何歩かつんのめったが無事に着地を終える。

「一夏！！」

「きゃあー！」

「むー！」

飛鳥が一夏の側頭部をライフルで渾身の力で殴り飛ばしたのを見て思わず身を乗り出してしまう。普通ならば頭が吹き飛んでもおかしくない力であったために、思わず真耶は手で顔を覆ってしまった。さすがの千冬もそれを見て立ち上がらざるを得なかった。

「つう・・・、まさかライフルを鈍器に使ってくるだなんて・・・」

一夏はまさかのライフルの用途に戸惑いながらも殴られた側頭部を撫でる。まだずきずきと傷むが、そこまでというわけではないので、再び刀剣を構えて上空へと飛ぶ。

再び飛鳥は上空へと上ってくる一夏に対して打ち込んでいく。何とか回避したいという必死さは伝わってくるが、まったく交わすこ

とができず、よくてかする程度、次々と白い騎士の装甲がぼろぼろになっていく。

一夏も負けじと刀剣を振るう。しかし、シールドにふさがれ、何閃もの剣閃はまったく飛鳥に、ヴェステイージに傷をつけられない。次々と打ち込まれるライフルを何とか刀剣で弾こうとするも、衝撃で後方に飛ばされる。

その後方に飛んだ一夏に対してすばやくシールドに付属しているワイヤーアンカーを射出し一夏の右腕を絡め取る。しまったというように一夏はそのつかまれた腕を見るが、力を抜いてしまったその瞬間に、飛鳥はそれを見逃さず、スラスターを全開に、ハンマー投げの要領でアリーナに張られているシールドに向かって一夏を投げ飛ばす。

「があああー!!」

鋼鉄と同等であろうシールドに叩く付けられた一夏はいくらIS装甲だからといって衝撃はすさまじいものだろう。背中から叩きつけられ、強制的にはいから酸素を吐き出させられる。

「千冬さん!! あれはやりすぎだ。今すぐやめさせるべきです」

箒が飛鳥の一夏に対する攻撃を見て叫ぶ。ぼろぼろになっていく弟の一夏を見て千冬だって教師という立場が泣ければ今すぐにでも向かいたいのである。確かに戦いにおいては回りのフィールドを使うことも作戦の内であり、飛鳥の戦い方は理にかなっている。だが、ここまで相手を傷つける必要はないのではないかと思った。

荒々しさだけが感じられ、あまつさえ怒り、更にはそれを昇華さ

せた感情である憎悪、その上を行く殺気さえも感じられ、攻撃の一撃一撃に込められている。彼女には分からなかった、どうしてそこまでするのが。そして、簞にあの時突っかかっていった・・・自身の親友である天災に対してかなり敏感に反応していた。

MSというISと似て非なるマルチスーツを持ってIS学園に来たのも何か大きな理由があるのかもしれない。更に裏ではあの対暗部のための暗部とのつながりがあるというのだから、只者ではないと思った。

この情報を伝えてくれた天災には今回ばかりは感謝せざるを得ない。いつもは心労ばかりを送りつけてくるというのとため息が出る。とはいえそれ以上の情報はさすがに引き出せなかったらしい。

飛鳥の経歴を見たところ、なんら珍しくないものであった。軍事学校を首席で卒業しているのはすごいことであり、女でISを乗るのであればそこに残っていてもよかっただろうが、彼は生憎男でありISに乗れない。更にMSといっても全く世間では認識は0である。

何はともあれ・・・。

「山田先生・・・一応打鉄の使用許可を取っておいてくれませんか??」

「え・・・??」

カメラから視線を動かさずに隣に座っている真耶に対して静かに呟く千冬。それを聞いて真耶はどういうことだろうかと怪訝そうな表情で千冬を見る。そこには教師としての千冬の顔と、そして弟を心配する姉としての千冬の顔が見え隠れしていた。

「分かりました」

その表情を見て真耶はその千冬の思いを理解し、すぐに使用許可を取り付けるように急ぐ。

「すぐに取ります」

「すまないな・・・」

そう呟き、何もなければいいがと不安を胸にモニターに映る二人の戦闘を見ていた・・・。

一夏は激痛で視界がかすむ。何とか目を細めて前方を見る。その瞬間に背中に装備されているバックパックのミサイルポットからファイヤビー誘導ミサイルの計16発が一夏と白式に対して向かってくる。

「くそ・・・」

逃げようにもダメージが多く、更にアンカーでつかまれているためにすぐにまたシールドに叩きつけられる。そして逃げる暇もなく、全弾ミサイルが一夏と白式のからだを飲み込んでいった。

だが、立ち込めていた一夏のいる場所に変化が起き始めた。そして突然何かが展開されたと思われる音と共に、倒したと思っていた一夏が姿を現したのだ。一体何が起きるのかと飛鳥は訝しげな表情をフェイスの裏で見せていた。

「な、あれは!？」

驚いている飛鳥の瞳に映るは今までと形の違うIS『白式』を纏った織斑一夏の姿であった。

>初期化と最適化が終了しました。確認ボタンを押して下さい<

煙の中から現れた一夏に聞こえたのは、今まで初期化。及び最適化を行っていた白式からの作業完了メッセージであった。

その様子を見ていた千冬は、そんな一次移行を完了させたい地価と白式の姿を見ながら言う。

「フン、機体に救われたな馬鹿者め」

その言葉とは裏腹に、口端を吊り上げて笑っていた。

同時に最適化の終わり姿形の変った自身が握っていたブレードを見て一夏は何かを思い出していた。

「この刀・・・雪片」

そう手元に現れた刀を一夏は見た事があったのだ。それは、最も自身が尊敬している姉が日本代表だった頃に使っていた唯一の武器なのだから。

それを感慨深そうに見つめて、しっかりと握り締める。それだけで姉がそばにいてくれるような気がした。

「つくづく最高の姉さんを持ったよ 俺は・・・」

しっかりと握り締められた刀・・・雪片二型を構えて、一夏はセ

シリアに向かって叫ぶ。

「さあ、こっからが本番だ!!」

腕に絡まっていたアンカーのワイヤーを雪片式型の刀身で切り裂き、ようやく自由にからだを動かせるようになった一夏。

「さっきより動きが速い!!一次移行が完了したのか」

先ほどのぎこちなさは幾分か抜け、その名称が付いた刀剣・・・雪片を構えて迫ってくる一夏。先ほどまでの戦いを、目の前の男・・・織斑一夏とそのIS『白式』初期化と最適化が終わっていない状態でなしていたのだ。

そして一夏の方も変化した自身のISから力を感じ取っていた。

——見える・・・!!さっきまでとはまるで違う。

一つ一つの動きを確認しながらそれを実感していた。

——機体・・・白式がまるで自分の手足のように動く!!俺専用になった。

そして握り締めている手元の刀に再び視線を向ける。雪片・・・それは一夏の姉の千冬と同じ武器である。そう、ずっと彼女が一夏を守るために振るってきた武器。

それが今、自身の手にある。

「俺も俺の家族を守る!!」

そして一夏は内心でこう思った・・・もう、守られるだけの関係は終わりにしよう・・・と。

「とりあえずは千冬姉の名前を守るさ」

その一夏の言葉を聞いた瞬間、飛鳥は後頭部を鈍器で殴られたようなものすごい衝撃を感じた。実際に攻撃を受けたわけではないのだが、ものすごい衝撃を受けた。

そして、思った・・・心の仲で、そう宣言した一夏に対して叫ぶ。

——ふざけたことを・・・。

雪片を腰高に構えてトップスピードでつつこんでくる一夏に対してビームライフルを腰にマウントし、ビームサーベルの柄を掴んでビーム刃を展開し、迎え撃つようにして構える。

振り切られる刀身をビームサーベルを振り下ろして受け止める。スラスターを前回に、罅迫り合いとなる。そのとき真正面に見える一夏の表情・・・笑っていた。

——なんでそんなに笑ってるんだ・・・。

飛鳥には理解ができない。そして、思う。こんな甘ったれた奴に負けられるかと。自分で望まずにISを起動させ、流されるままにここIS学園へと無理やりに入学させられるなどと人生設計をめちゃくちゃにされ、まるで望んできたわけではないという様子で、授業中においても参考書を捨てるやら、一般常識であるISの知識も知らない。そして、今日の決定戦まで全くISに手をつけずに戦って

いる。

そして、何より気に入らないのはそうやって簡単に力を手に入れていることだ。どれだけ手を伸ばしても決して手に入らなかったその力を織斑一夏は手に入れたのだ。

あの日、家族や大切な日常を失ったとき。あの場所で・・・あの全ての仇である篠ノ之束と白騎士を見たとき、自分に力がないことを、心臓をえぐられるような痛みとともに突きつけられた。上空を見上げ、悪魔のごとき強さを見せ付ける白騎士から、自分がどれだけ無力化、情けないか、ちつばけな存在か・・・思い知らされた。

今の飛鳥になるまで・・・どれだけの日々と努力が必要だったか。ただ残されていた一機のMS。まだ打たれていない剣になる前の熱を持ったただの鉄の棒だったのだから。

なのに目の前の一夏はそんな力を流されるだけで手にした。そして笑みを浮かべてその刀剣・・・雪片式型を振るってくる。それをサーベルで受け止め、弾き返す。

何度かの鏖迫り合い。いくら剣道をしていたからといって6年のブランクとともに、軍事学校での訓練、更には幼少期からの訓練のおかげで一夏の剣筋はほとんど見切れていた。

剣から伝わってくるのは守りたいという気持ち、それが姉であり、親友であり、幼馴染であつたり・・・。

——だからって・・・。

『僕ね、もつと強くなってお父さんとお母さんと朱雀を守るんだ』
『あら??? 皆のことはお父さんが守ってくれるわよ???』

『あははは、そうだな。俺だってまだまだ守られる年じゃないぞ』
『そんなわけないだろ??この前おねえちゃんに投げ飛ばされてたじゃないか』

『あ・・・、あれはだな・・・』

『あら、あなた。楯無ちゃんに負けたの??』

『お父さんよーい』

『う・・・。言わないでくれよ、結構へこむんだから・・・』

『僕、みんなのこと守るんだ。だからもつと稽古頑張るよ』

『あらあら、なら楯無ちゃんたちはどうするの??もしかして守られるほうなのかな??』

『ち、違う。俺が皆を守るんだ!!』

—— お前に・・・。

『強くなるんだ・・・』

『アツくん、今日はもうやめようよ。みんなと遊ぶ約束・・・』

『まだ一本も決めてない・・・』

『何でそんなに意地を張るの??』

『僕が、僕がみんなを守るって決めたから』

『へへ。私や簪ちゃん、本音ちゃんに虚に勝てないの??』

『!!う、うるさい』

『うん。だったらおねーさんが一肌脱ごうかしらね』

『え／＼／』

『ん??アツくん何かいかがわしいことでも考えたのかな??』

『そ、そんなわけないだろ／＼／』

『なぐんだ。残念ね。なら、おねーさんと特訓しよつか。そうすればアツくん強くなれるよ』

『それって、お姉ちゃんも強くなるんじゃない??』

『四の五の言わず、始めるわよ!!』

『う、うわー!!』

—— 大切なものを守れなかったときの思いが・・・。

『お父さん・・・、お母さん・・・、朱雀・・・。うわあああああ』

あ！！」

「分かるのかよオオオオオ！！」

その瞬間飛鳥の頭の仲で何か種子のようなものが弾けとんだ感じがした。その瞬間にあらゆる方向に対して視界が広がった、あらゆる感覚が研ぎ澄まされ、周囲のものがまるで指先で触れられるような精密な感覚。まるで時を止めるスイッチを押したかのように、回りの動きがあまりにも緩慢に止まって見えた。怒りにとらわれているはずなのに、何故か頭はすっきりとし、視界はクリアである。

前方から勇ましくも声をあげて飛ぶ込んでくる一夏の姿が見える。刀剣である雪片式型の刀身がビームサーベルのように輝いている。防ごうとビームサーベルを構え・・・ようとした。

—— あれは危険だ！！

全感覚が飛鳥の思考に対して警報を鳴らす。あの光る雪片をサーベルで受け止めてはいけないと言っていた。横なぎに振るおうとしたサーベルからビーム刃を解除する。それを見た一夏は一瞬驚いた表情になるが、これはチャンスだと思い、更に加速して飛び込んでくる。

剣道に忠実に、更に掛け声までも上げながら振り下ろしてくる。それに対して左腕に装備している大型のシールドで思いっきり殴りつける。受け止めるではなく、真正面からぶつけ合ったのだ。

「な！？」

「この、甘ったれやろうがアアアアア！！」

スラスターを全開にし、その雪片を殴りつけて押し合いの状態に

なっていたのを、いなし、一夏は勢いアマって前につんのめる。ここでISに乗っていないかった付けが回ってきた。体勢を大きく崩す。そんな一夏の腹に対して思いっきり蹴りを打ち込む。

「が!!」

からだを句の字に曲げながら広報に吹き飛ばされる一夏は咳き込みながらも何とか体勢を立て直す。雪片を構え睨みつけるようにしている。

「お前が・・・」

飛鳥はすばやくシールドとサーベルの柄を投げ捨てると、左の腰に装備してあった、折りたたみ式の対艦刀を両手で構える。ビーム刃も展開できるが、光っているあのビームサーベルのような雪片に対してそれは危険だという警報が、それを押しとどめていた。実体剣だけでもISの装甲であれば十分な脅威である。

「守るなんて言葉を・・・」

スラスターを噴かせ、一夏へと接近する。一夏も一瞬驚いた様子を見せるがすぐに表情を真剣なものにして雪片を振るう。剣と剣がぶつかり合い、ものすごい音が響く。お互いに鍔迫り合いの状態で押し合う。

「簡単に言っなああああ!!」

「なんなんだよ!!」

戸惑いの声をあげる一夏。徐々に押されていく。どんなに力を入れてもまるで壁を押しているように全く意味を成さない。むしろ押

されており、打つ手がない。

「く!!」

「逃がさない!!」

右腕の手首のあたりから飛び出した別のワイヤーブレード。それが足にからみつき、再び戻される形になる。勢い良く引っ張られ、体勢が崩れた状態になる。戻ってくる一夏に対して、対艦刀を構える。

「お前に・・・お前に守れなかったものの気持ちがかかるか!!」

「何をいきなり!?何を言われようと・・・俺は!!」

体制が悪くとも、対艦刀を雪片で受け止める。だが、勢いは殺せず、叩き込まれた勢いのまま、地面に叩きつけられる。小さくうめくも、すぐにまた足に絡まったワイヤーブレードが一夏を上空に引きずり上げ、中吊りの状態でスラスター部分に今度はビーム刃を展開して叩き込む。きるといっても叩き壊すといったほうがいいだろうか。あまりの衝撃にワイヤーブレードが引きちぎれ、その勢いのまま向こうのシールドに叩きつけられる一夏。

「があ!!」

すでに握られていた雪片式型も握力を失われた手から滑り落ちるようにして光を失いアリーナの地面に突き刺さる。ずるずるとシールドをすべるようにしてゆっくりと地面に落ちていく一夏に対して、その対艦刀を突く形に構える飛鳥。

「守ると言って・・・」

両手で構えるその対艦刀は禍々しいほどに美しく光を反射している。

「守ると誓って・・・」

抱いた小さな腕はとても軽く、命というのは失われるとあっけない。

「守れなかったときの気持ちが・・・」

ただ呆然と幼馴染の家が行ってくれた葬式で並んでいるまだ幸せであった頃の家族のそれぞれの写真。写真の仲では笑っているのに、二度と笑い返してくれない。

「分かるわけがないお前が、守るという言葉を軽々しく使うなアアアアア！！」

もはや限界を超えた加速を見せる。二重瞬時加速・・・。もはや姿を肉眼で捕えることはほぼ皆無である速度で白い騎士に向かって傷だらけの戦士が刃を向く。

やられる・・・。そう思った一夏。だが、体は動かず、白式のモニターに映るエネルギーはすでに底を尽き0を示していた。向かってくる飛鳥の・・・ヴェスティージの姿はひどく傷だらけの戦士のように見えた・・・。

やれる・・・。そう思った飛鳥。だが、その刃は突如として現れた刀の一閃によって崩れ落ちる一夏の真横のシールドに突き刺さり弾かれるのに終わる。その瞬間気を失った一夏が重力に従ってアリナナの地面へと落ちていく、それを抱きかかえるようにして現れた

人物がいた……。

「試合は終了だ。これ以上の攻撃を続けるなら……」

カチリとここに現れた女性が打鉄の装備されている刀をこちらに向ける、それを見て無言でビーム刃を展開し、構える。

「容赦はないぞ……」

打鉄を起動させた織斑千冬が飛鳥を見てにらみつけていた。

『しょ、勝者……紅月飛鳥!!』

慌ててアナウンスが聞こえるが、そこには歓声や拍手というものは皆無であった……。

PHASE 06 悪夢再び（後書き）

ED1 ↓遠雷 〉遠くにある明かり < HIGH and MIG
HTY COLOR >

かなり長くなりましたが読んでいただけてうれしいです。

誤字脱字やご感想がありましたらよろしく願います。

SEEDネタとして、あれが発動しました。換装システムネタとして残り三つほど登場させるつもりです。いつなにが飛び出してくるか、楽しみに。

PHASE07 それぞれの思い（前書き）

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

ヒロインたちとの会話が少ない。もう少し話に華を持たせたいのですが……。またこの後にもイベントがありますので、そのときでも……。

PHASE 07 それぞれの思い

「良くもまあ持ち上げてくれたものだ・・・」

そういうのは千冬である。あそこまで言っておいて結局負けてしまった一夏は羞恥と申し訳なさで落ち込み気味である。現在二人がいるのはIS学園に設けられている保健室である。一夏はあの試合の後完全に気を失ってしまったために、保健室に運ばれたのだ。

ただの疲労であり、初めての激しい戦闘で体のほうがついていかなかったのだろつという診断がでた。とりあえず大事には至らなかったなのでそれを聞いたここにいらない筈と真耶ともどもほつとした。

ようやく目を覚ました一夏。とりあえずひと言言おうとした千冬であつたが最初に出た言葉がそれだった。あからさまに落ち込ませってしまった。内心しまったと思う。

「あ、いや。だが、初めての試合にしては頑張つたほうだったぞ。取りあえず・・・無事で何よりだ」

「ああ・・・」

一夏もあの試合のことを思い出し。ただそう呟くだけだ。

「アイツ・・・なんであんなに怒つてたんだ?」

「怒っていた・・・??」

千冬が聞き返すと一夏は頷く。一夏は戦っている間、飛鳥から投げかけられたさまざまな言葉を思い出していた。

“この、甘ったれやろぅがアアアアア!!”

“お前が・・・、守るなんて言葉を・・・、簡単に言っなあああああ!!”

“お前に・・・お前に守れなかったものの気持ち分かるか!!”
“守ると言って・・・、守ると誓って・・・、守れなかったときの
気持ちか・・・分かるわけがないお前が、守るという言葉を経々し
く使っなアアアアア!!”

どれもまるで一夏の思いを否定するようなものであった。そのた
めに思い出すだけでも氣に入らないというような思いがわいてきた。
自分がどんな思いで今までを過ごしていたか、飛鳥は知らない。

だから、そんな飛鳥に何かをとにかく言われたくないと思っただ
だった。自分にも自分なりの思いがある。当然このIS学園にIS
を使えるということまでできたらそう思っただ。とはいえ、覚悟が
決まったのは白式をまとったときだ。ようやくこうして自分も戦え
る。何かを守るために、力を振るえるのだと思っただ。

「でも、負けたんだよな・・・」

「まあ・・・今回はぶっつけ本番という悪条件もあつて機体の特性
を掴み切れない部分もあつただろうからな。そこは仕方がないだろ
う・・・」

それから千冬からの説明が始まる。

ISによる戦いの勝敗のつけ方というのは相手のシールドエネ
ルギーをゼロにすることである。シールドを突破した攻撃だけがIS
自体にダメージを与えられるのだ。そのときに操縦者が死なないよ
うに、ISには絶対防御というものがそうなえられている。

そこまでは一夏も勉強していたので知っている。そして、その絶対防御というのは極端に大量のシールドエネルギーを消費する。それにIS自体が破損したとしても、危険だと判断されない限りはそれは発動されないのだ。

そして何より、一夏の唯一の武器である雪片式型にはとある特殊な能力があるらしい。それはバリア無効効果。

「バリア・・・無効効果??」

一夏はそれを聞いても分からないという表情をしている。

それは相手のエネルギー残量に関係なく、シールドエネルギーそのものを切り裂いて、ISと操縦者本体に直接ダメージを与えるというものらしい。

そして、相手の絶対防御が発動する為に大幅にエネルギーを削ぐことができる。

「かつて私が世界一の座にいたのも雪片の特殊能力によるところが大きい」

「・・・ていうことは、その攻撃を与えられれば俺にも勝機はあったのかな??」

一夏は恐る恐る聞いてみる。

「ISならな・・・」

「どういう意味だよ、千冬ね・・・じゃなかった、織斑先生」

「今はいつもどおり呼んでいい。ISなら、その装甲が破壊され、生身にダメージが行かないように、絶対防御が発動するが」

「飛鳥の使う・・・MSっていうのは・・・」

「一応上空から落ちた場合や、強い衝撃を受けた場合に保護するISで言うシールドのようなものがあるらしいが。ISのように零落白夜を受け、直接機体にダメージを与えたところで、傷はついてもエネルギーはISほどは期待できないだろうな」

「それと『白式』は自身のシールドエネルギーを攻撃に転化する機体なんだ」

「ああ！！なるほど」

一夏はようやく納得する。そして追い討ちをかけるように千冬が言う。

「つまり欠陥機だ」

「え？？ええええええ！？」

欠陥機という言葉にあからさまに反応する一夏。

「ああ、いや・・・言い方が悪かったな。そもそもISというものは未完成の段階だ。欠陥も何もない。『白式』は純粹に攻撃特化の機体というだけだ。通常は複数の武器を装備できる処理能力をこの『白式』は雪片一本に集約させているということだ」

落ち込む一夏に対してねぎらいの意味をこめて言ったのだろう。

『その威力は私を知る中でも全IS中トップクラスだ』と。

その言葉を聞いて一夏は過去の千冬のことを思い出していた。彼女が世界一になったときも、同じようにその手には雪片という一本の刀しかなかったのだ。そして同じスタートラインに立ったと思っただけであるが、まったくかなわない。姉と自分との差が、見えないくらいある、格が違いすぎることを突きつけられた。

だからこそ思える・・・凄いと。

「なあに・・・、余計な事を考えて戦うより一つの事を極める方がお前には向いているさ。なにせ・・・私の弟だ」

少し恥ずかしがりながらもそう言う千冬に対して一夏は元氣良く返事をするのだった。

あれから部屋に戻ってもいいという許可を貰ったために一夏は部屋に戻ろうと保健室を出ると、そこには箒の姿があった。やや目が赤くなっていたのは心配で少し泣いてしまったためであった。だが、それに一夏が気づくはずはない。

「ほ、箒・・・。どうしたんだよ」

「どうしたんだよじゃないだろ、一夏。その・・・、大丈夫なのか??」

「え??」

本当に心配していたと思わせるように必死な表情で聞いてくる。最初はどうしてなどと思っていた一夏であるが、さすがに泣いていたのだらう涙のあとを見て、心配させたんだなと反省した。

「ああ、大丈夫だ。体中がちょっと筋肉痛みたいに痛む位かな・・・。やっぱりなれていないことをいきなりやったから相当負担がかかったみたいだ」

「そ、そうか・・・」

二人は無言で歩いている。

「なあ箒??どうしたんだ・・・」

無言で何かを考えているように見えた箒に一夏が話しかける。すると箒から返ってきた言葉は・・・。

「負け犬」

「ぐあ!?!」

まさに一夏の心にKOパンチを入れる威力のある言葉であった。箒からすればメンを奪うものであるうか。一夏はその言葉を聞いて完全にノックアウトしていた。

そして一夏も一週間あったこといろいろと声に出さずに考えていると突然それを察したように箒が言ってくる

「とは言わん。ていうか今、私のことを何か馬鹿にしたか??」

「シテナイ」

「なんだ そのおかしい喋り方は」

「オカシクナイ、コレ中南米デハ普通・・・」

一夏はまるで箒に心を読まれたように言葉をかけられたために、片言になってしまっていた。そんな一夏に対して、箒は持っていた市内にて、思いつきり一夏を叩く。乾いたいい音が廊下に響き渡る。

「いつてえっ!!何すんだよ!?!俺は今重症患者だぞ!!」

「馬鹿がいたので叩いただけだ」

突然竹刀にて叩かれる一夏は、頭を撫でながら、その殴った本人である箒に対して怒りの声をあげる。しかし箒は別段、して当然だ

という顔である。

「お前は肉切り包丁か何かか！そんなに日常的に暴力振るっていいと思ってるのかよ！？お前は一体何の恨みがあつてそんなことをするんだよ！！」

一夏が激情に駆られながらそう叫ぶが、箒は再び竹刀を構えたために一夏はだまらずを得なかった。そして一夏が黙ると箒はやや頬を赤く染めて言う。

「一夏・・・その、なんだ・・・先ほどの戦い、負けて悔しいか？」

突然箒から一夏に投げかけられた言葉は負けて悔しいかというものだった。一夏は当然即答した、自分の力のなさと、自分の思いを否定されたのだから。だからといってそこであきらめる一夏ではない。

「悔しいさ・・・」

箒はその一夏の言葉を聞いて満足そうだった。これで、もしそうでなかったら再び竹刀を振り下ろす覚悟でいたからだ。そこまで腑抜けているようではなかったのでは？としていた。

「そ・・・そうか、それならいい。そうだな、明日からはISの訓練もしっかり入れないといけないな」

さすがに動かさずに戦いを挑んだというのは、飛鳥に対して失礼だったかもしれないと一夏は思った。それに全く齒が立たなかったということも悔しく思えた。

「え？？箒ISの操縦を教えてくれるのか？？」

「やっと、一夏の専用機も届いたしな。あ、む、無理にとは言わないぞ。なんなら千冬さんに教えて貰った方が・・・」

もごもごという箒であるが。一夏は自分が頼んだら身内贗品のよ
うに見られるかもしれないということで箒に頼もうかと思った。

「箒がもし嫌なら他をあたるけど・・・」
「嫌とは言つてない！！」

そう声を荒げて言う箒。さすがに目の前で叫ばれて一夏も驚かざるを得ない。

「いいい、一夏が、私に・・・教えて欲しいなら教える。そう、直
々にな！！」

そして、放課後は空けておくのだぞと念を押しながら言った箒であるが、どうしても一夏にものを言うたびにもしもじしていたために、一夏がいぶかしんでもしかしてと思い、言った言葉がトイレに行きたいのかというデリカシーのないものであった。

当然廊下には竹刀の乾いた音が響き渡った。

一夏が箒と共に部屋に戻っている時と同じくして、とある場所・・・
飛鳥と戦ったイギリス代表候補生セシリア・オルコットの部屋。

その本人は自室にあるシャワーを浴びながら汗を流しつつ、先ほどの戦いを通して思ったとあることについて考えていた。

——今日の試合・・・あんな戦い方をしたのは初めてでしたわ・・・
それにあんな気持ちになるだなんて・・・

飛鳥との試合。あの試合での出来事を考えていた。

「ふう・・・」

シャワーのノズルを回してお湯を止める。滴る雫と共に、口から出てくるのはため息だけだ。セシリアは自分の勝利に絶対の自信があった。それは代表候補生だからであり、それに見合うだけの努力をしてきたからであった。ぼつと出の男の操縦者、更には全く知られていない兵器を持ち込んだ男に負けるわけがないと思っていた、自負していた。だが、結果は明らかのように負けた。相手もぎりぎりであつたが、自分は確かに負けたのだ。

それにセシリアは常に、イギリスの貴族であることと、代表候補生であることに誇りを持ち、戦い方にもまさに華を美しさを求める。だが、先ほどの自分の戦い方は一体なんだろうか。まさに、この日本における古い殴り合いのような戦い。まさか自らの機体を傷つけてまでも飛鳥に立ち向かつていくとはやった自分でさえ、信じられない。

体当たりに蹴り・・・。セシリアとして、そんな美しくもない、ましてや野蛮な闘い方を自らがしたこと、数時間前の自分をしかってやりたい気持ちだ。だが、あの時は何としてでも勝ちたかった。負けたくなかった。ただ、そんな純粋な思いがあつた。

相手が男だから??相手がISでないものだから??

——紅月飛鳥……誰にも媚びることなく、あえて流れに逆らうような生き方……。そして、まっすぐな強い眼差し……。あんな男性は初めて見ましたわ。

飛鳥のことを考えながら、ふと自身の父親のことを思い出していた。セシリアの母親は現在の『女尊男卑』の風潮が起こる前からいくつもの会社を経営して成功を収めていたキャリアウーマンであった。そして当然同じ女性として、彼女は母親にあこがれた。

しかし、対して父親に対しては違っていた。セシリアの父親は母親の名家に婿入りしたせいかな常に母の機嫌とりにしていていたのだ。まるで現代の女性に対して怯えている男性のように。

そのことを思い出していたらため息が出る。女尊男卑の風潮やISが発表されてから、さらに男性の立場が危うくなると、その父親もまた、以前にも増して、母親に対しての態度が小さくなっていった。セシリアだけでなく、そんな夫に対して、セシリアの母もいい加減に鬱陶しいと思うようになっていたようだ。

「もう三年も経つんですのね」

そして今から3年前に起こった鉄道の横転事故で二人は一緒になくなった。そしてその事故において死者の数が100人を超えると、いう大規模なものであった。そして独りぼっちになってしまったセシリアに残されたのはそんな大好きであった母が残してくれた遺産と、その遺産に群がる金の亡者たちだった。

そんな亡者たちから自身の両親が残してくれたものを守るために必死に勉強したのだ。そしてISの適正試験を受けたときにAという成績をたたき出し、政府から国籍保持、いくつもの好条件を提示

された。セシリアはイギリスの代表候補生として選ばれたのだったのだ。

——そして・・・第三世代装備ブルーティアーズの操縦者として稼働データと戦闘経験値を得る為に日本へとやって来た・・・。

そしてIS学園へと入学したのだ。そこで知ったこと・・・。

「まだ男性にもそんな強い意志を持つお方がいらっしやったのですわね・・・」

自分がどれだけものを見ていなかったのか。イギリスという狭い檻を出て、新しく広がった視野。貴族間でしか男を見ていなかったセシリアにとって、飛鳥や一夏という二人の男はまた違って見えたのだ。だからこそ、もう一度始めなければいけないと思った。

「セシリア・オルコットはまだ始まったばかりですわ」

そう硬く決心した彼女のIS学園での生活はまだ始まったばかりである。

「終わった・・・」

飛鳥は机に持っていたシャープペンシルを投げ捨てる。机に跳ね返り、ころころと紙の上を転がる。その紙にはびっしりとなにやら文字が書かれており、彼の左横には山積みになった同じような原稿用紙があった。

最初の題の部分には、反省文と書かれていた。うんざりしたよう

に、伸びをしてから、腕を頭に組むようにして椅子にもたれかかる。まさか原稿用紙100枚に描けと漫画の世界だけだとおもっていたことを千冬は飛鳥に対して言い渡したのだ。

あの試合のあと、すぐさま待機状態にしたヴェステイージを取り上げられ、それを真耶に預けた千冬は飛鳥の腕を引っ張るようにして会議室へと投げ込んだ。お互いに椅子に座り、すぐさま千冬からの説教が始まった。

まず最初に言われたのは、やりすぎだということだった。セシリアを気絶させるまで身体的なダメージを与え、更にはイギリスの第三世代型ISのブルーティアーズを中破させた。

あれでコアまでダメージが言っていたら、彼女だけではなく、それを破壊した飛鳥までもどんな処罰がくらうかわからない。いくら外からの干渉を受け付けないIS学園だとしても完璧ではないのだ。

何とかすぐに修復できるとはいえ、あれははっきり言ってやりすぎだ、何度もそういわれた。思わずイライラを越して殴りかかるころだった。それくらいにイラついていた。

セシリア自身にも大事までは至らず、ただ気絶しただけだと言われ、後で謝罪するようにといわれた。

そして、次に一夏の試合でのことについて言われた。

『お前は一体何をしようとした??』

きつく睨みながら言われた。そこには教師としての彼女の顔と、弟を思う姉としての顔が見え隠れしていた。ただのブラコンかよと

内心想っていると鋭い拳が脳天に直撃した。かなり痛い……。

『何すんだよ!!』

『私はからかわれるのが嫌いだ』

『だからって殴るのかよ!!』

『口の利き方に気をつけろよ、紅月』

『ふん』

『まあいい、もう一度聞く……、何故あんな危険戦いをした』

どうやら彼女は教師として、あんな危険な戦い方……、つまりはあわや殺しかけた飛鳥の戦いを見過ごせないというのだった。更には、姉としては許せないという感情があるのだろう。

いたって冷静そうに振舞っているように見えるが、対暗部の家系の訓練を友だって受けていた飛鳥としては、内心の彼女はかなり怒りを持っている、そう読み取っていた。それ以上は流石に最強といわれたものであるために、詮索されないように感情コントロールをされている。

それに対して飛鳥もまた、彼女に対して怒りを向けていた。それは彼女とは違い、睨みつけるような目つきであることから表面にでている。いくら訓練をつんだからといって、どうしても彼は正直なのか顔に感情が出てしまうのだ。

そして、心の中で叫ぶ。よかったな、死ななくて……っと。

『なんのことだよ。俺はただ戦っただけだ。目の前に敵がいた……、だから倒そうとしたただけだ』

それが何か悪いのかと。睨みつける視線のまま言う。負けじと睨

みを強める千冬。彼女が言うにはISというのは“スポーツ”だと言う。このIS学園は最終的にIS関連の職業に生徒たちがつけるように教育する現場であると。整備科の生徒たちは研究や企業に就き、他の生徒たちは将来モンド・グロッソなど、世界の舞台に出て行くかもしれないのだ。

飛鳥の考えている“兵器”とは違っていた。しかし、ISというのは誰が何と言おうと、現代のあらゆる兵器の性能を超えた兵器だという事だ。そのためにいくらスポーツ競技だというオブラートにつつもうと、あの時起こった事件同様に、ISを何かの悪巧みに使おうとしている者たちもいるのだ。

今はアラスカ条約によって、それを表立って兵器として使用することはできないでいる。だが、それはもろすぎる鎖でしかない。何か突発的な何かが起これば、すぐさまISによる戦争が起きるだろう。

世界最強も、舞台を降りてからすっかり腑抜けてしまったのだから、腕のほうではなく・・・、ISの存在意義というものに対する認識能力が。

『お前のヴェステイジがISではないからといって、ISの法律が通用しないわけじゃない。ここがIS操縦者を教育する場である以上、それにしたがってもらう』

『・・・』

『返事はどうした!!』

『・・・ち。はい・・・』

面倒くさそうにしていやいや返事をする。それが更に彼女の機嫌を損ねたのか、その部屋の引き出しの仲から取り出したのは山積み

にされた原稿用紙であつた。ざつと見100枚はあるだろうか。にやりと笑つた千冬は言う。

『反省文だ。原稿用紙100枚。明日中に提出するように』

『な、なんだって!？』

悪魔のような笑みを浮かべた千冬に対して食つて掛かる飛鳥。だが、いくら言つてもそれは覆されることはなく、結局それをふらふらとさせながら持つていかざるをえなかつたのだ。

「くそ・・・、あいつ、なんだって言うんだよ!!!いくら世界最強だからって、いい気になつてゐるんじゃないねえ」

いくらここで飛鳥が叫んでも意味はない。もう因るも遅く、すでに後ろのベッドで眠っている二人は全く飛鳥がイラついていることを気にしていない様子である。

原稿用紙を持つて帰つてきたあと、二人からはそれぞれ呆れと面白いものを見たというような視線を双方から受けた。本音が試合を見ていたのは知っているが、まさか簪も、合間を縫つてみてくれたとは思わなかつた。

てつきり整備室にこもっているとはかり思つていたからだ。単なる息抜きだといつていたが、気にかけてくれたことはうれしかった。少しだけ、胸が温かくなる感じがした。

『でも、反省文はありえない』

『しょ、しょうがないだろ。あいつがやれつてゐるさいから・・・』

『馬鹿なの??』口答えすれば、織斑先生の性格からしたらそうなるでしょ』

簪から鋭いツツコミを入れられ、千冬に対して向けていた怒りが徐々に小さくなる。正論であるために何も言い返せない。とりあえずそう言い終えると、簪はきびすを返して、自分の机に座り、手元に空中投影ディスプレイを出して専用機の製作を始めた。

『アーちゃん頑張れ』

『人事のように言っちなよな・・・』

相変わらずの本音からのエールを受け、仕方ないと、夜遅くまで反省文を書くことになったのだった。そして、ようやく完成した反省文。今度は明日、これを持って行かなければいけないのだからめんどくさいと言ったらありやしないのである。

ふと後ろの眠っている二人を見る。今頃夢の世界に言っているのだろう。いつもどおりの幸せそうな表情をしている本音と、いつもは感情を表に出さず、クールな簪の表情も、このときばかりは幸せそうなものであった。

「俺は・・・」

そんな二人の寝顔を見て、それから自分の手首にある赤いブレスレットである待機状態のヴェステイージを見る。ようやく戻ってきたヴェステイージは元あるべき場所に帰ったことを喜ぶかのように赤く光を反射させる。

あの笑顔を守りたい……。そのための力なのだから……。

「そのためだったら戦ってやるさ……。どんな敵とだって」

それが例え、友達だとしても・・・。

PHASE 07 それぞれの思い（後書き）

ED1 ↓ 遠雷 〉 遠くにある明かり < HIGH and MIG
HTY COLOR >

ご感想や誤字脱字がありましたらよろしく願います。

次回は第一章のエピローグです。ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

PHASE 08 エピローグ（前書き）

OP1 ↓ ignited < T・M・Revolution >

第一章のエピローグです。ここまで読んでいただきどうもありがとうございます。

原作ではまだ一巻は続きますが、イベント的にここで第一章を区切らせてもらいます。第二章は・・・。

というのは置いておいて、たくさんのご感想、お気に入り登録ありがとうございます。いつでもお待ちしておりますのでよろしく願います。

PHASE 08 エピローグ

そして翌日。1年1組では昨日の件を含めてのクラス代表が決定していた。

「はい、という訳で・・・一年一組代表は試合結果より・・・紅月飛鳥くんに決定です!!」

教壇に立つ真耶が黒板に飛鳥の名前を書く。クラスからは賛成の声が上がった。昨日の試合内容を見ると嚴重注意が言い渡されるが、実力的にはこのクラスにおいてはトップレベルだということが示されていた。

一夏とセシリアの試合がなかったのは、どちらも試合後に気を失ってしまい、更に機体が危険レベルまで破損させられていたので早急に決めなければいけなかったクラス代表はこの時点で2勝していた飛鳥に決定したのだ。

一夏としてはようやく来たばかりの白式を危険レベルまで破損させてしまったので、それを整備するものたちからすればもっと丁重に扱ってほしいとも言われて、すいませんと謝っていた。

そこまで破損させたのは飛鳥であるが、破損させないようにするのは一夏の操縦の腕であるからどっちもどっちなのである。取りあえず白式もブルーティアーズも現在は修復中ということだ。

そして、ガタツという机の音とともに、ゆっくりと窓際に座る飛鳥が立ち上がる。教卓に立つ真耶の他クラスメイトたちの視線がそこに集まる。昨日のような恐怖心を掻き立てるような怒りはない飛

鳥。昨日の試合、誰もが見ても異常なほどの戦闘を見せたのだ。一夏は初心者であるから分かるが、代表候補生のセシリアまでも打ち破ってしまったその実力と・・・ISに対抗できるというMSの性能の高さを見せ付けられたのだ。

更にはこの学園に二人しかいない珍しい注目を集める男同士の戦い。だが、内容は一方的に近いもので、最後には強制的にとめるために教員である千冬自身がISを使って止めにするなどと波乱があった。

そのために少々距離がきつった飛鳥と他の生徒たち。彼があそこまで怒る理由を知っているものはこの学校には4人しかおらず。周りからすれば理解ができないことだっただろう。

「ええつと・・・」

立ち上がった飛鳥が口を開く。やや寝癖頭の髪をかき上げて、恥ずかしそうに、緊張している様子が伺える。昨日の恐怖心を掻き立てるような飛鳥とは打って変わって、女性が元来持ち合わせている母性というものをくすぐるそんな雰囲気をもし出している。

「一組のクラス代表になった・・・。ええつと、頑張るから応援よろしく!!」

言い切ったと目をつぶり勢い良く椅子に座る。かなり恥ずかしかったのか机に突っ伏してしまう。その後かわいいなどという歓声上がる。男がそう言われてもうれしくない。

「そこで!!」

すると突然立ち上がったのはセシリアである。歓声がぴたりと止まり、皆の視線がセシリアへと向かう。

「私のように優秀かつエレガント華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げればクラス代表戦に十分通用するまで飛鳥さんも一夏さんもみるみる・・・」

セシリアが飛鳥と一夏に対して訓練及びISの操縦を教えるという、突然机を叩いて、箒が立ち上がったのだ。

「生憎だが一夏の教官は足りている。私が直接頼まれたからな」

腕を組んでセシリアに対してその役は必要ないと言つてのける、それも堂々と一夏からのラブコールがあつたことも添えてだ。するとクラスメイトたちは、キャーキャーとはしゃいでいる。二人きりの男女、ちよつとしたことで発展するかもしれないという期待もあつたのかもしれない。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さんではないですか。Aの私に何かご用かしら??」

「え??? 箒、ISランク、Cだつたのか??」

一夏が、ランクの高い人から教えてもらったほうがいいのかと思ひ始めている様子を見て、箒は慌てる。

「ら・・・ランクなどは関係ない!! 私が頼まれたと言っているんだ!!! い、一夏がどうしてもと懇願するから・・・」

最後は尻すこみしてしまうが、箒は自分の言いたいことを言つてやった。一々ランクにこだわる二人に突然割つて入つたは一組の担

任織斑千冬。

「ランクなど15歳そこらのお前らになど関係ない。私から見ればお前らは皆ひよっこだ」

と云うことでセシリアと箒の口論を止める。

「クラス代表は紅月飛鳥。依存はないな!!」

と云うように千冬が強制的にしめると、クラスメイトたちは団結することはいいことであるように返事はOKであった。

こうして飛鳥のIS学園での波乱の日がまた始まったのだった。

(完)

PHASE 08 エピローグ（後書き）

ED1 ↓ 遠雷 遠くにある明かり < HIGH and MIG
HTY COLOR >

ここまで読んでいただきどうもありがとうございます。

今後とも泉海斗とインフィニット・ストラトス 怒れる瞳 をよろしく願います。

第二章 インフィニット・ストラトス 怒れる瞳 怒れる剣

ご期待に沿えるよう頑張りますのでよろしく願います。

PHASE 8・5 キャラ設定&機体設定2（前書き）

今日は新章の設定を載せたいと思います。

本編は明日から投稿しますので、よろしくお願いします。

PHASE 8・5 キャラ設定&機体設定2

名前 紅月飛鳥

年齢 15歳

容姿 髪は赤茶色で瞳は赤色。髪型は寝癖型で、顔立ちは上の中。

性格 一見して雰囲気的に冷たそうで怒りを露にすると怖い印象があるが、人を見下すようなものに対して陰悪している。

身長 170センチ

体重 60キロ

使用機体(MS) ヴェステイージ

家族関係 父・母・紅月飛鳥・妹・紅月朱雀

趣味 読書

学歴 一般小学校↓短期軍事学校↓IS学園

友人関係 更識姉妹、布仏姉妹とは親友で幼馴染

使用武器 小型ナイフ、ハンドガン

備考 もともとロボット工学系の大学教授であった父と専業主婦の母、妹の朱雀との一般的な4人家族。父が宇宙進出可能なマルチス

イツの試作としてMSを開発した。家族旅行先にて待っているときに白騎士事件に巻き込まれ、ミサイルが空港に着弾両親と妹を失いただ一人生き残る。その後小学を卒業するとともに中等部のある短期軍事学校に通う。その後MSの使用が認めらる軍学校を首席で卒業し、IS学園に入学し、数少ない教官を破る。入学の理由はMSの性能実験。家族を奪った篠ノ之束と白騎士のことを恨んでいる。ISは扱えない。

名前 ヴェステイージ

由来 身も心も傷だらけという意味から。

機体イメージ ガンダムSEED・DESTINYのインパルス。

配色 赤とダークグレーのツートン

世代部類 第1世代

動力源 電力

待機状態 紅いブレスレット

武装 ・CIWS×2

・フォールディングレイザー対装甲ナイフ×2

・高エネルギービームライフル×1

・アンカー付き巨大シールド×1

・折りたたみ式レーザー対艦刀×1

・誘導ミサイルポッド×2

・バズーカ×1

・ワイヤーブレード×1

換装シルエット*それぞれにエネルギーが貯蔵されているために、換装のたびにエネルギーは回復する。

・フォースシルエット*白式との戦闘データからヴエスティージ自身が生み出した新しい換装シルエット。高機動を生かした中近距離の戦闘を得意とする。配色が赤から青に変わる。

・ブラスターシルエット*ブルーティアーズとの戦闘データからヴエスティージ自身が生み出した新しい換装シルエット。機動性は若干劣るが、圧倒的な火力が持ち味。中遠距離での戦闘を得意とする。配色が赤から暗緑に変わる。

備考 ロボット工学系の大学教授だった父が作り出した宇宙進出のためのマルチスーツの試作品。ISのような絶対防御の他に、実体武器の攻撃には耐えられるように装甲は強化され操縦者の安全も守られている。ISのようにコアはあるがISとは全く違う。特殊装甲のおかげで実体による攻撃は通用しない。またシールドエネルギーではないので戦いによってはISよりも長時間戦える。防護服としてはパイロットスーツを着用。またデュートリオンビームによってエネルギーを回復することも可能。ISのコアのように自立進化の兆しがある。新たに二つの換装シルエットが増えたために戦略が大幅に広がった。

<新OP&ED

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

ED2↓REASON>玉置成実<

*もう少し幅があればいいのですが、自分の知っている音楽からすると・・・。

<以下は予告編です。

新しい生活が始まって数週間。

飛鳥たちの元に新たな問題がやってくる。・・・中国から。

「宣戦布告しにきたわよ!!」

「なんだ・・・こいつ??」

「俺のセカンド幼馴染の鳳鈴音だ」

嫉妬に燃える女子生徒たち。しかし、それに気づくことはない唐変朴オブ唐変朴。

「おい一夏、こいつとはどんな関係なんだ!!」

「どんなって・・・ねえ」

「ただの幼馴染だ」

「・・・」

気に食わない態度と決闘。

「こんなガキっぽい奴がクラス代表??」

「なんだって・・・こいつ!!」

「なら決闘よ!!」

突然の乱入者と無責任な行動・・・。

「なんだよあれ・・・」

「IS・・・ていうか全身装甲のISだなんて見たことないわよ!!」

その未確認のISが狙いをつけるは、幼馴染たちがいる観客席。

「俺はまた守れないのか．．．??俺は、俺はあああああ!!」

思考は一気に過去へと遡る．．．。

降りそそぐミサイル．．．。耳に突き刺さる悲鳴、爆音．．．。
見捨てた命と、自らがその灯火を消した命．．．。目の前に転がっている家族であつた肉片．．．。手に取った妹の腕はまだ温かく、それが体温か、それとも爆発の熱なのか．．．。

見上げた先にいるのは．．．。

その時弾ける種子．．．。

守りたい者を背にし、その攻撃を受け、煙につつまれる。

だが、そこから現れるは聖剣を握みし戦士。

「全部叩き切つてやる!!」

PHASE 8・5 キャラ設定&機体設定2（後書き）

読者様方に楽しんでいただけるように頑張りますので、応援よろしくお願いします。

PHASE09 プロローグ2（前書き）

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

キャラ&機体設定を先に投稿してしまいましたが、本編開始です。
新しいOP&EDとともに、それを聞きながら楽しく執筆しています。

少しばかり飛鳥の過去を覗いてみました。

たくさんのご感想、お気に入り投稿ありがとうございます。

このような作品ですが、今後ともよろしく願います。

早速間違えていたので修正しました。何をしていたのか・・・すみません。

PHASE 09 プロローグ 2

飛鳥がクラス代表になったその日の夕方。IS学園の校門に一人の少女が立っていた。

小柄で、その眼は活発で元気な女の子であることを示している。ツインテールにしているのはツンデレを示すトレードマークであるうか。

「ふうん」

少女はIS学園を見渡す。

「ここがIS学園か……。ここにアイツがいるのね……。」

恋する乙女の表情である。

母国に帰らなければいけなくなったために離れ離れになってしまった少年。しかし、その少年が突然女性しか扱えないはずのISを起動させたのだ。

丁度自身も国の代表候補生であったために、最初は行く気がなかったIS学園にその少年が通っていると聞いて、急遽転校することを決めたのだ。

まさか姉弟共にISの操縦者になるとは思わなかった。好きな少年のほかにイレギュラーが存在していることは知っているが、彼女には関係なかった。

ただ少女の頭には、あの時の約束を覚えていてくれているだろうかという期待と不安、そしてこの気持ちがその少年に伝わるかということだけだった。

「待つてなさいよ一夏・・・、今すぐ会いにいつてあげるから」

その少女の転校を皮切りに、新たな展開を迎えることになるのだった。

ここはどこだろう・・・。飛鳥はふと自分の体がふわふわと浮いているような感覚を感じていた。

自分が今一体何をしているのか、立っているのか、座っているのか、どちらが上でどちらが下なのか、左右さえ分からない。

手を伸ばそうにも、自分の手がある感覚すらない。あまりの衝撃的なことに、驚きを隠せない。しかし、そんな表情を作っているのかもわからない。

「どこだ、どこなんだよここは!!」

声に出して叫んでみる。だが、そこに無情に響くだけで、ゆっくりと視界が開けてくる真っ暗な世界に響くだけである。

そして、突如としてその奥から更に黒で塗りつぶされた濁流のようなものが押し寄せてきた。

「な、なんだよあれ!!」

驚く飛鳥。慌てて逃げる。

しかし、逃げているのかも分からない。足勝ちを踏みしめている感じがしない。足が動いている感じもない。腕を振っている感じがない。

「う、うわああああ！！！」

その瞬間飛鳥はその濁流に飲み込まれた・・・。

あれからどれくらいの時間がたったのだろうか。ゆっくりと飛鳥は目を覚ました。しかし、すぐに何かおかしいことに気づく。自身に違和感があるのだ。眼には色々なものが映っているのに、自分が動いているつもりがなくても、その周りをまるで子どものようにしやいで走り回っている。

うれしそうに声をあげているのも聞こえる。まるで声変わりをする前の自分のものにひどく似ていた。

すると突然視界が上に上がる。誰かに抱きかかえられたようだった。それが一体誰なのか、目を動かそうにも何故か動かない。

何故だという疑問が生まれる。きよろきよろと眼が動いていたが、ようやくその抱きかかえている人物の顔を映し出した。

「！！！」

飛鳥は息を呑んだ。そこにいたのは、飛鳥のことを抱きかかえていたのは、もう会えないと思っていた父親だった。あの日の父親よ

りも少しばかり若いように見えた。白衣姿で、研究室にいるときの格好だと飛鳥は理解した。

『こらこら飛鳥。ここは遊び場じゃないんだぞ』

『ごめんなさい』

飛鳥ではない飛鳥がそう言う。これは記憶・・・、もう飛鳥が遠い昔に忘れてしまっていた、過去の記憶だった。

どうしてこれが今になって蘇ったのだろうか。飛鳥には分からない。ゆつくりと体を下ろされ、また飛鳥は走りだす。

あまりはしゃぎすぎるなど言われた。どんどん奥へと走っていく。ようやく行き止まりかと思ったそこには、鉄の扉が異様な雰囲気醸し出し、佇んでいた。

『なんだろう・・・??』

子どもらしい、好奇心に溢れた疑問であった。手を伸ばし、ゆつくりとその扉を開いた。

『誰かな??』

『あ、ごめんなさい』

『何だ、飛鳥くんじゃないか。どうしたのかね。ここは君が繰るよ
うなところじゃない。遊ぶものだってないはずだが??』

『なんだか気になって・・・』

そこにいたのは端正な顔立ち、やや長い黒髪を持つ男性であった。彼もまた白衣姿ということで、父親の助手か、それとも協力者なのだろうかと思った。

名前は・・・忘れた。

やや薄暗い部屋であり、埃っぽさが目に付く。辺りの机にはさまざまな機器が設置され、今もせわしなく稼動している。

それを見ても飛鳥にはちんぷんかんぷんであり、あまり手に触れないようにさせるためであろう。男性は飛鳥をそこから引き離すようにした。

『ここ、父さんたちの研究室だよね』

『ああ。私と君のお父さんの夢は、何時か人が、自力で宇宙にいけるようになることなのだよ。もちろん、そこで新しい生活の場を得られるようにもね』

そのの第一歩として、これが足がかりとなってくれればうれしいのだけどねと視線を一点に向ける。

『こ、これは・・・』

そこに佇んでいたのは鉄の巨人。小さな飛鳥からすれば、3メートルのそれはまさに巨人といっても差し支えなかったのだ。

そこにあつたのはまだダークグレー一色のそれであるが、飛鳥が見まごうはしない・・・それであった。

「ヴェ、ヴェステイジ・・・」

感慨深く、その機体の名前を言う。この時はまだ、名前も付けられていなかったのだ。

『か、かつこいい!!』

飛鳥がそう叫ぶ。もう遠い昔のことであるし、一言一言覚えていくわけでもない。だが、微かにそんな興奮があつたのかもしれないという、胸に溢れるこの暖かさがあつた。

すると後ろのドアの向こうから声が聞こえた。一人は父親の声だ。しかし、更にもう一つ女性の声も聞こえた。

『まあ、そういわないで一度見てくれないか??』

そこに現れたのは先ほどと同じく白衣姿の父親。そして、その後ろからぴよこんと飛び出ている何故かウサギ耳。

そして、その後ろから姿をあらわしたのは、一人のまだ年若い女性であつた。薄紫色の長い髪をし、何故か某アリスの服とウサギ耳という特異な格好のまま現れたのだ。

『東さんはこんな玩具に付き合っているほど暇じゃないんだよ』
「!!--」

そうだ……。飛鳥はまるで鈍器で殴られたような衝撃を受けた。ガンガンと頭が痛む。小さい頃の飛鳥は一体誰だろうという目で彼女を見て、成長した飛鳥はそんな彼女を……。篠ノ之束を……。父を、母を、妹の朱雀を殺した仇を睨みつけていた。

『早く白騎士の調整をしなきゃだめなんだからね。 ■ ■ちゃんを待たせるわけにはいかないよ』

聞こえない、聞こえない……。何故聞こえなかったのだ。そう
必死に動くはずのない手を伸ばし、聞こえるはずのない声で叫ぶ。

そう、自分は……。飛鳥はこの時確かに会っていたのだ。

『ん?? 誰だい君は。君のような子に、東さんは興味はないよ』

まるでそこらに転がっているような石ころを見るような目で見られて
いる。こうやってあの時も、死に行く人たちを見ていたのかと
思うと更に憎悪が掻き立てられる。

殺してやる。そう叫ぼうとした瞬間、背中を何か暖かなもので包
まれたのを感じ、意識を落とした……。。

PHASE 09 プロローグ2（後書き）

ED2 ↓ REASON > 玉置成実 <

原作で言う第一巻の後半部分。今作品で言えば第二章に当たるものです。新しい原作キャラの登場。クラス代表としての初めての試合。オリジナルを組み込みつつ、主人公である飛鳥が活躍できればと思っています。

PHASE10 訓練と祝い（前書き）

OP2 ↓IDENTITY>玉置成実<

いよいよ第二章が始まります。

感想お待ちしております。

PHASE 10 訓練と祝い

飛鳥がクラス代表になった日の翌日。アリーナでは千冬による実技訓練が執り行われていた。一組の生徒たちは全員が集まり指導を受けている。

「それではこれから急上昇、急停止の実技を行ってもらう。専用機持ちは前に。あと、紅月もだな」

ISの専用機をすでに持っている一夏とセシリアはもちろん。もはや専用機と遜色ない性能を見せているMS。そのために、飛鳥もこうして待機状態のブレスレットをして前に出ていた。

「何で俺達だけ??」

一夏が疑問の色を顔に見せながら言う。

「そりゃ、知識だけじゃ分からないことを、俺達専用機持ちが見せてやることで勉強するんだよ」

「飛鳥さんの言うとおりですわ。結局頭で分かっても具体的イメージがなければなりませんし、逆に知識もなしの感覚でやってもいけませんわね」

「へ」

理解しているようではない様子の一夏。そんな一夏の様子を無視して千冬が指示を出す。

「それではISを展開しろ」

そう指示されて飛鳥は右腕の赤いブレスレットを、一夏は何故か白いガントレットを、セシリアは青いイヤークラスを。それぞれ起動させるイメージを膨らませる。

二人に挟まれている一夏は何度も唸りながら起動させようとしているがなかなかうまくいかない。対して隣の二人は数秒もかからずに展開できている。それを横目に更に焦る一夏に対して頭に出席簿が落ちてくる。

「遅い!!」

「す、すいません。でも、難しくて・・・」

「一流の操縦者だったら数秒もかからずに展開できる。考えるよりも慣れる」

「はい・・・」

ようやく展開に成功したのか光に包まれ、ISスーツであった一夏のからだに機械装甲が纏われていた。白い何者にも染まりそうで浄化する白い装甲。浄化の白い騎士の姿でそこに立っていた。

隣には青い装甲のブルーティアーズを展開したセシリアがいる。そしてまた逆隣には灰色のヴェステイージを展開した全身装甲姿の飛鳥がいた。顔までも全て覆われているために表情は分からない。

その機体からは騎士というよりも狂戦士と取ったほうがいいだろうか。更には背中のバックパックが以前とは違うものに成っていた。それに気づいたセシリアが尋ねる。

「あら??飛鳥さん。そのスラスタ部分にあるものですが・・・」
「あ、本当だ。前とは違ってる」

セシリアの言葉に一夏も気づいたようでそう言ってくる。それはこの前のクラス代表決定戦の後、ヴェステイージの根幹を成すコアがどうやらISと同様に学習し、武器を生み出したらしい。らしいというのは未だIS同様に良く分かっていないMSであるために、断定はできないのだ。それにMSに関して詳しいものはおらず、その開発の中心だった父はすでに他界している。

「新しい武器・・・って言えばいいか??」

「なあ、そうでしょうね。スラスターが大きくなっているってことは、機動性が上がったのですの??」

「軽くシミュレーションでは到来の3倍以上。ISに加算すれば第三世代にも見劣りしない速さだった」

「そ、それってすごいこと??」

当然だとセシリアが代弁してくれた。その途中千冬の静かにしろという声が聞こえたためにこれ以上はやめたほうがいいと判断し。口を閉じる。

「それでは三人にはまず急上昇をしてもらう。いけ!」

指で上をさす千冬。取りあえず上に上ろうということではまずセシリアがトップバッターで飛んでいく。さすがに手馴れているといつか、手本を見せる上ではやはり代表候補生はいい見本である。

スムーズに空に上昇していく。それをハイパーセンサーで見えた飛鳥。すぐにVPS装甲を起動させる。灰色だった装甲に色が付く。まるで命を吹き込まれるかのようにして、眠っていた狂戦士がそこに立つ。

「え???色が変わった」

「すごいね、一体どういう構造してるんだろう?？」

「見た目はちょっと怖い雰囲気だけだね」

後ろで見学を言う女子生徒たちはそのヴェスティージの変化を見てそれぞれの意見を言う。

“VPS装甲”

飛鳥にもどうやって父がこれを生み出したのかは分からないが、機体の装甲に対して電流を流し、実体の武器による攻撃を無力化できるという、まだビーム兵器などに遅れのあるISにとってはかなりの天敵である。

膝を軽く曲げ、呼び動作を加えながらスラスターを全開にし、飛び上がる。

「!」

予想以上の速さであった。もともときりぎりまで機体の軽量化が図られていたヴェスティージであるが、この新バックパックのスラスターの数が増えたことと対艦刀とビームサーベルを一本排除しているためにかなりの速さになっていた。

それは先に前を飛んでいたセシリアも同じだった。あっという間に追いついたその速さに目を見開いているのが見える。

「お、お速いんですね・・・」

「ああ、これなら機動性の高いISにだって対応できる」

飛鳥は確かな新しい力を感じていた。すると下のほうから声が聞

こえてきた。すでにぎりぎりまで上空に飛んでいた二人であるが、一体なんだろうと視線を向ける。そこには白式を展開し、よろよろと専用機持ちとしては情けない姿で上ってくる一夏の姿があった。

「ま、待ってくれ」

「な・・・」

「一夏さん・・・」

よろよると上ってくる一夏。以前の試合で見せたような動きは影を潜め、まるであれは火事場の馬鹿力からともいえるようなものに感じられる。おそらく何も意識せず、ただ任せるようにして動いていたのだらう。当然意識してやろうとしてもできるはずもない。

> 遅い！！スペック上ではヴェステイージやブルーティアーズよりも上だぞ！！<

下からインカム越しに千冬の叫ぶ声が聞こえてくる。一夏はそういわれても素人にいきなりやれと言うのは刻だと反論したかったが、さすがにそういえば黙れと一蹴されるだけだと、自身の姉の理不尽さを考えるとそれはやめざるを得なかった。

「とは言われても・・・」

いくら最新悦の専用機だからと言って、乗り手がこうも初心者であればその力は半分も発揮されない。この前の試合でだって、全く機体の性能や特殊能力を把握せずに戦ったために、最悪の機体損傷という形で惨敗してしまったのだ。はつきり言ってしまうえば今の一夏にとって白式というのは宝の持ち腐れなのだった。

「確かイメージは、ぐっと力を入れて、ドカーンってそれを爆発さ

せるようにする・・・だったかな」

「な・・・、なんだよそれ」

一夏がようやく追いついてから、なにやらぶつぶつ言っているのが聞こえ、それを聞いた飛鳥は思わず聞き返してしまった。とんでもない抽象的で擬音語が多いイメージの仕方であつたためにそう疑問に思つた。

「ああ、これか??」

どうやら一夏は昨日の内にすぐに修復が完了して戻ってきた白式を使って訓練を下らしい。そのとき一緒にいた幼馴染の篠ノ之箒が教えてくれたらしいのがそれである。はつきり言つて、何を言いたいかまつたく分からない。取りあえず言えることは、彼女にはものを教えるスキルはないということだ・・・。

「一夏さん??イメージは所詮イメージですわ。自分に合う方法を模索することが最も建設的かと」

「そうだな。ていうか、最初に乗つたとき、それをイメージしたのかよ」

「いや・・・。特に何も」

その様子だと、おそらく感覚で、取りあえずこうかもしれないというあやふやな状態で飛んでいたのだろう。確かにISの機能がある程度は制御してくれるが、基本はその操縦者にかかっている。セシリアの言うとおり、自分なりの方法を見つけていくしかないだろう。

「ていうか、これなんで浮いてるんだ??さっぱり分からないぞ?」

などといっている一夏であるが。そんなことを逐一説明していると時間がいくらあっても足りないくらいである。

セシリアはイギリスで代表候補生として、ずっと訓練していたために自分なりのイメージを浮かべる事が出来るのであるが、一夏は今までISに触れたこともないのだからイメージがまだ掴めていないのも無理は無いのだ。

「どうやって浮いてるか説明よろしいですけど、長くなりますわよ??反重力力翼と流動波干涉の話とか・・・」

「いや、やっぱり説明はいい」

一夏は聞きなれない単語を聞いただけで意味不明なのだ、さらに詳しくされたら更に混乱してしまい、イメージどころではない。

「一夏!!いつまでそんな所にいる!!早く降りて来い!!」

「なんだ??あいつ・・・」

飛鳥は突然インカムによる大きな声が響いてきたのに対して顔をしかめながら言う。

「箒だ・・・何してるんだ??あいつ・・・」

一夏は突然箒の声が聞こえたのでハイパーセンサーで地上を見れば、真耶からインカムを奪い取って一夏を睨んでいる箒の姿が見えた。ただ、すぐに千冬に頭を叩かれてインカムを真耶に返していたが・・・。

「でも、すげえなISって・・・こんなに離れてるのに箒の睫毛ま

でくつきり見える」

「いや、それは当たり前だろ・・・」

ISはもとも宇宙空間での活動を想定して作られたものである、当然宇宙空間では何万キロも離れた星の位置でその居場所を確認しなければいけないということだ。つまりはハイパーセンサーからすればコレくらいの距離、どうということではないのだ。

というか一体なにを見ているんだとあきれながら一夏のことを横目で見る飛鳥。すると私語が長かったためか千冬が出席簿で叩き、奪い取ったインカム越しに叫んで指示を出す。

「紅月、織斑、オルコット、いつまで私語をしているつもりだ！！次は急降下と完全停止だ！ 目標は地表から10cm」

千冬からの指示が来た。

次の指示が来て3人は「はい」と返事をする。最初にセシリアが自ら最初に行くといって地上へと向かっていく。

「それでは飛鳥さん、一夏さん。お先に失礼しますわ」

真っ直ぐな軌跡を描いて地上へと向かい、ぴたりと10センチの所で完全停止をして見せた。

「すごい」

「さすがセシリアさん」

「やっぱり代表候補生だからね。慣れてるよ」

「いえいえ、これくらいは当然のことですわ」

クラスメイトたちに褒められ、まんざらでもなさそうなセシリアがハイパーセンサーで見た。入学当初こそあの高飛車な言動で少し距離をとられつつあった彼女であるが、あの一戦の後、自分や一夏に対して謝罪し、少々貴族出の所があるが、いたって普通の女子生徒として振舞っていた。

それを見ていた他の生徒たちも、セシリアに対しての見方を変えて、普通に接する事ができるようになっていた。まだまだ、以前のような態度で接してくる人も少なくはないが、一組に関してはそう言う人はいなくなっていた。

「なら、先に行くぞ」

「あ、ああ。分かった」

飛鳥は一度一夏に視線を向け、断りを入れる。スラストスターを前回にし、トップスピードにて地上へと真っ直ぐと降下を始める。ものすごい速さで地面との距離が縮まる。

以前のバックパックもまた機動性を高めるものであったが、スラストスターの数や、武装を最低限のものを装備させたこともあってかさらに早くなっていた。体にかかるGもまた大きくなっているが、これは慣れていくしかないと思った。

そしていよいよというところで。

——— 今だ!!

すぐさま急停止に入る動作を行い、セシリア同様に10センチの所でぴたりと止まることができた。それを見て、クラスメイトたちは同様に褒める言葉をかけてくれた。

「すごい」

「飛鳥くんってもしかして操縦慣れてるの??」

「私にも教えてー」

「え／＼あ、いや／＼」

女子生徒にたかられて思わず赤面する飛鳥。普通の学校であればまだ大丈夫だっただろう。しかし、ここIS学園は普通の学校ではない。ISを使う際に着るのははっきり言ってからだのラインが丸分かりのISスーツというものであり、男子である二人はお互いのものを見ても何も感じないが、女子のそれを見ればはっきり言って反応してしまうのは仕方のないことである。

思わずたじろいでしまう。更には顔が熱くなるのが感じられ、恥ずかしくてしょうがなかった。

その頃、一夏は先日に行った、筈との訓練のことを思い出していた。

「ええっと・・・、確か急降下と急停止のときは・・・」

『いいか一夏。急降下と急停止のときは、まず“ギューン”と降りてだな、止まるときにこう・・・“クイツ”という感じに止まればうまくいくぞ』

『ううゝ・・・ん、なんだか良く分からないがやってみるか』

『よし、やれ』

『よし、いくぞ。まずは急降下の時には“ギューン”という感じで・・・』

『よしそのままいけ、一夏』

そのことを思い出し、まずは急降下のときの感じ”ギューン”というようにして白式のスラスタをふかして降りる。白式の速さは他

とはなかったので大事には至らなかったようだ。何処か落ち込んでいる様に見えるのは気の所為ではないだろう。

「何してるんだ?? あいつ」

「さ、さあ・・・、まさか一夏さんは自殺願望者じゃないとは思いますが・・・」

飛鳥とセシリアは揃って頭をつつこんでいる一夏を見て言う。大丈夫だろうかと近くによる。どうやら目立った怪我はないようである。絶対防御のおかげで首も無事であるが、あんな高度から落ちたらISやMSでなかったら普通に即死である。

「大丈夫なのかよ??」

「あ、ああ。悪い。大丈夫だ」

飛鳥が手を差し出し、それに捕まって立ち上がる一夏。ISスーツについたほこりを落とす。

「本当に大丈夫なのですか、一夏さん?? 保健室に一応行ったほうがよろしいのでは??」

「それは必要ない」

セシリアが一夏に対してそう言っていると、後ろから突然それを遮るようにして声が聞こえてきた。その声のしたほうを向くと、そこには腕を組んで一夏のことをにらんでいる筈の姿があった。

「一夏、あれだけ言ったのにどうしてそれができない」

「そ、それはだな筈・・・」

取りあえず一長一短でできるように簡単にはISというのはでき

ていない。とはいえ起動数秒の一夏があの時普通に戦闘できていたのだから、飛べてもおかしくはないのであるが……。

「ちょっと篠ノ之さん??その話しはまた後でもできますでしょ?」
「?」

「オルコット……」

一夏のことをにらんでいると、その二人の間に入ってきたセシリアが言う。割って入ったのは一応一夏のことを保健室に連れて行ったほうがいいのではないかということだった。

先ほど箒がいらなかったが、さすがにあの高さから落ちたのだ、いくら絶対防御が発動したからといって、衝撃を全て受け止められるとは限らないのだ。

「そうだな、一夏を一旦保健室に連れて行ったほうがいい。何かあったら、大変だからな」

飛鳥もそれに同意する。親友というわけではないが、数少ない男であり、クラスメイトである。何かあったら大変だということで、そう進言する。

「必要ない」

再びそう切り捨てる箒の言葉。それを聞いて飛鳥とセシリアはあきれたような若干怒りを込めた視線を箒に向けていた。箒はそれをまったく意に返していない様子である。

「それはどういう意味だよ、篠ノ之」

「ISには絶対防御がある。それくらいでは怪我はしない。だから

必要ないといっているのだ」

それくらいは知っているだろうというような視線を二人にぶつけてくる。幼馴染とは思えない言葉である。

「勉強不足なのは篠ノ之さん。あなたではなくて??」

「なんだと??」

セシリアがフンと小さく笑い、箒に言う。

「ISの絶対防御は確かに優秀ですわ。ですが、何も完璧というわけではないでしょう??」

「お前こそ何も分かっていない。一夏はこれくらいではなんともない」

「あなたは一夏さんではないでしょう??」

「黙れ猫かぶりが。そうやって優しく近づけば一夏が振り向くとも思っているのか??」

「関係ありませんわ。わたくしはただ一人のクラスメイトとして接しているだけです」

「ふん、なら言うておく。私は一夏の幼馴染だ。だから一夏のことなら何でも知っている。その私が言うんだ、一夏はなんともない」

「はぁ……。さあ、篠ノ之さんは無視して保健室にいきましょう一夏さん。わたくしじゃなくても、保健委員の方に頼んだほうがいいでしょうか??」

「だから必要ないといっているだろう!!関係の無いものは引っ込んでいてもらいたい」

そう叫んでいる箒とあくまでスタイルを変えずにいるセシリアの会話を無視して、飛鳥はそんな様子を遠目で見ている千冬と慌てている様子の真耶のもとへと向かう。見ているくらいなら早く止める

よと、内心思っていた。

「あいつら何とかしたほうがいいんじゃないか??」

親指で一触即発状態の二人を指差す飛鳥。真耶もそうですよと言っているが、あんたも教師だと飛鳥は内心あきれていた。小さく嘆息し、仕方ないと呟いた千冬はそんな二人の元へと歩み寄る。

「いつまで喋っているんだ馬鹿者どもめ。今は授業中だということを忘れたか」

「「痛ったー!!!」」

相変わらずの容赦のない出席簿による攻撃が二人の頭に直撃した。かなり大きな音が響き、二人は叩かれた部分を抱えて膝をつき、悶絶している。千冬はあきれたように二人を見下ろし、それから一夏へと視線を移す。

「織斑、何もないとは思うが・・・、一応保健室で見てもらって来い」

「あ、はい」

「それと一つ言い忘れていたことがある・・・」
「??」

一夏が身を翻し、保健室へと学校のほうに戻ろうとしたところで、地冬が何かを思い出したかのように一夏のことを引きとめる。一体なんだろうかと疑問を表情に表しながら聞く。

「特に異常がなかったら、このグラウンドに開いた穴を埋めておくように。分かったな??」

「な・・・、はい」

そこには一夏の等身大の跡がくつきりと残っていた。なんとも情けないものをグラウンドに残しておくわけにも行くまい。後々使うもの太刀に対しても、邪魔になろうということで、処理しておくようにといわれ、がつくりと肩を落とすのだった。

一夏が保健委員に付き添われて保健室へと向かった後、授業はいつもどおり進められた。再び専用機持ちであるセシリアとMSを持つ飛鳥が前に呼び出されていた。すでに二人はそれぞれを起動させている。セシリアは武装は何も持っていないが、大して飛鳥はすでに武器を展開させている。というよりも最初から全てが装備された状態になるのだ。

「では紅月とオルコットの二人とも武装を展開しろ」

そう千冬が飛鳥とセシリアの二人に指示をする。二人はそれに従ってそれぞれビームライフルとスターライトMK3を武装する。

セシリアは粒子変換をして自身の右手にライフルを出現させる。さすがに代表候補生というわけあって早いものである。飛鳥はすばやく腰にマウントされているライフルを手に取り構える。

「オルコットは流石に代表候補生といったところか」

千冬に褒められたからか、いつもの気品のある態度ではなく、普通の年頃の少女のようにうれしそうな表情になるセシリア。

「ただし」

セシリアが千冬に褒められて礼を言おうとしたのだが、その言葉は

途中で遮られてしまった。

「そのポーズはやめろ。真横に銃身を展開して誰を撃つ気だ??」

千冬がそう指摘するように、セシリアが展開していたスターライトMK3は正面ではなく、まったく誰がそこにいるかも分からない横に展開されていたのだ。それが戦場であつたなら、正面に展開されずに早撃ちができずに殺されることだったある。

「で・・・ですがこれは私のイメージを纏める為に必要な・・・」

などこのように展開する理由を述べているが、千冬相手にはそれは言い訳にしかならず、すぐさま直すように念押しされると、さすがのセシリアでも彼女には逆らえないのか承諾するしかない。

「紅月は状況に応じてすばやく武装を展開できるようにしろ」

「分かってますよ」

「返事は“はい”だ」

「・・・はい」

こうして授業は進んでいくのだった。

それから数時間後。

「というわけでっ！紅月くんクラス代表決定おめでとう!!」

「「おめでとー!!」」

「あ、ああ。ありがとう」

次々とクラッカーが乱射され、中の紐などが飛鳥の頭上に降りそそぐ。今は夕食後の自由時間で、場所は寮の食堂。一組のメンバー

は全員そろっていた。各自飲み物を片手にやいのやいのと盛り上がっていた。

壁にはデカデカと『紅月飛鳥クラス代表就任パーティー』と書かれた紙がかけてあった。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

そういつている女子生徒たちがいるのであるが、彼女たちは二組である。それに明らかに数が合わない。クラスにいるメンバー以外にもいるために三十人以上は埋まっているように見えた。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、紅月飛鳥くんに特別インタビューをしに来ましたー!!」

突然の新聞部の登場に彼女たちのテンションも更に上がる。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

そう言われて彼女から手渡された名刺を受け取る。

「ではでは、まずはぜひ紅月くん!!」

「え??? な、なんだよ」

「クラス代表になった感想を、どうぞ!!」

飛鳥は突然質問されて戸惑っている。周りを見ても期待の視線を

一心に向けている女子生徒たちと、目の前にはボイスレコーダーから延びているマイクを飛鳥に向けている二年生の黛薫子がいる。

「えーと・・・いきなりそう言われてもな。まあ、なんというか、がんばるっていうしかないのか」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。『俺に触れるとヤケドするぜ』とか『俺の女に勝利を捧げる』とか!」

「そ、そんな恥ずかしい台詞言えるかよ!! ていうかなんだよ二つ目の台詞!」

「あれ?? 楯無ちゃんから聞いたけど、同室に住んでいるのが・・・」

「なあ! ? 言うなよノノノ」

「お?? 食いついてきたね。どんな関係なの?? 恋人関係??」

「な、何言ってるんだよ。そんなわけ、ないノノノ」

薫子が言う言葉に思わず赤面してたじろぐ飛鳥。その反応が面白かったのか、色々といじってくる。されるほうとしては色々と恥ずかしいのであるが・・・やはりこの手のネタには興味がある女子生徒たち。色々とあることないことが飛び交っていた。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

「やめるよ。へんなこと言いふらされたら、あいつらだって困るだろ」

「ふん?? あいつらって??」

「な、それを聞くのかよ」

そんなこととして新聞部、大丈夫なのかと内心で突っ込みを入れる。今でさえ普通の一般の高校生とは違う学校生活を過ごしているというのに、更に慌しいものになったりしたらこっちの身が持たないというものだ。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですね」

などといっている彼女であるが、目に見えてようやく来たかと待ちに待ったとやる気満々に見える。

「コホン。ではまず・・・」

なにやら長くなりそうだと思った。そう感じたのは何も飛鳥だけではなかったようだ。

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだいな」

薫子もまた、付き合ってられないといわんばかりにすばやくセシリアの取材をやめる。それで新聞部が勤まるのかと内心でつつこんでいたが・・・。

「さ、最後まで聞きなさい!!」

当然のようにセシリアは反論する。

「はいはい、とりあえず三人並んでね。写真撮るから」

「あなた聞いてますの!？」

セシリアはその言葉に意外そうな声をあげていたが、声色には喜びが含まれていた。どうやら薫子は専用機持ちが2人と謎の機体を持つ飛鳥という注目の三人であるからそうしたかったらしい。せわしなく動く彼女に飛鳥も無理やり立ち上がらせられ、三人が並ぶ。

飛鳥と一夏の間、頭に一つ二つ小さいセシリアが入るという構図であつた。二人の男に挟まれていることから、セシリアの顔は真っ赤であつた。

「大丈夫か、セシリア??」

「べ、別に、何でもありませんわ」

「??」

この二人、程度は違えど、鈍感である。そのためにセシリアの今の気持ちを察することができると、感覚が鋭いわけではないのだ。飛鳥はそれ以外の感覚は鋭いのであるが……。

「……」

「どうしたんだよ、箒??」

「何でもない」

一夏がどういうわけか、かなり機嫌の悪い箒にどうしたのかと尋ねるが、箒はブスツとした表情でなんでもないと。一夏はしぶしぶ納得して、彼女から視線を外す。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は??」

「え??えつと……2、かな??」

一夏がそう計算の答えを言つと。

「違う、74.375だ」

「飛鳥くん、正解」

薫子を持っていたデジカメのシャッターが下りる。

周りを盛ると一組と来ていた二組の女子生徒全員が無理無理三人の中に入り込んでいた。

「なんで全員入ってるんだ??」

ちなみに、箒は一夏の隣にいる。恋する乙女の行動力はすごい。いつもそうやっていればいいのだが、素直になれない幼馴染と、それにまったく気づこうともしない朴念仁である。

「あ、あなたたちねえ!!」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないしょ」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「「ねー」」

「く、うぐぐ・・・」

セシリアはクラスメイトに対して文句を言っているが、彼女たちから丸め込まれて、二の口が告げなくなっていた。何はともあれ、飛鳥の代表就任を祝うパーティーは夜遅くまで続いたのだった。

クラス代表就任パーティーが終わり、一夏と箒は部屋に戻ってきていた。一夏はというと部屋に戻ってくるとすぐにベッドにダイブして、大の字になって疲れたと愚痴をこぼしていた。

するとそこに箒がやってきた。

「今日は楽しかっただろう。良かったな」

どうしたわけか、どこことなく不機嫌そうな表情である。

「どこがだよ……。まったく、疲れただけで楽しいもんか」

一夏はその疑問を彼方へと投げ捨てると、端的に先ほどのパーティーの感想を漏らしていた。さすがに異性ばかりの所では気疲れする。楽しめるのも楽しめず、むしろ主催した彼女たちが盛り上がっていたと思う。

「だったら、お前が逆の立場だったら楽しかったといえるのかよ」

一夏は冷やかすように箒にそういうが、意外にも箒は楽しいかもしれないといってきた。一夏はその答えを聞いて意外そうな表情を浮かべるが、どうして箒がそれも怒っているのかわからなかった。

しかし、一夏に考える時間を与えんと、突然の睡魔が襲い掛かってきて、一夏は箒との会話を適当に切り上げると、ぱたりと再びベットへとからだを預けるようにして眠りにつこうとした。

しかし、突然箒から枕を投げつけられ、再び現実世界に意識を覚醒させられる。一夏は怒り心頭に枕を掴みながら起き上がると箒に叫ぶように言う。

「何しやがる!」

「それはこちらのセリフだ!! 今から寝間着に着替えるんだから、さっさと向こうを向いていろ!!」

「……。あのな、箒。そういうのはお互いが部屋にいないときにさっさと済ませておけよ」

などと正論を口にする一夏に対して、有無を言わせぬにらみを向けてくる箒。まったくもって理不尽であると思う一夏。仕方なく箒

に対して背を向ける形で寝転がると、箒はそれを確認して着替えを始めるのだった。

それからして……。

「い……いいぞ」

「うん?? ああ……」

ようやく箒の着替えが終わったらしい。ゆつくりと元の向きに向き直った位置かであるが。箒の姿を見てすぐにあることに気づいていた。それは箒が着ている寝巻きの腰の帯が変わっていることであつた。

「あれ?? 帯が新しいやつだな」

「!?!」

一夏が意外にもそれに気づいたことに対して、箒は意外そうな驚いた表情を向けていた。しかし、すぐに良く見ているなとややうれしそうな笑みを浮かべていた。

「いや……なんだろう、色も模様も違うから、普通気づくだろう。だって、箒のこと、毎日見ているんだからな」

そう一夏が言つと箒は顔を真っ赤にした。

「そ、そうか。いつも見ているか……、そうか、そうか」

箒はうれしそうに呟いていた。それからお互いに横になり、眠りにつくのだった……。

「っ、疲れた・・・」

どさっと言う音とともに、私服のラフな格好の状態の飛鳥がベツドに大の字でうつぶせに倒れる。はつきり言つてものすごく疲れた。今回のパーティーの主役である自分よりも、周りの女子生徒たちのほうがはしゃいでいるように思えた。

更に1組だけではなく他のクラスからも生徒が来ていた。多分知り合いや友達を彼女たちが誘っていたのだらう。どう見ても一組だけの人数ではなかったからだ。

ごろりと体の向きを変え、天井を見上げる。まだ戻ってきていない簪と本音。簪のほうはぎりぎりまで整備室に入つてISの製作に励んでいるのだらう。本音のほうは多分友達とまだ喋っているのかもしれない。そろそろ消灯の時間なので戻ってくるとは思うのであるが。

クラス代表戦も近い。簪も4組のクラス代表になったらしいが、彼女は全く興味もないらしい。専用機持ちであり、日本の代表候補生だからだというが、その専用機はいまだ未完成のままである。彼女のプライドから考えると、クラス代表はおそらく、すでに代役としての副代表が参加することになるだらう。

彼女が未完成のままでは出場するとは思えない。本音のほうも専用機の使用人だということで手伝おうとしているようであるが、その度に一人でやると言われるらしい。

彼女の姉である楯無もそれについては心配しているようであるが、彼女自身も簪が自分に対してどういう感情を向けているかを知って

いるために迂闊に声をかけることもできない。

姉としては寂しいと以前飛び込んできたときがあったが、そういわれても彼女の性格というのか、自身に抱えているコンプレックスをどうにかしなければいけない。

しかし、そう簡単に何とかなるようなものではない。それだけ大きいものである。意固地になっている簪であるが、それでも彼女なりにけじめをつけようとしているようだ。

本音の助力を借りずに、自分一人で専用機を作り上げる。それができれば自分が抱えるコンプレックスというものが軽くなるのではないか、それ以上に、もう更識楯無の妹ではなく一人の更識簪として認められるのではないか・・・。

そう思っているのだろう。下手な言葉は彼女を更に傷つける。何とかしてあげたいという幼馴染としての気持ちはある。だが、不器用な自分で何がいったいできるのだろうか・・・。

「弱いな・・・俺」

守ってみせる。小さい頃から一緒にいた彼女たち。最初は大きな屋敷だということ了近寄りがあった。自分からそこに以降という気も起きなかったのだから。しかし、ふとあるきっかけで遊ぶことにあり、仲良くなったのだ。それから一緒にいることが当たり前になり、いつも一緒に遊び、ご飯を食べ・・・。

「ふ、風呂・・・／＼ああ！！何を思い出してるんだ！！」

ぼんやりと昔のことを思い出していた飛鳥の脳裏にいかがわしい

ビジョンが映った。慌ててその煩悩をかき消して忘れようとする。だが、顔は当然のように赤くなっている。小さい頃だからこそ平気であるが、今は普通に彼女たちも一人の女性。それと比べて年相応かそれ以上なのだろうか。それぞれが独自の雰囲気を出しているために考えただけでも・・・。

「や、やめだ！！お、俺は一体何を考えて・・・」

「るの〜??」

「わひゃあ!？」

「お〜」

突然肩越しからにゅつと飛び出してきたピ。チュウ・・・ではなく、キツネの着ぐるみ姿の本音。一体いつの間に帰ってきたのかと彼女の神出鬼没な行動に驚きを隠せない。

瞬時加速以上の速さでベッド上の彼女から離れる。まだ心臓の鼓動が早い。これは恥ずかしさと驚きの二重攻撃からであった。まだ激しい鼓動をしている胸に手を当てたまま、啞然として本音のことを見ている。

「ねえねえ・・・」

「な、なんだよ・・・」

ニコニコ笑っているようで何かを詮索しているような表情の本音。思わず後ずさりをしてしまう。ぶかぶかのその黄色の袖の部分を口元に以って行き、くすくすと笑う。

「な、なんだよ」

「ん〜ん、何でもないよ〜」

そういわれると余計に気になる。いきなり現れておいて、一人だけ何かを悟ったというか、分かったような表情で気になるように笑われるとそうなるのも仕方ないだろう。

くるりと背を向けてしまう。ゆっくりと近づき、背中越しに声をかける。だが、すぐに立ち上がってところどころと笑いながら自分のベッドに寝そべってしまう。全く話しの相手になってくれそうにもない。

「はあ、もういい……。今日は疲れた」

「私は楽しかったよ」

「それには答えるのかよ」

「お菓子もたくさん食べれたしね」

「は、話を逸らすな!!」

おそらくわざと話を逸らしているのだろう。とはいえこれ以上何かを言ってもそののほほんとした彼女に話を逸らされるだけなのだろうと思い、布団に転がる。背中に時節視線を感じるがすぐに無くなる。

おそらく後ろでころころと転がっているのだろう。そんな彼女を無視して、今度は近々行われるクラス対抗戦について考えていた。クラス代表となったため、飛鳥が出場することになっていた。

まだ詳しいことは聞いていないが、直前になるまでは試合形式は分からないらしい。^{タイム}一対一になるのか、それとも二対二になるのか。^{タッグマッチ}・・。

ごろりと天井を見つめる。ゆっくりと伸ばす手に付けられているブレスレットがきらりと光ったように見えた。今日の訓練時のよう

に新しい機能が装備されていた。

“ シルエット換装システム ”

おそらくISのコアのようにMSのコアも戦闘データから色々なことを学び、成長しているようだ。その証拠に新しいシステムが装備されていた。それは白式とブルーティアーズのそれぞれの武装や姿、戦闘パターンなどを急速に学習し、新しい武器を作り出していたのだ。

守りたい……。あの時の光景をもう二度と見たくないから。自分の大切な人たちが、親しい人たちが死んでいくのを見たくないから。だから、力を求める……。

「俺は……」

強くなれたのだろうか。それともまだ弱いのだろうか。あくなき向上心とともに、決して忘れぬ憤怒の感情を胸に、飛鳥はゆつくりと眼を閉じるのだった。耳に聞こえてきたお休みというのは空耳だったのだろうか……。

PHASE10 訓練と祝い（後書き）

ED2↓REASON>玉置成実<

次回予告

新たな場所、新たな環境。

そんな彼らの元に、海を越えて転校生がやってくる。

突然現れた彼女に対してさまざまな感情が交錯する。

そして、決定するクラス代表戦の試合形式。

戦いの舞台を目前に傷ついた戦士の胸にあるのは一体……。

次回インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ『龍の襲来』

*なんとなくやってみたくなりました。

PHASE 1 1 龍の襲来（前書き）

OP2 ↓ IDENTITY > 玉置成実 <

たくさんの閲覧と感想どうもありがとうございます。

PHASE 11 龍の襲来

何とか反省文を完成させた翌日。思い山積みのそれを何とか職員室まで持っていった飛鳥。時間ぎりぎりになって1年1組の教室へと入っていく。クラスに向かうと、中でなにやらクラスメイトたちが騒いでいる声が聞こえていた。一体どうしたのだろうかと思いいながらも、とりあえず中に入り、すぐ見つけたセシリア・オルコットに尋ねることにした。

「おはよう。なあ、この騒ぎは一体どうしたんだ?？」

「あら、おはようございますわ、飛鳥さん。何でも中国出身の代表候補生が転校してくるらしいですわ」

「転校生??」

セシリアからそう聞いて、飛鳥は首を捻る。こんな時期に転校生とは一体どういうことだろうか。IS学園の転入条件というのはかなり厳しいと聞き、更に試験自体も国の推薦がなければ受ける事ができないというものであった。

「取りあえず私の存在を危ぶんでの転入かもしれませぬ」

そう言いながらも、いつものように優雅なポーズを取るセシリアは、自信満々である。

「このクラスに、必ずしも転入してくるわけではないのだろうか?？」

セシリアに対して突っ込みのように篤が言う。後ろから一夏とともに教室にやってきていた。どうやら二人もそれについては詳しく知らないようだ。

「どんな奴なんだろうな??」

一夏が気にするような発言をする。やはり気になるのだろうか。だが、そんな彼の発言に対して反応するものがある。

「一夏!! 今のお前に他の女子を気にする余裕はないぞ!! 来月にはクラス対抗戦があるのだから!!」

「篤さんの言うとおりですわ、一夏さん。対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう。相手は専用機持ちの私がいつでも務めさせて頂きますわ」

「え?? 対抗戦?? 俺関係ないか??」

一夏が言うように、対抗戦はクラス代表がするためにその代表ではない一夏がそういわれるのはお門違いなはずなのである。しかし、そう言う彼に対して突きつけられる紙。

「クラス・・・代表対抗戦・・・変更知らせ??」

一夏は首を捻るようにしてそれを見る。そこに書かれていることを呟いている。飛鳥も今日の朝はそのような掲示板を見る余裕がなかったために、一夏同様にどういう意味なのだと思っていた。

その紙を見ると、当初の予定とはまた違う形式になっていた。タイム
ラグマッチ一対一形式から二対二形式へと変更が成されていたのだ。この意味は一体なんだろうかと思う。

はつきりいつて数週間は経っているが、そこまで綿密な連携が取れるとは思えない、更に本番は来週である。今からどうこうなるものであるのか。とはいえ泣き言は言ってられないのも事実である。

クラスメイトからも代表戦には勝って貰わないと困ると言われ出したのだった。

とは言うものの、彼女たちは純粋な気持ちで飛鳥のことを応援しているわけではなく、優勝することで手に入るとあるもののためであった。

「優勝商品は学食デザート半年フリーパス券だからね!!」

「それもクラス全員分の!!」

「飛鳥くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ!!」

などとそれぞれ本音が駄々漏れであった。飛鳥はそんな彼女たちを横目で見ながら責任重大だと思って大きくため息をついた。

そんな同じく紙を見ている一夏は何故自分が出場するような雰囲気になっているのかと疑問を感じていた。

「な、なあ……。この雰囲気だと、俺も出場するってことなのか??」

周りからは当然だというような視線が飛んでくる。戸惑っている一夏に対して、セシリアが言う。

「それはわたくしが辞退したからですわ」

「え??セシリアだったら、実力的に妥当だと思うんだが……」

一夏がそう言うが……。

「セシリアわかってる!!」

「だよね!!折角の男子がいるんだもん持ち上げないとね!!」

「私たちは貴重な経験を積める！！他のクラスの子に情報が売れる！！一粒で二度美味しいね！！」

クラスの女子生徒たちは口々にそんなことをいつていた。対する一夏はというと、クラスメイトを売るなど内心で叫んでいた。

「そんな無責任なこというなよ。ただでさえ俺はまだ基本操縦でつまづいているんだぞ。そんな簡単に優勝だなんて・・・」

できるわけがないと、一夏にしては、というよりも、この状況状態で当然の言葉であった。

「大丈夫。確か専用機持ちがいるのは1組と4組だけだから楽勝だよ」

そう誰かが言ったそのときだった。勢い良く教室の扉が空けられると、そこにいたのは、やや身長の高い、ツインテールの髪型をした少女であった。

「その情報・・・古いよ」

少女の名前は鳳鈴音^{ファン・リンイン}。彼女はとある人物に対して宣戦布告を含めた挨拶をするためにここ一年一組へと足を運んでいたのだ。そして専用機持ちが2人もいるし、それに専用機を持っている生徒がいるのはこと四組だけだから楽勝だという言葉聞いて、異議を唱えるようにしていつてやったのあった。

「え・・・」

「誰だ??」

鈴がそういつと一夏は彼女を見つめて驚愕の表情に染まっていた、飛鳥に関しては誰だという疑問を呈した表情で彼女を見ていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。だから、そう簡単には勝てないよ」

「お前・・・」

クラスが一体誰だというようにざわついているさなか、一夏は目の前の少女が一体誰なのかを知っているような口でいう。

「鈴・・・お前、鈴か??」

一夏の鈴を知っているというその言葉を聞いて、一夏のそばにいた二人の女子生徒、箒は鈴を目の敵にするようにしてにらみつけてきた。しかし、鈴はそんな視線を無視して言葉を続ける。

「そうよ。中国代表候補生 鳳鈴音、久しぶりね・・・一夏」

鈴は幼馴染である一夏に挨拶をしたのだった。

「何を言っているんだ、鈴。その格好、お前には全然に合わないから、やめておいたほうがいいぞ」

しかし、対する一夏の口から出た言葉はそんな鈴に対する似合わない問いう言葉であった。確かに小さな少女がやってもさまになるような格好ではない。

「んな!?なんてこというのよ!一夏!」

そんなことを言われた鈴はというと、彼女のトレードマークなだろう、ツインテールを揺らしながら激しく一夏に対して抗議してくる。

あ、こいつ終わったな。

ふと飛鳥が鈴の後ろを見たら、そう思わせる権化が仁王立ちしているのが見えた。案の定、千冬が話しかけると、鈴は一夏に対する怒りからか、年上に対する言葉遣いとは到底思えない口調で言う。

「おい・・・」

「何よ！！今いそが・・・しいのよ・・・」

最後はしぼんでいくように言う。彼女の目の前にはこの担任である織斑千冬の姿があった。

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生だ！！さつさと自分のクラスにもどれ、馬鹿者」

「は、はい。あ、一夏、後で覚えておきなさいよ！！」

「さつさと戻れ！！」

「す、すいません」

帰り際に一夏に向かって言葉を向けるが千冬の一喝で脱兎のごとく一組を後に行行った。飛鳥は先ほどの一夏と鈴という少女の会話から、二人の関係は意外と親密であることが分かった。しかし、対する筈はというと、そんな相変わらずの一夏に対して、苛立ちの視線を向けていた。

授業中、一夏に好意を向けている筈は気になるという視線を一夏に向けていたために、真耶から注意されたり、千冬から出席簿アタ

ツクを受けるなどそれを繰り返していることから、かなり気になっているのだろう。それにしても学習しない奴だと呆れていた。

「お前のせいだー!」

「なんでだよ・・・」

昼休み、やはりといわんばかりに箒が一夏に対して文句を言っていた。それにしても彼女が叩かれた原因は一夏であるが、そういう行動を自省できない自身のせいなのではないかと、ふと飛鳥は思っていた。

「なんだ・・・??? 話なら飯食いながら聞くから。とりあえず食堂に行こうぜ」

「ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

なんとも見事なツンデレを見せてくれた。彼女が好意を向けていながら一夏は気づいていない。この手のことは自身で気づかなければいけない。それはそうと、数人と食堂へと向かうのだった。

食堂についてからそれぞれが食べるものを注文していた。一夏は日替わりランチを、箒はきつねうどん、セシリアは洋食ランチ、飛鳥も日替わりを注文しようと決めていた。

そんな4人の前に突如として現れた人物がいた。朝に一夏の前に現れた鳳鈴音であった。その手にはすでに注文したものがお盆の上に乗っていた。しかし、彼女は自分が立っている場所が理解できていないのだろうか。食券が出せなくて4人は困っていた。

「待ってたわよ、一夏ー!!」

仁王立ちして言う彼女であるが。

「どけよ。邪魔なんだけど」

むっとした表情で飛鳥は鈴に対して言う。

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

一夏が目の前にいるから素直になったのかどうか分からないが、素直に聞いてくれた。後ろにいる人物であつたら絶対にしないだろうという行動である。

「のびるぞ、それ??」

飛鳥がそう言う。

「わ、わかってるわよ!! 私は一夏を待ってたのよ!! そうよ、あんたが早く来ないからこうなってるんでしょ!! 一夏!!」

素直だから筈とは違うのだと思っていたが、コレもまた裏切られたような気がした。もしかして、一夏を好きになる人は独占欲というのが強くなるのだろうか。もともとそういう性格の女性が好きになるのだろうか。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど一年ぶりになるのか?? 元気にしてたか??」

一夏がそう聞くと元気だったという鈴。

「あんたこそ、たまには怪我病気しなさいよね」

「それはないだろ」
「・・・」

それについては一夏に同感だった。こいつはこういう頭をしているのだろうかと、少し不安になってしまった。実際それだけ一夏のことが好きであり、少しでも離れていた時間を埋めたいためにそう言うってしまったのだ。それにしても一夏はどうもこつも癖の強い女の子に好かれるようだ。まあ、さまざまなキャラやジャンルの子がいるからはつきり言うてより取り見取りなのであるが・・・。鈍感な飛鳥がそれに気づくはずもないのだ。

「あー、ゴホンゴホン!!」

それからして、飛鳥たちは注文した品が来たのを箒があらさまにわざとらしい咳をして知らせる。それぞれの注文した品を受け取り、空いているテーブルへと向かう。この時間帯に空いているテーブルがあるのは驚きであるが、空いているなら座らないことはないと思い、向かう。そして飛鳥たちにくっついてきた鈴も共に昼食を食べる。鈴は一夏に対して言いたいことがあるからと一緒にいた。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ??おばさん元気か??いつ代表候補生になったんだ??」

などとマシンガンのように一夏が鈴に対して質問する。もちろん次々と質問を投げかけられた鈴もさすがにそれはないだろうと思った。

「質問ばっかしないでよ。それよりも、アンタこそなにIS使ってるのよ。ニュースで見た時びっくりしたじゃない」

鈴もやはり一夏がISを使えることが気になっていたようだ。かな

り離れていたために連絡も取れないし、今日聞くしかできなかったのだ。

一夏同様にこのIS学園においてはたった二人し甲斐ない男子の内一人の飛鳥も一緒にいるが、どうやら鈴にとつてはほとんど無視の状態である。飛鳥もまた、彼女がどんな人物なのか、関係なかった。

それにしても一夏は気づいていないようであるが、箒からのさすような視線がずっと向けられている。相変わらず女の嫉妬は怖い。

「な、なあ一夏、そいつとはそんな関係なんだ??」

さすがに気になったのか箒は一夏に対して質問する。箸を咥えながら考えるようにしている一夏。対して鈴はというと、顔を真っ赤にしている。とは言え、この一夏が気の利いた発言をするとは思えないのであるが・・・。

「あいつ・・・」

「少しは空気を読むということができないのでしょうか??」

離れた席にて食事を取りながら飛鳥とセシリアの二人は一夏たちの様子を横目で見ながら、話に耳を傾けていた。最初は一夏と鈴という久しぶりに会った親友同士、楽しく話をしているのが見聞きできた。

内容もまた、お互いの突然の登場についてのことであった。そんな風にして、久しぶりの会話を楽しんでいた二人であった。飛鳥たちにもそう映っていたのだが、そこに突如として箒が割って入ってきた。

彼女としては我慢したほうなのかもしれないが、せっかくの再会に水をさすような彼女の行動に、流石の鈍感な飛鳥も溜息をつかざるを得ない。鈴の気持ちは、同じ女性として、セシリアは分かる気がした。

箒のその発言が食堂にいたクラスメイトたちや他のクラスの女子生徒たちもまた気になっている様子である。いつまでも考えている一夏に対して箒はいらいらしているのか射殺するような視線を向ける。

「べべべ、別に私たちは付き合ってる訳じゃ・・・」

と鈴は言うが・・・。

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

「・・・」

「???どうした???何睨んでるんだ??」

「な、なんでもないわよ!!」

一人で勝手に何を想像したのか顔を真っ赤にして、否定している鈴であつたが、そこに鈍感である一夏の発言に不満げな視線を向ける鈴。こんなときでもやはり一夏は一夏である。ここまで来ると一種の病気なのではないかと思える。一度薬を出してもらつたほうがいいのではないだろうか。その薬として特効薬なのは、後ろから刺されることなのかもしれないが・・・。

「幼馴染・・・??」

ファースト幼馴染である箒がその単語に露骨に反応していた。飛鳥とセシリアはその三人の所から離れたところで昼食を取っていた。

離れたところといっても数席ほどの所であり、もともと声が響く三人であるために会話も十分に聞こえる。

最初に動かしたのはセシリアのほうであった。飛鳥は突然腕を引かれてセシリアとともに席を離れた。一体どうしたのだというも、セシリアは特に詳しくは言わずに、ただ空気を読めというような視線で飛鳥を見てきた、口数少なく、せつかくの機会ですしと言っていた。

三人の話に二人は食事を続けながらも耳を傾ける。どうやら一夏が箒に対して、鈴のことを紹介しているようだ。彼女との出会いについてだった。

箒が引越してしまったのが小学校4年生のときで、彼女が引越して、転校してきたのが5年生のときだったらしい。つまり、二人は入れ違いになったらしい。そういうことを説明しているのが聞こえた。

「鈴、こっちが箒。ほら、前に話したろ?? 小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘。つまりファースト幼馴染」

「ふうん、そうなんだ」

そう言っただけのことをじろじろと見ている鈴。そんな二人の間で火花が散っていたのを見たのは錯覚ではないことは確かであろう。当然一夏は気づいていない。

「ファ、ファーストって・・・」

「なら鈴さんはセカンドってことですね・・・」

どこの新世紀だよと内心つつこんでしまう。ならゼロ幼馴染はっ

て・・・いるわけがない。飛鳥は内心幼馴染にファーストもセカンドもないのではないかと思っていると、また話が聞こえてくる。

「そういえば一夏、アンタ、クラス代表なんだって??」

「お、おう。成り行きでな。って言ってもタツグなんだけど」

「ふーん・・・」

そう呟いて残っていたスープを飲む。

「あ、あのさあ。もしよかったら、ISの操縦、見てあげてもいいけど??」

鈴は顔を赤らめながら、恥ずかしそうにして一夏にそういう。相変わらず一夏はいい人脈に恵まれているようだ。一夏も一瞬驚いた表情になったが・・・。

「そりゃ助か・・・」

助かると言おうとしたときだった。突然テーブルがものすごい音を立てて叩かれる。相したのは当然のことながら、箒である。食堂なのだから少しは静かにしろと内心思った。そして、ここから修羅場だろう一夏に対して頑張れとしか言えない。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、そう私だからな。それに、お前は二組だろ!?いくら幼馴染だからといって、敵の施しは受けるわけにはいいかん」

箒とセシリアは鈴に対してそれぞれの意見を言う。とは言っても自分たちが一夏と少しでも長く一緒にいたいという欲望丸出し名それ

なのであるが。それでも一夏に駆って欲しい、強くなつて欲しいという気持ちは感じられた。

だからと言って簡単に譲り渡す鈴ではない。

「あたしは一夏に言つてんの。関係ない人は引つ込んでよね」

「関係か?? 関係ならあるぞ。私が一夏にどうしても頼まれているのだ」

満足そうに言っている筈であるが、それは筈の勝手な思い込みであつて、そこまで頼まれているわけではない。

「後から出てきて何を図々しいことをしようというのだ??」

筈の言うことは確かにお互いの手の内を明かすということであるが、別段学校内にいれればいずればれるのである、まあ見せたくないのは一理あるが……。

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「なananだと!?? そ、それを言うなら私の方が早いぞ! ! それに、一夏は何度も家で食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

負けじと顔を真っ赤にして自身との過去を公にさらす。

「うちで食事?? それならあたしも同じよ??」

しかし、鈴はというと必死になつていった筈の言葉をさらりと回避する。悔

しそうに鈴ではなく一夏を睨んでいる筈であるが、その怒りの矛先は間違つて

いる。とは言え恋する乙女としては仕方のないことなのだろう。

それよりも、篤は自分以外にもそのように親しい女の子がいたとは思わなかった。とは言え一夏であるからそういう関係の子が多いのは当然だろうが……。

「い、一夏……！これはどういうことだ！？聞いてないぞ私は……！」

転校してしまったのだから当然だろう。それに、まさか鈴が転校してくると思わなかった一夏であるから、話すこともできるわけがないと彼女の発言の理不尽さを感じていた。

「説明も何も……、鈴は幼馴染で、よく鈴の実家の中華料理屋にいった関係だ」

そう一夏が篤に対して説明する。一夏の幼馴染だという発言に鈴はふてくされたような表情になり、対する彼女はほっとした表情である。

「な、何だ。店なのか」

「なあ、鈴。親父さん、元気にしてるか??まあ、あの人だったら、まず病氣と無縁だよな」

「あ……、うん。元気だと、思うよ」

一夏が鈴の家族のことを質問すると、先ほどまであれだけ明るかった鈴の顔に影がさす。どうやら家族の間で何かがあったようである。飛鳥は彼女については一夏のセカンド幼馴染であることしか知らず、後は中国の代表候補生であることだけだ。新学期が始まって、時間が相手から転入してくるとは、やはりなにか理由があるのだろうと思った。

とりあえず、その理由は一夏にあることは間違いないだろうと思った。

「そ、それよりもさ、今日の放課後って時間ある??」

話の話題を変えて明るくしようとしたのだろう。そここの配慮はできているようだ。鈴は駅前のファミレスに行って話をしたいと持ちかけたが、一夏曰く、そこはすでにつぶれているというらしい。なんとも悲しいことだ。

「そ、そう・・・」

鈴は自分が嘗ていたところが時間とともに変わってしまったことにやや困惑しているようだった。

「じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ??」

どうやらよほど彼女は一夏と話がしたいらしい。恋する乙女であり、長く会っていないかった相手である、当然である。すっかり話の流れが大きく逸れて

いた。あの中に割り込むのは無粋だと思ったので、セシリアともども、耳を傾けるのはやめた。一夏の周りでは相も変わらず修羅場が展開されていた。今度は鈴が言った放課後に一夏と話がしたいということだった。しかし、それに待ったをかけたのは篤であった。

「生憎だが、一夏は私とISの特訓をするのだ。だから放課後の予定はすでに埋まっている」

「あっそう。じゃあ、それが終わったら行くから。ちゃんと時間空けといてね、一夏。じゃあね」

ラーメンのつゆを全て飲み干した鈴。一夏は内心そんなに塩分をとると太るぞなどと、デリカシーのないことを思ってしまったが、口にすることはなかった。もし言っていたらおそらくそのどんぶりを叩きつけられていただろう。

そう言い残して、鈴もまた食堂を後にしていった。

「一夏、分かっているだろうが、当然特訓が優先だぞ」
「は、はい」

一夏は箸から発せられる雰囲気から、そう答えるしかできなかった。放課後が楽しみなのか、箸は笑顔であったが、一夏はかなり疲労した表情であった。

PHASE 11 龍の襲来（後書き）

ED2 ↓ REASON > 玉置成実 <

次回はかなり長くなりそうです。

ご感想、誤字脱字がありましたらよろしくお願いします。

PHASE 12 星空（前書き）

OP2 ↓IDENTITY>玉置成実<

過去最長??まだ書き終わっていないために、明日の投稿は難しいかもしれません。少し間が空くかもしれませんが、気長に待っていてもえればうれしいです。

ご感想や、誤字脱字の報告はいつでも待っています。

たくさんの閲覧やご感想。いつもどうもありがとうございます。

それでは、本編をどうぞ!!

PHASE 12 星空

その日の放課後になっていた。飛鳥は一夏、箒、セシリアとともに予め予約を入れたアリーナにて訓練をしていた。

4人ともそれぞれのISスーツに着替え、飛鳥は自身の唯一機であるMSのヴェステイジを、一夏は白式を、セシリアはブルーテイアーズとそれぞれの専用機を起動させる。

「・・・」

「どうしたんだ??」

「別に・・・、何でもないさ」

一夏が起動させ、纏う白式のそのフォルムを見ただけで再び胸の内からどす黒い何かが溢れそうになった。どう見ても似すぎているその姿。一夏は無言で自分を睨みつけるようにして見てくる飛鳥に対して、どうしたのかと尋ねてくる。聞かれた飛鳥はなんでもないと、そっけなく返す。一夏も鈍感なのか、楽天的なのか、一々そのような態度を気にするようなことはしない。

そんな様子を見ていたセシリアと箒は?を頭の上に浮かべていた。箒もアリーナを予約するついでに、自身もタッグの特訓に参加するということとで打鉄を借りる予約を入れていたようだ。そのために彼女は今黒い装甲の打鉄を起動させ、纏っている。

「それにしても・・・」

「飛鳥さんの機体ですが、また違った形になっていますね」

「以前のよりも武装が火力重視なのか・・・??」

一夏が話を切り出した。それは飛鳥の機体であるヴェステイージの背信部に装備されるバックパックが以前のものとまた違った形のものであったからだ。起動させたVPS装甲の色もまた、赤とダークグレーのツートンから、暗緑とダークグレーのツートンに変わっていた。

高出力ビームライフルやアンカー付き巨大シールドはもちろんであるが、両腰にあった折りたたみ式対艦刀やビームサーベルは排除され、その代わりにバックパックであるそれによって巨大なビーム砲、レールガン、ミサイルランチャーを装備し、完全なロングレンジようになっていた。接近を許したときのためということで、フォールディンググレイザー対装甲ナイフの他にビームジャベリンも装備されていた。

完全な後方支援型の機体へと変わっていたそれは、一夏の白式が雪片式型という唯一の近接武器であるためにタッグを組むとなれば後方から一夏を支援するのがベストだということでこのバックパックを使用していた。

箒の言うとおり、完全に火力重視であるために、他のバックパックを装備したときよりも機動性は落ちている。とは言え、それがなくともお釣りが来るだけの威力と多彩な武装があった。

「じゃあ、時間も有限だからな。始めようぜ」

そう一夏が切り出し、タッグマッチの試合の訓練を始める4人。もちろん組み合わせは出場することになった飛鳥と一夏、その相手をするのはセシリアと箒である。お互いに即席であるが、残り時間のないこの状況で仕上げていかなければいけない。

とは言え、初めてタッグを組むとなった4人。連携という言葉は皆無であった。

「うわあああああ！！何でこっちにミサイルが飛んで来るんだよ！！」

「何やってんだよ、一夏！！ハイパーセンサーがあるんだから後ろも見えるだろ！！」

「攻撃をかわしながら、そんなことができるか！！」

セシリアのブルーティアーズから射出された四基のビットから放たれるレーザー攻撃を動き回り、回避する一夏。全てを回避しきることなど不可能であるため、数発装甲を貫き、シールドエネルギーを失う。

その後ろから援護としてミサイルを放った飛鳥であるが、そのミサイルの進行ルート上に突如として現れた一夏に命中し、一夏に大ダメージが襲う。

「覚悟！！」

「こんのお！！」

打鉄に装備された近接ブレードを振り下ろしてくる筈。掛け声もあるために、すぐに反応する一夏が雪片でそれに対応する。鏝迫り合いになり、お互いの表情に更に真剣味が表れる。

お互いに剣道をやっていたために、その実力がISに反映される。しかし、徐々にであるがISの性能差で一夏が押し始める。

「おりゃあ！！」

「く！！」

力任せに雪片を振り抜いた一夏。振り切られた簞はその勢いのまま一旦後ろへと後退する。視線を外したその瞬間。突然警戒を知らせるアラートがなる。はっとして上を向くとそこには更に上空へと上がっていた飛鳥・・・ヴェステイージが両腰と肩からビーム砲とレールガンを構えていた。

「いつけえええ!!」

「な!？」

全砲門が一斉掃射される。赤と黄色の軌跡が黒い装甲の打鉄を纏う簞に突き刺さる。一気にシールドエネルギーを削られる。

「簞さん、前に出すぎですわ。それでは援護のしようがありませんわよ」

「う、うるさい」

こちらもちちらで連携の取り様がない状態が起きていた。一夏と剣を交えることができることのうれしさに突っ走っていた簞。突然向こうは付け焼刃の連携で大幅に簞のシールドエネルギーを奪っていった。それに対して冷静であれば考えないことであるが、二対一などと卑怯だと考えてしまった。

セシリアがしきりに叫んでいるが、再び刀剣を握り締めた簞がスラスターを噴かし、一夏へと飛び込んでいく。雪片を構えていた一夏であるが、突然スラスターを切ったように、下へと落ちていく。

「何をしているんだ、一夏!!」

「これでいいんだよ」

「なに??」

疑問を表すすぐさの後、すぐさま一夏がいたその後ろにいつの間にか現れていた飛鳥がその両手でビームジャベリンを構えていた。

「こんのおおお!!」

「な!？」

振り上げられたビームジャベリンを渾身の力で振り下ろし、箒に向かって攻撃を放つ。とっさに刀剣を滑り込ませ、受け止めようとしたが、ヴェステイジのパワーに押され、下に叩きつけられる。

「が!？」

地面に叩きつけられ、体に激しい激痛が走る。いくらISに守られているからといって、全てを受け止めきれるほど、完璧ではない。叩きつけられたことで絶対防御が発動し、箒の打鉄のシールドエネルギーが完全にゼロとなった。

「情けない・・・」

思わず唇をかみ締める。箒の瞳が向く方向には今も三人の操縦者たちが戦っている。それなのに自分はこうして無様に地面に這いつくばっている。確かに生身で戦えば一夏にはまだ勝てるだろうし、セシリアにも、彼女がどんな訓練を受けているか分からないが、勝つ自信は持っている。軍学校を卒業している飛鳥に対しては到底敵わないだろうが、それでもISに乗ればこうも違うのかと・・・。

「私は一夏の・・・」

傍にいられないのだろうか……。そうふと思ってしまった。ズキ

りと胸が痛む。これは恋する乙女だからこそ、好きな人の傍にいられない、自分に入る資格がないのではないかと思うそれが胸に突き刺さり、ズキズキと痛みが走る。

それに一夏にとってはセカンド幼馴染である鳳鈴音という少女が転校してきた。箒にとっては更に恋敵が増えるということで戦々恐々としていた。朴念仁である一夏であるために、早々こりりというとは思えないが、そのせいで自分の思いもなかなか伝わらないと思うと、やりきれない。

更にその鈴もまた、セシリア同様に国から支給されている専用機を持つ国家代表候補生である。つまり、彼女には国家を代表するほどの実力があるということだ。

思わず顔をしかめる。そう言う自分はどうか。高々ISを生み出した稀代の天災、篠ノ之東の妹だからということ、このIS学園に入れられた。もちろん自分にもISの操縦に対するランクがあったとはいえセシリアや鈴といった代表候補生のAには遠く及ばないCであつた。

力がほしい……。力さえあれば一夏と一緒に、その傍にいられるのではないか。そう思いながら、空にいる一夏に向かって動くはずのない腕を伸ばすのであつた……。

「く、このままじゃ……」

飛鳥と一夏は連携してあと一人……。セシリアを倒さんと戦闘を繰り広げていた。ブルーティアーズの特徴とも入れるビットが所狭しと動き回り一夏の死角からレーザーを豪雨のように放ってくる。

「一夏！ちゃんと避ける」

「避けるって簡単に言うなよな！！」

飛鳥が周りにまわりついてくるビットから放たれるレーザーをか
らだを捻りつつかわして、かわしきれないのは左腕のシールドで受
け止める。反撃といわんばかりに右手のライフルから放たれた緑色
の軌跡が青いビットを貫き、爆散させる。

「何でそう避けられるんだよ！！」

「お前はレーザーが撃たれてから回避行動を始めてるんだよ。それ
じゃあ、かわせるわけないだろ！！」

「え？？それって普通じゃないか??」

一夏がそう言いながら、飛鳥がセシリアに向かってライフルを放っ
たために足を止めたビットを一基を雪片で叩き切る。

肩の装甲を吹き飛ばされたセシリアであるが、その爆発の余波を使
って大きく回避行動を取る。握られたスターライトから放たれたレ
ーザーでヴェステイージを射抜こうとしたが、それを横にずれるこ
とでかわす。

ミサイルランチャーを構えると、次々と誘導付きミサイルが嵐のご
とくセシリアへと向かっていく。セシリアも負けじとミサイルとレ
ーザーで対応する。次々と打ち落とされていくミサイルが爆発し、
煙が双方の視界を奪っていく。

「く、これでは・・・」

視認は不可能。後はISのセンサーに頼るしかできない。それはお

互い。どちらの攻撃が早いのか、どちらから攻撃が来るのか、飛鳥とヴェステイージか？？それも一体どの換装を使っているのか？？一夏と白式か？？単一能力を起動させているか？？自分から仕掛けたほうがいいだろうか？？セシリアはわずかな時間で思考をめぐらせる。

「いつけええええ！！」

突如として煙を切り裂く煌めいている刀剣がセシリアの目に映った。それを見て一夏と白式であると判断する。すぐさまライフルを握っていない左手にインターセプトを出現させる。あの後何度も練習をし、候補生として二度と恥ずかしい思いをしたくないということとですぐにその手に握り締める。

「甘いですわ。そうも、ご丁寧に掛け声もしてくださるとは、ラッキーですわ」

「ええ！？」

一夏は自身の攻撃が受け止められていることに目を見開き驚く。ISの装甲に触れた瞬間にバリアを無効化する単一能力“零落白夜”であるが、実体剣と交錯することではその力は全く生かされない。多少熱を持ったビームサーベルであろうか。

鏢迫り合いの状態が続く。しかし、剣の扱いに関しては一日の長がある一夏がセシリアのことを弾き飛ばす。

「おらあああ！！」

「く！！流石に分が悪いですわ・・・って！？」

弾き飛ばされたところに突如として現れた飛鳥とヴェステイージ。

「換装・フォースシルエツト!!」

バックパックが外され地上に落ちて行くそれがすぐに粒子化する。その代わりに背信部には新たな巨大スラスターのバックパックと右手に握られたビームライフル、アンカー突きの巨大シールドが上下に分かれる。

ライフルとシールドを手放した飛鳥。背中を向けているセシリアはそれを肩越しに見ている形である。両肩の部分にある二本の突起を手に掴む。そこから桜色のビーム刃が展開され、ビームサーベルが振り下ろされる。

「きゃあああ!!」

背中のスラスターごと二本のビームサーベルで切りつけられるセシリア。一気にエネルギーを削られ、スラスターが破損したために、そのまま真っ直ぐ二地上へと落ちていく、何とか着地に成功したもの、すでに彼女には空を飛ぶ術がなかった。

「……までですわね」

そこには前後からビームサーベルと雪片を突きつける飛鳥と一夏の姿があった。どう見ても彼女には逃げ場なく、更に反撃しようにも片方が止めをさすために試合終了であった。

「終わりか??」

「この通り、わたくしにはすでに飛ぶこともできませんし、反撃しようにもどちら科から攻撃を受けてそれで終わりですわ」

「これ以上機体にダメージを与えるのはな……」

相変わらず加減のない攻撃に一夏はため息をついている。その当人である飛鳥の表情は見えない。取りあえず4人は地上にてISの機動を解除する。先に戦闘不能になっていた箒はすでに解除を終えていた。

「一応即席の連携というのはできていたと思いますわ」

それぞれが一対一で来るのではなく、二対一出確実に落とすに行く。とはいえ4人がまだ連携のれの字も練習していなかったために、箒とセシリアの連携が取れなかったものは仕方のないことなのであるが。

「別に、一対二でやらなくてもいいのではないか??」

箒がそう提案する。一対一で確実に戦力を分散させる。それも一つの手である。

「何言つてんだよ。それの方が確実だろ」

飛鳥が口を挟む形で言う。そう言われ、ややむつとした様子を見せる。箒としては、自身が稽古をつけてほしいと頼まれた形であるため、一夏との一対一の稽古をしたいという気持ちがあった。

タッグマッチになったためにそう言う気持ちは押し殺していたが、別段個々の力が強くなり、確実に一対一で相手を落とせばいいのではないかと思ったのだ。

これは彼女が今まで二対二の試合形式を取ったことがないためにそう感じているのだ。それに彼女自身の過去にもつながる……。何より大きいのは、一夏と一緒にいられる時間がほしいという気持ち

ち。まだまだ剣道に関しては昔に比べてかなり腕が落ちている、そう言うのも含めて鍛えなおさなければいけないと思っていたのだ・・。

「確かに第さんの言う作戦もありますが、それは個々の力があつてのことですわ。今回の場合いきなり連携をとれといわれても無理かもしれません、ある程度は可能になっておいたほうがいいですよ??先ほどのようにお互いの位置関係を即座に認知できるようになっていればフレンドリーファイアだけは防ぐことができますから」「そこは何とかなるだろ。こう・・・ピキーンとくるような」「お前・・・どこの。ユータイプだよ」

頭に指を当ててそのように仕草をする第に対して、呆れの視線を向けた飛鳥がつっこむ。取りあえず、先ほどの模擬戦での反省をする。

「一夏、なぜあの時こうドンと来たミサイルをクイツとした動きでスツとすばやく回避できないんだ」

「え、えつと・・・。なんだ??第との手合わせに集中していて・・・」

「な、私に集中していて・・・。／／／」

「こほん、お話がずれていますわよ??」

「わ、分かっている／／／」

セシリアに話のベクトルが修正される。自分の都合のいい言葉だけが耳に入っているようだ。

「あの時のガンという攻撃はよかった。だが、せっかくチャンスの所でこうぐつと気合の入るような掛け声はやめたほうがいい。こうズバンつと反撃を受けるかもしれないからな。そう言うときはグイ

ッと強引でもいいから回避してだな……」

「え??? ああ、クイツと???ズバン……んん??」

一夏はマンツーマンの指導でそういわれるが、良く分からないという表情で箒の言った言葉を繰り返して口にして理解しようとしている。だが、彼女の指導は擬音語が多いために聞いているこちらもどう反応していい皮からない。

「ちょっと待てよ。そんな説明で分かるわけないだろ」

飛鳥が更に説明を続けようとしていた箒に対してストップをかける。一旦間が空いたことにほっとしている一夏。せっかくの一夏と野時間を潰されたことに不機嫌そうににらんでくる箒。それを無視して言う。

「なんだと??」

「だから、そんな説明で分かるわけがないって言ってるんだよ」

まだ分からないのかといらした口調で言う飛鳥。こういうところは短気であるからすぐに突っかかるような感じになってしまう。

「何だよそのグイツとかズバンとかって……。擬音語多すぎって言うか、それじゃあ、こいつが分かるわけないだろ??」

飛鳥が一夏を一瞥しながら言う。一夏は一夏で飛鳥と箒の二人を目できよろきよろと見ている。箒は飛鳥をにらんでおり。セシリアはそれを腕組みをして見ていながら頷いている。

「まったくですわ。あの演習のときの一夏さんの動きの悪さはそう言うことでしたのね。こんな教え方を見たのは初めてですわ」

「う、うるさい。これが1番分かりやすい教え方なのだ。ほら、一夏だってちゃんと理解しているではないか。なあ、一夏」

箒は自身の教え方に対して難癖をつけてくる飛鳥とセシリアに対して怒りを露にしながら噛み付くようにしてそう言う。そうして、一夏に期待のまなざしを向け、尋ねる。

「悪い。全然分らない・・・」

一夏はそう言いながらも箒から目を逸らす。

「逸らすな!!」

そう叫ぶ箒であるが、一夏にとって、彼女から教えられたことはほとんど理解していないに等しかった。それでも動けるのは才能なのであろうか。

擬音語が多い箒の教え方は、ほとんど彼女の感覚をそのまま伝えているだけである。そのために一夏と感覚が違うやり方であるために、例えそれを理解できたとして、一夏がそのやり方に合っているのかは甚だ疑問である。

それに一夏がこのまま操縦が上達しないとなれば、一夏の将来はともかく、言葉は悪いがIS協会としては貴重なサンプルである一夏が使い物にならなくなったら困る・・・ということもある。

そう言われると一夏の胸にその事実が鋭い剣のような刃で突き刺さる。自分は世界で唯一のIS操縦者。自分がどう言おうと、結局は世界に対しての発言権はない。IS学園という大きな後ろ盾があるからそこまでひどいことをされていない一夏であるが。もし、こ

のIS学園がなかったらと考えると身震いした・・・。

「取りあえず俺とセシリアが説明するから、お前は何か思ったことを言ってくれればいい」

「それがいいですね。それでは先ほどの模擬戦での事ですけれども・・・」

そうして模擬戦を終えての反省会とそれぞれの特訓を再び開始するのであった。

その日の夜。ちょうど訓練が終わってから数時間が経っていた。暗くなりつつあったアリーナにぽつんと一箇所だけ明かりがまるでスポットライトのようにそこを照らしていた。

次々と射出されてくるターゲットに対してライフルを放ち、撃ち落としていく。緑色の軌跡が闇夜を切り裂き、突然現れたターゲットに対して、頭部のバルカンにて撃墜させていく。

しかし、闇夜を切り裂き飛んでくるのは何もライフルだけではなく、高速移動をするターゲットもであった。システムの警戒音が鳴り響く。五感をぎりぎりまで研ぎ澄ませ、飛んでくるそれらを回避し、撃墜させる。だが、反応しきれないものもあり、それが装甲に激突して、機体を激しく揺さぶる。

「このやろっ!!」

ぶつかってきたターゲットはVPS装甲のおかげで自爆したが、その分電力を消費する。爆風で後方に飛ばされながらも、体勢は万全でないままライフルを連射し、飛び込んできたターゲットを撃墜

する。

ヴェステイージが、飛鳥が暗く、明かりの僅かなアリーナを縦横無尽に飛び回る。一人だけ延長を申し出、ぎりぎりまで動いていた。闇夜に溶け込むような黒い機体装甲。しかし、そこから放たれる一発一発のライフルも、一閃一閃のビームサーベルもその闇夜を切り裂く光となっていた。

「次・・・次!!」

無限に飛び出し続けるターゲットを装甲の内で汗だくになりながらも一心不乱に、そのトリガー引き続け、剣を振り回す。まるで何かに取り付かれたように・・・。何かを恐怖するように・・・。

「次って・・・あれ??」

突然ターゲットの射出が止まった。一旦地上に戻る飛鳥。モニターの時計を見ると、すでに延長した時間を越えていたのだ。

「何だ?? いきなり止まって」

誰かが止めたのだろうか、時間を知らせるためなのか、それとも時間を守らない自分に対して説教をくらわせようとしているのかは分からないと考えながら、その人物のシルエットが浮かぶ場所へと向かう。

すでにヴェステイージの機動を解除しているために、ISスーツと似た、防護スーツ姿の飛鳥。ゆっくりと歩いていくと、そこにいたのは相変わらずクールな雰囲気醸し出している更識簪の姿であった。

「簪??何でお前がこんなところにいるんだよ」

「時間が過ぎてるから、織斑先生に言われて伝えに来たの」

なるほどと考える飛鳥。どうやら彼女のほうも整備室からたたき出された様子である。まだやり足りないという不機嫌そうな感じがした。彼女の様子からして、まだ完成までは遠いらしい。このままクラス対抗戦には出るのかと聞いてもいいのかもしれないが、彼女の機嫌をこれ以上損ねるのはまずい。だから、やめておくことにした。

「もうそんな時間だったのか・・・」

「少しは決まりを守ったほうがいい」

「それはお前もだろ??」

「・・・」

言い返しはしたが、睨み返されてしまった。完成が遠いことになりストレスがたまっているらしく、爆弾の導火線に火をつけてしまいそうだ。

「夕食、まだだったな・・・」

ちらりと隣を歩く簪を見る。何も言わず、黙って横を歩いている。小さい頃から一緒にいる彼女であるが、昔ほど明るい様子はない。やはり姉である楯無に対するコンプレックスがそうさせているのか。だからといって楯無のことも責められるわけではない。

どうすればいいのか・・・。両者の間にいる立場である飛鳥にとって、二人の仲の早期改善を望んでいる。だが、それはまだまだ難しそうである。飛鳥が何かをすればまだ少し変わるかもしれないが、

それでも不器用な彼が下手に動いた場合、事態がどこに行くか分からない。そのために傍観、見守ることしかできないでいた。

「簪、お前は??」

「まだ食べてない。私もさっき整備室から出たから」

そう言う簪はいつものように淡々と言葉を並べる。会話が続き、気まずい雰囲気が続く。

「食堂行くか??」

「うん」

コクリと首肯し、飛鳥の提案を呑んだ。ならすぐに着替えてくるから待っていてほしいと言い、すばやくシャワーと着替えを済ませ、簪と共に食堂へと向かうのだった。

食堂にはまばらに生徒たちがそれぞれ席についているのが見えた。ある人は夕食を友達と取るために、ある人は談笑をするために、デザートをつつきながら、ある人は備え付けの大型テレビでバラエティー番組を見ている。

そんな様子を一瞥してから、飛鳥と簪はそれぞれの夕食を注文し、受け取ってから空いている席へと向かった。

8時近いということで、彼らのように夕食を済ませている人のほうが多い。お互いに向き合う形になってそれぞれ注文したものを食べる。洋風のランチセットだ。

「.....」

お互いに会話もなく、まるで冷め切ってしまった熟年夫婦のような夕食になっている。ちらりちらりと簪のほうに視線を向ける飛鳥であるが、淡々と食事を口に運んでいる彼女を見て、どうしても話題が見つからない。

ISに関すること・・・、大却下、即却下である。そんなことをすれば更に彼女のプライドを、心を傷つけることになる。

近況話・・・。もともと自分から人に話しかけることが苦手なのか、なかなかそうしない彼女である。それに専用機の完成に躍起になっているのだから、ほとんど打ち解けていないのではないか・・・。そんな風に不安がよぎる。

食事もそろそろ残り少なくなってきた。ふと前を見ると、簪のほうはまだ残りが飛鳥よりあった。ゆっくりと食べているために、時間が掛かるのだろう。

するとどこからかひそひそと声が聞こえてきた。どうやら飛鳥や簪と同じ一年生なのだろう。一人二人制服を着ている生徒がおり、そこにあるリボンの色が一年生のもものだったからだ。

「ねえねえ知ってる。4組、私のクラスの代表の更識さんなんだけど、専用機ってどうなってるのかな?？」

「そつえば、代表候補生だったよね??」

離れているからといって聞こえないと思っているのだろうか。それでも良く響くためにどんなに声を潜めても聞こえてしまう。ちらりと彼女のほうを見れば、気にしないようにしているように無理をしていると感じ取れた。

「うん。だから専用機を持っけていてもおかしくないんだけど・・・」
「確か倉持技研だったよ」

「あれ??そこって確か一組の織斑くんの専用機も製造してなかった??」

「そうそう、織斑くんのほうにかかりつきりだったらしいよ」

「え??それじゃあ、更識さんの専用機って・・・??」

「まだ完成してないらしいよ??でも聞く話だと、自分で完成させるって啖呵を切って引き取ったらしいよ」

「えゝ、それって無謀じゃない??」

「だよねゝ。いくらなんでもそれはないよ。えっと、確かこの会長、確か更識さんのお姉さん??専用機を自分で完成させたって言うけど」

「代表選手だったよね。ぶっちゃけ会長と同じ事ができるわけないよ。身の程知らずってやつ??」

「会長みたいな天才に、凡人が追いつけるわけないよねゝ」

それを聴いた瞬間空気がピシリと凍りついたような感じがした。そして同時にブチっという何かが切れる音がした。

わなわなと握る拳が震える。何も知らないくせに・・・。自分たちだつてできないくせに・・・。そうやって他の人を馬鹿にするのがそんなに面白いのか。飛鳥には分らない。ただ、今理解しているのは、幼馴染が馬鹿にされ、傷つけられたということだけ。

だから、飛鳥はキレた。いたって理由はシンプルだ。幼馴染が馬鹿にされて、黙っていられるほど、飛鳥は気が長いほうではない。ガタンという大きな音を立てて飛鳥が立ち上がる。その勢いで椅子が倒れ、床と接触して大きな音を立てる。それはまるで飛鳥の怒りを表しているように甲高い音を立てた。

「いい加減にしろよ!!」
「!!!!」

突然自分たちのほうに向かってきながら怒りを露にして叫ぶ飛鳥とその声を聞いてびくつと驚く女子生徒たち。彼女たちだけでなく、その食堂にいた者たち・・・、3年生も2年生も、食堂の関係者たちも黙ってその様子を見ている。

「そんなに人のことを馬鹿にして・・・、お前らは楽しいのかよ!!」

「な、なに・・・??」

「確かこいつ・・・一組のクラス代表じゃない??」

「IS使えないのに別の機体に乗ってるっていう??」

「そのクラス代表が何か用??」

飛鳥に対して、むしろ挑発的な態度を取る彼女たち。多少とはいえ、女性く男性という考えがあるのだろう。それを盾に取っているのが分かる。

「お前たちが簪のことを馬鹿にしていたのは聞こえてるんだよ。さっさと謝れよ!!」

そういわれた彼女たちは別段気にしていない様子である。

「でも言ってることは本当のことじゃない??」

「そうそう」

「ね」

などと自分たちの主張を撤回する気はないらしい。飛鳥は元来言葉

より手が先に出る。ここまで来て我慢しているのは珍しいことであつた。拳を押さえているのは、ここで騒ぎを大きくしても、自分に對しても、何より幼馴染の簪に對しての風当たりが更にひどくなる。怒りの炎は激しく燃え滾り、彼女たちの態度が油となり、ガソリンとなつて注ぎ込まれる。それで爆発しないのは不思議なことだつた。

「それに君だつて本当だつたら、ここに居ること事態が不思議なんだからね」

「なに??」

一人の女子生徒がそう言うのに對して、顔を顰めながら尋ねる。

「だつてそうでしょ?? ISじゃないんだから、場違いにもほどがあるよ??」

「一人だけ浮いてるつて感じ??」

馬鹿にしたような彼女たちの発言を聞いて、いよいよ限界を超えようとしていた。

「なんだよ、この前の試合でISに負けないつて証明できたじゃないか」

「そんなことくらいでISに負けないつていえるの??」

「ISつて言えば白騎士事件だよ」

「!」

白騎士事件……。それは飛鳥にとっては禁忌の言葉とされているものである。しかし、そんなことを彼女たちが知るわけがない。彼女たちには何の罪はないが、飛鳥に對していつてはならない言葉であつた。

「君のそのMSって言うのであんなことできるの?? 認められたいならそれくらい・・・」

そう言いかけた女子生徒がとまったのは自分に向かって怒りを爆発させた表情の飛鳥が拳を構え突っ込んできたのを見たためであった。限界まで力の込められた拳が彼女に向かって叩き込まれようとしたときだった・・・。

「やめて!!」

「!!」

ぴたりとその拳が女子生徒の目と鼻の先で止まっていた。つうつと嫌な汗が彼女に流れる。その拳を受けていたら一体どれだけの被害が出ていただろうか。このときの飛鳥の拳で病院送りになったものたちは後を絶たない。もちろんその中には女性もいた・・・。

男性として女性を殴るのはどうかという意見もあるが、そんなこと今もその時も飛鳥には関係のないことだった。急停止した拳からゆっくりと力が抜けていく。

振り向く先に簪が立ち上がり、こちらを見ていた。これ以上黙っていられなかったのだろう。このまま殴っていたら二人にとってまずい状況になる。

「な、何すんのよ!!」

「男が女を殴るって・・・意味分かってるの!？」

後ろでワンワン何かを言っているのが聞こえる。

「うるさい!!」

「!?!」

「く……」

「な、何よ偉そうに……」

怒号と共に怒りを露にしたにらみを利かせ、後ろで何かを言うてくる女子生徒たちを黙らせる。法などに守られているからといって、何を言ってもいいわけではない。だからといって、飛鳥が何をしてもいいわけでもない。

黙って簪へと視線を向ける。俯いているためにどうしたのか分からない。だが、小刻みに体が震えているのは見て取れた。

「っ!?!」

身を翻し、その場を立ち去る。

「簪!?!」

背中を向けて食堂を立ち去ろうとする簪に向かって飛鳥はとっさに声をかける。しかし、彼女はその言葉に対して答えることも振り返ることもせず、ただ真っ直ぐ前を向き、走っていく。

「っ!?!」

そのとき身を翻す彼女の瞳から何きらりと光る雫が流れているのを見た。泣いていたのだ……。あれだけ言われて、いくらいつもクールで冷静沈着な彼女でも、堪える。

飛鳥は彼女がいたほうへと手を伸ばしたまま固まっていた。呆然と彼女が食堂から走り去るのを見ているしかできない。

「な、何も言い返せないのね。情けないわ」
「黙れよ……」

そう呟き睨みつける。食堂の中はまったくの無音であり、誰も動けない状態にあった。

「あいつのどこが情けないんだよ。あいつがどれだけ頑張っているのかも知らないで、良くそんなことが言えるな。あいつはな……、簪の奴は人一倍頑張り屋なんだよ。いつもいつも他の奴より頑張つて、そう言う奴なんだ。それをお前なんか馬鹿にされてたまるかよ……！」

そう飛鳥が叫んだ。それは隣に立つものではなく、一步後ろから彼女の顔を見ていたから言えることだった。確かに彼女は才能の面からすれば姉の楯無には遠く及ばないだろう。

だが、それに負けない彼女にも才能があった。それは飛鳥が手を伸ばしても決して届くことのないもの……。彼女と同じような感情を、むしろ彼女たちに対して持ったことがある自分だからこそ、無力さを嫌というほど突きつけられたことがあるからこそ分かる……。

そして、そんな才能の他に、彼女にはひたむきに頑張れる心があった。だから途中で投げ出さず、一人で専用機を製作し続けられる。信念がある、覚悟がある。それも尊敬できるくらい……。

だから、飛鳥にはそんな簪を馬鹿にされることはとてもじゃないが耐えられるものではない。

「これは何の騒ぎだ!!」

突然現れた織斑千冬。その後ろに一人の女子生徒がいたということから、おそらくこの状況を何とかしてもらったために彼女を呼びに行っていたのだろう。

鋭い視線で食堂を見渡し、飛鳥とその口論になっていた女子生徒たちを見て、ゆっくりと近づいてきた。

千冬を見て、おそらくこの場で尋問されるだろう。怒りが彼女が現れたことで一瞬吹き飛んだ。そして、今冷静に今までのことを思い返し、今自分がやらなければいけないことがわかる……。

間に合うのか……。いや、今ならまだ間に合う。追いかけてなにができるのか……。ならいつそのこと、見捨てればいいのか……。そんなことはない、できないではない。自分は、今それをしてしなければいけないのだから。

簪……。彼女は泣いていた。飛鳥自身が泣かせたも同然だ。アスカは見えない何かに突き動かされるままに、行かなければいけないという思いと共に走り出す。突然動いた飛鳥を見て千冬は一瞬驚いた表情になる。

「待て紅月!!この状況を引き起こしたのはお前だと聞いているぞ!!」

「だからなんです??俺だけが悪いんですか??」

横を通り過ぎたところで、千冬の手が飛鳥の肩をがっちりと掴む。それに対して立ち止まり、睨みつけるようにしてみる飛鳥。彼としては早く追いかけるべきではない。そう言う思いでいっぱいだった

ただ。だから、彼女のこの行動は彼にとっては障害の他になかった。

「離せよ。俺は行かなきゃならないんだ」

「口の利き方に気をつけるとあれだけ言っておいて、まだ直していかないようだな。それはともかく、この状況を引き起こした経緯を話してもらおうぞ」

「そんなことより、俺は行かなきゃいけないんだよ」

そう言つて掴んでいた腕を振り払つた。パシツという乾いた音が響く。普通であればそれは逆らう行為であるために注意されるだろう。千冬は別として、まさか彼女に逆らうような人物が生徒にいるとは他の女子生徒たちにとってはありえない光景であつただろう。

「待て紅月!!」

振り払つたと同時に走り出す飛鳥。慌てて叫び、止まるように言うが、飛鳥はそれを見做して食堂を飛び出していく。どこに行つたかは分かるわけがない。だが、本能の赴くままに足を動かしていた。

夜の廊下にはほとんど生徒は居らず、それぞれの部屋にいるか、他の友達の部屋に遊びに行っているか、どこかに赴いているかである。そのためにぶつからずにひたすら前を向いて走ることができた。廊下を走るなどいわれても、おそらくこのときの飛鳥には馬の耳に念仏であつただろう。

どうしてこの一步一步が重く感じるのだろうか。まるで簪がこちらに来るなどいつているような感じであつた。膝が重い、腕が上がらない。消して疲れているわけではないのに、そう言う鬱陶気であつた。

階段を数段飛ばして駆け上がっていく。上へ・・・、上へと。

ようやくついたそこには更に飛鳥の行く手を遮るようにしてある扉があった。そのノブに手をかける。開けていいのだろうか・・・。
そう言う躊躇が一瞬生まれた。

「何やってんだよ・・・。何のためにここに来たんだよ!!」

そう自らを叱咤激励するかのように叫び、その扉を・・・まるで硬く閉じられた、今の簪の心を決じ開けるようにして開いた。それは普通であれば消していいことではなく、相手を傷つけることなのかもしれない・・・。だが、この時の飛鳥にはそこまで頭が回る余裕はなかった。

びゅっという一陣の風が吹いた。それが飛鳥の寝癖頭の髪をなでる。思わず目を細めてしまう。その飛鳥の瞳に映ったのは、夜天の空に浮かぶ付きの光をスポットライトのように浴び、キラキラとまるで涙のように煌めいている星星を見上げている簪の姿であった。

「簪・・・」

そう言うのと驚いたようにこちらを向く。まさか追って来るとは思わなかったのだろう。そこまで甲斐性があるようには思われていなかったのかもしれない。むしろいつも守られていたイメージがあるから・・・。

「どうして・・・??」

不思議そうにこちらを見てくる。来てほしくなかったというような

瞳で、そこに涙を溜めている。

「どうして来たの・・・??」

「それは・・・、放っておけなかったから」

「!」

そう、いつだって理由はシンプルがいい・・・。

更識簪は食堂から飛び出していた。幼馴染の飛鳥との夕食時、心無い言葉を浴びせられ、もう心が限界であったのだ。

一方的な姉に対するコンプレックスを抱えていた簪。彼女たちが自分に対して言うてくる言葉は彼女自身も分かっていたことだ。

だが、そうだからといって更識楯無というフィルターを通して自分を見てほしくないという、彼女なりのプライドがあった。

走った・・・。ただただ走った。周りに人がいなかったからぶつかる心配はなかったのでもいいが、途中廊下で転んでしまった。

情けない・・・。

そう思いながらもゆっくりと立ち上がり、ふらふらとまた歩き出す。

どこに行くのかも分からず、ただ一人になれるところを目指していた。こんな涙でぐしゃぐしゃになった顔を、誰にも見られたくなかった。それも異性であり、幼馴染の彼には・・・。

目の前に現れた扉をゆつくりと開ける。すると一陣の風が彼女の水色の髪の毛を撫でる。フワリをかきあげられる髪。乱れないように、とつさに手で押さえる。

ゆつくりと外に出る。そこは芝生のある屋上であつた。乾いた芝生をふむ足音だけが、夜天の下の世界に響き渡る。演奏者だけの開演場……。そこには観客の姿はない。

まるで暗い会場に月光がスポットライトのように、舞台上上がっている簪のことを照らし出している。キラキラと光っている星星も、この時ばかりはまるで涙のように儚く見えた。

やっと一人になれた……。そう思つた瞬間、せき止めていた涙がダムが崩壊したようにとめどなく溢れてくる。着ていた服の袖で拭いても、止まることなく流れ出てくる。

思い出すだけで胸が張り裂けそうになる……。いつも自分が思っていることであっても、やはり人に言われるということはそれが当たり前のように思えてしまったのだ。自分が否定したいことが・、当たり前のように思えてしまつて怖かつたのだ。

『ねえねえ知ってる。4組、私のクラスの代表の更識さんなんだけど、専用機つてどうなつてゐるのかな?』

『そういえば、代表候補生だつたよね?』

『うん。だから専用機を持つていてもおかしくないんだけど……。確か倉持技研だつたよ』

『あれ??そこつて確か一組の織斑くんの専用機も製造してなかった??』

『そうそう、織斑くんのほうにかかりつきりだつたらしいよ』

『え??それじゃあ、更識さんの専用機つて……。??』

『まだ完成してないらしいよ??でも聞く話だと、自分で完成させるって啖呵を切って引き取ったらしいよ』

『え、それって無謀じゃない??』

『だよ。いくらなんでもそれはないよ。えっと、確かこの会長、確か更識さんのお姉さん??専用機を自分で完成させたって言うけど』

『代表選手だったよね。ぶっちゃけ会長と同じ事ができるわけないよ。身の程知らずってやつ??』

『会長みたいな天才に、凡人が追いつけるわけないよね』

分かっていたはずだった。そう、誰よりも姉のことを・・・、更識楯無の事を身近で見ていた簪だからこそ分かっていたこと。彼女と自分には大きすぎるほどの才能という名の溝があるということだ。どれだけ努力で埋めようと、簪が10でようやくできることを、彼女はそれを半分の5でできるようなものだ。そう、それは決して彼女の手の届かない、自分と真上から照らしてくれている、この場所に自分だけがいるということを証明してくれている月に届くことのない距離があるように・・・。

ただ自分を、更識簪を見てほしかっただけなのだ。更識楯無の妹ではなく、ただ一人の更識簪として・・・それがいつしか姉に対するそつけない態度に表れ、一人で完成させると倉持技研から引き取ってしまうという行為に走ったのだろう。

今の彼女は不安定であった、まるで微風だけでも飛んでいってしまいそうな、タンポポの綿毛のように……。そんな支えは要らない……。いつからそう思っていたのだろうか。しかし、今になって一人しか居ないこの世界がとてつもなく怖かった。自分を見てくれているのは楯無の妹だから??ならもし彼女の妹でなかったら・・・。そう思うだけで世界の色が一瞬にして失われた。そんな彼女の

後ろから突然ドアが開く音がした。

風が再び一陣吹いた。

「簪……」

その風に流されるように、簪の体の向きはその声がした方へと向く。そこには赤茶色の髪、燃えるような赤い瞳を持った少年……紅月飛鳥がいた。

「どうして……??」

誰も来るはずがない。そう思っていた彼女にとって、飛鳥の登場は衝撃以外の何物でもなかったのだ。ただ彼の燃える炎を象徴した瞳だけがこちらに向けられている。

「どうして来たの……??」

それは彼女が真っ先に思った疑問だった。彼がここに来る理由はないはずだから。疑問に染まった瞳で飛鳥のことを見つめる。大して飛鳥はというと、真っ直ぐな瞳を黙って簪に向けている。不意に彼の口が開いた。

「それは……、放っておけなかったから」

「……」

衝撃だった。一瞬何を言われたのかを理解できなかった。その衝撃で一瞬からだか雷に打たれたように痺れた感覚で動けなくなっていた。ゆっくりといわれた言葉を反芻する。

“放っておけなかったから”

それはどうして。最初に簪に思い浮かんだのは自分が楯無の・・・、姉の妹だからということだった。そんなことだったら・・・、来てほしくなかった。まるで哀れみの目で見られている気がして・・・。今の彼女にとつては、傷に塩を塗りこむようなものだから。

「あんなに言われて、泣いてたじゃないか、お前・・・」

「だから・・・何??」

「え??」

飛鳥は簪から言われた言葉に、一瞬きょとんとしてしまう。彼女が向けているのは明確な怒り、として悲しみ。

「私を慰めに来たの!?それとも笑いに!??」

「ちょ、ちよつと待てよ・・・」

「どうせ飛鳥だって・・・、あの子たちと同じように思ってたんでしょ!!私はどうせ姉さんに追いつけない!!身の程知らずの凡人だって!!」

「な、何言つてんだよ!!俺はそんなこと、思っちゃいない!!」

そう手を広げ、近づきながら言う飛鳥。そんな飛鳥が近づいたそのとき、何かが額に当たった。そこまで硬いものではなく、何か紙のようなものが布のようなものに包まれている・・・、そんな感じがあつた。

「来ないで!!」

そう悲鳴に近い声で簪が何かを取り出して飛鳥に投げつけたのだ。こちらに来るな、拒絶された感じで、飛鳥は少し胸が痛んだ。決し

て自分はそんな気持ちはなく、純粹に彼女のことが心配なだけだったのだ。

柔らかい芝生にそれがゆっくりと落ちる。芝生がその重みで少し折れる。すつと膝を折り、それを手にしてみている。最初は何か分らなかったが、雲に隠れていた月が顔を出すと、それと共に二人をスポットライトで照らしたのだ。

「これ・・・お守り」

それは彼女が日本の代表候補生になる前に飛鳥があげた必勝祈願のお守りだった。どこにでもあるようなデザインのものであるが、かなりぼろぼろになっていても持つていてくれたようだ。思わずうれしさが胸にこみ上げてきて、笑みが零れる。

「持つててくれたのか」

「・・・」

「聞きたくなきゃ聞かなくていい。でも、どうしても放っておけなかったんだ。涙・・・。お前、泣いてたから」

小さい頃から見てきた簪のことであるが、泣いた様子など、ほとんど見たことがない。いつもクールを装っている彼女。

「俺が何してやれるってわけでもない。ヴェステイージのことだつて、お前たちのおかげであそこまで戦えるようになったわけだし。知識はお前のほうがある。支えになってやるっていつても・・・、いつも支えてもらっていた奴が言う台詞じゃないよな・・・」

乾いた自嘲をもらす。白騎士事件の後、葬儀など、あらゆることを一手に引き受けてくれたのが更識家と布仏家であった。何も縁の

ないただの一般家庭のために、そんな大きな家柄のものたちが手を施してくれたのだ。

その当時、心身ともにぼろぼろであつた彼がお礼を言えたかという、できなかった。ただただ喪失感と向けるものがない、ただ体の中に積もり積もる怒りだけがあつただけであつた。

「でも・・・、それでも!!」

必死に語りかけてくれる飛鳥。簪も無視を決め込んでいたが、いつの間にか耳を傾けていた。

「お前が泣く顔を見られたくないんだつたら・・・。俺が隠してやる。それくらいしか・・・、できないけど」

「え・・・」

「知ってるんだ・・・。お前、泣いてないっていう印象があるけど。本当は隠れて泣いてるんだろ?? 小さい頃から、変わってない」

「知ってたの??」

簪がまさかというように目で飛鳥を見る。たまたまそれを見てしまい。それ以降、簪の姿が見えなくなつたとき、探してその度に泣いている姿を見ていたなんて、言えるはずが無い。

「あ、ああ・・・」

そう言う飛鳥。そうと呟く簪。誰にも見せたことが無い涙。しかし、本当の彼女を見ていてくれた人もいたのだ。もちろん飛鳥だけではない。姉の楯無だつて、使用人の虚も本音もだ。ちゃんと更識簪という存在を見ていてくれたことに、うれしさが溢れる。それと同時に、先ほどの女子生徒たちから言われた言葉で傷ついた心から

溢れ出すものが、涙となる。

「あ、いや・・・、何で・・・」

またダムが崩壊したかのように、溢れる涙が止まらない。ほつとしたのがきつかけなのか、先ほどよりも多くの涙が溢れてくる。見られたくない。涙でぐしゃぐしゃになった顔など、人に・・・、それも異性に見られていいものではない。

「ああ、もう!」

「え?」

突然のことに、何がなんだか分からない簪。突然自分よりも大きな体に包まれたということだけが分かった。軍事学校で鍛えられたのか、昔の頼りない胸板とは違って硬く、そして暖かった。耳を当てるとときどきしているのが鼓動を通して伝わってくる。自分が今飛鳥の胸にいることを知り驚くと共に、何故か安心感が感じられた。

「これで誰もお前の泣いているところ・・・、見えないだろ?」

「え、うん・・・」

「周りには誰もいない。下にも聞こえはしない・・・、だから」

今くらい泣けばいい。そう言うもややとしたものは、涙と一緒に吐き出してしまえば、少しはすっきりするのではないか。簪はそう言われ顔を飛鳥の胸にうずめて泣いた。まるで幼子のように、脇目も振らず大声で泣いた。こんなに泣いたのはいつ以来だろうか。

幼い頃、一度だけこんな風に誰かに抱きしめられて、その誰かの胸に顔をうずめて泣いたのを霞がかった記憶であるが思い出した。あ

の時は一体誰だったのだろうか……。ぼんやりと赤茶色の髪の毛だけが見えた……。

PHASE 12 星空（後書き）

ED2 ↓ REASON > 玉置成実 <

長い・・・長かった・・・。

これで一つはフラグ的なものが建てられたかな・・・???

これは一つのきっかけ。恋愛を書くのは難しい・・・。

ご感想や誤字脱字があればよろしくお願いします。

PHASE 13 クラス代表戦開始！！（前書き）

OP2 ↓IDENTITY>玉置成実<

また、長くなりました。明日も投稿できるかわかりません。申し訳ありませんが一日おきか、やや間を空けることになるかもしれません。

それでも待つてもらえればうれしいです。

ご感想お待ちしております。

PS 主人公が相変わらず辛い境遇にありますが、必ず彼にはいいことがあります。ありますので、そこは耐えてください！！

PHASE 13 クラス代表戦開始!!

昨日のことは、お互いに秘密にしようということになった。流石に根掘り葉掘り質問されてはお互いに困る。そう言う関係であればまだいいが、そうではない今は流石に避けなければいけない。少し残念そうな表情をしていた簪であるが、飛鳥はそれに気づかない。

クラス対抗戦が近いということで、トーナメント表が張り出されるということだった。生徒玄関前の掲示板に張られており、そこにはたくさん生徒たちが集まっていた。やはりトーナメントに二人の男が出場するという事で、かなり注目度は高い。

「どいてくれ」

そう言うのと、前にいた生徒たちの顔が少し朱に染まり慌てて、道を作ってくれた。礼を言つて掲示板の前に立つ。そこにあったのはそれぞれのクラスのタッグとその対戦表であった。

「一回戦の相手は・・・3組??誰だ??」

そこには飛鳥が全く知り合いや話す機会がない組のタッグの名前があった。日本人の名前であるために、専用機持ちのものではないだろうとは思ったが、どれほどの実力かは分からない。

すると後ろから飛鳥に対して声がかかる。やや気に入らない口調であった。振り向くとそこにいたのは、昨日簪について悪く言っていた女子生徒たちであった。

また、こいつらか・・・。

彼女たちのほうも、飛鳥がそこにいるとは思わなかったらしい。彼女たちの視線は掲示板に張られている対戦表から飛鳥へと移る。

「あなたのせいで昨日は散々だったわ」

「そうよ、おかげで私たちだけが織斑先生に怒られたんだから」

「なんだよ。最初に喧嘩をふっかけてきたのはお前たちだろ」

昨日のことを根に持っている彼女たちの言葉に、飛鳥は負けじと言いつ返す。どうやら彼女たちは嘘はつけずに、ありのままを千冬に話したらしい。彼女に嘘をつける人間はこの学園にはいないだろう。

当然のように怒られるのは彼女たちであるが、それでも飛鳥もあの場を乱した一人である。おそらく後で説教が飛ぶだろうということとは覚悟の上である。正直めんどくさいことこの上ないが・・・。

「でもラッキーね。これで憂さ晴らしさせてもらうわ」

「男同士のタッグ??まさか広告塔にでも建てられたのかしらね」

それを聞いた回りからも小さく笑い声が聞こえてくる。それを聞いて、むっとした表情になる。

「何言ってるんだよ。クラス代表決定戦で勝ったからだ。変な言いばかりをつけるなよな」

「へえ〜。でも、それに参加した人の実力が低かったんじゃないの??」

「!!!なに・・・」

そう言ってくる女子生徒。沸点の低い飛鳥にとって、人を馬鹿にするような言葉は気に入らない。その言い方から、誰と戦ったのか

は知らないらしい。見聞きもせず、自分の憶測から言っているのが許せなかった。あの時確かに代表候補生であるセシリアに勝つことはできた。

だが、あの時は明らかに彼女が本気を出すのが遅かったのが勝因の一つでもある。一度気を抜いた状態から本気を持つていくなど、彼女の年齢からして、難しい。更に、精神的な衝撃もあり、多少なりともそれを阻害した焦りがあったのだらう。

今なら正面を切って戦えるかもしれないが、あの時の實力からして、悔しいが、真正面から戦っていれば負けていたというのが現実だっただらう。そう考えると、今回は非常にラッキーだったというわけだ。

「ふざけるなよな。誰と戦ったかも知らないくせに。噂だけで話をするようなお前に負けるかよ!!」

「!!言ってくれるわね・・・」

こめかみをひくつかせている女子生徒。彼女も相当プライドが高いらしい。實力のほどは分からないが、手を抜くほど戦闘に関して馬鹿ではない飛鳥。むしろ叩きのめしてやるといった気持ちである。

「いいわ。当日は楽しみにしてるわよ。あなたとその機体が無様な姿を晒すことをね」

「ならお前も覚悟してるんだな。俺は手加減できるほど器用じゃない」

「くっ……。いいわ。行きましょう」

一緒にいた数人を引き連れてその場を去っていく。どこかの令嬢

だろう。そんな雰囲気と仕草が見て取れた。

そんな彼女たちの後姿をにらみつけるような視線で見ていた飛鳥であるが、そろそろアリーナに行こうと思い、足をその方向に向けるのであった。

飛鳥が防護スーツに着替え、アリーナへと向かっていると、向こうのほうからなにやら声が聞こえてきた。声色からして女子生徒であるのは、当然この学園に二人しか男子がいないために決定的であるが、その声でとあるワードがあったので、その会話主が限定的になった。

「はいはい、話が進まないからアンタ達とは後でね。ところで、一夏。あの件についてだけど・・・、反省した?？」

一夏という言葉であるために、おそらく先に来ていただろう3人がいるのだろう。だが一人、箒でもセシリアでもない声があった。一夏の関係上、あの転校してきた中国人であろうかと思いつつも、アリーナへと向かう。

「へ? 何が?」

「だから!! 『あたしを怒らせて申し訳なかったな』とか『仲直りしたいな』とか色々言うことがあるでしょうが!!」

「いや、そう言われてもな・・・。と言うか、鈴の方が俺のことを避けてたんじゃねえか」

その会話を聞いている限り、一夏がまた女性関係の問題に大して何かをしたらしい。相変わらず巻き込まれる体質だ。

「一夏アンタって人はねえ……。じゃあなに？？もし、女の子が放っておいてって言ったら、アンタは、はい分かりましたって素直に放っておくわけ！？」

「おう」

単純な馬鹿である。馬鹿正直なのは、時と場合によってこんなにも相手を傷つける鋭利な刃物になるだろうか。なんとも思っていないように、至極当然のように言っている一夏は気づいていないかもしれないが、それを言われた鈴の心には小さく傷がついていた。

こんなことになっていたのは転校してきた鈴が一夏に対していった言葉への返答であつた。彼女が中学生時代、中国へと戻らなければいけなくなつたとき、一夏に対して料理が……。このときは酢豚であつたが、それがうまくできるようになつたら毎日食べてくれるかということだつた。

そのとき一夏は何気無しにそれを承諾した。日本人であつたなら、それは味噌汁に変換し、遠まわしに告白していることなのであるが、生憎鈴は中国人、そのために味噌汁ではなく当時彼女の作つていた酢豚を代わりに使つたのだ。

その言葉の意味を知っていて、気づくことができればよかったのであるが、唐変朴、朴念仁、鈍感である一夏が気づくはずもなく、ただ自分のために料理を作ってくれるのかと、純粋な友達感覚で受け取っていたのだ。

ここで二人の間に認識の齟齬が発生し、IS学園で再会した二人の間でそれが明るみになつたということだつた。

「それがどうかしたか？？何かおかしいこと言つたか？？俺」

「おかしなことを言っただかどうかって・・・ああもう！！信じられない！！謝りなさいよ！！今すぐに！！誠心誠意、心を込めて！！」

自身の言っただことに何も疑問を持たない一夏。ここまでくれば恋愛という方向に対してまったく感覚というものを持っていないのではないかと疑いたくなるような発言である。

そういわれた鈴はむしろしゃしゃしているのか髪を掻き立てる。そんな彼女を見ているようやく彼女の酢豚の言葉の意味を理解したようであるセシリアは哀れんでいる視線を向け、箒はというと、一夏がそんな約束を自分の知らないところで、つい最近まで知らなかった女としていたということに対してかなり気分が悪かったが、内心では一夏が全くその言葉に意味を理解していないようであることを知りほっとしていた。

とはいえ鈴よりもアプローチをかけていることが少ない彼女に一夏が好意というものを向けているわけでもなく、はっきり言って現状は全く変化無く進んでいたのだ。

「だからなんでだよ、一体！！」

とうとう一夏のほうもいい加減にしてほしいというように言う。

鈴はそれを聞いて信じられないというような表情で見ている。彼女にとっては死活問題であるが、そんな風に言われるととてもではないが我慢できない。

ズキズキと胸が痛む。こんなに好意を向けているのに・・・。なけなしの勇気を振り絞って、言葉にしたというのに・・・。伝わらなければそれは意味はないというが、流石に一夏の言葉は彼女にとっては想定外であった。

「それにちゃんと約束覚えてただろうが!!」

詰め寄ってそう言う一夏。逆に一步下がり、たじろぐ鈴。

「あ、呆れた。まだそんな寝言言うつていうの!? アンタの言った約束の意味が違うのよ!! そう・・・、意味が!!」

乾いた声で笑いながら、首を横に弱弱しく振りながら言う鈴。その姿はあまりにかわいそうである。もう我慢できずに、出てくる言葉は告白でもなければ、その意味を問い詰める言葉でもなかった・・・。ただの罵声だ。

「アンタは本当に馬鹿ね。馬鹿よ、馬鹿!! 大馬鹿!! この朴念仁!! 唐変朴!! 鈍感!! 間抜け!! アホ!!」

「うるさい、貧乳!!」

その瞬間。鈴の中で何かがぶちきれた。もはや無意識の行動であった。起動させた彼女のIS・・・部分展開で腕だけであった。しかし、それを虚空に叩きつけるだけで巨大なクレーターを作り出していた。

流石に目の前でそれをされた一夏も筈も、セシリアも驚きを隠せなかった。それがもし自分に当たっていたらと考えると恐ろしい結末しか考えられない。

「い、一夏・・・?? あ、アンタ・・・。い、言ったわね・・・?」

怒りで震える鈴。後ろには彼女の感情を表しているかのように黒

いオーラのようなものが見え隠れしている。一夏も流石にこれはまずいことを言ってしまったと自覚したのか分からないが慌てている。

「アンタ・・・言ってはならないことを、言ったわね!!」

怒り心頭の様子が、小さく小刻みに震えている肩を見て分かる。

「い、いや。今は悪い。今は俺が悪かった。すまん」

「今の“は”!?今の“も”よ!!今回のことも含めて・・・、何時だってアンタが悪いのよ!!この、馬鹿一夏!!」

まるでミサイルでも着弾したのかというような大きなクレーターが形成され。それがまるで今の鈴の怒りの指数を表しているかのように、圧倒的な存在感を示していた。

「ちょっと手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね・・・。いいわよ、アンタの希望通りにしてあげる・・・。全力で叩きの召してあげるわ!!」

そう言っただけ鈴は踵を返してアリーナを出て行くように、走り出す。入り口近くにいた飛鳥と俯いた状態で走ってきた鈴がぶつかる。鈴は下しか見ていなかったために、飛鳥がそこにいたことに気づくのが遅れた。

「邪魔よ!!」

「な、なんだよ!!その言い草は。そっちがぶつかってきたんだろ!!」

「うっさいわね。私は今急いでるのよ!!」

そう悲鳴に近い声で言いながら再び走り出そうとしている。背中を向けた瞬間。飛鳥の手は、彼女の腕を掴んでいた。掴まれた瞬間、大きく驚いたように体が反応したのが見えた。

当然異性にいきなりつかまれたのだから当然の反応であろう。だが、それだけではない震えも見取れた。向こうから何かあったのだろうかと、いきなり走り去った鈴の叫び声が聞こえてきたのだろう、一夏たちがゆっくりとこちらに向かってくるのが見えた。

このまま彼女を放っておくわけにもいくまい。そう思った飛鳥は彼女の体を後ろから急かすように押して、廊下を進み、人気の少ないところにきていた。もちろん一夏たちには少し野暮用があるということを伝える。

それについてあまり詮索されなかったことに関しては感謝している。取りあえず涙目になって小さく震えている彼女をどうにかしなければいけないだろう相当言い合っているのが聞こえていた。

「ああ、取りあえず。あいつと何かあったのか?？」

飛鳥は一夏と彼女の関係は深くは知らない。ただ幼馴染であるということだけであり、何やら約束事をしていた。そして、それを一夏がどうしたわけか、彼女の意味合いと別の意味合いで捉えていたということだった。

あまり刺激しすぎないように尋ねる。小さくまるで猫のように唸るようにして下からにらみつけるように見上げてくる。一夏に対する怒りがまだ収まっていないことに対してなのか、いきなりこんなところに連れてきて、どう下などと聞いてくるお節介な飛鳥に対してなのか。それはどちらにせよ、前者は理不尽であり、後者は申し

訳ないというものだ。とはいえ、無視できるほど、飛鳥は女性に対する対応に長けているわけではなく、男女関係なく、ただ見過ごせないから声をかけたというものだった。

深い意味も、卑しい意味もないのだ。取りあえず、鈴の返答を待つ飛鳥。どうしようかと、連れてきたはいいが、このような経験は全くといって皆無である飛鳥にとって一つ一つの選択肢を慎重にしていかなければいけないのだ。まるでR18指定のギャルゲーみたいだと言われてもおかしくない状況なのである。取りあえず、かなり緊張している。

「何で、アンタ。こんなことするのよ・・・」

「べ、別に・・・。お前、泣いてたじゃん」

「な、何よ！！べ、別に泣いてなんか！！」

そんな目を赤くした状態で言われても困る。相当彼女にとっては重要なことだったようだ。それを覚えてもらえていなかったこと、相当ショックを受けている。まるで約束を破られ、ぐずっている幼子のようなのだ。

「あのなあ・・・」

溜息をつき、相変わらず頑固な赤茶色の寝癖頭をかき上げる。

「そんな涙目で言われても、説得力ないぜ」

「うるさいうるさいうるさい！！」

「おわ！？殴るなよ、いてえ」

飛鳥の胸に対して拳を叩きつける鈴。結構な力があるようでかなり痛い。ここでISを起動させられなかっただけラッキーなのかも

しれない。そこまでは冷静に落ち着いてきたのかもしれない。

「あいつと何かあったようだけど??大切な約束でもしてたのか?」

「そうなのよ、聞いてよね。あの馬鹿一夏ときたら、もう全く信じられない!!」

といわれても一夏で無いから良く分からないが。相当お冠であるのは見て分かった。取りあえず、引き受けてしまったこんな厄介ごとを引き起こした一夏に対して軽く呆れていた。どうしてこうも女性関係の問題が多いのだろうか、自分もそういうところがあるのを棚に上げて思っていた。

「で??一体何があったんだよ。言い争ってるくらいしか分からなかったけど」

「あ、アンタには関係のないことよ」

プイッと顔を背ける。なんとも話しづらい相手だと飛鳥は内心思っていた。もしかしたら自分とはんでもない問題に頭をつっこんでしまったのではないかと、自らの軽率な行動に対して頭を痛める。

「ああ、そうかよ。なら俺は行くぜ」

顔を背けたまま、下を寂しそうな表情で見ている彼女を見て、これ以上何を言っても、多分意味はない。そう判断して飛鳥はそう言うてその場を立ち去ろうとした。

だが、突然防護スーツの上に羽織っている服をまるで羽毛に触れるようにちょこんとつまんで引きとめている鈴がいた。恥ずかしそうに顔を赤らめ、右手で服をつまみ、左手は握り拳を作って胸のあ

たりに添えている。なけなしの勇気で行動したのだろう。

「なんだよ・・・」

飛鳥はそれを見て参ったというような表情でいる。こんな顔をされてはまるで自分がいじめているようなものである。

「俺は関係ないんだろ??悪いけど、対抗戦の練習が・・・」

「す、少しくらい・・・。話くらい聞いてくれても、いいでしょ」

「さつきは関係ないって言ったくせに」

「そ、それはそれ。これはこれよ」

なんて身勝手なんだ・・・。それが飛鳥の鳳鈴音に対してもった感想であつた。慌てたように言う鈴。少しずつであるが、話を始めた。

それは彼女が日本に来たときの話であり、一夏との出会いの話でもあつた。小学校5年生のときに両親と共に中国からやってきた。

小学校というと、やはり自分と違う何かに過敏に反応する年頃である。そして、鈴にはほかの子どもたちとは違う何かを持っていた・・・。

それは彼女が日本人ではなく中国人だということだった。まだ来たばかりであり、勉強をしたとはいえ、スラスラと流れるように日本語を話せるわけもなく、ところどころつかえたり、イントネーションがおかしかったりと、いたずら盛りの子どもたちにとっては格好の餌食だったのだろう。

「虐められていたのか」

「・・・うん」

やはり幼かった彼女にとっても、それは話すことも辛いだろう。いくらそれが出会いのきっかけになったかもしれないとはいえ、周りとは違うというレッテルを貼られた彼女は孤独だったのだろう。

異性には虐められ、同性にも助けを求めることができない。彼女はその頃小学校では、ただ一人だけの世界にいたのだ。周りは灰色に染まり、何も色がない、孤独な世界。色褪せてしまったこんな世界に一秒たりとも居たくない。

そう彼女がどう思おうが、虐めは続く。更に、いじめが続くのは当時から変わっていない強気な彼女の性格にもあった。言葉は自由でも、言い返すことはする。それが更に虐めっ子からすれば癪に触ることであるために虐めが繰り返される。

「辛かったよ・・・でも、当たり前だよね・・・、虐められるのって大抵周りとは違う何かを持っている奴ばかりだから・・・」
「!」

ヒュッと息を呑んだ。それは当時の彼女のことでありながら、今まさに飛鳥のことがそのまま当てはまるのだ。一人だけ浮いている・・・。そうあの時の女子生徒が言っていたが、自分はこの学園では大きく浮いた存在なのではないかと、今更になって思わされた・・・。

俺は浮いた存在・・・。

誰にもそうは言われてなくても、そう思われているのかもしれない。だが、飛鳥にとってはどうでもいいことだった。確かに、そう

言われるならだからなんだと言い返すだろう。

自分にとって、ここにいる理由は更に強くなることと、ISに関わって伊ること何れ現れるであろう家族の仇・・・、篠ノ之束を殺す事にあるのだから。運がよかったのか彼女の妹である篠ノ之箒の存在もある。彼女が箒に対してどういう感情を向けているのかは知らないが、何かしらの接触を図ってくるだろうということは分かっていた。そして、彼女を守るようにしていた白騎士・・・。あの時の夢が正しければ・・・、彼女と親しき者が・・・、それもまたISに関してはトップレベルな実力があるもの。例えば世界最強のIS操縦者、ブリュンヒルデと呼ばれた織斑千冬がいい例だ。

鈴の話は続く。虐められている間。それを教師に話すこともできない。もし話してしまえば更に虐めが酷くなるという恐怖があったからだ。いくら強気な彼女の性格でも、それは寂しがりやな性格の裏返し。少しでも周りに気を向けてほしいから・・・。

両親にも言えるわけがない。中華料理店を切り盛りして、いつも忙しい両親の楽しみというのは、鈴の小学校での出来事であり、鈴の笑顔であった。そんな二人に対して辛い虐めのこと話せようか・・・。

「言えないよ・・・、言えるわけがない」

「・・・」

「あんなに楽しみにしてくれている二人に・・・、悲しい顔なんてさせたくないもん」

彼女にとっては二度と戻ってこない暖かい家族との団欒。それが手が届かないもののように、写真という形で彼女の目の前に突きつけられているような気がしていた。

「でもね、虐めが始まってから一週間位してからかな・・・」

「あいつか・・・」

「うん・・・」

そのときの鈴の表情は先ほどまでの暗い表情から懐かしいような、それでこそ大切な思い出、彼女の世界にまた色が付いた瞬間を思い出すように笑顔になっていた。

それだけ大きな出来事だったのだろう。だからこそ、一夏と一緒にいた彼女にも、そんな恋心が生まれないわけがないのだ。だが、それに気づくことない本人は一体なんなのか。

『いい加減にしろよ！！虐めなんてかつこ悪いだけだ！！』

『何だよ、織斑！！休んだ、戻ってきたらいきなりそれかよ！！』

『正義の味方気取りかよ』

『虐めをするよな馬鹿よりは何倍もマシだよ！！』

『このやろっ！！前から思ってたけど、お前むかつくんだよ！！』

『やるか！？このやろっ！！』

一夏はどうやら家の事情で一週間ほど・・・つまり鈴が転校してきたときにいなかったのだ。そして、久しぶりに学校に来たら目に付いたのが彼女に対する虐めだったということだ。

別に正義の味方気取りというよりも、虐めなどが嫌いである一夏の性格上、当然の行動であった。その後、鈴を虐めていた少年たちと、担任の教師が騒ぎを聞きつけてやってくるまで取っ組み合いが続いたらしい。

「私はね、その時ただ見てるしかできなかったの・・・いきなり

現れた男の子・・・、一夏ね。私のこと知らないはずなのに、あんなにムキになっちゃって・・・。最初は意味分からなかったけど、自分のこと守ってくれたんだって思ったら・・・、ね」

「好きになってたってか??」

「ノノノな、な、何でそんなに平気に言えるのよ。まるで他人事のように!」

飛鳥としては真剣に聞いていて、そのまま思ったことをいったままであったのだが、彼女にはそれがお気に召さなかったようだ。まるで怒っている猫のようだ。

「そ、それで、また中国に戻るようになって・・・」

それでまた再会したときに答えを貰いたい。そう言う気持ちを込めて彼女は一夏に対して日本で言う味噌汁を酢豚に変換して思いを伝えたのだ。彼女の思い虚しく、それは伝わっていなかったようであるが・・・。

「でも、相変わらず変わってなかったわ。やっぱり一夏は一夏ね」

「馬鹿で、唐変朴で、空気が読めない・・・、奴??」

「流石に言い過ぎて・・・、わけじゃないのよね」

苦笑いを含めて飛鳥の言った言葉に対して否定できない鈴は小さくため息をつく。それでも表情には笑顔があった。それは変わらない一夏に対してなのか、それとも思いが伝わっていなかったことに對する自らへの哀れみなのか・・・。

それを飛鳥に知る術はなく、鈴だけが知ることである。大きくまるで猫が兵に飛び乗るかのように見事な跳躍を見せ飛鳥から離れる。そこにはもう、先ほどまでであった重苦しいオーラは完全にではない

が、なくなっていたように見える。

「一夏にも言っておいたけど。アンタもぼこぼこにしてあげる。それが今のお礼よ。代表候補生と戦えるんだから、うれしいでしょ」
「何だよ、その手荒いお礼は・・・」

そんな綺麗にビシツと言う効果音がぴったりな指差しを飛鳥に向けている鈴に対して、小さくため息を吐きながら言う。また、大きな戦いになるだろう。そんな彼女と戦う前に、あの三組のペアを潰さなければ意味がない。

「それじゃあ、せいぜい腕を磨いてるのね」
「それはこっちの台詞だ」

そう言い返して、背中を向けて去っていく鈴とは逆のアリーナへと足を進める飛鳥。すでに優しさなどという甘えを一切捨て去った戦う者の目をしていて。バサツと羽織っていたものを投げ捨て、ヴェステイージを起動させ、アリーナに舞い上がるのだった・・・。

一通りの訓練が終わり、一夏たちは揃ってアリーナを後にしていた。途中で更衣室が別々ということで別れ、待ち合わせ場所を指定しておいた。夕食を鳥に食堂に行くためでもあった。

それぞれスーツを脱ぎ、着替えをする。更衣室に設備されたシャワーを浴びる。激しい運動をした後であるために、かなり体がべたついていた。買い換えただけのシャンプーを使い髪を洗い、汗を流れ落とす。

「なあ飛鳥・・・」

「なんだよ」

突然隣のシャワーを使っている一夏が話しかけてくる。どうやら途中で飛鳥が野暮用だということで訓練に参加しなかったことについてであった。そのとき近くにりんがいたということで、二人に何かあったのではと思っただけらしい。一夏としては鈴に対して言い過ぎた所があるので、もし何か言っていたら教えてほしいということであつた。

「別に。特に何もなかったさ」

「そうなのか??」

怪訝そうにしてこちらに視線を向ける。相当後悔しているようだ。こういうところは純粹だから氣に病むものかもしれない。とはいえ無自覺に女性を引掛けるは、思ったことを口にするから色々タチが悪い。

「だからといって、流石にあればないだろ」

「だよ、な・・・」

髪を洗う手を止めてシュンとなる。そこまで落ち込むくらいなら少しは女心を勉強したほうがいいのではないか。とはいえ、そう思う飛鳥も一夏程ではないが鈍感なのであるが。

それからバスタオルでからだを拭き、着替えを済ませると、荷物をしまっているロッカーに手を伸ばす。

「ん、なんだ??」

ロッカーの扉に挟まれて一枚の紙。一体なんだというように思い

ながらそれを抜き取り、おられているそれを開く。

「・・・」

「どうした??」

ロッカーの前に立ち、動かない飛鳥を見て、すでに扉のノブに手をかけていた一夏が尋ねる。何でもないといい、少し幼児ができたということ伝え、更衣室を出てから分かれることにした。

“生徒会室へ”

その文字だけで、誰が呼んでいるということと、何か厄介なことだということだけは分かった。

「ここか・・・」

飛鳥が制服姿でやってきたのはロッカーに挟められていた紙切れに書かれていた指定場所である生徒会室であった。どこにでもあるドアであるが、何故か異質な感じがして、その中と外では別空間なのではないかと思うくらいであった。

「何で俺をこんなところに・・・」

そう呟きながらも軽くノックする。中から落ち着き払った女性の声がある楯無でも、本音でもないとなれば、本音の姉である虚であるうと思いい、扉を開け、中へと入る。

「失礼します・・・」

「よしよし、ちゃんと礼儀はわきまえてるわね」

ムスツとしたように一言言って中に入った飛鳥に対して正面の大きな机に座っていた楯無が大きく頷きながら満足そうに言う。その横に並ぶ机の上に山のような書類と共に、湯気だつお茶が見える。

「お待ちしました」

「アーちゃんだ」

中央のテーブルに座るように言われた飛鳥の手元に虚がお茶を持ってきてくれた。それを啜って、用件を聞こうと楯無の事を見る。

「で、俺をここに呼んだのは何だよ」

「そうね・・・」

そう切り出した飛鳥。とたんに真剣な表情に変わる楯無。いつも悪戯をしてくるような陽気な彼女とは思えない。そんな雰囲気が生徒会室を包み込む。それが対暗部の家系である楯無の名を継ぐ者の顔なのかもしれない。

ごくりと生唾を飲み込む。手を組んで口元を隠している彼女がゆっくりと口を開く。

「とある情報ルートからなんだけど、今度のクラス対抗戦で何か起きそうなのよ」

「はあ??? どういうことだよ」

突然襲撃まがいのことを聞かされ、理解が追いつかない飛鳥。しかし、横にいる二人の様子を見ても、それが何の冗談でもないこと

がわかる。

「どういうことだよ・・・」

「不確定だけど、何かが起きるということよ。一応私たちのほうでも手回しをするけど・・・」

「それに出場する俺に警戒しておけ・・・、ということなのか?」

「ええ。アックンがこの学園の中でも織斑くんと同じくらい異質だということもあるし、何より使っているのがISじゃない」

楯無の視線の先には、飛鳥の手首にある赤く光っているブレスレット・・・、待機状態のヴェステイージがあった。

最初は単なる宇宙服と同じようなものであったそれも、ISのデータを流用することによって完全なる兵器と化していた。それだけではまだ分かるが、まるでISのように自己進化を続けているヴェステイージ。まるで成長期だといわんばかりに急速にである。

狙われる理由として挙げられる筆頭が、男で唯一ISを起動させることができた織斑一夏。そして、飛鳥・・・というよりも飛鳥の持つMS『ヴェステイージ』であろう。

俺はついでかよ・・・。

そう内心自嘲気味に思う。MSにとって操縦者というのはあくまでそれを動かす人間である。ISと違って拒否反応無しに性別関係なく起動するために、重要なのはMS自身であり、一夏のように生身のほうではないのだ。別段、世界で有名になろうなどという考えはない・・・。

「いつどこから来るかわからないの。いくら警戒してても、それに

は限界があるのよ」

「なんだよ、いつになく弱気だな」

「おねーさんだって人間だよ?? そう言う心配はするものの」

いつも陽気な彼女からは想像もできない言葉であった。少し意外な彼女の一面を垣間見ることができた気がした。しかし、何故自分にそんなことを伝えるのだろうか。それよりだったら、気に入らないが千冬など教師たちあたりに伝えたほうがいいのではないかと思った。

とはいえそれは対暗部の家系である彼女たちからの情報でありおっぴらに明かすわけにもいかない。伝えたとしても最低限である。

「伝えた理由は簡単だよ。アツくんに釘をさしておくため」

「俺に??」

どういう意味だよというように彼女を目を細めて見る。確かに目の前で何かがあったら飛鳥は迷いなくそれに突っ込んでいくかもしれない。それを自粛するように言う楯無のその釘を指すという言葉。それはまるで……。

「俺に関わるな……、まるでそう言いたいみたいだな。あんたは」

「名前と呼んでよー。おねーさん……、寂しい」

「ふざけるなよ……」

いらいらしたように言う。そこには一抹の寂しさがあった。彼女を見ても申しわけなさそうにしている。純粹に心配だからそういつているだけなのだ。それはわかる。だが、飛鳥だって……、プライドや意地というものはある。

「そこまで重要なことを俺に言っておいて・・・、関わるなって、ふざけてるのかよ!!」

「そうでもないとアツくん、いくらでも頭つつこむもの。そうなたらフォローしきれないわ」

「くっ!!」

つつこまれた飛鳥は言い返せない。いくら訓練を受けているといつても元の人間性というものは大きく変えることはできない。元来、感情で大きく動いてしまう飛鳥。回りのものが危険で、その元凶があるというならいくらでも頭をつつこんでしまう。

そう言うことも含めて彼女は飛鳥に関わることを良しとしなかった。それは彼女にとつても飛鳥が大切な存在だから。生徒会長としては守るべき生徒として、更識楯無としては本当の弟のような存在だから・・・。

「今回の件は私たちに任せて、アツくんはそれよりも、試合のことに集中しなきゃ。簪ちゃんのことで一悶着あつたんでしょ??」

「!!」

何でそれを・・・。

思わず目を見開いて驚く。でも、彼女が生徒会長ということを考えればいくらでもこの学園内のことは知ることにはできるだろうし、簪の使用人である本音が知っていればそれを彼女に伝えることもあるかもしれない。

「でも、次の日のカンちゃんは、うれしそうな顔をしてたよ」

本音がそう言う。次の日の彼女を見ても、あまり変わった様子はな

かったように燃えたが、女しか分からない何かがあるのかもしれないと思った。気づけないのは飛鳥の鈍感なせいもあるのであるが・・。

「あまり詮索はしないわ。二人だけの大切なことだもんね」

「な、何だよそれ。別に俺は」

「分かってる分かってる。おねーさんはちゃんと分かってるから」

「し、信用できない・・」

意味ありげな笑みを浮かべる彼女に対して、一割も信用を見せていない。確かに今の飛鳥にとっての死活問題である、あのむかつく女子生徒を倒すことが先決であった。

「それじゃあ、私からの話しはおしまい。戻っていいよ」

「ハア、分かった。でも・・、やっぱり納得できない。戦いには集中する。警戒もする。だけど!!」

立ち上がったところでもう一度楯無に対して言う。我俣かもしれない。いや、これは我俣だ。

しかし、例えそうだとしてもあの頃の自分とは違う。守りたい、大切なものがある。だからそのための力も手に入れた。それがヴェステイージ。身も心も傷ついた飛鳥そのものを表していた。

それを知っているからこそ。楯無だけでなく、虚も本音もこれ以上飛鳥が傷つけば辿るだろう結末を予想できる。裏世界に生きるものだからこそ飛鳥のようなものたちを見たことも、聞かされたこともある。その多くの者たちが辿った道の厳しさと辛さ・・、その結末も。それが本当になることだけは嫌なのだ。だからこそ、あえて彼をこれから遠ざける。

「俺だって伊達に軍事学校に通っていたわけじゃ!!」

「うん、分かるよ。アツくん頑張ったもんね」

「だったら!!」

「でもね、アツくん・・・」

笑顔だった。それは力を貸してくれるということに対するお礼なのか。それはわからない。だが、その笑顔と裏腹に、彼女が言う言葉は飛鳥にとっては残酷なものだ。

「このことは一般人のアツくんには関係ないの、私たち裏に生きるものの・・・」の問題だから」

「!!」

それは明らかなる拒絶の言葉だった。自分と彼女の立場は違う。ただそれだけで、自分は何も役に立てない。今彼女たちとの間に、大きすぎる壁があることを自覚した。

守ってみせる・・・。今度こそ大切な存在を。

そう意気込んでいたはずなのに。もちろん復讐を忘れたわけではない。だが、それだけのために力を手に入れたわけではないのだ。あの時変わり果てた姿となった家族を見て。もう二度と大切なものを失いたくない。失ってたまるかと思うようになった。

いくら口でそういつても、実際にそう言う体験をしなければその重さというものを知ることはいできない。

「・・・」

ボタンという音と共に飛鳥は生徒会から外に出ていた。あの後一体自分が何を言ったのか分からない。しかし、もうこの部屋にはいることはできない。そう言う感じがした。

肩越しに扉を見ると、まるで先ほどまでそこにあった扉がひどく遠くに見える。まるで近づこうとしても、向こうから離れていくような、そんな感じがした。

「はははは・・・」

もう流れないと思っていたのに・・・。

「何だよ・・・、何なんだよ。俺が何かしたのかよ・・・」

まるで心が出血しているかのように、飛鳥の赤い瞳から溢れ出す涙。完全なる拒絶。守りたいと思っていたものから、力になりたいと思っていたものからの完全なる拒絶。

それがどれだけ衝撃的であり、絶望を与えただろうか。目を閉じ、声を漏らすまいと歯をかみ締める。いくら扉を閉めても、その隙間から溢れ出す涙が、廊下に雫として落ちていく。

「結局・・・」

何も変わっていない。あの時と何一つ、自分はいつまでも守られる側であり、彼女たちの横にも立てない・・・。力を得ても・・・、想いがあっても・・・。受け入れられなければ何の意味もない。

「ちくしょう・・・」

飛鳥は音もなくそこを立ち去る。最後に生徒会室を出る際に聞こえて来た『ごめんね』という言葉は一体何に對して言ったものなのか。もはやそれすら考えるのがどうでも良くなっていた……。

あれから数日後、とうとうクラス対抗戦の日がやってきた。今年の生徒の入りは過去最高を記録されていた。それも当然のことで、飛鳥と一夏という男二人のタッグが出場するということからだ。

今だ客寄せパンダ状態である二人、とはいえ二人にとっては関係のないことであるために、無視を決め込んでいる。

現在二人は控え室にて出番を待っていた。すでに着替えを終えているために、同じ部屋にはセシリアと箒の二人もいた。もちろん試合が開始する前になったら二人もすでに取ってある観客席のほうに戻る予定であるが。

「とりあえずやれることはやった。後はそれを出し切るだけだぞ」

「お二人は最初に比べると、見違えるほどに連携が取れるようになっていきますわ。自信を持ってください」

「ありがとうな、箒、セシリア。どこまでやれるかわからないけど、やれることはやってみるさ」

「ああ、その意気だ」

「そうですわね」

その一夏たちが話している横で、黙ってブレスレット状態のヴェステイージを見ている飛鳥。精神統一をしているようでいて、まるで何も考えたクナイというように、思考を拒否していた。

「飛鳥、お前もそう思うよな……って大丈夫か??」

「え、ああ。なんでもない」

一夏が横に座っている飛鳥の様子がいつもと違っていたのに気づき、話しかけてきた。一瞬遅れて反応した飛鳥であるが、内心の葛藤を悟られないようにと、いたって普通に返答する。

同様にそれに気づいていたのかセシリアも一夏同様に心配そうな表情で見ていた。飛鳥が一夏に言った言葉を聞いた後も何か言いたそうなそぶりを見せたがすぐにそれを引っ込める。

「一回戦の相手は三組だったな」

「っ！！」

「ああ。専用機持ちじゃないらしいけど、選ばれたってことは相当実力を持つてるんだろうな」

そんな風なことを言いながら、やってやるという意気込みと不安だという二つの相反する感情を見せている一夏。そんな最初から弱気になるな軟弱ものと叫んでいる篤。そんな二人を見て相変わらずだと少し離れて見ているセシリア。止めようとしていないのは同じ女性として篤の気持ちを分かっていたからだ。

対して飛鳥は拳を包み込んでいた掌でまるでこぶしを握りつぶさんとするほどに力を込めていた。それは他へとぶつけられない今日まで溜まっていた怒りとやりきれなさを表した行動であった。

すると突然控え室にアナウンスの声が聞こえて来た。どうやら一回戦の試合二組と四組の試合が終わったらしい。対戦表に簪の名前がなかったなので、出場していないのだろう。なら、当然勝ったのは二組だろう。

> 一組の紅月さん、織斑さんは至急ピットにお越しく下さいく

「わ、もう試合かよ」

「お、落ち着け一夏。焦っては勝てるものも勝てないぞ」

「そう言うお前が焦ってどうするんだよ箒」

アナウンスを聞いて慌てて立ち上がる。がたんという音に、近くにいた箒も驚く。やいのやいのと二人で騒いでいるが、対照的にゆっくりと立ち上がる飛鳥。そんな彼の前に立つセシリア。

「やはり、いつもと様子が違いますわよ??」

「そうかよ・・・」

「素っ気無いのはいつもどおりですけど」

「まだ何かあるのかよ」

セシリアの横を通り過ぎたところで立ち止まる。お互いに顔は見えない。やや俯き加減であるが、セシリアは言う。

「あまり無理はなさらない方がいいですわよ??今の飛鳥さんは、余裕がないように見受けられますわ」

「ああ・・・分かったよ」

「それではわたくしも観客席に戻りますわ、一夏さんもお早く。箒さんもいい加減にしてくださいませ」

「あ、おい。待てよ飛鳥」

「な、おい待て一夏。ええい、負けたら承知しないぞ」

飛鳥が控え室を出て行くのを見た一夏は慌てて追いかける。まだ言いかけたことをいえない箒は焦りながらも叫んで言う。何とか伝わったのか一夏は手を振って控え室を出て行った。

ピットに着くとそこには対抗戦であるために生徒会やら教師たち

がそこに配置されているのだ。一瞬楯無との視線があったが、睨むような視線を一瞬贈ってすぐに外す。少し寂しさもあったが、今はそれをもみ消した。

彼女も自分のような一般人とは違いやることが多いだろうからだ。黙って彼女の前を通り過ぎる。

「一組の紅月飛鳥さんと織斑一夏くんですね??」

「はい」

「対戦相手三組の綾崎さんと神崎さんはすでにアリーナ入りしています。時間ぎりぎりでしたね」

「あ、すいません」

おそらくこの時間帯の担当の先生なのだろう。ニコニコとして二人に対応している。すばやくチェックが入れられ、許可を得る。

「それでは、熱い試合、期待していますよ」

「あ、頑張ります」

そっついわれ、律儀に返す一夏。

「なあ、最初どっちが出る??」

一夏が振り向いてそっいつてくる。すでに白式の待機状態であるガントレットを身につけている。肩越しからちらりとこちらを見ている彼女を一瞥し、一夏に振り返って言う。

「最初に出るよ」

「??分かった。あ、そういえば、いつも飛鳥がピットから出てききに言う、あれ。俺もやってみようかな」

好きにしるよ。そう内心思った。一夏はすばやく白式を起動させ、カタパルトデッキに固定させる。発進の許可を示すランプが赤から青へと変わる。それを見て一夏はコールして飛び出していく。

「織斑一夏、白式。出るぜ!!」

威勢よく飛び出して行く彼の姿を見て、次は自分だと思いながらピットへと向かう。すると背中に飛鳥だけに聞こえるほどの声で何かを呟いてきた。

「頑張つてね」

「・・・」

振り返れない、振り返ればきつとあの時のことで胸に押し込めていた何かが爆発しそうだから。だから、我慢した。もう振り向けない。そう思いながら手首にあるブレスレット状態のヴェステイジを起動させる。

バックパックとしてフォースシルエットを装備している形だ。カタパルトに脚部を固定させる。真っ直ぐに倒すべき敵が待つアリーナが見える。赤いランプが数回点滅して青へと変わる。

まるでからだを絡め取る後悔と悲しみを振り切るかのように、飛鳥は叫ぶようにしてコールする。

「紅月飛鳥、ヴェステイジ。行きます!!」

アリーナを見下ろす大空は真っ青に晴れ渡っているはずなのに、飛鳥の心はひどく荒れていた・・・。

PHASE 13 クラス代表戦開始！！（後書き）

ED2 ↓ REASON > 玉置成実 <

次回予告

拒絶

それは飛鳥にとって、何よりも耐え難いことであつた

再び傷を負つた戦士が空に立つ

横に立つは白亜の騎士

そんな二人の前に立ちはだかる龍を引き連れた少女

そんな彼らの元に突如として現れる5機の謎の影

それは見慣れぬ全身装甲のISであつた

大切な者たちへと向けられた魔の手

彼らの運命は如何に

次回インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ
謎の襲撃者！！

PHASE 14

大切なものを守りきれ！！ヴェスティージ！！

PHASE 14 謎の襲撃者!! (前書き)

OP2 ↓ IDENTITY > 玉置成実 <

長い・・・、過去最長です。

ご感想や誤字脱字の報告お待ちしております。

PHASE 14 謎の襲撃者！！

アリーナの中央に向かう。そこには綾崎と神崎という令嬢とそれに付き従うものがいた。彼女たちの前には飛鳥のタッグパートナーである一夏の姿もある。すでに雪片式型を展開していることからやる気は十分だった。

「あら、遅かったわね」

「怖くて尻尾を巻いて逃げたのかと思つたよ」

「お前たち、いい加減にしろよ。言つたとおりだろ、飛鳥は来るつて」

どうやら一夏は飛鳥が来るまでであることない子と彼女たちから言われていたらしい。若干苛立っているのが見えた。彼女たちから飛鳥の表情は見えない。逆に飛鳥からは彼女たちの顔が見える。

捻り潰してやりたいと思つた。右手にマウントされていたビームライフルを構える。目の前にいる二人はそれぞれラファール・リヴアイブと打鉄というフランス産と純国産の第二世代型のISであった。

機体性能だけを見ればこちらのほうが俄然有利であった。しかし、機体性能だけでなく、その乗り手の操縦技術がともわなければ、ISというのはただの鉄屑に過ぎないのである。

>それではクラス対抗戦第二試合。一組紅月、織斑ペア対綾崎、神崎ペアの試合を開始します<

アナウンスがそう叫ぶのと同時に試合開始のブザーが高らかに鳴

らされた。その瞬間すばやくセーフティーを解除した飛鳥はビームライフルで綾崎の起動させているラファールが構えていたサブマシンガンの一丁を打ち抜き爆発させる。突然の武器破壊に驚いたのか悲鳴を上げていた。

それに思わず反応して振り向いてしまった打鉄を起動させていた神崎。それを隙ありという形で一夏が雪片を振り上げ、接近する。はっとして気づいた彼女であるが、反応が遅れた分、受け止めた刀剣同士の押し合いは一夏の圧勝だった。

大きく吹き飛ばされる彼女に向かって、中距離から正確な射撃が襲いかかる。次々と装甲をえぐられるたびに、シールドエネルギーが削られていく。このままではと焦りを覚える。

「嘗めるな!!」

両手にショットガンを構えた綾崎がまるで鬱陶しいハエを追い払わんとするようにして撃ちまくる。一夏は慌ててスラスターを噴かせてそのショットガンの嵐のルート上から離脱する。その後ろにいた飛鳥に向かって次々と銃弾が打ち込まれていく。

「数うちや当たるってか!?!そっちこそ嘗めるな!!」

その瞬間一気に怒りの沸点を超えた飛鳥の頭の奥で何か種子のようなものがはじけた。その瞬間飛鳥の瞳からハイライトが消える。先ほども異常なまでに回りの動きが手に取るようにして見える。もちろん向かってくるショットガンの銃弾もまた、到来よりも遅く感じるくらいである。

「な!?!」

乱射した綾崎が自らの銃弾が次々とヴェスティージの頭部に装備されているCIWSによって着弾する銃弾のみ打ち落とされるのを見て、驚きの声をあげる。そんな荒業を見せた飛鳥に対して観客は沸く。

それでスラスターが噴く音が聞こえなかったのか、突如として彼女の頭上に現れた一夏の構える雪片が振り下ろされる。光り輝いているビームサーベル状態であるそれは、単一能力である零落白夜が起動している状態であった。

近接武器を出す時間がないために、弾切れ寸前であった二丁のショットガンで受け止めようとする。だが、サーベルの熱でショットガンの銃身が真つ二つに切り裂かれる。

銃身を切ることにやや時間が取られたことで掠る程度に終わる。

「くっ！！掠っただけだよ」

「か、掠っただけでこんなに！？」

しかし、一夏と綾崎の反応は全くの反対のものであった。綾崎は一夏の白式のことを知らない。つまり、一撃必殺の単一能力である零落白夜を知らないのである。

だからといって、綾崎も馬鹿ではない。当然選ばれたのはそれだけ実力があるから。すぐさま一夏の雪片が危険であると察知して後退する。その代わりに打鉄・・・近接主戦のそれを起動させた神崎が飛び出してくる。

ハイパーセンサーに移った機影を見て、すぐさま一夏は体をその

方向へと向ける。雪片と刀剣がぶつかり合う。激しい火花が散る。しかし、白式の馬力のほうが上であるのがここでも出る。

「くっ！！第4世代に乗ってるからって！！」

「この！！」

馬力で勝っている白式であるが、ISの経験は神崎のほうが上回ったようだ。出力の調整で一夏のことを有利に弾き飛ばす。すぐさま体勢を立て直す一夏。そこにサブマシンガンの銃弾の嵐が飛び込んでくる。

「くそ、まずは俺ってか」

「落ちろ！！」

接近を許した一夏に振り下ろされたラファールに多彩に搭載された武装の一つである近接ブレード。鏑迫り合いになり、お互いに後退する。その間にも銃弾の嵐が一夏に向かう。

「やらせるかよ！！」

そこにわって入った飛鳥が大型シールドをかざして一夏の前に立つ。銃弾をもろともしないその強固なシールドが二人を守る。

銃弾を受けてもなお、傷すら見えない強固なシールド。苦々しくそれを見ている二人。その二人にライフルを牽制で連射し、遮断する。

「お前たちは・・・落とす！！」

「あ、ちよつと待て、飛鳥！！」

ライフルをマウントすると、勢い良くスラスターを噴かせた飛鳥

がビームサーベルを展開して飛び出していく。慌ててそれを追いかける一夏。

「な、何よ!!」

「男のくせに!!」

彼女たちにもプライドがある。それは女尊男卑という風潮が生み出したものだ。女性が男性に負けるわけがない。そう思い込むことで、彼女たちはこの劣勢の中、何とか落ち着こうとしていたのだ。

「落ちろ!!」

しかし、まるでどこまでも追ってくるかのような飛鳥の気迫が彼女たちの動きを鈍らせる。向かってくる相手に対して、防戦一方である。顔は見えないはずなのに、ものすごい怒りの瞳をこちらに向けている。そう思わざるを得なかったのだ。

「きゃあああ!!」

ビームサーベルが一本目の近接ブレードを切り裂き、そのまま綾崎のラファールの装甲をえぐる。斜めに切られたそこからISスーツが見える。

「こんな、こんなことが!!」

綾崎には信じられなかった。今まで自分の周りの男は自らを持て囃し、敬うものばかり。それがこの時代において当然だと思った。しかし、目の前の男は・・・飛鳥はどうか。そんなことは関係なく、自らに突っかかってくる。信じられなかった。

「男に女が負けるはず・・・」

「まだそんなこと言ってるのかよ!!」

青とダークグレーの機体がものすごい勢いでこちらに向かってシールドアンカーを射出する。がつちりと絡め取られ、それを遠心力で振り回される。視界がぐるぐると高速回転するために、焦る。

「な、な、何を!？」

そう焦っているのもつかの間、彼女の体に走るような衝撃と共に痛みが与えられる。まるでプレス機に放り込まれたような、体がぺちゃんこにされるような感覚であった。突然の衝撃が脳を貫通したのか、脳震盪を起こし、一瞬意識を飛ばしていた。

すぐに意識を取り戻したが、目を動かして自分が固い何かに叩きつけられたのを知る。アリーナに張り巡らされている。観客の保護を前提としたシールドバリアだった。

「がつ・・・。何なのよ・・・」

そう呟いている間にも再び、無重力感覚を味わい、放り投げられた体勢を立て直す暇もなく、高速で接近を許し、飛鳥が振るうビームサーベルが片方の脚部を切り裂き、吹き飛ばす。

「ひい!!」

足が切り飛ばされた。ISは通常操縦者の体の延長である。そのために彼女のISの脚部が吹き飛ばされたとして、体には異常はないが、それを初めてやられるものにとっては理解していても恐怖が勝る。

「ブラストシルエット!!」
「!!」

その瞬間ヴェステイジの背信部にあった巨大なスラスタバツクパック、フォースシルエットが解除され、落ちていく途中で粒子化する。そのまま体の上に現れた巨大なビーム砲、レール砲、ミサイルランチャーが見えるバツクパック、ブラストシルエットからドッキングセンサーが放たれ、装備する。

その瞬間青から暗緑に変わる機体色。それを始めてみたものたちからすれば歓声ものであった。一気に消費されていたエネルギーを回復する。重火力武装を引っさげ、再び綾崎へと襲いかかる。

恐怖の権化であるヴェステイジが迫る。更に恐怖をかき立てられる綾崎は逃げるようにしてアサルトライフルを打ちまくる。しかし、スラスターを巧みに使った回避行動に掠ることすら叶わない。

何で当たらないのかと叫んでいる綾崎であるが、握っていたライフルをビームが貫き、爆発する。もはや武装がいくらあっても勝ち目がない。そんな風に確信させられていた。

「痛い!!? 当たり前だろうな。でも、簪が受けた傷は、そんなもんじゃない!!」

肩越しから巨大なミサイルランチャーを構える。そこから無数のミサイルが追尾機能付きで綾崎のラファールへと向かっていく。

次々とミサイルが着弾していく。何度も何度も・・・。ラファールの装甲がもはや原形をとどめていないようにも見える。爆煙にまみ

れ、激しく咳き込む。そんな彼女を守るために一夏を振り切って打鉄を纏った神崎が向かってくる。性根は腐っていても、あくまで彼女を庇い立てする……。

彼女がまだ戦闘に参加していたということに対して、飛鳥は齒噛みする。一夏がここまで来て討ち取れていない。流石に経験者は違うらしい。だからといって……。

「お前もだつたな……」

その瞬間、レール砲に内備されている二本のビームジャベリンを連結させる。それを槍投げの要領で向かってきた彼女に対して投擲する。それはまるで光の矢の如し。

「は、早い！！かわしきれ……」

ハイパーセンサーでようやく視認できるほどの高速スピードで投擲されたビームジャベリンが打鉄に突き刺さる。ビーム刃が装甲をえぐり、操縦者が危険だということで、絶対防御が発動し、シールドエネルギーがゼロとなった。

機体がものすごいスパーク音を放つ。操縦者自身には絶対防御のおかげで怪我はないが、彼女にとつての恐怖はまだ終わっておらず、むしろここからであった。

しかし、神崎のISが解除されたところはアリーナの地上からかなり高度にある上空である。すでにISを纏っていない彼女がそこにいれば当然その後どうなるかは決まっている。数秒の無重力を感じていた彼女であるが、その瞬間、まるで地上から見えない無数の腕が彼女を引き摺り下ろそうとでもしているように、ものすごい速

さで落ちていく。

「い、いやぁ・・・、いやぁああぁぁ!!」

「明美!!」

綾崎が落ちていくタッグのパートナーである彼女を追いかけていく。ものすごい速さで地上との距離がなくなっていく神崎は悲鳴をあげることすらできずにもはや死を覚悟している。

しかし、ぼろぼろで、残りシールドエネルギーが少ないラファールにて、綾崎がぎりぎりですべての瞬間加速を使い彼女を救う。どうやらなかなかの実力があつたのは確からしい。

助かったことに綾崎に抱きかかえられているのを見てわっと泣き出す。その近くには同じく離れたところから瞬間加速をして向かってきていた一夏がきていた。とつさのことで瞬間加速を会得したらしい。

それが普通の訓練や模擬戦であつたならよかったのだが・・・。
突然二人の機体にアラート音がなる。ロックされたと映し出された。まさかと思い一夏は慌てて上空を見上げる。

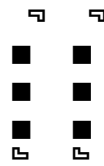
「何でだよ・・・」

無意識に雪片を握り締める手に力が入る。一夏の目に映つたのはこちらに対してためらいなく銃口を向けているヴェステイジの姿であつた。このままトリガーを引いたとなれば、すでにISを解除されている神崎に関しては死は免れない。

「お前たちが・・・、お前たちが簪を傷つけたんだ!!」

そう叫んだ瞬間、周りと共に自らの動きも緩慢に思える感覚に陥る。ゆつくりとトリガーを引こうとする。その瞬間飛鳥はまるで一瞬にして時を越えたような感じがした。

体と時間をそこに置いて、意識体だけが時を越える。そこは空の上であつた。頭上を見上げると大空が広がり、白い雲、青い海色の染まつた空が飛鳥の目に広がる。こんなに近くで見るのは初めてだつた。



飛鳥が口を動かしているわけではない。だが、確かに近くで誰かが喋っているのが聞こえたのだ。声色からして・・・、二人とも（・女性）だろうか。

そして、突然耳障りなアラート音になる。これはISなのかと驚きが隠せない。何せ飛鳥はISを一夏のように操縦することができるところではないからだ。なら何故自分がISに乗っているような視点で見ているのだろうか。

何がなんだか分からない。そんな風に混乱していた。その瞬間、飛鳥がハイパーセンサーに移ったものを見て愕然とした。それはミサイルミサイルミサイル・・・。忘れるはずがない。篠ノ之束がハッキングを行い、日本に向かってはなつた二千発以上のミサイルがこちらに向かつてきたのだ。

ここは過去・・・あの時か！！

ものすごい速さでミサイルに近づいていく白騎士の操縦者と同じ資格から見ている飛鳥はその答えに行き着いた。一体どうしてこうなったのかはどうでもいい、ここで彼女の……、白騎士の正体を暴いてみせる。そう思った。

白騎士の技量は圧倒的であった。自分の強さが霞んでしまうのではないかと思うくらいの強さであった。まるで世界最強の操縦者である織斑千冬のように……。

たった一本の刀剣だけで次々とミサイルを切り落としていく。その後ろで小さく聞こえてくる悲鳴や泣き叫ぶ声。大人も子供も、お年よりも。あの時たくさんの人がいた。

それを、こいつは……、こいつらは……！！

瞬時加速を使ったかのように、視界がめまぐるしく変化する。上に下に、右に左に、前に後ろに激しい動きを難なくこなすその飛鳥にとって敵である（……）彼女は圧倒的な強さを飛鳥に、そして世界にそれを見せ付けていたのだ。

そのとき飛鳥は全ての時間が止まったかのような感覚に襲われた。そんな彼の目に映ったのは人ごみから抜け出し、何かピンク色のものを拾い上げた少年だった。

あれは……、俺……！！

ようやく見つけた宝物を手取るようにして笑顔になった少年。だが、飛鳥はそんな小さい頃の自分を視界に入れつつ、ハイパーセンサーに映るミサイルが一発、その人々が群れをなして走っている場所に着弾したのを見た。

あれが全ての（・・・）終わり（・・・）であり、すべての始まり（・・・）だった・・・。

どうして、どうしてあれを破壊してくれなかったのだと飛鳥は叫んだ。叫んだところで彼女に聞こえるはずもなく、時間が、過去が書き換えられるはずもない。

爆発が広がっていき、まるで人がゴミのように吹き飛ばされていく。飛鳥は乾いたうめき声しか出せない。人はこんなにも簡単に死んでいくのだ。たったミサイル一発でこれだけの人が死ぬ。

ならISは・・・??

そんなミサイルすら無効化してしまう、現代兵器最強のISは一体なんなのか。篠ノ之東は一体何を目的に作り出したのか。

爆風が人々を吹き飛ばしていく。木々にぶつかり、勢いで体が切断されるもの、木に突き刺さるもの、地面に叩きつけられ絶命するもの……。幼い頃の飛鳥が吹き飛ばされ、地面をすべるようにして倒れる。擦りむいたところから痛々しい傷が見え、血が流れていた。

そして、飛鳥は確かに見た。ミサイルが着弾する前、飛鳥が戻ってくるのを待っている家族のことを。心配そうにしている母親。そんな母親に声をかけている父親。そして、自分が落としてしまった携帯を持ってきてくれる飛鳥のことを待っている朱雀。

そんな、三人に向かっていく爆発の余波。飛鳥は体を動かしたかった。だが、そのからだはなく、意識だけの存在である飛鳥は、あ

の時知らなかった光景を目の当たりにする。

「あ、あああああ！！」

余波に巻き込まれた家族が一瞬にして肉片へと変わり果てていく。あの時あった心配そうな表情も、氣遣っている表情も、笑顔も全て奪われたのだ。飛鳥はただ呆然としていた。

それと同じくして、幼い飛鳥は周りを見て呆然としているようだ。ふらふらとまるで夢遊病者のように、おぼつかない足取りで歩き始める。飛鳥が歩く道端に死体が山のように積み上げられている。

柔らかい肉が踏みつけるたびに、背中が冷えるような音を立てていく。更にはこちらに向かって助けを求めるかのようにして手を伸ばしてくるものもいた。そんな人に対して、口が動いたのみ手、おそらく誤ったのだろうと思った。すぐにそのものをまるで地面の一部かのようにして踏みつけ、歩いていく。ばたりと倒れるその人はおそらく、死んだのだろう。

その間にも、白騎士はミサイルを鬱陶しいと思うようにして刀剣で切り裂いていく。すでに飛鳥はそれには目を向けず、あの時の自分の事を見ていた。

幼い飛鳥は崩れ落ちるようにして膝をつく。そのとき締まっていた朱雀の携帯電話が滑り落ちる。それが近くに落ちていた汚れてしまったかわいらしいワンピースだったのだらう服の切れ端が引つかかった一本の腕の傍に落ちる。

ゆっくりとそれを抱き上げる。妹の温もりなのか、それともミサ

イルの熱のもののかは分からない。だが、あの時は信じられなかったのだ。たった一瞬で家族を失うだなんて、誰が想像、信じられようか……。

『■ちゃん。そろそろ、軍のほうも来るから、そっちのほうもお願いねー』

『東、これで本当にいいのか??』

『オツケー、オツケー。全ては順調だよ』

その瞬間飛鳥の胸に怒りがあふれ出した。何が順調だと。人が死ぬことも、全て想定内だったというのか。世間に知られていなければ、それでいいのかと。

向こうから戦闘機やら、更に海上にはイージス艦など、軍艦までもが現れていた。とはいえ白騎士にはそんなのはまるで赤子の手を捻るようなものであろう。動き出す前に白騎士が視線を下に向けた。

「!」

飛鳥の目に映ったのは、おそらく白騎士の操縦者が見たのと同じなのだろう。まるでこちらを射殺さんとするくらいの怒りに染まった瞳を向けているあの時の自分がいたのだから。

俺は、あの時こんな目をしていたのか……。

それは今でも変わらない、否、あのときよりもおそらく恨みなどは深まっただろう。そして、白騎士はこのときこんな高度なところから自分のことを見下していた(……)のだと知った。

そして、一瞬にして意識は現在へと戻る。トリガーを引こうとす

る。だがその瞬間飛鳥の目の前に現れたのは父、母、そして妹の朱雀であった。

「あ、あああ・・・」

まるでこちらを睨むようにして見て来る。どうしてそこにといいよりも、どうしてそんな目を向けてくるのだという困惑のほうが大きかった。そして、一瞬にして、自分がついさっき何を見たのかということから理解する。

俺は殺すのか・・・。

あの時のように・・・、まるで白騎士が自分の家族を殺したかのよう。ゆつくりと飛鳥に近づいてくる家族の姿を見て、そんな目で俺を見るなと飛鳥はたじろぐ。だが、家族の後ろにいるのは簪を傷つけた者たち。そんな彼女たちに、飛鳥は・・・。

『お兄ちゃん』

「！！！」

飛鳥の目の前に朱雀の姿がフツと現れる。その幼い手が、トリガーに手をかけているヴェステイジのそれにそつと置かれる。その瞬間、ゆつくりとトリガーから指が離れていく。一体何が起きているのかと自分の意志とは違う行動をする手に困惑を隠し切れない。

ゆつくりと遠ざかっていく朱雀。首を横に振っている。まるで撃つてはいけない。そう言っているかのように。ゆつくりと離れて行く家族の姿。まるでもう二度と会えないと、そして、その最後のお礼を言いに来たかのようにだった。そして、消えた家族がいたところから雪片を、零落白夜を起動させた状態で握りしめた一夏がこちら

に向かって瞬時加速にて突っ込んできたのだ。

「やめろおおおおお！！！」

「！！！」

一夏にはすでに飛鳥がトリガーから指を離しているのが見えていなかったのだろうか、否、彼はただ飛鳥が後ろにいた、すでに棄権している二人に対して殺そうと銃口を構えていたのに対してぶちきれていたのだ。

どうしてそんなことをするんだよ！！

一夏には分からない。飛鳥もまた同じようにして大切な存在を守りたいと思っていることを。過去に守れず、傷つけ、失ったことがあるからこそ、力を求めた。それでも、目の前で傷ついていくものがある。それも手が届くところで、そう、彼女たちによって簪が癒えぬかもしれない心の傷を負ったのだ。

「彼女たちはもう棄権してたんだぞ！！！」

「何を言ってるんだ、お前は！！！」

切りつけられた雪片をシールドで受け止める。会場では突然同士討ちが始まったことに困惑のざわめきが広がる。

「お前はあの二人を殺そうとしたのか！？何か言えよ！！！」

お互いに後退する。一夏がそう叫ぶのに対して飛鳥は何も答えられない。自分は多少痛めつけてやろうというくらいであった。だが、あの時打ち込んでいたら、明らかに一人は消し炭となり、一人は即死だろう。

「あの二人が何かしたのかよ!!」

「何かした・・・だとオオオオオ!!」

何も知らないくせに、いつも加害者側のお前がそれを言うのかと。飛鳥は一夏に言われて戸惑いを覚えていたものを完全に振り捨てた。ビーム砲とレールガンを構え、一夏に向かって放つ。

「!!!こんのおお!!」

ビーム砲に対して零落白夜を起動させ、切りつける。受け止めたところから、バリア無効化効果のためにビームが掻き消えていく。だが、実弾を殺すことはできないために、白式をレールガンが貫いていく。

打ち抜かれたところから煙が上がる。それでも一夏は戦いをやめようとしない。雪片を通常の状態へと戻す。

「お前が、お前がそれを言うのか!!」

「な、また出力が上がった!？」

再びビーム砲が放たれたため、瞬時に零落白夜を起動させる。しかし、先ほどよりも出力が大きいために、なかなか消すことができず、徐々に押される。無造作に振り切って、ビームを横なぎに切り裂く。

「何も知らないくせに、お前が!!」

すばやく換装シルエットを変更し、赤い巨大なスラスタが再び装備される。肩越しから抜き取ったビームサーベルで一夏に向かっ

て切りかかる。

「殺そうとしたとき・・・、何も思わなかったのかよ!!」

「黙れ!! あいつらは多少痛めつけるだけにするつもりだったのに!!」

「何でだよ!! そんなことのためにクラス対抗戦を・・・」

「そ、そんなことだとおおお!!」

すでに沸点を軽く超えている怒りのボルテージ。飛鳥の連閃が一夏の体を激しく揺さぶっていく。切るよりも叩き付けるといったサーベルの使い方で、雪片で受け止めるも怒りで威力が上がっている。その衝撃を全て受け止められるわけではなかった。

一夏の先ほどの怒りは戸惑いにすり変わりつつあった。目の前の飛鳥がその場のことで、多少のからかいの言葉だけでそこまでするとは一夏には思えなかった。いくら短気な飛鳥だからといって、そこは区別をつけている。なら、何故彼はそこまでして彼女たちに対して一方的な制裁にも似た行動を取ろうとしたのか。

「ぐが!？」

突然腹にもものすごい衝撃が走った。飛鳥がものすごい勢いで接近したと思ったら鍔迫り合いの状態からその勢いのまま回し蹴りを一夏に叩き込んだのだ。IS装甲に対して意図も簡単に輝を入れられるような鋼鉄の装甲を持つヴェステイジ。たった一回の蹴りだけでここまでエネルギーが削られるものなのだろうか。ISじゃないからといって心のどこかで見下していた感のある一夏であるが、そんなことはない、IS以上のものだとは危機感が勝る。

> いい加減にしないか!! <

「「!!」」

お互いの武器が鏝迫り合いになった状態でその声が聞こえるほうに向く、そこか管制室であり、担当の教師がいる。当然そこにいるのは織斑千冬。いい加減アナウンスの女子生徒が叫んでも聞こうとしない二人に対して怒鳴り声を上げていた。

> 対戦者はすでに棄権している。まさか気づいていなかったとは言わないな??<

そう言う千冬であるが、はっきり言って怒りでほとんど聞こえていなかった飛鳥はそれを知らなかった。そのためにぎりぎりの所まで、トリガーを彼女たちに向けていたのだ。

『お兄ちゃん』

あれは空耳だったのだろうか。あの家族は幻覚だったのだろうか。しかし、あの時家族が、そして朱雀がそうしてくれなかったら飛鳥は迷いなくトリガーを引いていただろう。

ゆっくりとピットへと戻る。勝利したというのに、そこには喜びなどというものが皆無であった・・・。

「「・・・」」

そこにはただならぬ雰囲気があった。突然ピットから戻ってきて一夏と少しばかり口論になったところで、ちらりと簪の姿が見えた前に飛鳥は適当に一夏をあしらい、その後を追って行った。例の件の対策に走っているのだろうか、楯無の姿はその場にはなかった。

廊下を歩いていき、人気の少ないところで、立ち止まった。一体なんだろうか。そう考える必要はないだろう。簪なら分かっているだろう。飛鳥があそこまでぶちきれていた理由を。

その理由が自身も関わっているために、こうしてここに来ていたのだ。真っ直ぐこちらを向いている彼女の目は少し睨んでいるようである。とは言え、見上げてくる形であるために、むしろ可愛いというもののなだが。

「な、何だよ。こんなところに連れてきておいて・・・」

「理由はいわなくても分かっているよね??」

「あ、ああ・・・」

すっかり怒りのボルテージが下がっているために幾分か冷静である飛鳥は苦しそうな表情をして呟く。彼女のためということであったことであるが、また傷つけるだけだったのかもしれないと思うと心が限界であった。

「どうしてあんなことをしたの??」

「お前までそう言うのか・・・??」

飛鳥はもはや精神的に限界だった。今にも足元から崩れてしまいそうだった。真紅の瞳が簪の姿を映している。

「お前まで・・・、何だよ、皆、皆」

「あ、飛鳥・・・??」

何か言おうとしていたのだが、飛鳥が突然そう言うので、簪も戸惑いを隠せない。まるでこちらが悪いみたいに見られる。別に先ほ

どの理由をもう一度聞きたい、原因は分かっているけど、どうして飛鳥がそうしたのか、その真意を聞きたかったのだ。

「お前まで俺のことを!!」

「ちよつと飛鳥!?何を言っているのかわからないよ!!」

声を荒げる飛鳥に対して、ついつい簪も叫んでしまう。最近自分も声を張り上げることが多くなったような気がする。ずっと溜め込んでできていたことも反動してのことなのだろうか。

信じられない、信じたくない、そんな葛藤が飛鳥の顔に現れていた。簪の知らないところで、飛鳥もまた人一倍傷ついていたのだ。何気ない仕草、行動、言葉。それらは時として、癒えぬ傷をつける鋭利な刃物へと変わる。

もしかしたら自分も知らないところで、知らず知らずの内に飛鳥のことを傷つけていたのかもしれないと思うと、この前のことからすると、罪悪感が彼女にのしかかる。

「お前も俺のことを……。俺はただ、あいつらが許せなかったから……」

「う、うん。それが飛鳥のさっきのことをした理由なんだよね」

「そうだよ。お前が納得しても、俺は納得できない。それにあいつら、あることないこと、いい加減なこと言ってきやがって……」

友達のこと、MSのこと、どれも飛鳥にとっては大切なものだ。それを馬鹿にされて我慢できるような性格はしていなかったのだ。

「多少痛い目にあわせる……。それだけだった」

「でも、飛鳥は最後まで銃口を逸らさなかった……」

「あれは・・・」

怒りに我を忘れて……。そんなのは言い訳にしかない。確かに自分は人を殺そうとした。この手で、あの時目の前にいる彼女を抱きしめたこの手で……。恐ろしく自分の手が血で汚れてしまっているかのように見えた。

「でも良く止まったよね。良かったって思った」

「簪・・・」

「もし、あそこでトリガーを引いていたら。多分もう、飛鳥のことを受け入れられないと思った。いくら私のためだからといって、そこまでして欲しいって私、言っていないから」

「・・・」

悲しそうな表情で言う。それを見て飛鳥は、何も言えない気持ちになる。自分がしようとしていたのは、ただの自己満足だったのだろうか。それが結局は彼女のことを傷つけることになり、そして、彼女に・・・。

怖かった。誰もが傍から離れていくことが。まるで、家族を一瞬にして奪われたとき、たった一人その世界にいるような感覚が蘇ってくるような気がしたから。あれは生き地獄……。何度死のうと思ったことが。

しかし、そうしなかったのは彼女たちがいてくれたからだ。親身になって、いつも傍にいてくれた。そんな彼女たちすらもいなくなってしまうたら・・・。

「そうだ・・・、よな。あははは、俺・・・、何やってんだろ」

飛鳥は乾いた声で笑う。

「やっぱり口だけなのか・・・な。俺って」

守りたいと思っけていても、こうして逆に悲しませたりしている。そんなことをしているから、拒絶されてしまうのかもしれない。悔しそつに、唇をかみ締める。目をつぶり、流れるものを塞き止めようとして、後から後からあふれ出してくる。

こんな情けない顔は見せられない。そんな風に背中を向ける。簷の目には、体を震わせている飛鳥の姿が見える。まるでないている幼子のように見える彼は、今にも消えてしまいそつに見えた。

まるであの時の私みたい・・・。

簷に映る飛鳥はまるで微風で求んでいつてしまつのではないかと思つくらい弱弱しく見えた。そんな彼をそのままにしておけなかつた。それはこの前のお礼であろうか。それとも・・・、別の感情があつたからだろうか・・・。

フワツという感触と共に、飛鳥は背中から抱きしめられていることに気づいた。ハツとして目を見開く、慌てて肩越しから後ろを見る。柔らかい感触が背中に押し付けられているために、後悔などが吹き飛び羞恥のほうに勝り始めていた。

慌てて離せと言うが、がっちりとホールドされているために、微動だにしない。いくら言つてもても動かないという簷を見て、何も言わなくなる。なんだかこれだけでも心が落ち着くような感じがした。

自分がここにいる。確かに存在しているのだということが分かるから。ふと飛鳥は先ほどの不思議な体験を話すことにした。時間が迫っていることから、掻い摘んでのことであるが……。

話が進むに連れて、家族が死ぬ場面が話される。飛鳥の握り締める拳に力が入る。怒りと悲しみ、嘗ての無力な自分を見せつけられたことに体が震えている。

そんな飛鳥のことを、簪はただただ抱きしめていた。今の彼には余計な言葉入らない。ただ、温もりと安心感、存在していることの証がほしいのだ。飛鳥を支えていたのは篠ノ之束、白騎士への憎しみと簪たち幼馴染たちの存在とそんな彼女たちを守りたいという想いだった。

しかし、そんな彼女たちに拒絶という形でそれを拒まれ、見つからない憎しみの相手、もはや飛鳥を支えるものが無くなっていった。このままではあのとこのようになってしまいかもしれない。

簪はそれだけが不安でしやうがなかった。あの時虚空を見つめ、微動だにしない一人の少年……それが飛鳥だった。家族の笑顔が収められた写真を見つめて、まるでそこに吸い込まれるようにしてみていたのだ。今にも死にそんな雰囲気があった。

彼女たちの言葉はまるで聞こえていないという状態だった。あれから数日して、突然事件が起きた。いつものように遊びに来ていた簪たちが家の中に入ったとき、異様な鉄の臭いが充満していたのだ。何れ楯無の名を継ぐことになっていた彼女と姉、使用人見習いであった布仏姉妹が中へと入っていく。そこには風呂場で手首を切った状態の飛鳥の姿があった。まるで瞳と同じ、その風呂場が美しいほど悲しい真紅の部屋へと変わっていたのだ。

悲鳴をあげながらもすぐさま救急車と家のものに連絡し、何とか一命を取り留めた飛鳥。目を覚ましたときに最初にこぼした言葉は・・・。

『どうして生きているんだ・・・』

誰もがその言葉に愕然とした。もう彼の目には自分たちは映っておらず。求めているのは安寧、家族の元へと向かうことだった。それは守りたいと思っていた子どもらしい正義感が、あまりにも無情にも打ち砕かれたためのものであり、目の前で殺されてしまったからでもあった。

そして、彼女たちに向けた瞳はただただ怒りと恨みのこもった真紅の瞳であった。まるで彼女たちを殺さんとしているような、そんな瞳をしていた。血が足りていないために、体が動かないが、今にも殺そうと動かないからだを動かそうとしていた。

悲しかった。そして、罪悪感というものがここまで重いものだったのかと初めて知ったのだ。

飛鳥は言った。もう守りたい存在もない。守る力もない。自分は無力だ・・・と。簪たちも守るといつていた飛鳥であるが、目の前でちつばけな力で守れるものなど、せいぜい五対不満足でも自らが生き残るというだけであった。

簪の姉、当時は楯無を名乗っていなかった頃の彼女が言う。

『だったら、アツくん。もっと強くなって、私たちを守ってよ』

睨みつける飛鳥をまっすぐ見つめていった。生きる意味がないなら与えるしかない。子どもらしい発想であるが、彼女とてどうすればいいのか分からなかったのだ。いくら今は楯無を名乗っている彼女だとしても、その当時は一人の少女だったのだから。

『■、簪、虚、本音・・・、俺』

虚ろだった、その瞳に再び炎が灯ったのが見えた。

「あの時・・・、朱雀が俺を止めてくれた」

「うん」

「そうじゃなかったら・・・、俺」

きつとトリガーを引いていた。人を・・・、あの二人を、嫌うものたちであるが、まるで自分があの中の時の白騎士のように・・・。人を殺すところだったのだ。あの時どうして家族が現れ、朱雀が止めてくれたのかは分からない。

「良かった、まだ飛鳥がここにいてくれて」

「え??」

「だって・・・」

私たちのことを守ってくれるんでしょう??

もう意味はないと思っていたあの時の約束。小さいときのことだから、もう忘れてしまっていたのではないか、自分だけの想いだと思っていた。だが、彼女は覚えていてくれた。

「簪・・・」

「飛鳥がいなくなったら、だれが私たちを守ってくれるの??」

お前にだって守る力はあるだろうと言う言葉がかかったところで、飛鳥はそれを飲み込んだ。それは未だ専用機が完成していない彼女に対しては、禁句であり、それに、その言葉を言ってしまったら、自分で自分の思いを踏みにじってしまいそうに思えたから。

もしくはもう一人のISを操縦できる織斑一夏に……。

「っ!!」

そこまで考えて、数秒前の自分がそこにいたら殺してやりたい気分になった。絶対にそれだけは嫌だ。守りたい大切な存在が他の奴に守られる。まるで用無しだと自分で決め付けているような、そんな気がした。それに、そう思った瞬間に胸が締め付けられるような感じがあつた。それはまるで、心にある宝物を無理やり奪われるような感覚……。

俺が、俺が守りたい大切な存在……。

スツと抱きしめていた簪の手を解く。先ほどはうんともすんともしなかった手であるが、どうしたわけか、簡単に外れた。後ろを振り向き、もう、迷いや悲しみに囚われた瞳はしていなかった。

「俺は、俺が……、守るから」

「うん」

「約束も守る。絶対に!!」

その言葉に対して、簪は笑顔で答えてくれた。小さい頃、一緒に遊んでいたときの笑顔だ。やっぱり彼女は笑顔が似合っている。そんな笑顔を守れるなら……。

「あ、来た来た。か〜んちゃ〜ん」

「ごめん、本音」

「うっん、大丈夫だよ」

相変わらずのほんとした本音が、こちらに歩いてきた簪にぶかぶかの袖が長いために手が出ていないが、手を振って席が空いていることをアピールしていた。本音を見つけてそこに向かう簪。

アリーナが良く見える席である。良くここが取れたなと簪は内心彼女のことを感心していた。そんな本音を横目でちらりと見たのだが、少しばかり笑顔にかげりが見えていた。その理由をすぐに悟る。

「飛鳥のこと??」

「良く分かったね」

口調はいつもどおりでも、シュンとなっているのが、半開きの眠そうな瞳が悲しそうにたれている。

彼女たちの周りにも、徐々に人入りが多くなってくる。早くも決勝ということで、他学年の生徒たちもやはり注目している。先ほどのアクシデントはあったとはいえ、目を引くものは多い。

「大丈夫だよ」

「え??」

簪が呟く言葉を聞いて、本音がきよとした顔で見る。

「飛鳥は大丈夫」

「カンちゃん、さつき会って来たの??」
「うん」

先ほどあったことを、周りに聞かれない程度の小声で伝える。とは言え、流石に抱きついたことを言うのはかなり恥ずかしかった。本音も嬉しそうな、それでいて少し悔しそうな表情でこちらを見ていた。

「そっか。アーちゃん・・・、あの約束覚えていてくれたんだね」

「うん。飛鳥は私たちがもうとくに忘れてると思ってた」

「そんなことないんだけどな」

懐かしそうにしている。辛い時であったが、飛鳥が生きていくれたことは何よりも嬉しかった。

「あ、それと・・・」

話題を変える。簪もまた、更識の一人として今回のことを聞いていた。大きく動くことはせずとも、いざとなったら裏の人間として動かなければいけないという心構えはしていた。

どうやら裏で姉の楯無が色々と動いているらしいが、表立った動きがない以上、警戒は怠れない。いざとなったら彼女たちが誘導にも参加しなければいけない。

一体何が起きるのか。裏の人間である彼女たちの警戒網に何かがつっかかる感じがしていた。

「全くあいつは何をしたいんだ!!」

「まあまあ、落ち着いてくださいませ、篠ノ之さん。確かに先ほどの飛鳥さんの行動は見過ごせませんが・・・」

簪と本音の隣が空いていたために、やってきた箒とセシリアが座った。どうやら二人が話している話題は飛鳥の先ほどの行動だ。

「先ほども一夏さんが問い詰めていましたが、もうあんな行動はしないと思いますわ」

「何故そう言いきれる。あいつはいつ何をするか・・・」

「あら、篠ノ之さんは気づきませんでしたの??」

「何をだ??」

セシリアの言う言葉には何故か自信が溢れていた。まるで飛鳥のことを信頼しているかのように。そこまで言い切れるのはどうしたのかと箒には分からなかった。

「目ですわ」

「目??目だと??それがどうしたというのだ」

何を言いたいのだと、訝しげな視線を向けている。

「目は口ほどにものを言う。確かそんな言葉がありませんの??」

「あるにはあるが、まさか、あいつの目がどうのと言うわけじゃないだろうな??」

「その通りですわ」

「な!??」

セシリアの言う言葉に、箒は信じられないという表情で驚く。放棄からして、飛鳥がまたいつあんな行動をするか。何時かの一夏に對して行ったまるで殺すような・・・。

あのときのことかまだ頭からはなれず、先ほどの試合でそれがまたよみがえっていたのだ。更に飛鳥は自分の姉、篠ノ之束のことをなにやら怨んでいるのがわかっていた。一体姉が彼に対して何をしたのか。それがMS・・・ヴェスティージと何か関係があるのだろうか。

「飛鳥さんの目が一回戦を終えてからのものとは違ってましたの」

おそらくピットから離れてから何かがあつたのだろう。そうセシリアは思っていた。ちらりと横を見れば、水色の髪をした女子生徒と同じクラスの生徒である布仏本音の姿がある。

セシリアの視線は水色の髪の少女・・・、更識簪のほうに向けられていた。彼女が飛鳥の何かを変えたのだと。そう思っていた。

アリーナを見ると、一組の飛鳥と一夏、二組の鈴ともう一人の生徒がそれぞれISとMSを起動させ、空中にいた。

「一夏・・・」

簪は決勝に来ている、自身の想い人のことを心配して思わず祈るようにして手を合わせてしまう。

相手の一人は代表候補生。いくらセシリアが候補生として特訓に付き合ってくれたとて、彼女のISであるブルーティアーズとは戦術が違う。

それに対応できるだろうか。うまく連携は取れるだろうか。いろんな不安が現われては、消えていった。

簪と本音が周囲を見渡す。周りには教師団が立ち、誘導時に使うであろうインカムと共に警戒してか、待機状態のISを所持していた。

戦闘開始のブザーが鳴る。クラス対抗戦、決勝が開始された。しかし、二人にはまた別の何かに聞こえた。そう、まるで何かを呼び寄せる笛の音色に……。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

鈴がオープンチャネルで一夏に言ってくる。だが、一夏はそんなの入らないというように言う。

ブザーが鳴り、お互いに一旦距離をとるために後退する。相手の女子生徒は鈴の専用機『甲龍^{シエンロン}』が中近接型であるために、後方支援ができるラファールを選んでいるようだ。

その両手にはアサルトライフルを構えている。対して鈴はその両手に青竜刀が握られている。

鈴と対峙する一夏は白式を起動させ、その手には姉千冬の使っていたものと同じ武器である雪片式型を握り締めている。

飛鳥は暗緑とダークグレーのツートンカラーのVPS装甲をしたブラストシルエットを装備しているヴェステージである。右手にはビームライフルを構え、いつでも撃てるように準備が完了してい

る。

「行くわよ、一夏!!」

「こつちこそ行くぞ、鈴!!」

それぞれの獲物を構えた二人が接近し、ぶつかり合う。金属音が響き渡り、火花が散る。ギリギリという罅迫り合いが続き、そんな二人の間を緑色の光の軌跡と、鉛色の流星が走る。

お互いに押し合って後退する。二人に向けられた銃口から次々とビームと銃弾の嵐が襲いかかる。

一夏に当たらないよう、飛鳥は的確に鈴に対して牽制の射撃を行う。もちろん相手の生徒も負けじと一夏に狙いを定めて、銃弾の嵐を浴びせる。鈴が来ていなかったら十分クラス代表になっていた実力者。その腕前は確かだ。

「はああ!!」

「っ!!」

二本の青竜刀を連結させた『双天牙月』そってんそうがが一夏に縦から、横から、斜めからとバトンのように振り回して、襲いかかる。変幻自在なその攻撃の前に、防戦一方の一夏はその連撃を雪片で受け止めるしかできない。その瞬間、白式から警告音になる。

「!!」

「避ける!!」

まずい!!

飛鳥が叫ぶ声が聞こえた。まずいと、そう思った一夏はとつさに鈴に向けて、雪片を盾にするようにして翳す。するとものすごい衝撃が一夏と白式を襲う。

その衝撃が来る前に甲龍の肩部アーマーがスライドして開き、中心の球体が光ったのだ。そこから放たれた見えない何かが一夏を襲ったのだ。

「甘いわよ、一夏。今はほんのジャブなんだから」

そう笑みを浮かべて言う鈴。ジャブの次に来るのは当然ストリートである。再び甲龍のスライドして開いた光る球体の部分から、見えない何かが一夏に襲い掛かった。

「があー!!」

もろに受けてしまった一夏はその勢いのままアリーナの地上に叩きつけられる。それが鈴の専用機である甲龍に搭載されている衝撃砲『龍砲』の力であった。よろよろと立ち上がる一夏に対して、次々と放たれる不可視の衝撃が逃げ回り一夏のいた地面をえぐっていく。

「あんなの喰らってたら、いくらエネルギーがあっても!!」

そう回避行動をしながら一夏は毒づく。空を見上げると。飛鳥がもう一人の女子生徒と共に戦闘を繰り広げていた。

「このおー!!」

「嘗めるなー!!」

近接ブレードを選択して振り下ろしてきた相手の攻撃を、取り出した二本のビームジャベリンで受け止める。連結したそれを鈴の双天牙月のように振り回し、刀剣をかち上げ、ラファールの装甲をビーム刃で決る。

「きゃあああ!!」

「逃がすか!!」

その攻撃を受け、慌てて交代する相手を執拗に追いかける。そこに突然アラートが鳴り響き、スラスターを使って慌てて回避する。すると目前を不可視の衝撃が通過していく。

「やらせないわよ!!」

「あいつ・・・」

一夏が地上からこちらを見ている。どうやら置き去りにした状態で、鈴がこちらに向かってきていたのだ。確かにあの時飛鳥に対しても宣戦布告をしていた。その言葉通り、攻撃してきたのだ。

「アンタはどうかしたね??」

「こいつ、嘗めるな!!」

龍砲を放ってくる鈴の攻撃を、その光タイミングを掴み回避していく。

「当たらない!? 初見で回避したことは・・・、あるってものね!!」

構えていた双天牙月を振り回してくる。それに合わせるようにして、ビームジャベリンにてそれに対抗する飛鳥。

獲物同士がぶつかり合うたびに、激しいスパークが二人の間に起きる。思わず目をつぶってしまいそうになるが、それをしたほうが負けである。どちらも気合でそれをしないでいた。

「こいつでー!」

「このお・・・」

ビーム砲とレール砲を向け、一斉掃射する。ビームは回避するが、レール砲は得物を盾にして受け止める。しかし、衝撃は殺せず、後方へと吹き飛ばされる。

「今だ!」

「よっしゃあ!」

「ええ!」

鈴の後ろには零落白夜を起動させた雪片を構えた一夏が突っ込んできていた。やれると思った一夏が雪片を振り下ろそうとした瞬間、突然後ろ向きのはずである体勢で、龍砲が放たれたのだ。

「な!」

「あれは後ろにも撃てるのかよ」

とつさの所で回避した一夏であるが、零落白夜は解除され、更に鈴は体勢を立て直すべく後退していた。追いかけようとした一夏であるが、その間に割って入る女子生徒がアサルトライフルで牽制してきた。

「よくかわすじゃない。衝撃砲『龍砲』は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

そう鈴が二人を褒めるように言う。どうやらまだ自分のほうが実量は植えてであると思っっているようだ。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、何よ……。そんなこと当たり前じゃない!!と、とにかく、格の違いってのを見せてあげるわよ!!」

お互いに雪片と双天牙月を構える。いつでも援護できるように飛鳥も全砲門が使用できることを確認する。そして、汗が雫として地面に落ちた瞬間。大きく動く。

「いつけえええ!!」

肩越しから無数のミサイルが放たれる。それが全て誘導つきで二人に向かっていく。とっさにアサルトライフルを構える生徒の前に立つ鈴は双天牙月をブーメランのようにして投擲する。それが鋭い回転を維持したまま、向かってきたミサイルを次々と落としていく。

「これくらい!!」

「掛かった!!」

「な!？」

ミサイルを全弾打ち落としたことに得意げに声をあげる鈴であるが、飛鳥はもともミサイルを当てる気はなかった。むしろ当たればラッキー……。それくらいのものであった。

双天牙月が今だ旋回しているのに対してビーム砲『ケロベロス』

を向け、掃射する。ビーム熱が実体剣を溶かし、貫く。その瞬間甲龍の近接武器である双天牙月が爆ぜたのだ。

「くっ!!」

「鈴!!」

「っ!!」

パートナーの声で、咄然として自身の武器が破壊されたのを見ていた鈴があわてて気をそちらに向ける。一夏が零落白夜を起動させた状態で突っ込んできていたのだ。

「あたしとした事が・・・」

とつさに龍砲を放つがそれをかわして一夏。多少装甲を掠めるが、まだいけるという勢いのままつつこんでくる。このままじゃやられる。そう思ったりんであるが、自分にはあれを受け止める武器がすでに手元がない。そう思っていたところに突然、投げつけられた刀剣が目に入った。

「使って!!」

「ありがとう」

アンロック
使用承諾したラファール・リヴァイブの近接ブレードが鈴の手に渡り、振り下ろされた雪片とぶつかり合う。

「味方の武器を!？」

「これも連携の一つよ、一夏!!」

「こんのおお!!」

鏑迫り合いが再び始まる。そこに割って入ろうとした女子生徒に

対して、突然現われた飛鳥が蹴りを放って後方に吹き飛ばす。その手に持ったビームジャベリンを構え、突進する。

慌てて一直線上であるためにショットガンを取り出し、打ち込んでくる。しかし、そんな実弾もA Bシールドの前には無駄であり、多少の衝撃はあっても、ヴェステイージには傷はなかった。

「はあああ!!」

したから切り上げるようにして振り上げられたビームジャベリンのビーム刃が、ショットガンの銃身もろともラファールの腕部を切り飛ばした。自らの腕が切られたかのように恐怖に染まった顔の女子生徒。飛鳥は、止めといわんばかりに振り上げたそれを切り下ろす。完全に決まった攻撃を受け、女子生徒は地面に叩きつけられる。そのときに絶対防御が発動して、シールドエネルギーがゼロとなった。

ずっとメインカメラに移る、一夏と鈴の戦闘。今しがたやられたパートナーのほうに一瞥した鈴はまずいというような表情になり、龍砲と借りた刀剣を使って一夏を翻弄していた。一夏も何とか接近できればいいのであるが、瞬時加速をしてもおそらく鈴には見切られる。

飛鳥はすぐさまシルエットを換装する。ブラストシルエットが消え、その代わりに巨大なスラスターを持ったフォースシルエットが武装される。盾が上下に分かれる。増加されたスラスターを全開にして、肩越しから掴んだ柄からビーム刃を展開し、背中を向けている鈴に向かって接近する。

「後ろから!!」

「飛鳥!!」

鈴は後ろから接近する飛鳥のことを警戒音とハイパーセンサーで確認していた。一夏も挟み撃ちをするということで、飛鳥に声をかける。飛鳥もその意図を読み取り、加速する。焦る鈴の放った龍砲は全く当たらない。落ち着いていれば当たったかもしれないが、すでに底までの冷静さは彼女にはなかった。そして振り上げられた二本の剣。そして、それらが振り下ろされようとしたときだった。

「!!」

突然アリーナの天井を突き破る熱線が三人の近くに着弾し、会場を大きく揺らした。

「な、何だ!!」

飛鳥が慌ててメインカメラを煙の出ているほうへと向ける。するとそこから突然現れた謎の機影。それも・・・、五機。

「何だよ、あれ・・・」

「全身装甲のIS??あんなの見たことないわよ!!」

鈴と一夏がなにやら叫んでいる。飛鳥はただただ突然現れたそれらに対して、驚きと怒りの視線を向けている。

「何なんだよ!!お前たちは!!」

「!?!」

一体何が起きたのか一瞬分からなかった。鈴の甲龍の武装である龍砲でさえ、これほどの威力はない。会場を覆っているシールドエネルギーと同じバリアーを突き破るほどの範囲と威力を持っているのだ。

一体何がおきているのか分からないでいる一夏に、突然鈴からプライベートチャンネルによる通信が入る。

>一夏、試合は中止よ！！アンタ達はすぐにピットに戻って！！」

その鈴の言葉をすぐに理解できなかった一夏。突然白式が危険を伝える警戒音を鳴らす。天井を突き破ったために発生した煙の中から熱源反応があることを告げていたのだ。

モニターに出ていたのは所属不明とすでに向こうからロックされているという文字であった。

ここに来て、ようやく一夏は何が起きたのかを理解した。アリーナの遮断シールドはISと同じものが使われている。だが、それすらも破られ、一夏のことをロックしているのだ。

>いいから、早く！！>

「だったら、鈴！！お前は どうするんだよ！？」

一夏は回線をつなげる方法が分からないために、オープンチャンネルにて鈴に尋ねる。鈴は一夏がオープンチャンネルで尋ねてきたために、自身もそれで答える。

「アタシが時間を稼ぐから、アンタ達はその間に逃げなさいってことよ！！！」

「はあ！？逃げるってお前……。誰が女を置いてそんなことできるか！！」

「この余に及んで馬鹿！？アタシよりアンタの方が弱いんだからしようがないじゃない！！」

鈴の言うとおり、現在の一夏の実力では、あんな危険な武器を持つている謎のISに勝てるとは到底思えなかった。それを分かっている鈴だからこそ、そう提案したのであるが。大して一夏は空気が読めないのか、それとも自らの信念に馬鹿一直線なのかどうか。それを拒否する。

「別に、アタシだって最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態なんだから、直ぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾して……」

「まずい、鈴！！」

一機のISから放たれた太い光線が先ほどまで鈴がいたところを通過して言った。それに気づいた一夏が間一髪の所で鈴を抱きかかえて回避していたのだ。

そんなISの攻撃の威力を目の当たりにした一夏と鈴は一瞬言葉を失った。レーザーを放つセシリアのブルーティアーズよりも威力は上。同じくビーム兵器を使う飛鳥のヴェステイージのものよりも上であったのだ。そんな時、一夏に抱きかかえられていた鈴は恥ずかしいのか、体をばたつかせて一夏から離れようとしている。

「ちよつ、ちよつと、馬鹿！離さないよ！！」

「お、おい、暴れるな。って馬鹿、殴るな！！」

「う、うるさいうるさいうるさい！！！！」

いくらシールドバリアーに守られているからといって、ISの拳で殴ってくるために白式のエネルギーは少しずつ減っていった。

「だ、大体、どこ触って・・・」

「！！しまった、間に合わな・・・」

いつの間にか誘導されていたのか、一夏たちの前には銃口をむけたISがいた。鈴の言葉に気を取られていて、全く周りを警戒していなかったことがあだになった。

やられる・・・。

そう思った瞬間に放たれたビーム。しかし、二人の間に突然現われた青とダークグレーのツートンカラーの機体・・・ヴェステイジがABシールドを翳してその攻撃を受け止めていたのだ。

「飛鳥！！」

「あ、アンタ・・・」

「早く逃げる！！」

受け止めきつた飛鳥はすかさずビームライフルをそのISに向かって放つ。それが回避行動を取ったその腕を吹き飛ばす。すかさずにカバーするように入ってきた他のISがこちらにビーム砲を向けていた。

「何なんだよ、あんたたちは！！」

「・・・」

飛鳥がその声を張り上げて叫ぶが、謎のISたちは答えない。

『紅月くん、織斑くん、鳳さん。今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生たちがISで制圧に行きます！！』

突然いつもはワタワタしている彼女とは打って変わって、威勢がある真耶の声が通信で入ってきた。

「何言ってるんです！！あんたたちを待ってたんじゃない、被害が広がる！！」

飛鳥は牽制するようにしてライフルを連射する。

「先生たちが来るまで俺たちで食い止めます。いいな、鈴」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいよ。動けないじゃない！！」

「おわ！？悪かったって」

暴れるりんのことを一夏は離す。二人もどうやらやる気満々のようである。

『織斑くん！？だ、ダメですよ！！生徒さんにもしものことがあったら・・・』

真耶の話の途中、未確認がその機体装甲を生かして、飛鳥たちに向かって突進してきた。それを回避し、それぞれの武器を構える。五機の未確認もそれぞれビーム砲を向けている。

「また、たくさんの人を殺したいのか・・・、あんたたちは！！」

飛鳥があ那时的光景を思い出し、叫んだ。

「もしもし！？紅月くん、織斑くん、鳳さんも！！聞いてますか！？」

アリーナの管制室にて通信を行っていた真耶の声が響いていた。しかし通信先の三人は全く答えることはない。

「山田くん。本人たちが自分達でやると言ってるのだ、やらせてみても良いだろう」

「ちよつと、お、織斑先生！？何呑気なことを！！一大事なんですよ！？」

「落ち着いてコーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

そう言つて千冬は手元にある入れ物からスプーンを使って白い粉をコーヒーの中に入れていく。しかし、真耶が見たその入れ物にはデカデカと塩と書かれていた。

落ち着けといっている千冬であるが、一番焦っているのは彼女ではないだろうか。そんな彼女は全く気づく素振りもなく、塩を入れたコーヒーをかき混ぜている。

「あ、あの・・・、織斑先生？？それ、塩ですけど・・・」

「何を言っているんだ、山田くん。これのどこが・・・って、何故塩があるんだ??」

「さあ??でも、そこにはちゃんと塩って書かれていますよね??」

「・・・」

「あー！やっぱり、弟さんのことが心配なんですネ。やっぱり織斑先生でも・・・」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

一瞬間まった千冬であつたが、真耶のその言葉にピクリと反応し、ゆっくりとそのコップを彼女に突きつけた。無言で飲めといっているのだ。

「へ???でもそれ、塩が入ったやつじゃ・・・」
「どうぞ」

真耶は千冬に塩入りコーヒーを押し付けられ、涙目でそれを受け取った。泣き泣きそれに口を付ける。

「い、いただきます・・・」
「熱いので一気に飲むといい」

呑気にコーヒープレイクをしている暇はないのであるが、やはりそれはしよっぱかった。それ以上に辛かった・・・。

千冬と真耶の漫才が繰り広げられている間、アリーナでは未確認のISから放たれるビーム砲が三人を襲っていた。次々とエネルギーのそこが見えない彼らが打つビームは一撃でも喰らえばやられてしまう。最悪死亡というものであった。そんな恐怖を感じながらも、飛鳥はライフルを次々と未確認に向かって撃ち込んでいた。

鈴も龍砲を放っているが、それがありえない回避行動にてかわされていく。鈴の誘導でチャンスができたとしても、零落白夜で切りつける一夏の攻撃を、これまたありえない回避行動でかわしてしまうのだ。

「何やってんのよ、一夏！ちゃんと狙いなさいよね」
「やってる！！でも、当たらないんだよ！！」

すでに白式のエネルギー残量は半分を切っており、最悪零落白夜の使用回数は後一回であった。

「なあ、あいつの動きって、なんか機械じみてないか？？」

「何言ってるのよ？ ISは機械じゃない」

一夏がいきなり二人に尋ねてきた。鈴がそれに答える。ISが機械であるから、そんな行動は当然なのであるが。

「なんて言うかな……。あれって、本当に人が乗ってるのか？？」

「は？？人が乗らなきゃISは動かない……」

でしょと続けようとした鈴であるが、こちらに向いている未確認からは全く攻撃をする素振りが見えない。それに気づいた飛鳥は、まるでこちらを観察しているようだと思う。そう、まるでデータを取っているかのように……。

まさかと思った……。これもまた、あいつの仕業なのかと。

常識からして、無尽のISというのはありえない。しかし、それに人工的なAIもしくは、入力した動きだけをするように造られているなら、それはクリアされる。超高度な技術であるが、できないことはない。

「仮に、そう仮にだ。アレが無人機だったらどうだ？？」

「何？？無人機なら勝てるって言うの？？」

だからといって一気に五機は無理である。流石に零落白夜を使つたとしても一機が限界である。その間に狙い撃ちをされたらとんでもないことになる。一夏にそう飛鳥が言つと、一夏も黙らざるをえない。命を張る時ではないのだ。しかし、そんな時だった。突然インカム越しに、ものすごい声量で叫ぶものがいた。

『一夏！！！』

アリーナに響くその声。ハウリングが聞いたこの声は・・・、観客席に立つ篠ノ之箒のものであった。

「あいつ・・・、何してるんだよ！！」

飛鳥はカツと頭に血が上る。みすみすここに攻撃を撃つてくさいと言っているようなものである。ハイパーセンサーで見ると、箒の近くにやめると掴みかかっている教師がいる。おそらく彼女が無理やり取つたのだろう。抵抗して更に叫ぶ。

『男なら・・・、男ならそれくらいの敵に勝てなくてなんとする！！』

アリーナに響くほどの大声。そして、未確認のISが箒の方にそのビーム砲を向けた。そして、飛鳥がハイパーセンサーを通して箒の近くにいたものを見た。

「！！！！」

ヒュッと息を呑んだ。呆然としてしまった。そこにいたのは飛鳥が守ると誓った大切な存在である二人の姿・・・、簪と本音の姿があったのだ。

やめろ、やめろ！！

飛鳥は叫んだ。スラスターを全開にして飛ぶ。

「やめろ！！簪！！本音！！」

左腕に装備されたABシールドを構える。もっと早く、もっと早く飛鳥はヴェステイージに念じる。

「やめろ！！これ以上、俺から大切なものを奪うな！！」

その瞬間ビーム砲が放たれた。その瞬間飛鳥の頭の奥底で何かはじけた。それに答えるようにして、ヴェステイージのスラスターが今までにない爆発的な噴射をする。

ダブル・イグニッションブースト
“二重瞬時加速”

飛鳥とヴェステイージが一本の軌跡となった。

「ヤメロオオオオオ！！」

飛鳥がビーム砲から彼女達を守る形でABシールドを構える。高エネルギーのビームがシールドを蝕んでいく。モニターに映るはこれ以上の防御は無理だというアラート音。

「嘗めるなアアアアア！！」

こちらから押すようにしてスラスターを爆発させる。そして、シールドが爆発する前に、一機のISのビーム銃口に蓋をする。その

瞬間、ビームが内部でISを蹂躪するように駆け巡り、爆ぜた。

「ウワアアアアア！！」

ISが爆発したときの余波に巻き込まれ、飛鳥はシールドバリアーに叩きつけられる。左腕のABシールドは拉げ、もはや使い物にはならなかった。後ろに見える、二人の安堵した顔が見える。

守れた・・・、俺は。

「！！」

しかし、忘れていた。ISはまだ四機あつたのだ。それぞれが飛鳥に向けて、そして、後ろの生徒たちに向けてビーム砲を向けていた。飛鳥は覚悟を決めていた。例え、シールドがなくても、このヴェステイージで守って見せると。

「俺は！！もう、二度と大切なものを失ってたまるかアアアアアア！！」

そう叫ぶと同時に四本のビームが打ち込まれる。とっさに構えたシールドは数秒もつたのがいいほうであろうか。すぐさま溶解し、左腕と同化する。そして、その四本のビームが飛鳥とヴェステイージを打ち抜き、シールドバリアーがヴェステイージのぶつかった衝撃で破壊され、観客がいない席にヴェステイージが叩きつけられる。

「あ・・・、ああ・・・」

もはや視界がぼんやりとしていた。焦げ臭いにおいが充満し、それが鼻を刺激していた。

「飛鳥!!」

「アーちゃん!!」

すると向こうから二人の声が聞こえて来た。どうやら二人は無事なようだ。それを知った瞬間、飛鳥には何故か満足感が体を駆け巡った。そしてその瞬間、ふわっと体が浮き上がる感じがした。

激しく体を突き破る痛みが、一瞬にしてなくなった。まるで自分の体から意識だけが抜けたように・・・。

ああ、俺は・・・。

「守れたのか・・・」

そう満足感に満ちた言葉を最後に、飛鳥はゆっくりと瞳を閉じた。それと同時に、まるでヴェスティージが死んだように、VPS装甲の色が落ちた。

それを見た二人の少女の、少年の名を叫ぶ声だけがアリーナに響いていた・・・。

PHASE 14 謎の襲撃者！！（後書き）

ED 2 ↓ REASON > 玉置成実 <

インフイニット・ストラトスゝ怒れる瞳ゝ PHASE 15 勝利
エクスカリバー
の剣

次回予告

広がる草原

少年は再び見知らぬ場所へと来ていた

そこには丘へと続く、ただ広がる大地

その丘にひっそりと主を待つ一本の剣

それは、ただ使用者に勝利を齎す剣

そこに現れる二人の女性

そして、自らに手を差し伸べる騎士

悲しみにつつまれた少女達に向けられる悪魔の手

その前に現れるは再び立ち上がる傷ついた戦士

その手に握る剣にて、勝利を掴め・・・ヴェステイージ！！

PHASE15 未知なる世界で・・・（前書き）

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

前回の次回予告とは大幅に変わっています。現行のまま投稿するとPHASE14を軽く超えそうだったので・・・。

それぞれのタイトルをつけ、少しずつ投稿していきたいと思いますので、その所はご了承ください。

PHASE 15 未知なる世界で・・・

ものすごい衝撃が彼女たちの立っていた観客席に走る。それと同時にものすごい音が耳を貫くような感じがした。シールドバリアーを破壊して、何かが観客席に落ちてきたのだ。

簪と本音が恐る恐る煙が晴れるそこを見る。彼女たちの瞳に映ったのは、ビーム砲を全身に受け、機体装甲が融解しているヴェステイジの姿であつた。ぐったりとして、まるで死んでいるかのように見えた。

胸が張り裂けそうな思いを抱え、そこへと向かう。煙が上がるヴェステイジ。その煙は天高く上っていく・・・、まるで飛鳥の魂を表しているかのようにだつた。そんなはずはない。そういう思いを胸に、簪はヴェステイジの横に立つ。

「アーちゃん・・・」

「大丈夫・・・、うん。飛鳥なら大丈夫だよ」

本音が不安そうな声を漏らす。小さく震えているのが見える。そこにいるのは対暗部家系の使用人である布仏本音ではなく、ただ一人の少年のことを心配する少女であつた。

もう一度視線を戻す。クレーターを形成し、ぐったりとそこに体を預けている状態である。

後ろのほうでは悲鳴と共に、教師の避難指示が聞こえている。自分たちも生徒会として、裏の人間としてそれを手伝いながらも動かなければいけない。だが、彼女たちはそれらをかなくなり捨てて、飛

鳥のもとに来ていたのだ。

隣で突然立ち上がり、誘導していた教師からインカムを奪った女子生徒・・・、篠ノ之箒が叫んだ声に反応してこちらに向かつてビームを放ってきた未確認のIS。それらから自分たちを守るために、飛鳥は身を挺して守ってくれたのだ。

「でも、こんなのないよ・・・」

本音が涙を流して言う。ガクリと膝をついて、汚れていた床に制服の袖が触れたために黒く汚れる。しかし、そんなのを一々気にしていられるような余裕は彼女にはなかった。

「嘘だよね・・・??」

指一本動かずにしているヴェステイジ・・・、飛鳥を見て簪がそう呟く。嘘だ嘘だと、目の前で彼女は自身に突きつけられている現実を必死に否定しようとしている。

一瞬こちらに視線を向けたような気がした。だが、運命はまるで彼女たちをあざ笑うかのようなだった。まるで息を引き取るように、ゆっくりとヴェステイジのVPS装甲が解除されていったのだ。

色鮮やかな青から無機質な鉄色に・・・。それを見て目を見開く。彼女たちの声はもう届かない。その双眼からも金色の光が失われた。

「あ、アーちゃん!! やだよ、行かないでよ!!」

「飛鳥、飛鳥!! いやあああ!!」

二人の叫びはもはや飛鳥には届かない。そう、手の届かない遠い

場所へといってしまったのだから・・・。

ビュウっと言う風が体を撫でる。寝癖頭の髪の毛が、風を受けてふわっと言う感触を感じている。ゆっくりと瞳を開ける飛鳥。体がとても柔らかなものに包まれているのを感じた。

柔らかく、そして暖かい。飛鳥の全てを包み込んでくれるようなそんな感じがした。横を見ると小さなテーブルの上に救急箱のようなものと、薬のような液体の入ったビン、それを入れたのだろう、水滴の付いたコップが置かれていた。

「ぐっ!!」

起き上がろうとした飛鳥であるが、とたんに走る激痛に顔を歪ませ、直ぐに柔らかな感触のあるものに体を沈ませる。どうやらこれは純白のベッドらしい。包み込む柔らかさは今までに触れた布団にはないものであった。

何とかここがどこなのか知ろうと思い。重たい首を横に向けることで見ることでできる範囲を広げる。すると回りはどこまでも広がっているのではないかと錯覚してしまうくらいに青々と茂った大草原であった。

近くには大きな泉の姿があり、木々の周りには近くの森の動物たちなのだろうか。ゆっくりとしている様子が見えた。ここは一体どこなのだとアス力は内心焦っていた。

すると誰かがこちらに向かってくる音が聞こえて来た。草を踏みしめる、ゆっくりとした足取り。複数の足音と気配がした。それを

察知できたのは幼い頃から軍事学校と鍛えられていたためである。

だが、やってくる者たちが一体何者なのか分からない以上、警戒を怠ることはできない。とはいえ、飛鳥は今体が動かない。指一本すら動かすのにかなりの神経が必要で、それを腕だというのはなら、まるで？がれたような痛みが走るのだった。

「あら？？もう目が覚めたのかしら？？」

「え？？あ、本当だ」

そんな風にどこかで聞いたような声色と口調であった。ゆっくりと、動かしづらい首をその声のするほうへと向ける。思わず目を見開き、体を起き上がらせようとしてしまった。それだけ飛鳥には衝撃的だったのだ。

「がつ！？」

「あ、もう。駄目じゃない」

「あなたは今、とてもじゃないけど体を動かせる状態じゃないんだよ？？」

痛みに涙が出そうだ。そこは歯を食いしばった我慢する。もれてくる苦悶の声を聞いて、少しでもその痛みを和らげようと、一人の女性が布団を千切らんと握り締めている飛鳥の手をそっと包み込んだ。

雪のように白いが、とても暖かく、優しい感じがした。まるで彼女と手をつないでいた時の感触を思い出しつつあった。

「あ、あん、私たち、は・・・」

声を出すのも厳しい。途切れ途切れになりながらも飛鳥は尋ねる。痛みがまだあるために、目が半開きの状態である。それでもなんとか彼女たちの顔を見ようとする。

「今は少し休んだほうがいいわ」

「それからでも遅くはないから」

ふわっと飛鳥は頭を撫でられると、とたんに痛みよりも激しい睡魔に襲われ、ゆっくりと瞳を閉じた。

飛鳥が眠りに落ちたことを確かめる二人の女性。水色の髪をした、顔立ちは似ているが、一人はセミロングの髪が外側に向いているのに対して、もうひとりには眼鏡をかけ、同じくセミロングの髪が内側に向いている。

二人ともお揃いの白いワンピースを着ており、仲の良い姉妹を思わせる。彼女たちの傍に突然現れたテーブルと椅子のセット。それに座る二人。テーブルの上には入れたての紅茶がカップの中にあつた。

「いきなり彼が現れた時には驚いたけど」

「マイスターの声が聞こえたから。たぶん彼は・・・」

そう眼鏡をかけた女性が飛鳥のことを心配そうにしてみる。突然草原に出現した一人の少年・・・、それが飛鳥だった。

不干涉のはずのこの世界に現れた一人の少年。どこまでも自由な世界。誰にも干渉されず、ただ望むものがある世界。まるで心の中を表しているようであった。

「私のマイスターもようやく気づいたようだけど。信じたくないって思ってるわ」

「私のマイスターも友達と一緒に泣いてるよ。彼、戻してあげたほうがいいが・・・」

そう言うが今戻したとしても、数秒で命の灯火が消えるだろう。

それほどまでに、飛鳥の傷は深刻であった。体中に火傷があり、ほとんど死んでもおかしくない重傷である。この干渉の世界のもので治療を施しているとはいえ、回復するには時間が掛かる。それに、このまま飛鳥を元の世界に戻すことを、彼女たちはあまり良しと思っていなかった。彼女たちが彼に向けている想いというのは、彼女たちのマイスターの心に隠されている想いと同じなのだから・・・。そう、彼女たち（・・・）は彼女たち（・・・）自身なのだ。

「自らの失策で失う命。今必死に動揺を押し殺してる・・・」

「何もできなかったことに、無力さを嘆いている・・・」

マイスターたちから流れてくる思いが、彼女たちの胸を突き刺す。重苦しい雰囲気漂う。温かった紅茶が、すっかり冷えてしまっていた。指を鳴らせば直ぐに温くなるが、そのまま冷たいそれを口に運ぶ。

冷たい・・・。

まるで冷え切ってしまった心に触れた感じであった。自らの名を捨て、受け継ぐ名を名乗る・・・。彼女は彼女であっても、本当の彼女ではない。仮面をかぶり、それでも自らを失わないために明るく振舞う。

捨てたはずの彼女の心が今も受け継いだ仮面を被る彼女の心の奥

底にある。まるで永遠に出てこないように、冷凍保存されているように……。しかし、それはまるで、とてもとても大切に、なくならないように、形が変わらないようにするために施された処置のようにも見える……。

本当の自分を見てほしい、仮面をかなぐり捨て、ただの自分となり、思いっきり甘えたい。しかし、そんなことを許される立場ではない。彼女のISだから分かる。彼女はいつも表で笑っていても、心で寂しそうにしているのだと……。

力がほしい……。

それは何も飛鳥だけが求めているものではない。誰もが小なり小なり、力というものを求めている。彼女のマイスターもまたそれを心から望んでいるのだ。目の前で冷たくなった少年。守るという約束は確かに果たしてくれた。だからといって、彼が死ぬことはなかったのだ。

飛鳥は体は守れても、心は守れなかった。彼女のマイスターは泣いている。それが彼女の心にも流れ込み、同調しているかのように彼女の瞳からも涙が溢れてくる。

「少しでも傷の治りが早くなればいいけど……」
「でも、その後だね……。本当に心が試されるのは……」

二人がそう呟き、ここから見える小高い丘を見上げる。人ならざる存在である二人には見えている。ただそこにひっそりと突き立てられた剣が、今もまだ手にする主がいなままあるのが……。

飛鳥がこの世界に来て数日というのだろうか。もともと時間概念というものがここにはないために、今日も昨日も明日というものもないのだ。朝がよいならずと朝、夜がよいなら夜と、まさに意のままにこの世界はあった。

歩けるほどではないものの、体を起き上がらせるくらいはできるようになっていた。少しずつであるが、治癒が進んでいるのが見て取れた。それでも体中にできた火傷などの傷は痛々しく残っている。

飛鳥自身は二人を守れたのだから、別にいいと言っていたが、少し悲しそうな表情を見てどうしたのかと尋ねる。飛鳥にとって、彼女たちはあまりに幼馴染の二人に似すぎていたのだ。

楯無と簪。飛鳥の看病をしてくれている二人の女性は、そんな二人が大人っぽくなった、数年先の未来の姿を現しているようであった。彼女たちの顔を見たとき飛鳥は、純粋に綺麗だと思った。これは嘘偽りのない思いだ。

飛鳥にとって、彼女たちが悲しそうな表情をすると、まるで楯無と簪がそんな表情になったのを想起するために、胸が痛んだ。

この世界は現実世界ではないということが直ぐに理解できた。いくら時間がたつても太陽は上ったままであるから。夜のほうがいいのかと聞かれたが、別にいいと言った。

手渡されたスープは温かく、心まで染み渡るものだ。始めの内は腕が上がらず、彼女たちにスプーンで飲ませてもらっていたが、今はこうして自分でできるまでに回復していた。一体どれくらいの時間がたったのだろうか。

元の世界の自分はどうなったのかと聞くことはできなかった。どうしても飛鳥が望まない答えが返ってきてそうだったからだ。

「あ、まだ名前聞いてなかったな・・・」

食事を終え、空になったお皿と使ったスプーンを返しながら飛鳥が言う。いつまでもあんなやお前というのは流石に失礼だと思った。声を出すのも苦しく、激痛でそこまで思考が回らなかったために、遅い自己紹介だった。

「俺は飛鳥。紅月飛鳥って言うんだ」

彼女たちにとっては飛鳥が名乗らなくても良く知っている名前だった。マイスターたちが姉として、幼馴染として、同級生として、そして・・・。

「なら、私たちも自己紹介しなきゃ駄目よね。私の名前はミステリアス・レイディ。マイスターは更識楯無よ」

「私は打鉄式。マイスターは妹の更識簪」
「な・・・」

まさかここまで彼女たちに似ているというのは、今飛鳥の目の前にいる二人がISであるからだった。

「なあ、ISって性別は皆女なのか??」

飛鳥は困惑を隠しきれない表情で尋ねる。うっかり彼女たちを楯無、簪とマイスターたちの名前で呼んでしまうのは仕方のないことだろう。それほどまでにそっくりなのだから。

クスクスと二人に笑われ、何だよと拗ねる飛鳥も、恥ずかしさで頬が赤くなっている。

式式が説明してくれたことによると、グランドマザーと呼ばれる人物・・・、飛鳥にとつては家族の仇になる篠ノ之束。その束に作られる彼女たちたちISの人が他としての存在というのはやはり、女性にしか起動しないこともあり、女性体となるらしい。一夏が唯一の男性操縦者であるが、やはり使用しているのはISである。彼の白式のコアの人が他もまた女性なのだろうと予想できた。

「というか、何で俺はここに?? 時間はどうなってるんだ?? まさか!？」

「落ち着きなさい。向こうでは数秒もたっていないわ。ここには時間という概念がないから」

「そ、そうなのか・・・」

ミステリアスにそう言われ、飛鳥はよかったと内心安堵のため息をつく。とはいえ、今の飛鳥は自身の状態を見て、例え戻ったとしても何もできないだろうと思った。更に、ビーム砲を受けたヴェステイジはかなり機体にダメージがある。その戦いには到底参加できないだろう。

今はゆっくりと傷を癒すのが先決だった。今向こうはどうなっているのだろうか。時間はほとんど経っていないといっても、最後に聞いたのは簪と本音が自分の名前を叫ぶ声だった。

悲痛な叫びだった。大切な存在である二人を守るためにシールドを構えてビームを受け止めたが、敵は五機いた。一機を倒しても、残っていたそれらが畳み掛けるようにしてビームを撃ってきた。一発を止めて限界であったシールドは簡単に破壊され、熱で溶かされ

たそれが左腕と同化したようになったのだ。

左腕を見ると、火傷が治りかけとはいえ、痣ができていた。無理をした結果だとしても、それで守れたのならいい。思わず笑みがこぼれた。先ほども見せた悲しそうな表情。あの時聞きそびれたが、一体どうしたのかと尋ねる。

「なんだよ、これくらいどうってこと・・・」

乾いた音が草原に響き渡る。まるで山にいるかのようにどこまでも、永遠にその音が流れ続けるかと思った。その乾いた音はまるで悲しみの曲のようにして流れていた・・・。

「な、何するんだよ!!」

飛鳥は頬を叩いた簪似の式式に対して、動揺の浮かんている瞳を向け、怒ったように叫ぶ。ジンジンと叩かれた頬が痛む。動揺も相まって、更に痛みが大きかった。再び逆の頬が叩かれる。無抵抗の飛鳥は再びされるがままに叩かれた。

どうして・・・。

飛鳥には分からなかった。何故彼女が自分を叩くのか、呆然とした表情で、今度は反論できない。叩かれ横を向いたまま固まったようにしている。

そんな二人のことをミスティアスは黙って見ていた。彼女にはどうやらこのことの原因が分かっているらしい。彼女のマイスターである楯無が妹である簪のことを色々知っているように、それがISの彼女にもそのまま流れていた。だから、どうして式式が悲しそう

な表情でいるのかも分かっているつもりだった。

もし自分が同じ立場だったら・・・。

きつと同じことをしただろう楯無であり、■ ■である彼女もその想いを抱いているから。

アツくん・・・。守るって言うこと、もう一度良く考えてみてね。

慈愛のこもった瞳で飛鳥を見つめているミスティアス。こればかりは彼自身が分からなければいけないのだ。

「何するんだよ!!」

「馬鹿!!」

「!!」

ハッとして、意味も分からずに叩かれた飛鳥は思わずカッとなつて叫んでしまった。自分が何か悪いことをしたのかと。飛鳥は叫ぶすると、式式が真正面から馬鹿と叫んだ。

「ば、馬鹿って何だよ。いきなり叩きやがって・・・。全然意味が分からない!!」

一瞬たじろぎそうになったが、叫ぶようにして言い返す。いくらなんでもおかしい。

「何も分かってない。飛鳥は何も」

「分かってないって・・・、一体何をだよ」

そう言われても、会ったばかりで彼女の考えていることなど分か

るわけがない。だが、どうしてか彼女は泣いていた。そして、その表情が簪と重なる。当然だ・・・、ほとんど瓜二つなのだから。それだけでないことを、飛鳥はまだ気づいていない。

でも、何故だろう・・・。

彼女の悲しそうな顔を見ると、胸が痛い。まるで守ったように、何も守れなかったような・・・、そんな気がしていた。

「俺は守れたんだ。約束通り、簪と本音のことを」

その何が悪い。飛鳥はそう叫んだ。式式だけでなく、後ろで飛鳥たちの事を見ていたミステリアスに対しても。

「その何が悪いんだよ。それともあんたは二人を見捨てるとでも言いたいのかよ」

「違う!!」

「そうじゃないわよ、アツくん」

「あ、アツくん!」

突然彼女から、楯無が飛鳥を呼ぶときに使う愛称で呼ばれたために、一瞬戸惑いを見せる。悪戯っぽい笑みを浮かべている彼女を見て、マイスターがマイスターなら、ISもISだと思った。性格までも似るのだろうか、どこまでも固い絆が結ばれる奥の深さを感じた。

「そうじゃないって、どういうことだよ?」

「私たちの気持ちはマイスターと繋がっているのよ。つまり、ISは心で繋がっているの」

「??」

どういう意味だと飛鳥は頭を捻る。突然そう言われてもどうしようもない。だが、一つだけ分かったことがある。式式が涙を流しているのも、ミステリアスが悲しそうな表情をしているのは、すべて現実世界での彼女たちの感情なのだということを……。

「お、俺は……」

二人を悲しませたのか……??

彼女たちの今の表情が、元の世界の二人のと同じであるならば、きっとそうなるのだろ。そう思った瞬間、飛鳥は鈍器で殴られたような衝撃が走った。視界がグラつき、眩暈がする。

目を見開き、無意識の内に手で頭を抱えていた。俯き、口からは言葉にならない呼吸音だけが聞こえる。

守ると言っておきながら、そう確固たる想いを持ちながら……。ヴェステイージという力をその手に持ちながら……。

雫が白い布団に落ちる。それが小さく染みを形成していく。いくつも、いくつも……。悔しさと、情けなさと、申し訳なさが入り混じっている。その染みがいつしか繋がるようにして大きなものへととなっていく。まるで小さな涙の雫がISのコアのようにして、次々と繋がっていき、大きな集合体へとなるかのように……。

涙を流す飛鳥を優しく抱きしめる式式。マイスターを守ってくれたことには感謝している。自分が今だ完成しないことを、彼女自身が悔しい思いを感じているのだ。マイスターを守る盾として矛としての役割を全うできないのだから……。

そして、マイスターの気持ちを汲み取るなら、飛鳥に対して怒りを向けざるを得なかった。マイスターの心を傷つけたのは本当のことだから。

ミステリアスも本当はそこに行きたいが、今は楯無の姉として、妹の簪を見守る思いを尊重し、そこで二人を見ている。

そして、別の思考を凝らしていた。彼をこのまま元の世界に戻してもいいのだろうか。

マイスターたち・・・、楯無と簪の想いを汲み取るなら、早急に傷を癒し、元の世界に戻すことが彼女たちにとっては取るべき行動であった。

しかし、傷の癒えはゆっくりというものだった。それには彼女たち自身の想いがあった。その想いというのは、マイスターたちの想いを裏切ってしまうものだったのだ・・・。

彼を元の世界に戻すのは・・・。

傷つき、それでも前に進もうとしている飛鳥。今回だって、簪と本音を守るために自ら身を挺してビームを受け、傷ついた。それを悲しむことはなく、むしろそれで守れたのだからいいのだと小さく笑みを浮かべていた。

思わず抱きしめたくなった。彼が二人を守ったからでもなく、怪我をしたからでもない。IS（兵器）である彼女自身がそう言う想いをもっていたのだ。傷つき、しかし、それを逆に力に変えていく飛鳥が今にも倒れそうに見えたのだ。

きつと元の世界に戻っても、大切な存在を守るために戦い続けるだろう。例え自らが傷つこうとも。いくら傷つかないでと言っても、きつとそれは果たされない。自分よりも、想いのほうを優先するか
ら……。

ねえ、ずっとこの世界にいない??

ゆっくりと近づいたミスティアスが言う。微笑を浮かべ、飛鳥のことを歓迎すると手を差し伸べる。飛鳥はそう言われ、驚きながらその手とミスティアスのことを交互に見る。

飛鳥を抱きしめていた式式も、ミスティアスが一体何を言っているのだという視線を向けている。マイスターたちの想いを知っている自分たちがすべきことはそんなことではない。そう言う式式であるが、ミスティアスはその手を引っ込める気配はない。

「何を言ってるんだよ、そんなことしたら……」

向こうの世界の時間はどうなるのだと。飛鳥はその疑問を口にする。

「大丈夫よ。向こうの世界との干渉を切り離せばいいだけだから」
「それって、つまりは……」

向こうでほぼ止まった状態である時間が再び動き出すということ。それはつまり、飛鳥にとっては完全なる死を意味することだった。それを理解した瞬間、飛鳥は叫んでいた。

「ふざけるなよ!!」

飛鳥は傷む体を押して、差し出されていた手を叩いた。それはつまり、拒絶を意味するものだった。拒絶されたことを驚いた表情ではなく、当然かというような、確信していたかのような表情で飛鳥を見ていた。

全て確信済みかよ……。

どうも、彼女のマイスター同様にやることが巧みだ。飛鳥の本当の想いを、こうも簡単に引きだしてしまった。

してやられたと、飛鳥は少し不機嫌そうにしてミステリアスを睨みつけている。クスクスと笑う彼女は少し赤くなった手の甲をさすりながら飛鳥を見つめる。

「俺はこの世界にはいられない……。悪いけど、俺にはやらなきゃいけないことがあるんだ」

「それはグランドマザーと白騎士に対する復讐??」

「ああ」

肩に手を置いて心配そうに見ていた式式が尋ねるのに対して、間を入れずに即答した。

もちろんそれだけじゃない……。

「守るため……、なのかしら??」

「当たり前だ。俺が決めたことなんだ。約束もあるけど……。俺が、俺自身が決めた信念を曲げたくない」

無意識の内に拳を握り締めていた。まるで、確固たる信念を体現

しているようにミスティアスと式式には見えた。硬く握られた信念はどうやらそう簡単には崩れることはないらしい。

なら仕方ない。そう思い、二人は飛鳥の手をそれぞれ両手で包み込み、祈るような姿勢になる。一体何をしようというのかと、飛鳥は突然のことに顔を赤くして慌てる。

淡い光が飛鳥の体を包み込む。暖かく、そして全てを受け入れるかのような。そんな感じの光に包まれた飛鳥。体から痛みがスウッと消えていくような感じがした。

起き上がってみても、以前は動かすこともできなかった足もちゃんと地に着けることができ、歩くこともできた。まるで綿毛になったかのように、風に乗って飛べるくらいに体が軽く感じた。

どこから取り出したのか分からないが、いつも着ているようなIS学園の男子生徒特注の制服が出された。それを着て、一度着替えるために借りていた小屋から出る。

ずっと横になっていたために、立った状態で感じる太陽の光はまるで現実の世界に居るように眩しく感じた。

PHASE15 未知なる世界で・・・（後書き）

ED2↓REASON>玉置成実<

次回予告

立ち上がる者

その世界の住人である二人に連れられ、まだ見ぬ力を求め、少年は歩き出す

小高い丘にあるは主なき剣

力を求めん少年の前に現れるは、緋翼を持ちし一人の騎士

その力に相応しいかは己の力のみが証明する

ぶつかり合う想いと想い

彼らが触れしものは幻想か

剣を前に崩れ行く者

今再び運命を呪う

次回 インフィニット・ストラトスゝ怒れる瞳ゝ

PHASE16 力を求めるもの

悲しき運命は残酷のみを戦士に与えん・・・。

PHASE 16 力求めるもの（前書き）

OP2 ↓ IDENTITY > 玉置成実 <

いよいよ戦闘開始。

敵は・・・。

たくさんのご感想と閲覧いつもありがとうございます。それだけでも作者にとっては嬉しく、執筆もはかどります。

少しでも読者様に楽しんでいただけるようにしていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

それでは本編開始です。

PHASE 16 力求めるもの

それから飛鳥は二人に連れられて丘を登っていた。不思議と疲れはなかった。時間という概念がないために、時間の流れで衰える体力などというものもないのだろう。

二人の着ている白のワンピースがキラキラと光を受けて煌めく。まるで羽衣を身にまとった女神のように見えた。

どこまでも続くかと思わせる草原の草と同じものが丘を駆け上がるように続いている。ゆっくりとした歩調で丘の頂上を目指す。

「なあ、頂上には何があるんだ??」

「うふふふ」秘密って言いたいけど・・・」

――あなたの中に眠る、まだ見ぬ力って言えばいいのかな。

そう振り返り、微笑みながら言うミスティアス。飛鳥は新しい力が手に入るとは、素直に嬉しかった。だが、物静かに歩いている式式は、それがそう簡単に手に入れられるものではないと思っていた。

それはこの世界が彼女たちのマスターの心を表したものが混ざり合ったものとして形成されているとはいえ、何故か今から向かっている先にある、その力があることが彼女にとっては気がかりであった。

――この世界で・・・、IS間で何かが起きている??

そう歩きながら考える。意識体だけがISと接触するのは大抵第二次移行の時であり、彼女の隣を歩くミステリアスはすでに彼女のマイスターである楯無との接触は終えている。式式自身は未だ完成の域に達していないために、まだであるが……。

しかし、大前提であるISの操縦者というものに、飛鳥は当て嵌らないのだ。もしIS間で何かが起きていたならば、自分たちを生み出したグランドマザーである篠ノ之束が何かしらに気づくはずであり、早急な手立てを打ってくる筈である。

しかし、それが見られない以上。何が起きているか彼女には理解のしようがなかった。

そして、ようやく長い上り坂を登りきり、丘の頂上へと着いた。飛鳥にとっては、そこから見下ろす景色はまた別のものに見え、ずっと自分がいたところが小さく見え、更に遠くまで向こうのほうが見えた。

どこまでも無限に続く世界。果てしないこの世界に終わりはなく、始まりもない。しかし、飛鳥にとっては、ここはもう一度スタートする、始まりの場所になりそうだった。

「あ、あれは……」

後ろを向いた飛鳥の眼に飛び込んできたのは一本の剣であった。巨大な岩に突き刺さった、主なき剣……。

「私と式式の世界にはあるはずのないもののよ」

「この世界……、確かISと操縦者の対面は第二次移行の時だった……」

「そう、私とマイスターはそれを既に済ませているってわけ」

式式が少し不機嫌そうな表情になったのを見て、これは失敬というような仕草を見せる。一つ一つの仕草が可愛いと思った。

でもしかし、あの剣には見覚えがない。突然合わさった二人のI Sの世界。そして、まるでそれだけが異質のような雰囲気醸し出していた。

飛鳥は二人の顔を見る。頷く二人を見て、飛鳥はその間を進み、岩に突き刺さった剣の前に立つ。

「これが・・・、俺の新しい力」

まるで新品そのものである刀身が光を反射して光っている。西洋風の両刃剣。それに向かって、ゆっくりと手を伸ばした飛鳥。

「危ない!!」

「!!」

突然式式の叫びと共に、彼女が飛鳥に向かって体当たりを食らわせる。彼女に抱きかかえられながら、飛鳥は柔らかな草の上を二人でごろごろと転がる。何かが上空から飛鳥に向かって襲い掛かってきたらしい。ものすごい金属音が響いた。

「な、一体なんなんだ!？」

飛鳥が慌てて倒れていた体勢から起き上がり、先ほどの場所を見る。するとそこには赤、青、白灰色の騎士甲冑を纏った何者かが、ミステリアスに向かって剣を振り下ろしていたのだ。とっさに守り

にはいった彼女は、自身の武器である蒼流旋そうりゅうせんを出現させ、受け止める。

「だ、誰よあなた・・・」

「・・・」

力で押し負けているミステリアスが苦しそうな表情のまま、尋ねる。しかし、突然現れた騎士は無言のままその手に持っている剣を押し付けている。

すると突然、ミステリアスがこちらにちらりと目配せしたのを見た飛鳥。式式が立ち上がり飛鳥の腕を掴み走り出す。飛鳥も慌てて引かれるがままに走り出す。

「な、いきなりどうしたんだよ」

「いいから離れて」

飛鳥が慌てて尋ねるが、式式はただそう答えるだけで走る。離れたところで突然大爆発が起きた。飛鳥はその手を振りほどき、ミステリアスがいた爆発地点に目を向ける。

爆発の余波で起きた煙と土が舞い上がり、そこで今どんな状態にあるのか、彼女は無事なのか、あの騎士は倒したのかと。飛鳥は次から次へと疑問を持った。

そして突然、煙を突き破って飛び出してきた人影があった。上空から降りてきて、片膝をつく状態で着地したのは、綺麗な白いワンピースがぼろぼろになり、その手には服装には似合わない物騒な槍を持つミステリアスであった。

「お、おい。大丈夫なのかよ」
「ちよーつと無茶しちゃったかな?？」

飛鳥が慌てて心配そうに尋ねるのに対して、ちろつと舌を出して
そう言うミスティアス。あれだけの爆発をしたのだ。流石の騎士も、
大丈夫なはずはない。飛鳥は何度か楯無のISの試合を見たことが
あったためにあの爆発が、ミスティアス・レイディのものであるの
がすぐに分かった。

ぼろぼろのワンピースを押さえているのを見て、思わず顔が熱く
なるのを感じた。女性であることをこれでもかと強調している胸が
飛鳥の目に入ったためである。

そんな飛鳥を見て、にやりと小悪魔的な笑みを浮かべるミスティアス。
そんな状況ではないにしろ、余裕を持っているのは流石であると、
まるで楯無が隣にいるような感じであった。

ザッという草を踏む音と共にそこに現れたのは巨大な荷電粒子砲
を構える式式の姿があった。そんなクールな表情をして物騒な巨大
なランチャーを構える彼女を見て、飛鳥は啞然としている。

「来る」

「来るわね」

「まじかよ・・・」

そう口々に言うの徒同時に、持っていた剣を一閃・・・蔓延し
ていた土煙を薙ぎ払う騎士の姿が見えた。

「傷一つないって・・・。ちよつとシヨックね」

笑顔で言っているが、それは余裕そうなものではなかった。そこに現れた騎士の甲冑には傷一つ付いていなかったのだ。堂々と仁王立ちをして、こちらを見ていた。

素顔は見えないために分からないが、その胸に起伏がないことや、雰囲気からして女性ではなく男性だと思われる。背中にある大きな緋色の翼は羽ばたけないように鎖で封印されているような形であった。

「男・・・??? ならあれはISじゃない」

ISが女性にしか反応しないように、コアの人型としての姿も女性対なのである。しかし、飛鳥たちの目の前にいるのは男。つまり彼はISではない(・・・)。

「何なんだよあんたは!! いきなり攻撃してきて、何の理由があるんだよ」

「貴様がこの剣、『エクスカリバー』の真の主にふさわしいか見極めるために来た」

「な!? 見極める・・・、だって」

飛鳥は立ち上がり、騎士と真正面に対面する。彼から放たれる威圧感に飛鳥の全身の毛が逆立つ。足が震えているのは飛鳥の勘違いではないだろう。ここまで恐怖するのは初めてであった。

「我と戦え、紅月飛鳥」

「何故俺の名前を!？」

すると突然飛鳥の頭上に太陽の光を反射して煌めく何かが映った。慌てて後ろに下がると飛鳥が先ほどまでいたところに二振りのナイ

フ・・・、フォールディングレイザー体装甲ナイフがあった。

「あ、危ない。いきなり何するんだよ」

「貴様にそれをくれてやる」

そう言って自身は巨大な剣を構える。はつきり言っで、たった二振りのナイフでそれに対抗しようなどとは無謀にもほどがある。

「ちょっと待ちなさい。あなたにそれをする資格があるのかしら？」

「あるからこうして来ただけ。邪魔な貴様らに出る幕はない」

「人の世界に勝手に入って来て、言うことはそれ??」

ミステリアスと式式がそれぞれの得物を構える。しかし、顔色一つ変えずに騎士は言う。

二つのISの世界を繋げてやったものを・・・っと。

「!!」

「まさか・・・」

「あなたが??」

一層の警戒感が高まる。飛鳥もすばやく地面に突き刺さっていた二振り之ナイフを手に取り、逆刃にして構える。それを見て満足そうに笑みを浮かべる騎士。軽々と剣を振り回し、それが空気を切り裂く。

「まさか、あんたが俺をここに連れてきたのか??」

「そうだ。まだお前には死んでもらいたくないからな」

「っ!!」

死という言葉が飛鳥の胸に突き刺さる。時間は経っていないとしても、彼女たちを傷つけてしまったのは変わらない。ナイフを握る力が強まる。

「何で俺に・・・、そこまで執着するんだよ」

「お前は俺で、俺はお前だからだ」

「はあ??」

意味が分からなかった。しかし、威圧感と共に感じられるものは激しい悲しみと怒りであった。それはまるで、飛鳥自身が持っているものと酷似していた。

「想いがあるうと・・・」

剣が上段に構えられる。

「力があるうと・・・」

騎士甲冑の奥から赤く燃える瞳が見える。それはまるで怒りと憎悪の炎で燃えているようだった。

「運命に翻弄される!!」

一刀両断といわんばかりに振り下ろされた攻撃。それが衝撃波となって飛鳥に向かってきた。とっさに構えたナイフであるが、全く相手にされずに後方に吹き飛ばされる。

「がつ!!」

「アツくん!!」

「無謀よ！！こんな戦い認められない」

荷電粒子砲を放つ式式。それに対して左腕にあるシールドからなにやら光を出現させ、それを受け止める。全く効いていない事に、呆然とする。雰囲気が一瞬冷たいものになる。まずいと思ったミステリアスはとっさに式式を庇うようにして立ちはだかった。

「！！」

金属音と共に、式式の前にいたミステリアスが軽々と吹き飛ばされる。力の差が歴然であった。敵は目の前にいる。啞然としていた表情からすぐに気を引き締め、ミサイルを出現させて、至近距離で全弾放つ。

全弾が着弾し、その余波で後方に飛ぶ式式。しかし、突然煙の仲から金属製の鞭がものすごい速さで出現し、彼女の足を絡めとり、激しい電流パルスが彼女を襲う。

「きゃあああ！！」

体に走る激しい痛みと悲鳴をあげてしまう。解かれた鞭は煙の仲へと戻っていき、攻撃を受けた式式は真つ逆さまに、上空から地上へと落ちていく。

「危ない！！」

飛鳥はナイフを放り捨て、慌てて落ちてくる式式の元へと走る。地面に叩きつけられる寸前で彼女のことをキャッチする。

「だ、大丈夫かよ」

「つつっ……。只者じゃない」

「ああ」

「ちよつと、おねーさんを無視するってのは酷いな」

ボロボロになったワンピースをとどころ結んで補修をしているようだ。流石に痺れたと手を振って攻撃のすさまじさをアピールしている。

圧倒的な力と防御。更に多彩な武装と勝ち目がほとんど見えない。だが、彼を倒さない以上、あの剣を手にすることは敵わない。煙が晴れ、望んでいたダメージはなかった。

「これだけか??」

一退散でありながら全く引く様子のない騎士。飛鳥は投げ捨てていたナイフを再び構え、走り出す。

「お前を倒さないと……。それが手に入らないなら!!」

構えたナイフで切りかかる。甲冑は狙わない。爆発やミサイルを受けてなお健在であるその頑丈性は既に学習済みだ。

「そこ!!」

「甘い!!」

体格差を狙い、掻い潜って切りかかったが、剣ではなく腹に蹴りを入れられ、胃の中をシェイクされて吹き飛ばされる。地面に叩きつけられ、叩きつけられ時に打った箇所が痛む。

激しく咳き込むと、草に赤い液体も口から吐き出される。口の中

にも血生臭いにおいと共に、鉄の味が広がった。

「くっ……、体術かよ」

「IS戦で武器ばかりに頼った戦いをしているからだ。拳や蹴りだけでも十分にシールドエネルギーを削ることができる」

確かにと思いながらも立ち上がる飛鳥。その後ろにそれぞれの武器を構えている二人。

「くそ、このままじゃ……」

飛鳥が単体で突っ込んだところでもぐり込められても、体術でいなされる。更に先ほどのが単体でのチャンスだっただろう。しかし、それを失ってしまった今、もはや一人で突っ込むのは自殺行為であろう。

しかし、これは飛鳥に突きつけられたもの。彼女たちの助力を借りるのは……。

「一緒に戦おう、アツくん」

「一人じゃ危険。私たちがフォローする」

「二人とも……」

後ろから声がかかる。ミステリアスと式式が笑みを浮かべ、力を貸してやると言っていたのだ。心強いと飛鳥は嬉しかった。

来いと言わんばかりに剣を構える騎士。飛鳥とミステリアスが並走して突撃する。ミステリアスの槍にある四門の銃口から銃弾が放たれる。それが甲冑と地面に突き刺さり、煙を上げていく。

弾丸のごく飛び込んでいく飛鳥がナイフを構える。

「嘗めるな!!」

「そつちもね」

「!!」

飛鳥を再び蹴りつけようとした騎士が蹴ったのは、飛鳥の前に出現した水のヴェールであった。

「ちっ!!」

「くらえええ!!」

足を止められた騎士の下から現れた飛鳥がナイフで切りつける。慌てて体を捻って回避する。そのナイフが騎士甲冑にぶつかり弾かれる。想像以上の硬さに、衝突と共にあまりにも硬かったために痺れた手からナイフが落ちる。

一瞬の隙を突いて振り上げた剣を飛鳥に振り下ろそうとする。そこに次々と着弾するミサイル。正確な狙いで飛鳥とミステリアスを避けて騎士だけに命中させる式。その隙に二人は後退する。

「気をつけて!!」

「来た!!」

式式の声聞くのと同時に煙の仲から飛び出してきた鉄の鞭。それに対して片手ナイフの鋭い一閃で切り裂く。切り飛ばされた部分が地面に落ちる。

煙の中から現れる騎士。小さく舌打ちをしていた。今度はこちらといわんばかりに剣を構えて切りかかってくる。それに対して、特

殊ナノマシンによつて超高周波振動する水を螺旋状に纏つた蒼流旋でミステリアスが受け止める。

罅迫り合いになり、お互いの得物がギリギリと鳴る。ここは持ち前の力で騎士がミステリアスを弾き飛ばす。そのまま上空に飛ぶのと同時に、ブラインドにして、式式が正面から荷電粒子砲を撃ち込んだ。

それに対して盾を翳す暇もなく真正面から受ける。その粒子砲が甲冑を撃ち砕いていく。所々に輝が入り、崩れ落ちている部分も見えた。緋色の翼を絡め取っていた鎖にも輝が入り、砕け散って草の上に零れ落ち、光となり、消えていく。

「今よ!!」

「行つて!!」

二人の声に答えるようにして飛鳥が走る。二人が作ってくれたチャンス。これを逃すわけには行かない。

「うおおお!!」

「この!!」

珍しく騎士が吐き捨てるような言葉を言う。ナイフを順手に持ち、壊れた騎士甲冑に対して切っ先を向けている。

対する騎士はその緋翼を大きく広げ、正面に剣を構え、突撃する。その瞬間、大きく広げられた翼を更に巨大に見せるような光の翼が現れる。

「は、早い。でも!!」

初速からの加速が瞬時加速並みであつたのことに對して一瞬驚きを隠せなかつた飛鳥であるが、すぐさまナイフを構えなおし、狙いを定める。

「これで!」

「甘い!」

「!」

スピード勝負で何枚も上であつた騎士が既に目の前に剣を構えていた。はつとして気づいたときには既にその剣が振り下ろされていた。

「やらせない!」

瞬時的にミステリアスの水のヴェールが飛鳥の前に展開される。それに向かつて剣が振り下ろされる。その剣は光に包まれ、その光が螺旋状に渦巻いていた。

振り下ろされた剣がそれに阻まれると思われていた。しかし、その剣は止まることなく、水のヴェールごと飛鳥のことを真つ二つにしたのだ。啞然とした表情の飛鳥。ゆっくりと水のヴェールと共に姿を消した(･･････)。

「これは!」

「引つかつたね」

悪戯っぽく笑みを浮かべているミステリアス。自身の水を操る力を利用し、飛鳥の幻影を作り出していたのだ。そして、その飛鳥はというと、呆氣にとられている騎士の後ろから現れる。

「これで、終わりだああ!!」

飛鳥がナイフを突き立てる。しかし、付きたてた騎士に全く感触がなかったのだ。

馬鹿なと思ったその瞬間、ゆっくりとナイフを突き立てていた騎士の姿がまるで霞のように消えたのだ。

「まさか、これも幻影!!」

「アツくん!!」

「危ない!!」

「!!」

ハツとして気づいたときにはすでに遅かった。螺旋状に輝く光を纏った両刃剣が飛鳥の体を貫いていたのだ(・・・・・・・・)。

「残念だったな」

「そ、そんな・・・」

腕から力が抜けナイフが草の上に落ちる。引き抜かれた剣の銀色の刀身が赤々と血で染まっている。抜き取られると同時に、血が噴出す。白い制服の上着の胸の辺りから徐々に血が染み渡っていく。まるで赤と白のツートンカラー・・・。

ガクリと膝から崩れ落ちる。霞む目で肩越しから騎士の事を見ている。見下す形で赤い瞳が飛鳥の事を見ている。その目にあるのは悲しみ、怒り、憎悪、・・・そして、失望だろうか。

くるりと身を翻す騎士が立ち去ろうとしている。飛鳥は腹から込

み上げてくる血を吐き出しながら、掠れた声で言う。

「ま、待て……」

手を伸ばそうにも力が入らない。ゆっくりと閉じられていく瞳に映るは、堂々とその場に立つ緋翼を持つ騎士の背中だった……。

PHASE 16 力求めるもの（後書き）

ED2 ↓ REASON > 玉置成実 <

次回予告

敗北

再び運命は少年に対して残酷な現実を突きつける

自らの無力さを再び突きつけられた少年が手を伸ばす先にあるは――
振りの剣

剣が求めるは運命に屈しない、不屈の心

少年が求めるは運命を覆すだけの力

二つの想いが重なった時、その力は衝撃となって戦士は立ち上がる

騎士の前に現れるは、勝利を齎さん剣を持ちし衝撃という名の戦士

今度こそ大切なものを二度と失わないために戦うと誓った飛鳥は騎士へと戦いを挑む

次回 インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ

PHASE 17 インパルス 衝撃

エクスカリバー
聖剣と共に、運命を変える衝撃となれ……、インパルス！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8276w/>

インフィニット・ストラトス～怒れる瞳～

2011年10月10日06時35分発行